

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI

鳥取県鳥取市

高住平田遺跡 I

高住平田遺跡 I

鳥取県教育委員会

2012

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書VI

鳥取県鳥取市

高住平田遺跡 I

2012

鳥取県教育委員会



3区 第2面 12 河川古段階完掘状況（南上空から）



銅印、刀装具



12 河川出土 墨書土器



12 河川出土 平安時代 供膳具



1005 構造物に使用された卒塔婆

序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長 380 キロメートルの自動車専用道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長 19.3 キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成 20 年度から当教育委員会が実施しています。このうち、I 期工区（鳥取市本高から鳥取市松原まで）については、平成 21 年度から財団法人鳥取県教育文化財団に現地での発掘調査や出土遺物などの整理作業、報告書作成を委託して調査を進めてまいりました。

今回報告する高住平田遺跡では、2 箇年にわたる調査で、飛鳥時代末から中近世に至る自然流路や新たに開削した溝、ならびにそれらに付属する施設がみつかりました。また当該期の土器、木製品、金属製品などが多数出土しましたが、中でも銅印、刀装具、烏帽子を被った人物を表現した形代、代掻具は、全国的にみても貴重な発見です。本書はその発掘調査成果をまとめたもので、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

さらに発掘調査成果は現地説明会を開催し、地元を中心として多くの方々に紹介してまいりました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することとして、現在に生きる私たちの重要な責務と考えております。

本書をまとめるに当たり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 7 月 30 日

鳥取県教育委員会

教育長 横 濱 純 一

例 言

- 1 本書は、一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成22・23年度に実施した高住平田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 高住平田遺跡の所在地は、鳥取市高住字平田、中瀬である。調査面積は平成22年度が4,230㎡（2区と1区の一部）、平成23年度が5,185㎡（1・3区）である。
現地調査は平成22年度調査が平成22年6月に表土掘削に着手し、平成22年11月に終了、平成23年度調査が平成23年5月に表土掘削に着手し、平成23年12月に終了したのち、引き続き遺物整理を平成24年3月末まで行った。
- 3 本調査の略号は「高住平田遺跡10」「高住平田遺跡11」である。
- 4 調査は財団法人鳥取県教育文化財団の中森、西村、駒井、田中が担当し、平成22年度は株式会社イビソク、平成23年度は島田組・大地企画共同企業体の支援を受けた。なお、株式会社イビソクの現場代理人は竹内康晴、支援調査員は持田 透、島田組・大地企画共同企業体の現場代理人は中川健二、支援調査員は島田裕弘、清岡廣子である。
- 5 遺跡の図面作成は、原則として株式会社イビソク、島田組・大地企画共同企業体が担当し、財団法人鳥取県教育文化財団が補佐した。
- 6 遺跡の写真撮影は、株式会社イビソクおよび島田組・大地企画共同企業体と財団法人鳥取県教育文化財団が行った。
- 7 遺物実測および浄書は、財団法人鳥取県教育文化財団の整理作業員が行った。
- 8 遺物の写真撮影は、田中が行った。
- 9 本書の執筆は、駒井、田中で分担し、田中が編集した。
- 10 本調査に係わる図面、写真や出土した遺物については、鳥取県埋蔵文化財センターに移管されることになっており、広く利用されることを希望する。
- 11 調査では、鳥取大学農学部准教授保坂善真氏に出土獣骨の調査指導を頂いた。
また、出土した土器について、岡山理科大学総合情報学部准教授白石純氏に胎土分析を依頼した。
- 12 調査中において、以下の方々にご助言、ご教示をいただいた。（順不同）
岡田昭明（鳥取大学名誉教授）、錦織勤、上原正人（鳥取大学）、小野映介（新潟大学）
寒川旭（独立行政法人産業技術総合研究所）
芝康次郎、山本崇（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）
高島英之（公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）、中嶋由紀子（平塚市埋蔵文化財調査事務所）
片山彰一、黒須亜希子、市村慎太郎（公益財団法人大阪府文化財センター）
橘田正徳（豊中市教育委員会）、嶋谷和彦（堺市文化観光局文化部文化財課）
谷本進（養父市教育委員会）、伊藤康晴、神谷伊鈴（財団法人鳥取市文化財団）
根鈴輝雄（倉吉博物館）、瀨野浩美（財団法人米子市教育文化事業団）
松尾充晶（島根県教育庁文化財課）松井和幸（北九州市立自然史・歴史博物館）
佐藤浩司（財団法人北九州市芸術文化振興財団）、加藤裕一（鳥取県埋蔵文化財センター）
- 13 土壌サンプルの花粉、珪藻、プラントオパール分析は、株式会社パリオ・サーヴェイへ委託した。

凡 例

- 1 本遺跡および本書では、国土座標第V系により地区割り設定を行っている。
平面図では方位が座標北を示し、図中にはXとY座標がm単位で表記されている。
- 2 標高は海拔標高で示した。
- 3 本報告書で使用した地図は、国土地理院発行地形図（1/25,000）、鳥取市都市計画図を縮小、加筆して使用した。
- 4 本書で使用した土壌色は、小山正忠、竹原秀雄編著 2008年版『新版標準土色帳』を使用して命名した。
- 5 遺構平面図、断面図についての縮尺は統一していない。なお断面図では、木材には斜線を、石には濃いアミカケとした。
- 6 遺物は出土地点、種類を問わず通し番号を付し、挿図と写真図版に共通する。
縮尺は土器が1/4、木製品が1/2・1/4・1/10、金属製品が原寸もしくは1/2で示した。
土器の断面については、土師器は白塗り、須恵器は黒塗りとした。また赤彩や黒色処理の範囲は、薄い網掛けで表現した。
- 7 本書の中で研究の現状から勘案して不適当な表現がみられた場合は、すべて報告者の責に帰するが、他意のあるものではない点ご容赦願いたい。
- 8 本書における遺構、遺物の時期決定は、以下の文献を参考としている。
『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966
中村浩『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版 2001
『年代のものさし—陶邑の須恵器—』大阪府立近つ飛鳥博物館 2006
中森祥「因幡・伯耆における古代土器の編年とその様相」『出雲国の形成と国府成立の研究—古代山陰地域の土器様相と領域性—』島根県古代文化センター 2010
中森祥「山陰地域における古代末～中世前期の土師器」『第11回山陰中世土器検討会資料集 土器・陶磁器から見た中世前半期の山陰』山陰中世土器検討会 2012
『大宰府条坊跡XV』太宰府市教育委員会 2000
中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

目 次

序文

例言、凡例

目次、挿図目次、表目次、写真目次、巻頭図版目次、図版目次

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の経過	2
第 3 節 調査体制	7

第 II 章 遺跡の位置と歴史的環境

第 1 節 位置と地理的環境	8
第 2 節 歴史的環境	9

第 III 章 調査の方法

第 1 節 現地調査	13
第 2 節 整理作業	15

第 IV 章 調査の成果

第 1 節 調査の概要	16
第 2 節 基本層序	18
第 3 節 第 1 面の調査	27
第 4 節 第 2 面の調査	43
第 5 節 第 3 面の調査	102
第 6 節 出土遺物	131

第 V 章 自然科学分析

149

第 VI 章 総括

169

挿図目次

図1 鳥取西道路路線図と調査地の関係 …………… 1	図39 2区 15平坦面・21溝遺物出土状況 …………… 63・64
図2 調査地詳細位置 …………… 2	図40 1区 第2面検出遺構(1) …………… 66
図3 圃場整備前の地割と調査地の関係 …………… 2	図41 1区 第2面検出遺構(2) …………… 67・68
図4 平成22年度 現地説明会資料 …………… 4	図42 1区 第2面検出遺構(3) …………… 69
図5 平成23粘土 現地説明会資料 …………… 6	図43 1区 第2面検出遺構(4) …………… 70
図6 遺跡周辺の地形 …………… 8	図44 1区 第2面検出遺構(5) …………… 71
図7 周辺の遺跡 …………… 10	図45 1区 第2面検出遺構(6) …………… 72
図8 地区割模式 …………… 13	図46 1区 第2面検出遺構(7) …………… 73
図9 調査地の地区割 …………… 14	図47 1区 第2面検出遺構(8) …………… 74
図10 小井手・暗渠 平面・立面 …………… 17	図48 1区 第2面検出遺構(9) …………… 75
図11 X = -56,040 ライン断面 …………… 19・20	図49 1区 第2面検出遺構(10) …………… 76
図12 Y = -15,720 ライン断面 …………… 21・22	図50 1区 第2面検出遺構(11) …………… 77
図13 X = -56,100 ライン断面 …………… 23・24	図51 1区 第2面検出遺構(12) …………… 78
図14 1004 溝断面 …………… 27	図52 1区 第2面検出遺構(13) …………… 79
図15 第1面 1004 溝平面 …………… 28・29	図53 1区 第2面検出遺構(14) …………… 80
図16 小井手と1004 溝の位置関係 …………… 30	図54 1区 第2面検出遺構(15) …………… 81
図17 1004 溝内護岸礫群・杭群 …………… 31	図55 1区 第2面検出遺構(16) …………… 82
図18 第1面 2河川古段階平面 …………… 32・33	図56 1区 第2面検出遺構(17) …………… 83
図19 3区 2河川断面 …………… 34	図57 2区 第2面検出遺構(1) …………… 84
図20 3区 2河川新段階内礫出土位置 …………… 35	図58 2区 第2面検出遺構(2) …………… 85
図21 1区 1005 構造物 …………… 36	図59 2区 第2面検出遺構(3) …………… 86
図22 3区 2河川新段階水田 …………… 38	図60 2区 第2面検出遺構(4) …………… 87
図23 3区 1020 畦・2河川新段階西岸畦 …………… 39	図61 2区 第2面検出遺構(5) …………… 88
図24 2区 第1面検出遺構 …………… 40	図62 2区 第2面検出遺構(6) …………… 89
図25 3区 第1面検出遺構(1) …………… 41	図63 2区 第2面検出遺構(7) …………… 90
図26 3区 第1面検出遺構(2) …………… 42	図64 3区 第2面検出遺構(1) …………… 91
図27 第2面 12河川古段階 平面 …………… 44・45	図65 3区 第2面検出遺構(2) …………… 92
図28 3区 掘立柱建物1 …………… 46	図66 3区 第2面検出遺構(3) …………… 93
図29 X = -56,100 ライン 12河川断面 …………… 47・48	図67 3区 第2面検出遺構(4) …………… 94
図30 3区 12河川新段階平面 …………… 49	図68 3区 第2面検出遺構(5) …………… 95
図31 2区 12河川内 杭列 …………… 51	図69 3区 第2面検出遺構(6) …………… 96
図32 3区 12河川内 構造物群 …………… 52	図70 3区 第2面検出遺構(7) …………… 97
図33 3区 1250 構造物 …………… 53	図71 3区 第2面検出遺構(8) …………… 98
図34 3区 1249 構造物 …………… 54	図72 3区 第2面検出遺構(9) …………… 99
図35 3区 1249 構造物詳細 …………… 55	図73 3区 第2面検出遺構(10) …………… 100
図36 3区 12河川内 古墳～奈良時代遺物 出土位置 …………… 57・58	図74 3区 第2面検出遺構(11) …………… 101
図37 3区 12河川内 平安時代遺物出土位置 …………… 59・60	図75 1区 第3面検出遺構 …………… 103
図38 2区 15平坦面・21溝 …………… 62	図76 第3面 平面 …………… 104・105
	図77 2区 第3面検出遺構(1) …………… 106
	図78 2区 第3面検出遺構(2) …………… 107

図 79	2区	第3面検出遺構(3)	108	図 100	3区	第3面検出遺構(7)	129
図 80	2区	第3面検出遺構(4)	109	図 101	3区	第3面検出遺構(8)	130
図 81	2区	第3面検出遺構(5)	110	図 102	1004 溝・2河川・第IV層出土遺物	132	
図 82	2区	第3面検出遺構(6)	111	図 103	12河川出土遺物(1)	133	
図 83	2区	第3面検出遺構(7)	112	図 104	12河川出土遺物(2)	134	
図 84	2区	第3面検出遺構(8)	113	図 105	12河川出土遺物(3)	135	
図 85	2区	第3面検出遺構(9)	114	図 106	12河川出土遺物(4)	136	
図 86	2区	第3面検出遺構(10)	115	図 107	12河川出土遺物(5)	138	
図 87	2区	第3面検出遺構(11)	116	図 108	12河川出土遺物(6)	139	
図 88	2区	第3面検出遺構(12)	117	図 109	12河川出土遺物(7)	140	
図 89	2区	第3面検出遺構(13)	118	図 110	12河川他出土遺物	141	
図 90	2区	第3面検出遺構(14)	119	図 111	15平坦面・21溝出土遺物	142	
図 91	2区	第3面検出遺構(15)	120	図 112	その他の遺構・第V層出土遺物	143	
図 92	2区	第3面検出遺構(16)	121	図 113	出土木製品(1)	145	
図 93	2区	第3面検出遺構(17)	122	図 114	出土木製品(2)	146	
図 94	3区	第3面検出遺構(1)	123	図 115	出土木製品(3)	147	
図 95	3区	第3面検出遺構(2)	124	図 116	出土金属製品	148	
図 96	3区	第3面検出遺構(3)	125	図 117	調査区北壁断面の層序および分析層準	150	
図 97	3区	第3面検出遺構(4)	126	図 118	主要珪藻分析群集の層位分布	156	
図 98	3区	第3面検出遺構(5)	127	図 119	主要花粉化石群集の層位分布	158	
図 99	3区	第3面検出遺構(6)	128	図 120	植物珪酸体含量の層位分布	160	

表目次

表 1	基本層序対応表	18	表 5	植物珪酸体分析結果	159
表 2	12河川内遺物出土点数表	56	表 6	漆書土器出土地一覧表	172
表 3	珪藻分析結果	154・155	表 7	土坑・ピット・溝一覧表	174
表 4	花粉分析結果	157	表 8	遺物観察表	180

挿入写真図版

写真 1	平成 22 年度 現地説明会風景	3	写真 4	珪藻化石	166
写真 2	平成 23 年度 現地説明会風景	5	写真 5	花粉化石	167
写真 3	3区 小井手護岸	16	写真 6	植物珪酸体	168

巻頭写真図版

巻頭図版 1	3区 第2面 12河川古段階完掘状況 (南上空から)	巻頭図版 3	12河川出土 平安時代 供膳具
巻頭図版 2	(上) 銅印、刀装具 (下) 12河川出土 墨書土器	巻頭図版 4	1005 構造物に使用された卒塔婆

図 版

- 図版 1 1区 第1面 1004 溝完掘状況 (南西から)
- 図版 2 (上) 1区 第1面 1004 溝 護岸礫群検出状況 (南西から)
(下) 1区 第1面 1004 溝 護岸杭群検出状況 (南西から)
- 図版 3 1区 第1面 2河川完掘状況 (南西から)
- 図版 4 (上) 3区 第1面 1004 溝、2河川新段階完掘状況 (北東から)
(下) 3区 第1面 水田畦畔検出状況 (北から)
- 図版 5 (上) 1区 第1面 1005 構造物全景 (北から)
(下) 1区 第1面 1005 構造物西側 砂堆検出状況 (北から)
- 図版 6 (上) 3区 第1面 2河川新段階西岸 畦芯材検出状況 (北東から)
(下) 3区 第1面 1020 畦芯材検出状況 (東から)
- 図版 7 (上) 3区 第1面 2河川古段階完掘状況 (北から)
(下) 3区 第1面 2河川古段階西岸 杭列検出状況 (北東から)
- 図版 8 (上) 3区 第2面 掘立柱建物 検出状況 (北から)
(下左) 3区 第2面 1171 ピット断面 (南から)
(下右) 3区 第2面 1174 ピット断面 (南から)
- 図版 9 2区 第2面 12河川完掘状況 (南から)
- 図版 10 (上) 3区 第2面 12河川新段階完掘状況 (北東から)
(下) 3区 第2面 12河川古段階完掘状況 (北から)
- 図版 11 (上) 3区 第2面 1250 構造物検出状況 (北西から)
(下) 3区 第2面 1249 構造物検出状況 (南西から)
- 図版 12 (上) 2区 第2面 12河川内 漆書土器出土状況
(中) 1区 第2面 12河川内 土師器坏出土状況
(下) 3区 第2面 12河川内 土師器坏出土状況
- 図版 13 (上) 2区 第2面 21 溝内 遺物出土状況 (南から)
(下) 2区 第2面 21 溝内 代掻具出土状況 (西から)
- 図版 14 (上) 2区 第2面 64 土坑 断面 (北から)
(下) 1区 第3面 完掘状況 (南西から)
- 図版 15 (上) 小井手出土遺物
(中) 1004 溝出土遺物
(下) 2河川出土遺物
- 図版 16 (上) 第IV層出土遺物
(下) 第IV層出土漆器
- 図版 17 (上) 第IV層ほか出土 木製品
(下) 第IV層出土 人形代
- 図版 18 (上) 整地層出土 銅印
(下) 第IV層、2河川、12河川、21 溝出土土製品
- 図版 19 12河川出土 飛鳥～奈良時代 供膳具
- 図版 20 12河川出土 須恵器甕、壺、提瓶、横瓶
- 図版 21 (上) 12河川出土 土師器甕、土製支脚、ミニチュア土器
(下) 12河川等出土 転用焼台
- 図版 22 (上) 12河川出土土師器に残る粘土紐痕跡
(下) 12河川出土 漆書、墨書土器、円面硯
- 図版 23 (上) 12河川出土土器に書かれた墨書 近接写真
(下) 12河川、第IV層出土墨書土器
- 図版 24 (上) 21 溝、15 平坦面 出土遺物
(下) 21 溝出土 代掻具

第I章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

高住平田遺跡は、鳥取市を流れる千代川下流域西岸の丘陵部裾に位置する遺跡で、一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に伴って、平成22・23年度に発掘調査を実施した。

山陰地方では、観光、物流などの地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消、緩和、災害時の緊急輸送路確保などを目的とし、中国横断自動車道姫路鳥取線や山陰自動車道といった国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの鳥取西道路も、山陰自動車道整備の一環となる事業である。

鳥取西道路の計画地内には多くの遺跡が存在する。建設に先立つ埋蔵文化財の取扱いは、国土交通省、鳥取県、鳥取市が協議を行い、まず計画地内に存在する遺跡の現状把握の必要性を確認した。これを受けて平成17年度からは、計画地内の踏査による調査や鳥取市教育委員会による試掘、確認調査を逐次実施中である。

高住地区では、計画地内の遺跡の有無を確認するため、平成19・20年度に鳥取市教育委員会が文化庁の国庫補助事業として範囲確認調査を行った。

その結果、事業地内には遺跡が存在することが明らかとなり、この取扱いについて再度国土交通省、鳥取県、鳥取市で慎重に協議を重ねた。そして文化財保護法第94条による手続きを踏まえ、平成22・23年度鳥取県教育委員会が、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所の委託を受けて発掘調査を実施した。発掘調査に当たっては、現場発掘作業、出土遺物の整理および報告書の作成を財団法人鳥取県教育文化財団に再委託した。さらに発掘作業、調査記録作業などについて、平成22年度は株式会社イビソク、平成23年度は島田組・大地企画共同企業体に支援を受けた。



図1 鳥取西道路路線図と調査地の関係

第2節 調査の経過

平成22年度調査

平成22年度の調査は、国土交通省による調査地内の耕作土採取作業の終了後、5月末から6月初旬にかけて2区の重機による表土掘削を開始した。当初調査前に撮影を予定していた航空写真撮影は、天候不順のため機械掘削途中に実施した。

機械掘削終了後、調査区南端にあった鳥取市教育委員会が設定した試掘調査トレンチを利用し、下層確認のため標高-1 mまで掘削した。これは、近隣の桂見遺跡で標高0 m付近から縄文時代の遺物が出土したこと、試掘調査では当該層まで調査ができなかったことによる。その結果、下層は自然堆積層のみと判断し、同教育委員会が遺構面を第IV層下面・第V-2 b層上面の2面と判断した、当初設計とおりに調査を進めることを再確認した。



図2 調査地詳細位置

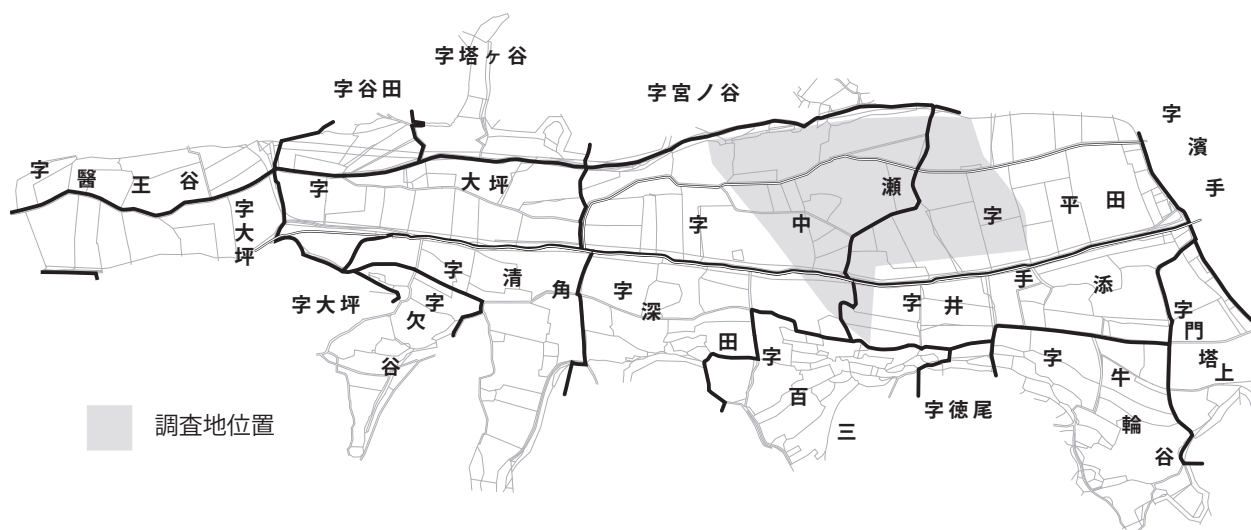


図3 圃場整備前の地割と調査地の関係

今回の調査地は丘陵に挟まれた沖積地であるため、水田耕作痕跡の存在を把握することが重要と考えた。そこで土層の堆積状況を詳細に把握しつつ調査を進めるために、国土座標に沿って東西、南北20 mごとにサブトレンチを設定し、6月中旬から掘削した。2区では東西、南北合計7本のサブトレンチ及び調査地周囲の側溝を掘削（土層確認アゼを設置）し、全体の基本層序を確認した。このトレンチ掘削には、終了までに約1ヶ月を要した。

7月上旬から包含層掘削を開始し、まもなく調査区南東端にて大きく蛇行する2河川を、さらに調査区北半の遺構精査にて溝、土坑を検出し、順次掘削した。2河川の流芯は、新旧大きく2時期に分かれることが判明し、8月中旬に一連の調査を終えて完掘写真を撮影した。その後、調査区東端でも2河川の一部を検出した。

一方2河川に接して確認した12河川は、順次検出作業を行ったにもかかわらず肩部が不明瞭なこともあり、サブトレンチを設定して確認作業を進めた。その結果、12河川も新旧大きく2時期の流芯が判明し、摩耗の少ない比較的大きな土器破片が多く出土した。さらに何らかの構造物の残骸と思しき4本の杭を、立った状態で検出した。

初秋を迎えた頃、12河川から「深縁」と墨書した須恵器が出土し、調査区北東部、同流路東岸から鳥取県下では5例目となる銅印がみつかった。後者は、既存資料がいずれも採集品であったのに対し、今回の事例は出土地点等が明瞭にわかる点で貴重な成果であった。さらに12河川古段階の調査を開始、同河川に接して検出した21溝から、代掻具^註が極めて良好な状態で出土した。10月初旬、これらの遺構掘削が完了し、第1面完掘写真を撮影した。引き続き下層調査を実施したが、地震動による土壌攪拌が著しく、遺構検出は困難を極めた。それでも調査区西端に沿って、窪地状の地形やたわみを検出した。

2区の調査がほぼ完了した11月3日、現地説明会を実施し、同月中旬ラジコンヘリによる2区の全景写真撮影を行った。これと前後して、1区の一部を追加調査することとなり機械掘削を実施、2河川の検出作業に引き続き、同月下旬にかけて掘削を行った。さらに11月下旬には12河川の掘削を開始したが、河川同士が切り合っており、調査は難渋を極めた。

このような過程を経て11月30日1区完掘写真を撮影し、全調査を無事完了した。



写真1 平成22年度 現地説明会風景

第I章 調査の経緯

●注目すべき遺物

今回の調査では主に飛鳥時代（7世紀）から室町時代初めごろ（14世紀）の遺物が出土しました。

なかでも注目される遺物が、銅印と須恵器の硯です。

銅印

12河川の東岸あたりでみつかりました。県内では5例目の発見ですが、発掘調査によって出土場所が特定できたのは今回がはじめてのことです。

印面は一边約3cmの正方形、高さも約3cmで、つまみにはひもを通すための穴が開けられています。

印面の文字は篆書体の「木」と考えられ、一字の印は貴族などが使った「私印」に多いとされています。



鳥取県内で出土した銅印一覧表

出土・採集地	印面の大きさ (縦・横・cm)	印の高さ (cm)	印の文字	長さ	採集	所蔵
岩倉印大塚	3.0 3.0	3.1	良	財	採集	個人蔵
大山町長者原	3.3 3.3	3.55	財	財	採集	名和神社
琴浦町新尾崎寺跡	2.2 2.2	2.8	財	財	採集	鳥取県立博物館
倉吉市穴窪	3.0 2.9	2.7	有	財	採集	倉吉博物館
鳥取市高住平田遺跡	3.0 3.1	3.05	木	財	発掘調査	

硯

墨をすところや円く、直径が約18cmあります。真ん中の平らな部分で墨をすって、できた墨汁を周りの溝にためて使いました。

飛鳥～奈良時代（7～8世紀）のものと考えられます。



硯の復元図

●まとめ

今回の調査では、川や溝が見つかったものの、建物跡などは確認できませんでした。

しかし、多くの遺物が出土し、この地域の歴史を考える上で重要な発見がありました。

銅印は、奈良時代（8世紀初めごろ）から国や役所で使われるようになり、その後、奈良時代の終わりごろ（8世紀後半）には、寺院や地域の有力者たちも使うようになったとされます。しかし、印を使う人々はまだ限られていました。

今回の調査において、銅印とともに墨書土器や硯が出土したことをあわせると、奈良～平安時代の遺跡周辺には、文書を作成する必要があった役所や寺院に関連する施設が存在していた可能性が考えられます。また、飛鳥時代までは農具などの存在から、水田などの耕作地に近い場所であったことがうかがえ、この地域の古代における変遷が明らかになってきました。

●みつかった遺構

主なものとして、2本の川と、川岸につくられた溝があります。

21溝

12河川西岸の中程にある平坦地に造られていました。幅は約1m、長さ約13mあります。12河川とつながっていて、川から流れこんだ水が再び川に戻っていったと考えています。



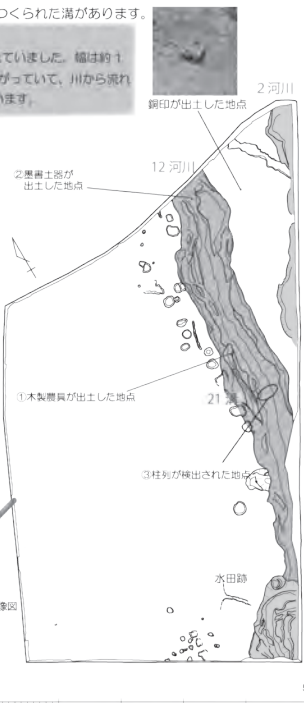
溝からは飛鳥時代（7世紀初めごろ）の土器がたくさん出土したほか、木製農具もみつかりました。



幅約40cmの木製農具です。1本は折れていますが、9本の歯が取り付けられていて、真ん中の穴に柄を付けたようです。このような農具は全国でも4例（静岡・福岡県の3遺跡）しか見つかっておらず、貴重な発見となりました。

右の写真は、地盤の断面です。下にある白い粘土が吹きあがるように上の土とかが混ぜられています。これは土が地震によって乱されたためにできたものです。

調査区の西側では、こうした土の乱れが著しいこともあって、遺構はほとんどみつかりませんでした。



(5:1, 500)

現地説明会資料
平成22年11月3日(水)

高住平田遺跡の調査

鳥取県教育文化財団 鳥取県教育委員会
 〒690-1135 鳥取県鳥取市1-1 鳥取県立総合教育センター(604)
 TEL: 0857-517558 FAX: 0857-517170
 メール: info@birdakenet.or.jp
 〒690-1135 http://birdakenet.or.jp/

●はじめに

財団法人鳥取県教育文化財団では、昨年度から一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に伴う発掘調査を実施しています。

今年度の調査地のひとつ、鳥取市高住にある高住平田遺跡は、湖山地の南側に位置し、東西を丘陵に挟まれた谷筋にあります。調査地点は西側の丘陵裾にあたり、この丘陵では弥生時代中期（紀元前1世紀ごろ）の銅鐸がみつっています。

今回、高住地区では初めてとなる広範囲の発掘調査を行い、飛鳥時代（7世紀）から室町時代初めごろ（14世紀）までの遺構と遺物がみつかりました。なかには、墨書土器や硯、さらに県内では5例目となる銅印などがあり、この地域の歴史を知るうえで重要な手がかりを得ることができました。

このたびの調査で明らかになってきた、この地域の昔のようすをご紹介します。



調査区を南上空から見たようす

12河川

調査区の東側でみつかった川です。最大幅が約10m、深さ約2mで、約70m分を確認しました。川は7世紀頃から流れていたと考えています。それが、上流から運ばれてきた土砂によって埋まった後、鎌倉時代（12～13世紀ごろ）に再び、幅の狭い溝を掘り直していることがわかりました。

掘り直してつくられた溝

川が埋まることによって埋まった部分

川の中からは、飛鳥時代から鎌倉時代にかけての土器がたくさん出土しました。なかには、ほとんど割れていないものもあり、数個まとまっているところもあります。こうした状況から、土器がわざと投げ入れられたのではないかと考えていますが、その理由がわかりません。

土器が出土したようす

出土した遺物の中には、文字や記号の記された土器がありました。例えば、平安時代前期（9世紀末から10世紀初めごろ）の杯の蓋には文字が書かれていました。一部が欠けているものの、「安縁」と読み取ることができます。また、奈良時代（7世紀末から8世紀）の須恵器の中には、漆で記号が描かれたものもありました。描かれていたのは全て蓋で、つまみのところに「×」や「△」といった記号がみられます。

出土した遺物の中には、文字や記号の記された土器がありました。

例えば、平安時代前期（9世紀末から10世紀初めごろ）の杯の蓋には文字が書かれていました。一部が欠けているものの、「安縁」と読み取ることができます。また、奈良時代（7世紀末から8世紀）の須恵器の中には、漆で記号が描かれたものもありました。

描かれていたのは全て蓋で、つまみのところに「×」や「△」といった記号がみられます。

川底には4本の丸木が立てられていました。直径20～30cmの丸木は川の流れに直交するように並んでいました。柱の先端が川岸の上面とはほぼ同じであることや、川をせき止めるような部材がみつからなかったことから、構脚だった可能性がみられます。

図4 平成22年度 現地説明会資料

平成23年度調査

平成23年度の調査は、5月中旬3区から重機による表土掘削を開始し、引き続き1区の機械掘削を行った。今回も3区で前年度同様鳥取市教育委員会による試掘トレンチを標高0m付近まで掘削したが、第V-2層以下は自然堆積層と判断でき、第V-1層までを調査対象とすることを再確認した。

機械掘削が完了すると、1・3区には昨年同様国土座標の東西、南北に20mごとのサブトレンチを各6ヶ所設定、掘削し、土層の堆積状況を確認した。

1区の包含層掘削は6月中旬から開始した。同月下旬には中～近世の1004溝を検出、7月中旬には2河川の範囲を確認し、両者の構造や前後関係などを追求するとともに、2河川内で卒塔婆を転用した1005構造物を検出した。これらは8月初旬に調査を終え、足場からの全景写真の撮影およびラジコンヘリによる航空写真撮影を実施した。

続く8月上旬には、調査区南西隅にて2区で検出した12河川の一部を確認、掘削し、盆休みを挟んで下旬には完掘写真を撮影した。9月にはさらに下層の調査を行い、10月初旬に1区の調査を完了した。当初1区の調査面数は、古代、中世河川1面の調査を想定していたが、中世河川、古代河川および古代河川以前の3面調査となった。

一方、3区は7月下旬から包含層の掘削を開始し、8月下旬には1004溝を検出、同月末には1004溝を完掘した。その際3区北半に堆積した砂層が、2河川新段階にあった水田を覆った洪水砂であることが判明した。10月中旬には、3区2河川完掘写真をラジコンヘリで撮影した。

3区12河川の調査は10月下旬から始まり、同河川古段階の掘削に目途がついた11月19日に3区を対象とした現地説明会を行った。調査は1区同様、中世河川、古代河川および古代河川以前の3面調査となり、12月15日をもって完了した。



写真2 平成23年度 現地説明会風景

●出土した遺物



○書土器
平安時代の埴の底に、墨で「深緑」と書かれていました。同じ文字は昨年度の調査で出土した土器（右の写真）にも記されていました。

○漆で記号が書かれた土器
外側に「×」と書かれた蓋が数点出土しています。



○黒色土器
内面にすすを吸着させて、いないにみがいものです。

○土鍾
素焼のおもりで、魚をとるための網などに使われたものです。

○奈良時代の須恵器
川の中からは、環や蓋のほか、俵形の胴体に口がついた横瓶などが出土しました。

●まとめ

昨年度からの調査で、調査地には奈良時代から江戸時代にかけて連続する3条の川や溝が見つかり、これが昭和50年ごろまで使われていた水路に受け継がれたことがわかりました。調査では建物跡は川の近くにあって1棟だけで、その他の遺構はほとんどみつかりませんでした。そんな中で、川の中から奈良～平安時代にかけての遺物が多くみつかったことが注目されます。出土したものの中には、銅印（写真左）や人形代（写真右）といった特異な遺物があり、高住地域がこのあたりの有力者と何らかの関わりがあったことが想像されます。鎌倉時代以降になると調査地周辺には水田が広がっていたようで、高住の人々が川や溝を利用して耕作を行っていたようすがうかがわれます。

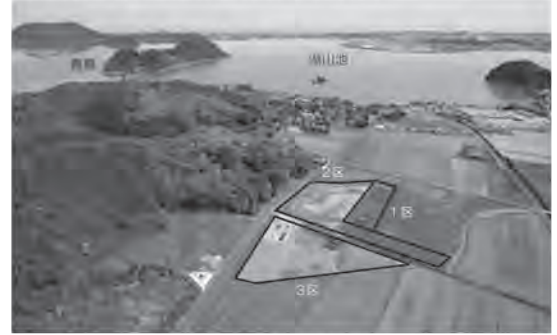


現地説明会資料 平成23年11月19日(土)

高住平田遺跡の調査

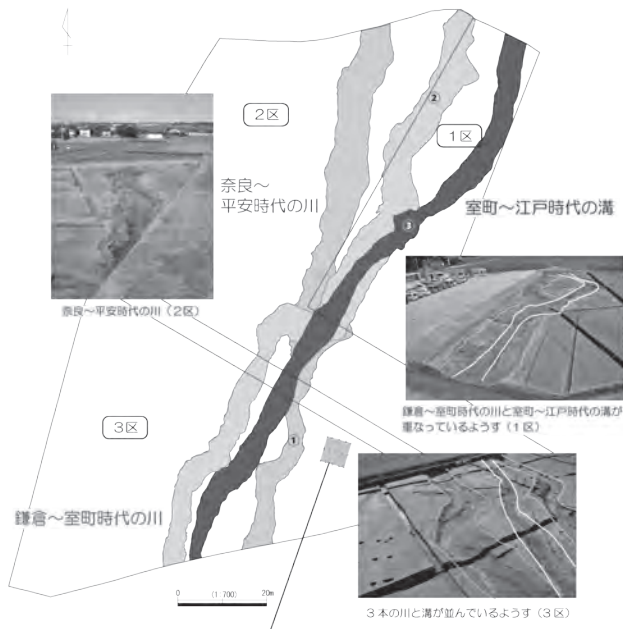
【協】鳥取県教育文化財団 鳥取県教育委員会 鳥取県立総合教育センター
〒690-1133 鳥取県東出雲郡高住町(分館内)
TEL: 0857-517558 FAX: 0857-517550
メールアドレス: natukokup@birda.jp
ホームページ: http://www.natukokup.jp/kyougyo-bunko/

●はじめに
財団法人鳥取県教育文化財団では、鳥取県から受託した一般国道9号（鳥取西道路）の改築工事に伴う発掘調査を、昨年度から継続して実施しています。鳥取市高住にある高住平田遺跡は、湖山地の南側に位置し、東西を丘陵にはさまれた谷筋にあります。調査地点は西側の丘陵裾にあたり、この丘陵では弥生時代中期（約2100年前）の銅鐸がみつっています。昨年度調査した2区では、飛鳥時代（約1400年前）から室町時代初めころ（約700年前）の遺構がみつかりました。注目される遺物としては、役所や寺社、貴族の邸宅などの限られたところで使われたと考えられる銅印や、鳥帽子姿の貴族をかたどった人形代があります。今年度は1区と3区で発掘調査を行い、その結果、奈良時代（約1300年前）から江戸時代（約300年前）までの遺構と遺物が見つかり、この地域の歴史を知るうえで重要な手がかりを得ることができました。このたびの調査で明らかになってきた、この地域の昔のようすをご紹介します。



調査地を南上空から見たようす

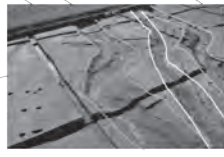
●みつかった主な遺構（図の丸数字は、右ページの写真の数字と対応しています）



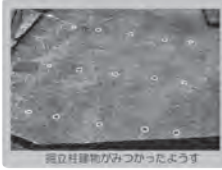
奈良～平安時代の川（2区）



鎌倉～室町時代の川と室町～江戸時代の溝が重なっているようす（1区）



3本の川と溝が並んでいるようす（3区）



●掘立柱建物跡
奈良～平安時代の川が埋まった後につくられた建物跡で、大きさは東西5.5m、南北5.6mあります。柱穴は東西方向に5本、南北方向に3本並んでいました。この建物では内側に柱があって、しっかりとしたつくりをしています。こうした構造は、倉庫に多いとされています。

掘立柱建物跡が見つかったようす

●奈良～平安時代の川（約1300～900年前）

幅が4～7mあります。川の中からは多くの土器が出土していて、ほとんど割れていないものもたくさんみつかりました。なかには、右の写真のように2枚の皿が重なった状態でみつかったものもあります。

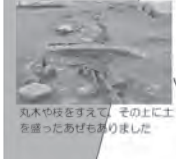


●鎌倉～室町時代の川と水田（約900～600年前）

丸木や枝をすえて、その上に土を盛ったあぜも残りました。

室町時代ごろの3区の様子

茶色い部分は水田を、青い部分は川を表わしています。



室町時代ごろの3区の様子

奈良～平安時代の川が埋まった後に流れていた川で、幅4～5mあります。川の中からは、土器とともにたくさんの牛の骨がみつかりました。また、3区ではこの川の洪水による砂で埋まった水田を確認しました。水田の大きさは大小さまざまで、高さ数センチのあぜで区画されていました。



牛の下あごの骨

●室町～江戸時代の溝（約600～300年前）

鎌倉～室町時代の川が埋まった後に新たに作られた溝で、幅が約3～4mありました。川があったところは、他の場所と比べて脆れやすいので、右の写真のように石を南岸において、溝が崩れないように補強していました。



溝を石で補強しているようす

図5 平成23年度 現地説明会資料

第 3 節 調査体制

発掘調査及び報告書作成は以下の体制で行った。

	平成 22 年度	平成 23 年度
鳥取県教育委員会		
教育長	横濱 純一	横濱 純一
鳥取県教育委員会事務局文化財課		
課長	植田 司郎	上山 憲二
歴史遺産室長	中原 斉	中原 斉
課長補佐（兼主幹）	田貝 隆	田貝 隆
副主幹	福市 信	福市 信
文化財係長	北浦 弘人	北浦 弘人
文化財主事	高尾 浩司	大野 哲二
財団法人鳥取県教育文化財団		
理事長	井上 善弘	井上 善弘
事務局長	漆原 貞夫	漆原 貞夫
事務職員	岡田美津子	岡田美津子
調査室		
室長（美和調査事務所長と兼務）	松井 潔（※1）	松井 潔（※1）
次長	石本 富正	石本 富正
事務職員	福田早由里	福田早由里
美和調査事務所・調査第二担当		
副主幹	中森 祥（※1）	駒井 正明（※2）
副主幹	西村 歩（※2）	
文化財主事	田中 正利（※1）	田中 正利（※1）
事務職員		植木 智子
（※1） 鳥取県埋蔵文化財センターから派遣	（※2） 公益財団法人大阪府文化財センターから派遣	
発掘調査支援業者	株式会社イビソク	島田組・大地企画共同企業体
調査協力		

国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、公益財団法人大阪府文化財センター、鳥取市教育委員会、鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財センター、高住地区自治会、松保地区公民館

註 松井和幸「馬鍬の起源と変遷」（『考古学研究』第 51 巻第 1 号 考古学研究会 2004）で「2 類木製馬鍬」とするもので、松井が指摘するように人の手で土をならしたりするための道具と考える。そのため、この道具は構造が馬鍬に類似するものの牛馬に曳かせるものではないので、「馬鍬」の名称はふさわしくないと考えた。同様の道具は『伊場遺跡遺物編 8』（浜松市教育委員会 2002）では「代搔」と呼んでおり、本文ではこれを参考にして「代搔具」とした。

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 位置と地理的環境

高住平田遺跡は、鳥取市高住に所在する。鳥取市は鳥取県東部に位置しており、東は岩美郡、南は八頭郡、西は東伯郡と接し、北には日本海が広がる。総面積 765.66km²、人口約 20 万人を有する県庁所在地である。

鳥取県東部を流れる一級河川千代川の河口に形成された鳥取平野の西側には、海跡湖である湖山池があり、遺跡は池の南岸に位置する。遺跡の周辺は、中国山地から延びる山地または丘陵地とそれが開析されてできた谷底平野、湖山池に流下する中小の河川によって形成された三角州に大別される。

昭和 18（1943）年鳥取地震の活断層である鹿野－吉岡断層は、当遺跡の南側において東西方向に走向しており、山地を分断するような地形を形成する。断層が成因となるような地形は、吉岡断層の以北においても複数見いだすことができ、断層がこの地域の景観に果たした役割は大きい。また当遺跡の南西には、応和 2（962）年ないし後村上天皇（在位：延元 4～正平 23、1339～1368）の頃からとも伝えられる吉岡温泉があり、花崗岩の断層から湧き出る温泉とされる。

調査地は谷底平野に位置する。調査地西側の丘陵の表層地質は風化した鳥取花崗岩で、調査地北西隅付近で岩盤が検出された。

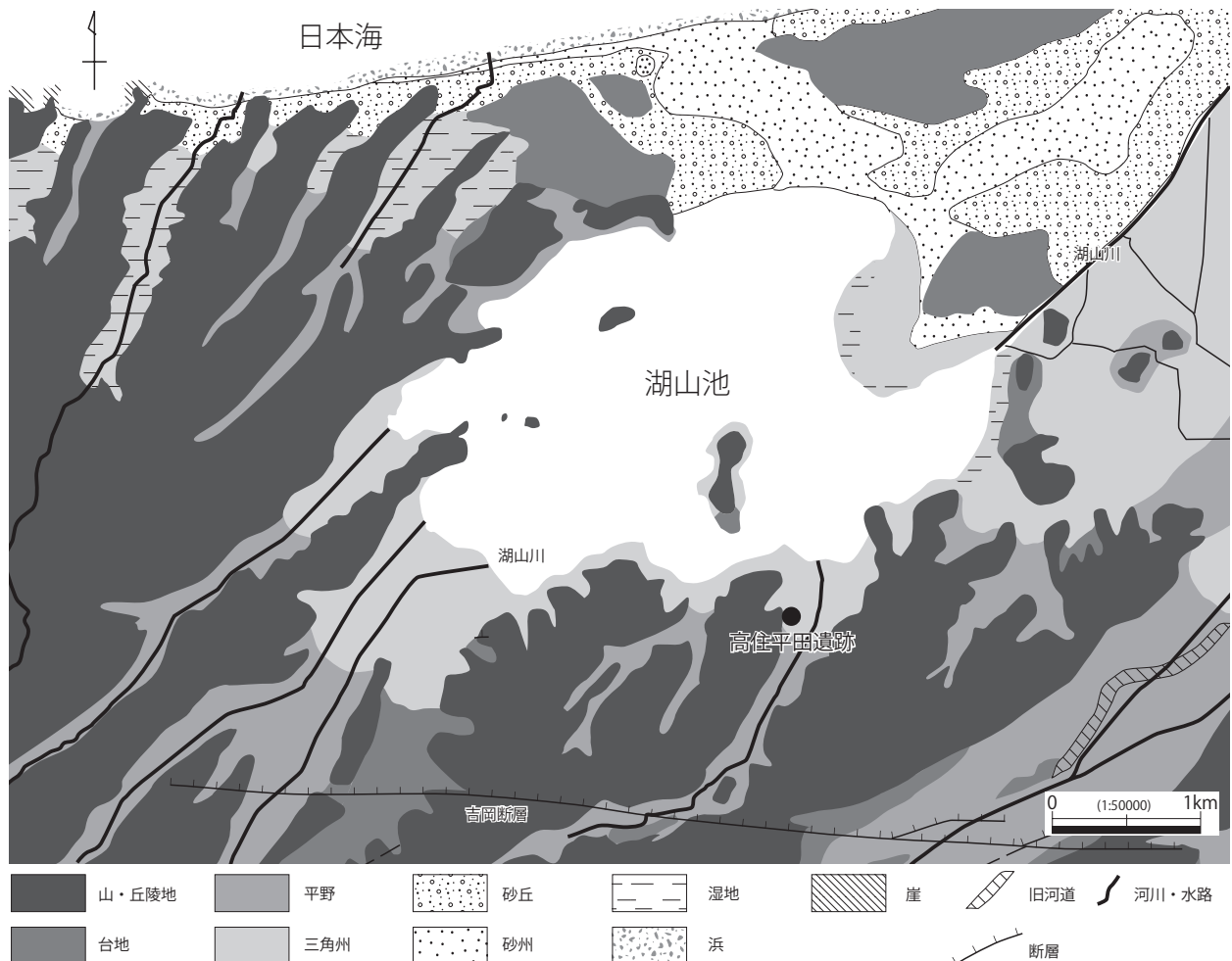


図 6 遺跡周辺の地形（『松原古墳群Ⅱ 松原小奥遺跡』から引用、一部改変）

第2節 歴史的環境

今回の調査地は湖山池の南部にあたる。湖山池周辺は、鳥取県東部でも多くの遺跡が集中する地域の一つである。本節では湖山池周辺の歴史を概観する。

【縄文時代】

湖山池周辺で人々の生活痕跡が確認できるのは縄文時代前期末からで、南東部の桂見遺跡で少量の大歳山式土器が出土する。ただ、この地域でまとまった遺物がみつかるのは、縄文時代中期末からである。なお鳥取平野周辺では、これに先行して鳥取市浜坂の砂丘で有茎尖頭器が採集されたほか、鳥取市福部町所在栗谷遺跡で縄文時代前期から継続した生活をうかがい知ることができる。

中期末から後期にかけて、池南東部の布勢、桂見の低湿地を中心に人々が生活を展開する。布勢第1遺跡では、杭と板材を用いた後期の水路護岸らしき遺構が確認された。このあたりは腐食土層の発達で多数の木製品が良好な状態で保存されており、中でも布勢第1遺跡出土の朱漆塗りの木製容器や、桂見遺跡出土の丸木舟は特筆される。後期以降の土器は、池南側にある青島でも出土した。

後期後半から晩期にかけて、千代川やそこへ合流する河川によって形成された自然堤防上に人々が進出する。縄文海進時に湖山池から鳥取平野にかけて広がった内湾が、海退するなかで河川堆積によって平野が形成されたことによるのだろう。野坂川沿いの大桝遺跡や、千代川と湖山池の間にある岩吉遺跡、北東部にある湖山第2遺跡では、晩期の土器がみつかった。池南西部の岩本第2遺跡では、少量ながら晩期の突帯文土器が出土する。ただ、明確な遺構はいずれも未確認である。

【弥生時代】

前期の遺物出土地点は、縄文時代晩期に展開した地域と大きな差はない。これまで遺構はほとんど確認されていなかったが、南西部にある松原田中遺跡でこの頃の溝がみつかった。

明らかな建物が確認できるのは中期以降である。湖山第2遺跡では、中期前葉と思われる掘立柱建物が発見された。中期中葉はよくわかっていないが、中期後葉になると徐々に遺構が確認されはじめる。布勢第2遺跡や湖山第2遺跡では竪穴建物を、岩吉遺跡では掘立柱建物を検出しており、この様相は後期も存続する。

南部では、高住字宮ノ谷の丘陵から流水文銅鐸が、青島の対岸にある塞ノ谷遺跡から分銅形土製品がそれぞれ出土した。このあたりにも集落の存在が予想される。

北部の砂丘地では、中ノ茶屋遺跡でこの頃の遺物が散布する。

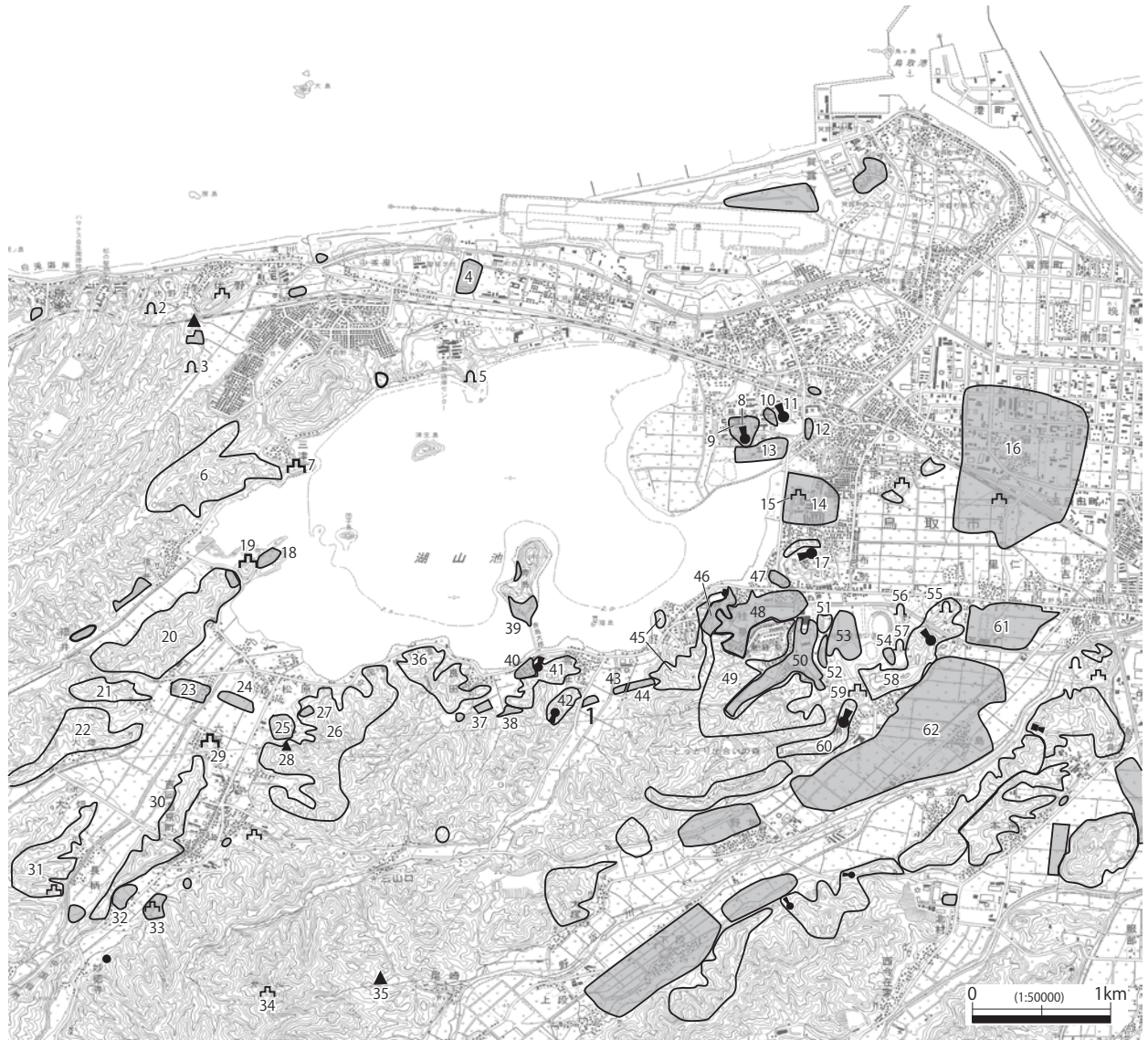
後期になると、建物のある遺跡が各所でみつかる。湖山第2遺跡ではこの頃から遺構数が増え、布勢第2遺跡に続き桂見遺跡、帆城遺跡、大桝遺跡では丘陵裾に、西桂見遺跡では丘陵上に建物が確認された。特に、布勢第2遺跡の玉作工房と思しき竪穴建物は注目される。

一方、南東部の丘陵では墳墓群を築造する。その中で後期中葉の長軸17.8mを測る布勢鶴指奥1号墳丘墓や、桂見墳墓群で一回り大きい墓壙に水銀朱や玉類を副葬する第1土壙墓の存在は、首長層の存在を示すものだろう。さらに後期末になると西桂見墳丘墓（全長約65m）が出現し、南東部に有力な集団が存在していたようだ。

南西部でも、松原田中遺跡や松原谷田遺跡、岩本第2遺跡で建物が発見された。また、池に突き出した丘陵上には多量のガラス玉が出土した松原1号墳丘墓がある。

【古墳時代】

古墳時代に入ると、南部から西部にかけての丘陵上を中心に古墳が造られる。



- | | | | |
|--------|------------|--------|----------|
| ○ 集落遺跡 | ● 主要な前方後円墳 | ∩ 横穴墓群 | ▲ その他の遺跡 |
| ○ 古墳群 | ■ 前方後方墳 | □ 城跡 | |

- 1 高住平田遺跡 2 伏野神社の南横穴墓群 3 伏野所在横穴墓群 4 中ノ茶屋遺跡 5 三津所在横穴墓
 6 三津古墳群 7 三津ヶ崎本陣山城跡 8 三浦1号墳(琵琶隈古墳) 9 三浦遺跡 10 大熊段遺跡
 11 大熊段1号墳 12 湖山第1遺跡 13 湖山第2遺跡 14 天神山遺跡 15 天神山城跡 16 岩吉遺跡
 17 布勢1号墳 18 岩本第2遺跡 19 防己尾城跡 20 岩本古墳群 21 大谷古墳群 22 大畑古墳群
 23 金沢坂津口遺跡 24 松原田中遺跡 25 松原谷田遺跡 26 松原古墳群 27 松原小奥遺跡
 28 松原所在古墓 29 丸山城跡 30 吉岡古墳群 31 長柄古墳群 32 吉岡遺跡(大海地区)
 33 吉岡遺跡(丸山地区) 34 蓑上山城跡 35 尾崎須恵器窯跡 36 良田古墳群 37 良田中道遺跡
 38 良田平田遺跡 39 青島第1遺跡 40 塞ノ谷遺跡 41 高住古墳群 42 高住宮ノ谷古墳群 43 高住井手添遺跡
 44 高住牛輪谷遺跡 45 倉見古墳群 46 西桂見遺跡 47 帆城遺跡 48 桂見遺跡 49 桂見古墳群 50 東桂見遺跡
 51 布勢古墳群 52 布勢鶴指奥墳墓群 53 布勢第1遺跡 54 布勢第2遺跡 55 里仁第1横穴群
 56 里仁第2横穴群 57 里仁第3横穴群 58 里仁古墳群 59 鍋山城跡 60 桝間古墳群 61 里仁遺跡
 62 大桝遺跡

図7 周辺の遺跡

鳥取平野最大の前方後円墳は、大楠遺跡を見下ろす尾根上にある柵間1号墳（全長92m）で、湖山池沿岸では里仁29号墳（全長81m）が最も大きい。また全長30m前後の前方後円墳が、桂見、高住や良田、松原、吉岡の各古墳群に点在する。松原古墳群内の7号墳（全長54m）は、この中では突出した規模を持つ。

前期古墳の調査は、桂見古墳群や倉見古墳群、松原古墳群で実施された。これらはすべて方墳で、立地も含めて弥生時代からの伝統を継承していることが想定される。

中期古墳の調査例は里仁32～35号墳にある。いずれも方墳で、32・33号墳は鱗付円筒埴輪を棺に転用した埋葬施設を確認し、35号墳から竪櫛が多数出土した。

後期古墳は、北東部の濃山台地上にある三浦1号墳（琵琶隈古墳）（全長36m）や大熊段1号墳（全長46m）、東部の布勢古墳（全長59m）といった前方後円墳が比較的近接して築造される。横穴式石室は倉見9号墳、高住12号墳、松原28号墳や吉岡1号墳（葦岡長者古墳）などがあるが、千代川東岸に比べると確認例は少ない。このほか松原古墳群では、尾根頂部が広がるところを中心に築造された10基の古墳と、斜面に開口する後期末の横穴墓が調査された。

集落は弥生時代後期から継続して、湖山第2遺跡や西桂見遺跡、布勢第2遺跡、松原谷田遺跡などで営まれた。ただ中期の遺構、遺物は減少傾向にある。西桂見遺跡は前期で廃絶し、布勢第2遺跡も中期の遺構は未確認である。湖山第2遺跡は中期で終焉し、隣接する湖山第1遺跡は中期末から後期の建物を検出する。松原谷田遺跡は、前期以降の遺物が散布するのみである。

塞ノ谷遺跡では、弥生時代後期から古墳時代の遺物とともに木製の護岸施設を伴う池状遺構がみつかり、水に関係する祭祀が想定される。

【古代】

湖山池周辺は、律令制下因幡国高草郡に属した。この時期の遺構は、桂見遺跡や岩吉遺跡で掘立柱建物が確認されている。桂見遺跡では周辺から赤色塗彩された土師器や転用硯、木簡が出土し、岩吉遺跡は木簡とともに「草田」と記した墨書土器が多数見つかった。両遺跡とも人形代や斎串などの木製祭祀具が出土する。

松原谷田遺跡では平安時代の掘立柱建物1棟を確認したほか、吉岡遺跡では須恵器とともに奈良時代初頭の単弁十二弁蓮花文軒丸瓦や鴟尾の破片が出土する。調査地近くの吉岡大海地区で瓦が多数散布しており、古代寺院があったようだ。

【中世】

南北朝の争乱期において因幡の実質的な支配を確立した山名時氏は、貞治3（1346）年に室町幕府から正式に因幡守護に任じられ、以後山名氏が因幡守護職に就くことになる。

その守護所として築城されたのが天神山城である。正確な築造時期はよく分らないが、15世紀後半には守護所として機能していたらしい。その後但馬山名氏の支配下に入るが、永禄6（1563）年に武田高信による攻撃を受けた山名豊数が退去し廃城となる。

当該期の墓は、天神山城の北側の三浦遺跡、大熊段遺跡や、南東の徳尾遺跡、南側の里仁古墳群、布勢墳墓群、布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡で見つかった。大熊段遺跡、布勢墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡などでは、方形に周溝を持つものや盛土が確認された。

一方、丸山城跡と防己尾城跡は、この地域を拠点とする吉岡氏との関連性が考えられよう。

参考文献（本書で紹介した遺跡の主要文献のみを掲出する、遺跡名五十音順）

- 『葦岡長者古墳（吉岡1号墳）発掘調査報告書』 明日の湖南を考える会 1984
- 『岩吉遺跡』 岩吉遺跡調査団 1976
- 『岩吉遺跡発掘調査概報』 鳥取市文化財報告書 25 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1989
- 『岩吉遺跡発掘調査概報Ⅱ』 鳥取市文化財報告書 20 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1990
- 『岩吉遺跡Ⅲ』 鳥取市文化財報告書 30 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1991
- 『岩吉遺跡Ⅳ』 鳥取市教育文化財団 1997
- 『大熊段遺跡』 鳥取県教育文化財団報告書 19 財団法人鳥取県教育文化財団 1986
- 『桂見墳墓群』 鳥取市文化財報告書 鳥取市教育委員会 鳥取市遺跡調査団 1984
- 『桂見墳墓群Ⅱ』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1993
- 『平成6年度 桂見遺跡発掘調査報告書』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1995
- 『平成7年度 桂見遺跡群発掘調査概要報告書』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996
- 『桂見遺跡一八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区一』 鳥取県教育文化財団調査報告書 45 財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- 『平成8年度 桂見遺跡群発掘調査概要報告書』 財団法人鳥取市教育福祉協議会 1997
- 『平成9年度 桂見遺跡発掘調査報告書』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1998
- 『桂見遺跡群（その1）』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1998
- 『桂見遺跡群（その2）』 財団法人鳥取県教育文化財団 1998
- 『平成20年度 桂見遺跡発掘調査報告書』 財団法人鳥取市文化財団 2009
- 『桂見古墳群・桂見遺跡発掘調査概要報告書』 鳥取市文化財報告書 23 鳥取市教育委員会 1988
- 『湖山第1遺跡』 鳥取県教育文化財団調査報告書 24 鳥取県教育委員会 財団法人鳥取県教育文化財団 1989
- 『湖山第2遺跡』 鳥取県教育文化財団調査報告書 11 財団法人鳥取県教育文化財団 1982
- 『里仁古墳群』 鳥取県教育文化財団報告書 18 財団法人鳥取県教育文化財団 1985
- 『天神山遺跡発掘調査概報』 鳥取県教育委員会 1973
- 『天神山遺跡発掘調査報告書』 鳥取県教育委員会 1989
- 『徳尾遺跡群発掘調査報告書』 鳥取県教育委員会 1985
- 『西桂見遺跡』 鳥取市文化財報告書X 鳥取市教育委員会 1981
- 『西桂見遺跡Ⅱ』 鳥取市文化財報告書 16 鳥取市教育委員会 倉見古墳群発掘調査団 1984
- 『西桂見遺跡一鷲谷口地区・鷲谷奥地区・堤谷地区一 倉見古墳群』 鳥取県教育文化財団調査報告書 46 財団法人鳥取県教育文化財団 1996
- 『東桂見遺跡試掘調査報告書』 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 6 鳥取県教育委員会 1992
- 『東桂見遺跡 布勢鶴指奥墳墓群』 鳥取県教育文化財団調査報告書 29 財団法人鳥取県教育文化財団 1992
- 『布勢遺跡発掘調査報告書』 鳥取県教育文化財団調査報告書 7 財団法人鳥取県教育文化財団 1981
- 『布勢鶴指奥墳墓群試掘調査報告書』 鳥取県教育委員会 1992
- 『布勢墳墓群』 財団法人鳥取市教育福祉振興会 1998
- 『松原古墳群Ⅰ』 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 30 鳥取県埋蔵文化財センター 国土交通省鳥取河川国道事務所 2010
- 『松原古墳群Ⅱ 松原小奥遺跡』 鳥取県文化財調査報告書 20 鳥取県教育委員会 2010
- 『三浦遺跡』 鳥取県教育文化財団調査報告書 9 鳥取大学 財団法人鳥取県教育文化財団 1982
- 『鳥取県史』 第1巻 原始古代 鳥取県 1972
- 『新修鳥取市史』 第1巻 古代・中世篇 鳥取市 1983

第三章 調査の方法

第三章
調査の方法

第1節 現地調査

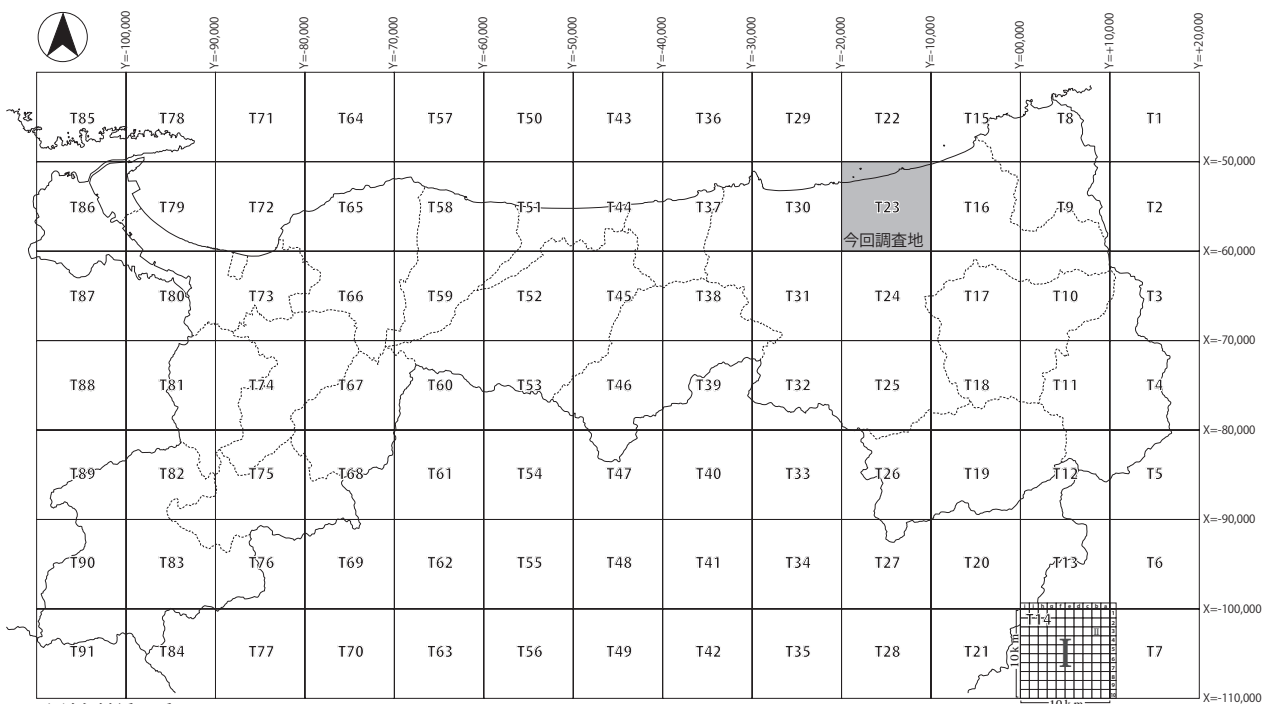
調査地の地区割り

調査の標準化をはかるため、遺跡、遺構の位置表示、遺物の取り上げなどに使用する調査区割り（グリッド）を以下の通り定め、調査を行っている。

遺跡、遺構の位置は平面直角座標の第V系（世界測地系）を使用して表示する。

遺跡（調査地）内の地区割りは鳥取県の全域を図8に示したように、まず第I区画として10,000 m × 10,000 mで1～91に区画する。次に第I区画内を100等分して1,000 m × 1,000 mの地区割りを作成、第II区画として南北軸に1～10、東西軸にa～jまでの記号を付す。さらに第II区画を100等分して100 m × 100 mの地区割りを作成、第III区画として南北軸に1～10、東西軸にA～Jまでの記号を付し、第IV区画として第III区画を100等分10 m × 10 mの区画を作成する。この10 m × 10 mの区画が遺物取り上げの最大単位となり、列（南北軸）、行（東西軸）の順で数字（1～10）、アルファベット（a～j）で表記し、区画を示す。

例を提示すると、図9の網部分は「T 23 - 7 f - 1 H - 7 d」となる。なお本文では、第III区画



平面直角座標系：V系

N 36° 00' 00" を座標原点 (X=0, Y=0) とする
E 134° 20' 00"

区画名称例				
区画の大きさ	10000m	1000m	100m	10m
単位区画	I	II	III	IV
区画名称	（※区画北東の座標値に基づいて名称を付与する）			
例1.	X=-57,430.00 Y=-12,810.00	T23	- 8 c	- 5 I
例2.	X=-74,120.00 Y=+14,350.00	T4	- 5 g	- 2 H

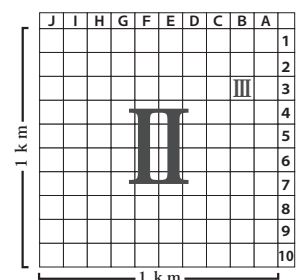
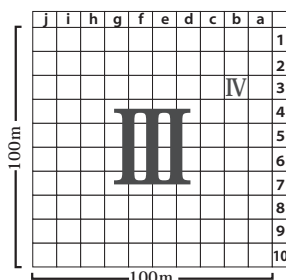


図8 地区割模式

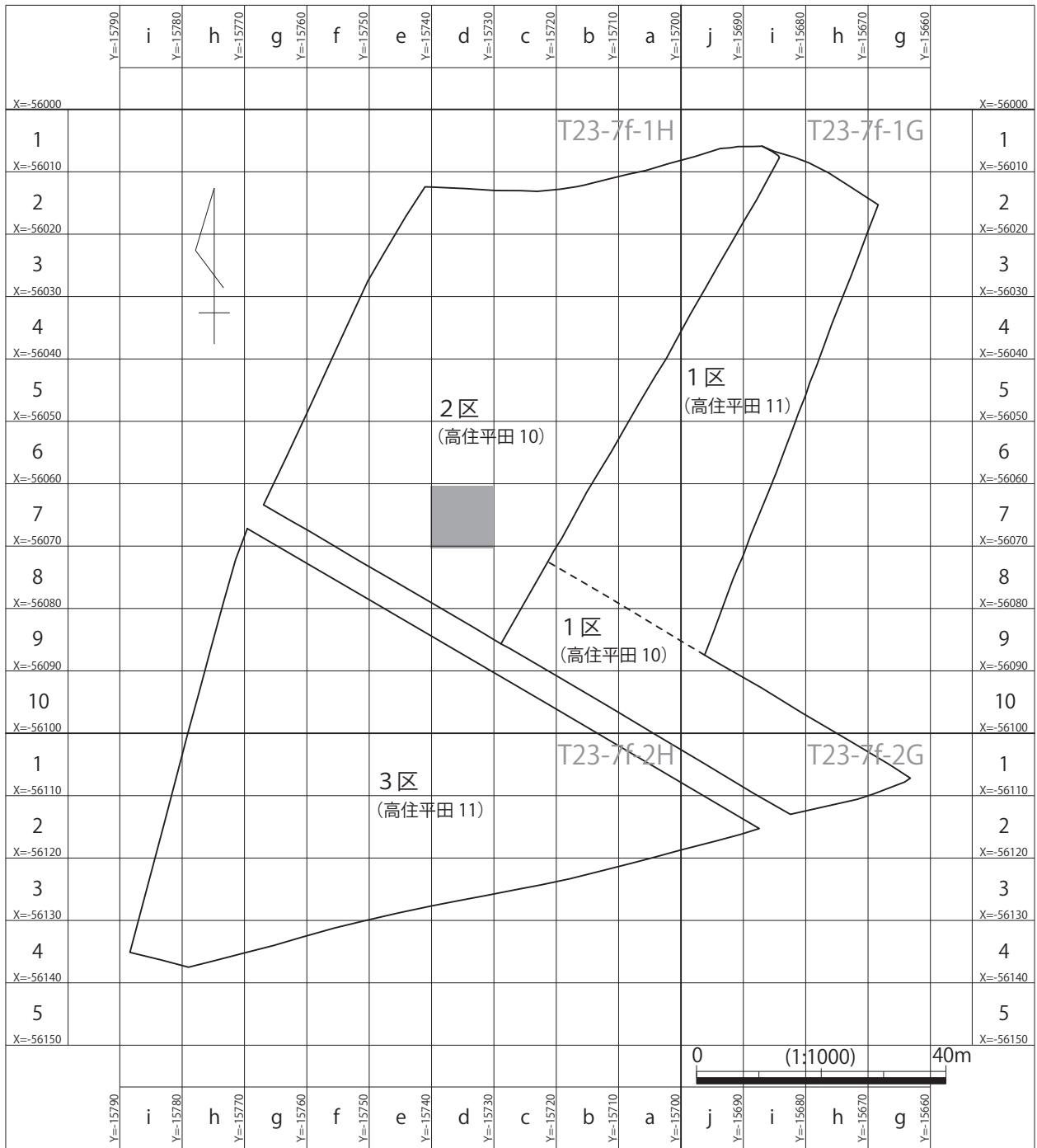


図9 調査地の地区割

以下で位置を表記する。

遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、上記の地区割りを基本にして、10 m×10 mの単位で行っている。また、遺物の取り上げカード及び遺物取り上げ台帳にもこの地区名を必ず記入しており、地図上でも出土地点を示すことが可能となっている。

遺構番号と遺構種類の呼称

遺構の番号については、検出した順に番号を付し、その性格がわかるものについては番号の後ろに種類を記載した。つまり、「1土坑、2墓、3ピット」などである。

また、各年度の調査で検出した遺構番号の重複を防ぐため、平成22年度は1から、平成23年度

は明らかに連続する河川を除いて 1001 からの番号を付した。

掘削の方法

現況耕作土・床土（第Ⅰ層）、旧耕作土（第Ⅱ層）を重機にて掘削し、その後国土座標に沿って 20 mごとにサブトレンチを掘削して土層観察用のアゼとし、第Ⅲ層以下を人力にて掘削した。また層界ごとに精査し、遺構検出に努めた。

遺跡の図面

図面は平成 22 年度・平成 23 年度調査ごとに作成し、それぞれ通し番号を付し、登録台帳を作成して管理した。遺跡の全体図はトータルステーションを用いた電子平板で、出土状況図や断面図は簡易的な写真測量により作図した。

写真撮影

調査地全体の写真については、遺跡の立地や景観・周辺地形との関係性を表現するため、平成 22 年度調査では 2 回、平成 23 年度調査では 3 回、ラジコンヘリによる航空写真撮影を実施した。

また文化財主事による 4×5 判リバーサル・白黒写真、支援調査員による 6×7 判リバーサル・白黒写真、35mm 判リバーサル・白黒写真、デジタル撮影を、撮影対象に応じ適宜選択しながら撮影した。

4×5 判以外はいずれも撮影日順に番号を付し、登録台帳を作成して管理している。なお、デジタルデータには撮影の諸データを写し込み、各フィルムカットの検索性資料の役割を持たせた。またデジタルデータは、デジタル一眼カメラで撮影し、各カット RAW データと jpeg データの 2 種類を作成し保存している。

第 2 節 整理作業

土器・陶磁器

遺物整理は、平成 23 年度半ばより現場作業と併行して行った。土器・陶磁器類については、洗浄・注記・接合作業を行ったのち、実測作業を実施した。

その他の遺物

木製品は出土直後から、乾燥による変形・腐朽を防ぐために水槽にて保管していたが、整理作業の際再度精査して、明瞭な加工痕があり、製品の一部と判断できたものを厳選し、実測作業を行った。

また金属製品のうち鉄製品に関しては、錆落としを実施したのち実測した。

写真撮影

遺物撮影は、調査担当者が 4×5 判あるいは 6×7 判リバーサル、白黒フィルムにて撮影した。

遺構、遺物の検討

検出遺構、出土遺物に基づく検討を行い、その成果を第四章に記した。

収納

調査で得られた図面、写真の記録類、土器などの遺物類はすべて登録して収納作業を行い、各資料は活用に対応することを念頭に、随時検索できる状況で保管している。

第IV章 調査の成果

第1節 調査の概要

高住平田遺跡は、湖山池の南岸にある鳥取市高住に所在する。湖山池には南岸から数条の河川が流入しており、遺跡は三山口川が流れる谷の西側丘陵裾部に位置する。

調査の結果、古代～近世までの遺構、遺物を確認した。調査地の中央には、古代から中世にかけての自然河川（12 河川、2 河川）が筋を変えながら流れており、近世になると水路（1004 溝）として整備される。一方、河川の周辺では、古代から中世の粘土採掘坑と中世前期のものとする掘立柱建物を 1 棟確認しているが、中世後期以降は専ら水田として利用される。

調査地周辺は昭和 50 年頃に圃場整備が実施されたが、それ以前地域の人々に「小井手」と称された農業用水路があった。平成 23 年度の調査で機械掘削を行った際、小井手の痕跡が良好な状態で残存することを確認した。調査地の土地利用の変遷を知る上で、小井手の構築時期やこれに関連すると思われる水田暗渠の位置、構築以前の河川などとの関係を確認することは重要と判断した。そこで、小井手と水田暗渠の位置を記録するとともに、良好に残存していた護岸施設については詳細な記録を作成することとした。

小井手は 3 区南側中央付近から北東方向に延び、1 区北東隅あたりから調査区外へ出る。3 区北側の東岸では護岸施設が良好に残っており、底に丸木を置いて杭で固定し、この上に拳大から人頭大の礫を積み上げていた。小井手には節を抜いた竹が接続されており、水田暗渠の排水を行っていた。埋土からは、中世以降の陶磁器やガラスが出土しており（図版 15 上）、調査した第 1 面の時期と考え合わせると、18 世紀以降に機能していたものと考えている。



写真3 3区 小井手護岸（北西から）

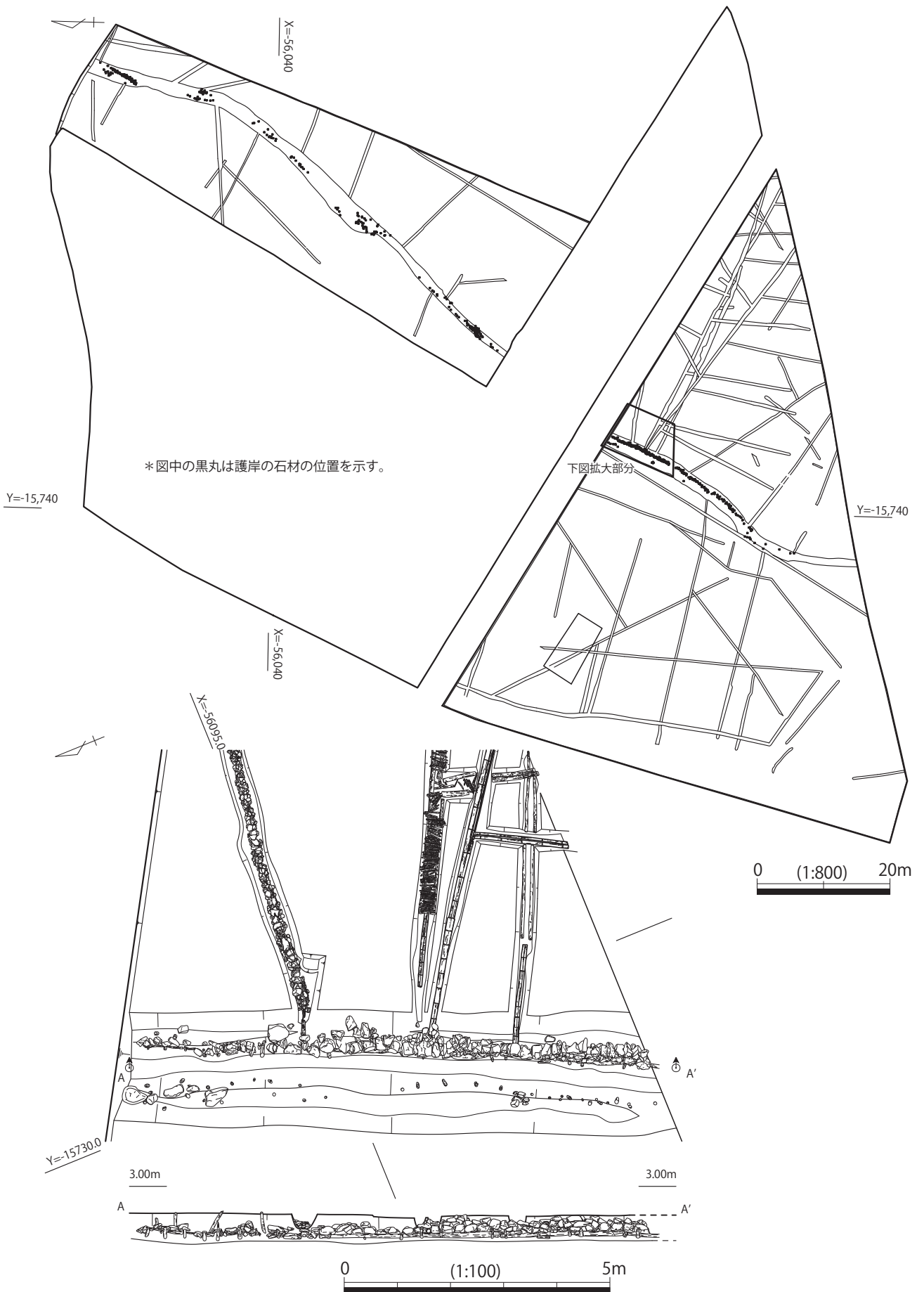


図10 小井手・暗渠 平面・立面

第2節 基本層序

調査では、機械掘削後国土座標に沿うかたちで東西・南北に土層確認アゼを設け、東西アゼの南側と南北アゼの西側にトレンチを掘削し、堆積状況の確認を行った。

調査区内では、第VI層よりも上層はほとんどが土壌化しており、土壌化層と母岩堆積のセット関係による層単位の把握が困難であった。そこで、土質と土壌化の状況をもとに層単位を把握して層序番号を付し、さらに土質の差で細分が可能なものは枝番を付けて区別した。また、土壌化した堆積にはa、土壌化していない堆積にはbを、各堆積の数字の後ろに付した。

ここでは、比較的調査区の層序が把握し易いものとして、東西方向のX=-56,040ライン(図11)とX=-56,100ライン(図13)、南北方向のY=-15,720ライン(図12)の断面図を提示した。なお、機械掘削で第I・II層を除去しており、図はおもに第III層以下の状況を示す。

なお、本文では調査段階から層名を変更しており、対照表を表1に示しておく。

第I層 現況の耕作土で、昭和50年代に行われた圃場整備以降のものである。黄灰色(2.5Y5/3)中～細砂混じりシルトを基本とする。

第II層 第II a層は、圃場整備以前の耕作土と考える。この下にある第II b層は薄い堆積で、2区北東部を中心に確認できるが、ほとんどは第II a層の耕作によって失われる。

第II a層の代表的な色調と土質は、暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂～シルト、第II b層は黄褐色(2.5Y5/4)中～極細砂で、葉理を認める。

第III層 3層に細分することができる。調査区全体に堆積する第III-1 a層の下にその母材である第III-1 b層があり、さらに下層に第III-2 a層が存在する。第III-1 b層と第III-2 a層は、3区の低い箇所を中心に堆積を確認した。

第III-1 a層は、東西方向では調査地中央部でやや厚く堆積し、丘陵部に近い西側でやや薄くなる。近世の陶磁器の細片を含む。代表的な色調・土質は、黒褐色(2.5Y3/1.5)中～細砂混じりシルトで、一部で色調が薄くなる(2.5Y4/2暗灰黄色)。また調査地の西端あるいは東端では、砂粒を多く含む傾向がある。

第III-1 b層は、黄褐色粗～細砂を基本とする堆積である。調査地内で検出した2河川新段階から供給された洪水砂で、葉理を明瞭に観察することができる。この堆積は3区の中央部に顕著で、2区北側にも薄い堆積が点在する。3区ではこの下面で水田を検出した。

第III-2 a層は3区の2河川古段階埋没後に、河川跡周辺の低い部分に堆積したもので、2層に細分することができる。第III-2-1 a層は、黒褐色(2.5Y3/2)細砂混じりシルトを基本とし、第III a層に比べて砂粒が細かい。一方第III-2-2 a層は、黒褐色(5Y3/1)中砂～シルトで、砂粒を多

表1 基本層序対応表

報告書 層名	1区調査時 層名	2区調査時 層名	3区調査時 層名	報告書 層名	1区調査時 層名	2区調査時 層名	3区調査時 層名
第I層	第I a層	第I a層	第I a層	第V-1 a層		第V-1 a層	第V-1 a層
第II a層	第II a層	第II a層	第II a層	第V-1 b層			
第II b層	第II b層	第II b層	第II b層	第V-2 a層			
第III-1 a層	第III a層	第III a層	第III a層	第V-2 b層	第V-2 b層	第V-2 b層	第V-2 b層
第III-1 b層		第III b層	第III b層	第VI層	第VI b層	第VI b層	第VI b層
第III-2-1 a層			第III-3 a層	第VII-1 a層	第VII a層		
第III-2-2 a層			第III-4 a層	第VII-1 b層			
第IV-1 a層	第IV a層	第IV a層	第IV a層	第VII-2 b層	第VII b層		
第IV-2 a層	第IV-3 a層		第IV-2 a層				

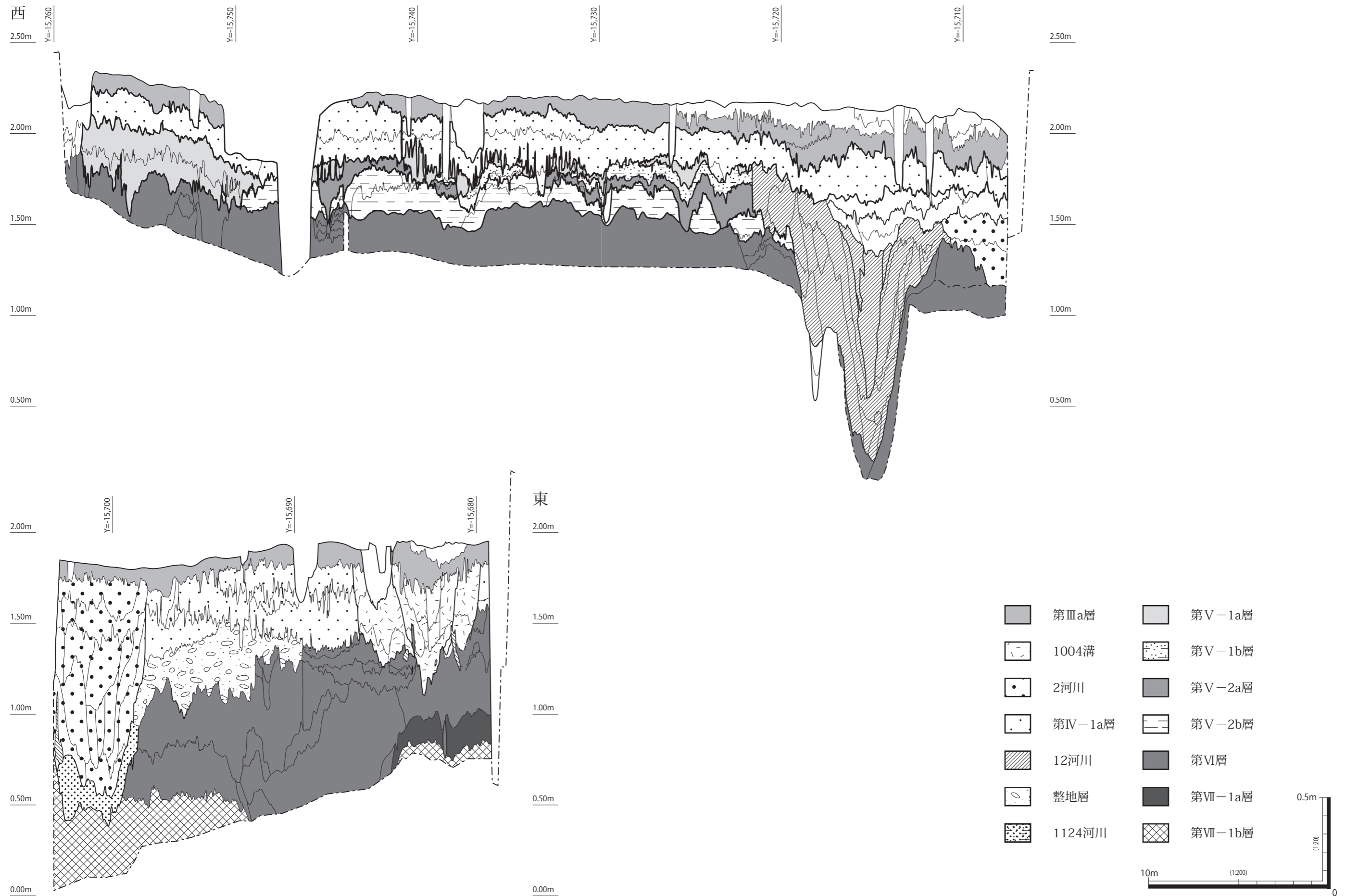


図 11 X=-56,040 ライン 断面

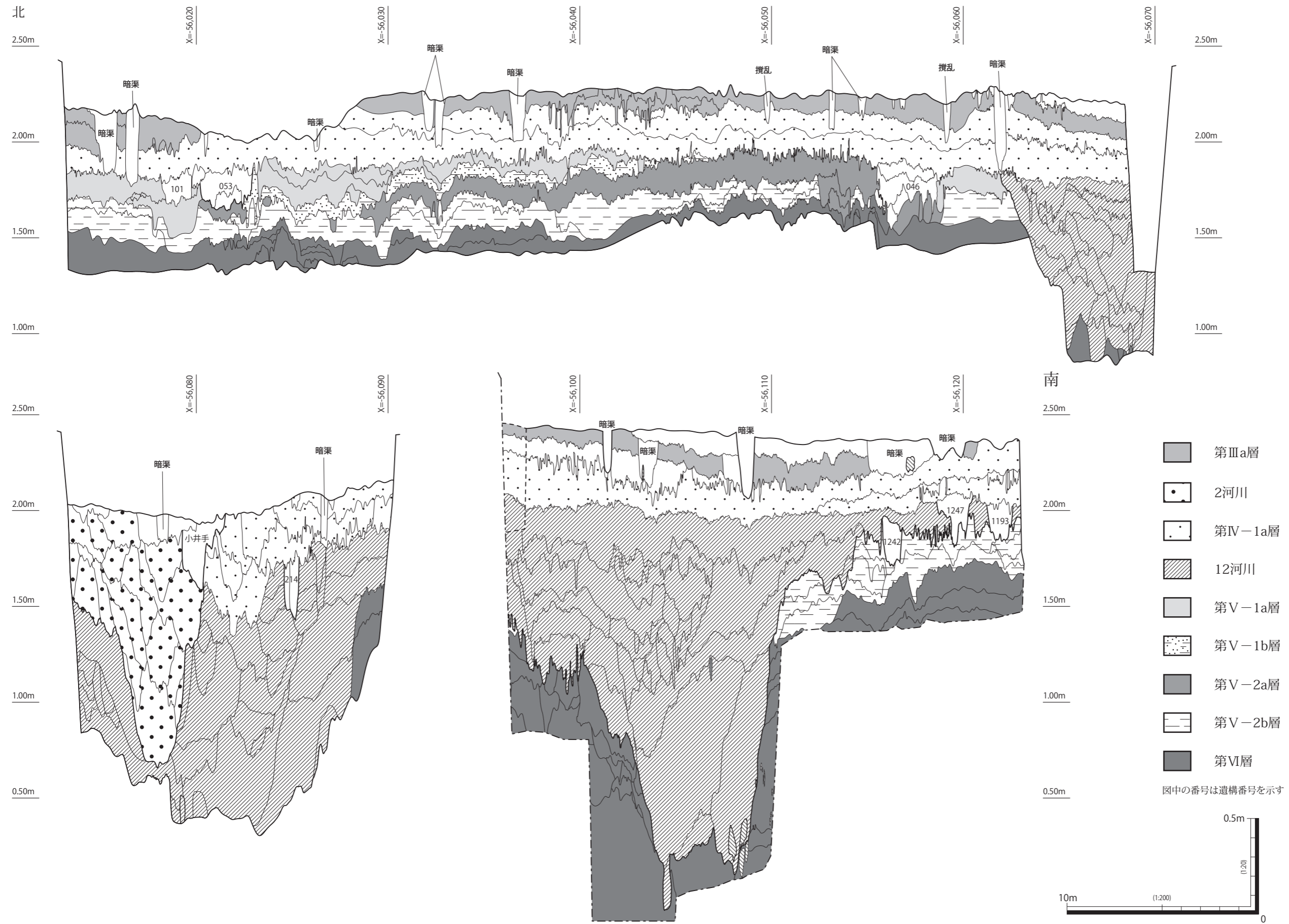


図12 Y=-15,720 ライン断面

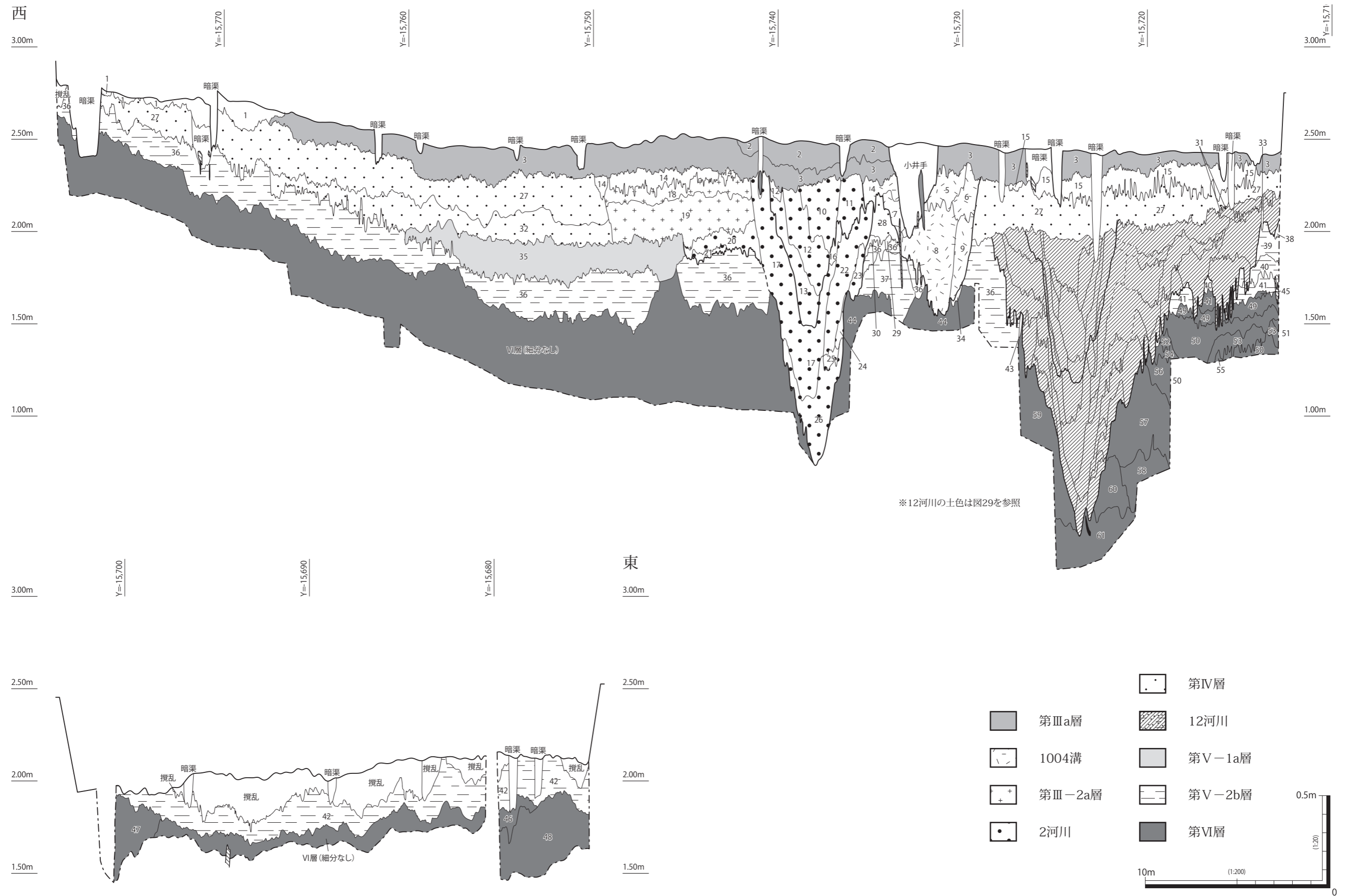


図13 X=-56,100 ライン断面

1	第IIa層	2.5Y5/2	暗灰黄色	粗砂～シルト	
2	第IIIa層か	2.5Y5/2	暗灰黄色	細砂混じりシルト	(2.5Y6/3 にぶい黄色細砂～極細砂を葉理状に含む)
3	第IIIa層	2.5Y3/2	黒褐色	中砂～細砂混じりシルト	
4	第1面 1004 溝	2.5Y4/1	黄灰色	細砂～シルト	(砂粒多い、2.5Y5/3 黄褐色粗砂～細砂葉理層がみられる)
5	第1面 1004 溝	5Y5/1	灰色	シルト	(中砂～細砂葉理層がみられる)
6	第1面 1004 溝	2.5Y4/1	黄灰色	中砂～シルト	
7	第1面 1004 溝	10YR4/2	灰黄褐色	中砂～シルト	(2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂～細砂葉理層がみられる)
8	第1面 1004 溝	2.5Y5/1	黄灰色	粗砂～細砂	(2.5Y4/1 黄灰色シルト葉理層がみられる)
9	第1面 1004 溝	5Y4/1	灰色	細砂混じりシルト	
10	第1面 2 河川新段階	2.5Y3/2	黒褐色	粗砂～シルト	(葉理あり、枝片を含む)
11	第1面 2 河川新段階	2.5Y6/3	にぶい黄色	粗砂～細砂	(細砂主体 葉理あり)
12	第1面 2 河川新段階	2.5Y6/2	灰黄色	細礫～細砂	(中砂～細砂主体、2.5Y4/1 黄灰色細砂混じりシルト葉理層がみられる)
13	第1面 2 河川新段階	5Y3/1	オリーブ黒色	細砂～シルト	(5Y5/1 灰色中砂～極細砂葉理層がみられる、枝片を含む)
14	第IIIb層	2.5Y6/3	にぶい黄色	粗砂～細砂	(細砂主体、一部に 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂～細砂が間層として入る)
15	第IIIb層	2.5Y5/4	黄褐色	細礫～細砂	(細砂主体)
16	第1面 2 河川新段階	2.5Y3/2	黒褐色	極細砂～シルト	(枝片を含む)
17	第1面 2 河川新段階	2.5Y3/1	黒褐色	中砂～シルト	(砂粒多い、5Y5/1 灰色中砂～極細砂葉理層がみられ下部では砂が主体となる)
18	第III-2-1a層	2.5Y3/2	黒褐色	細砂混じりシルト	
19	第III-2-2a層	5Y3/1	オリーブ黒色	中砂～シルト	(2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂～細砂ブロックを含む、砂粒多い)
20	第1面 2 河川古段階	2.5Y3/1	黒褐色	中砂～シルト	(砂粒多い)
21	第1面 2 河川古段階	2.5Y5/2	暗灰黄色	粗砂～極細砂	(中砂～細砂主体)
22	第1面 2 河川古段階	5Y3/1	オリーブ黒色	中砂～細砂混じりシルト	(枝片を含む、5Y5/1 灰色細砂～極細砂葉理層? がみられる)
23	第1面 2 河川古段階	2.5Y4/1	黄灰色	粗砂～シルト	(砂粒やや多い)
24	第1面 2 河川古段階	5Y4/1	灰色	細砂～シルト	(砂粒多い)
25	第1面 2 河川古段階	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト	(枝片を含む)
26	第1面 2 河川古段階	2.5Y3/1	黒褐色	極細砂混じりシルト	(5Y5/1 灰色中砂～極細砂葉理層がみられる)
27	第IV-1a層	5Y3/2	オリーブ黒色	粗砂～細砂混じりシルト	
28	第IV-1a層	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂～シルト	(5Y5/1 灰色中砂～極細砂を斑状に含む、砂粒多い)
29	第IV-1a層	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂～シルト	(第V-2b層ブロックを含む、5Y5/1 灰色中砂～極細砂を斑状に含む、砂粒多い)
30	第IVb層	2.5Y5/3	黄褐色	中砂～細砂	
31	第IV-1a層下面踏み込み	2.5Y5/4	黄褐色	細礫～細砂	
32	第IV-2a層	5Y3/1	オリーブ黒色	中砂～シルト	
33	第IV-2a層下面生痕?	2.5Y3/2	黒褐色	細砂～シルト	
34	整地層か	5Y5/2	灰オリーブ色	細砂～シルト	(第VIb層ブロックを含む)
35	第V-1a層	2.5Y3/1	黒褐色	中砂～細砂混じりシルト	
36	第V-2b層	5Y6/2	灰オリーブ色	粘土	(未分解有機物を含む、一部に 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂～細砂が間層として入る)
37	第V-2b層	5Y4/1	灰色	粗砂～極細砂	
38	第V-2b層	2.5Y5/2	暗灰黄色	極細砂～シルト	
39	第V-2b層	7.5Y5/1	灰色	細礫～粘土	
40	第V-2b層	2.5Y5/4	黄褐色	粗砂～細砂	
41	第V-2b層	10Y5/1	灰色	シルト	
42	第V-2b層	7.5Y6/2	灰オリーブ色	粘土	
43	生痕か	2.5Y4/2	暗灰黄色	中砂～シルト	(第VIb層ブロックを含む)
44	第VI層	10YR4/1	褐灰色	中砂～シルト	(有機物を含む)
45	第VI層	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト	
46	第VI層	2.5Y5/1	黄灰色	細砂～シルト	
47	第VI層	5Y5/1	灰色	細礫～シルト細砂	(葉理層あり)
48	第VI層	5Y5/1	灰色	中砂～細砂	
49	第VI層	10YR3/1	黒褐色	有機質シルト	
50	第VI層	2.5Y4/1	黄灰色	シルト	
51	第VI層	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂～シルト	
52	第VI層	2.5Y5/4	黄褐色	細礫～細砂	
53	第VI層	2.5Y5/3	黄褐色	粗砂～細砂	(葉理あり)
54	第VI層	10YR3/1	黒褐色	有機質シルト	
55	第VI層	10YR3/1	黒褐色	有機質シルト	
56	第VI層	10YR4/1	褐灰色	有機質シルト	(有機物を葉理状に含む)
57	第VI層	2.5Y4/1	黄灰色	極細砂～シルト	(上部は 10YR3/1 黒褐色)
58	第VI層	10YR3/2	黒褐色	有機質シルト	(5Y4/1 灰色細砂～極細砂葉理層がみられる)
59	第VI層	7.5Y5/1	灰色	シルト	
60	第VI層	7.5Y5/1	灰色	シルト	
61	第VI層	5Y4/1	灰色	極細砂～シルト	(炭片を含む)

く含む。

第IV層 古代から中世の遺物を含む堆積である。平成22年度の調査当初、砂粒を多く含む第IV-2 a層のみを第IV層として調査を行ったが、第III-1 b層と第IV-2 a層の間に第IV-1 a層を確認し、第IV層が2層に細分可能となった。平成23年度の調査でも第IV層は2層に大別できたが、第IV-2 a層の様相は調査区ごとに異なる。

第IV-1 a層は、調査地のほぼ全域で確認できる堆積である。代表的な色調、土質は黒褐色(2.5Y3/2)中～細砂混じりシルトで、第III-1 a層に比べ砂粒はやや多くなる。

第IV-2 a層は、調査地北側の1・2区では西に行くほど薄くなり、2区西端ではみられなくなる。代表的な色調、土質は黒褐色(2.5Y3/1)中～細砂混じりシルトで、先述したように第IV-1 a層に比べ砂粒を多く含むことが特徴である。一方、調査地南側では3区の北東部のみ堆積していた。代表的な色調、土質はオリーブ黒色(5Y3/1)中砂～シルトで、北側の堆積と比べると砂粒は少なめである。

整地層 第IV層下面で確認したもので、黄灰色(2.5Y4/1)細砂～シルトに自然堆積層である第V-2 b層、第VI層の偽礫を多く含んだものを基本とする。周辺に比べて低い1区西半から2区東側、3区中央と北西部に分布する。

第V層 4層に大別することができる。調査地全域で自然堆積層の第V-2 b層の上に土壌化した第V-1 a層、第V-2 a層が堆積しており、その間に自然堆積層の第V-1 b層がある。第V-1 b層と第V-2 a層は、地形が低くなる2区中央部で確認した。

第V-1 a層は、2区ほぼ全域と3区西側で確認した。古代の遺物を含み、特に調査地西部で遺物量が多くなる。代表的な色調、土質は黒褐色(2.5Y3/1)中～細砂混じりシルトで、2区中央部ではやや色調が薄くなる(5Y4/1灰色)。

第V-1 b層は、2区中央部付近で確認できる薄い堆積で、細砂を主体とする暗灰黄色(10YR4/2)細砂～シルトを基本とする。

第V-2 a層は、2区北寄りでは確認できる薄い堆積で、遺物はほとんど含まない。代表的な色調、土質はオリーブ黒色(5Y3/1)中～細砂混じりシルトで、砂粒はあまり含まない。

第V-2 b層は、灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルトまたは粘土を基本とする堆積で、未分解の有機物を含むことがある。自然堆積層で、第VI層と一連の堆積である。

第VI層 黒色(2.5Y2/1)または黒褐色(2.5Y3/1)の有機物層または有機質シルトを基本とし、中～細砂層あるいは第V-2 b層に類似する灰オリーブ色シルト～粘土が間層として入る。調査時には土壌化していないと判断したが、一部で土壌化した層が存在することが判明している(第V章参照)。

第VII層 1区北東部で確認した。土壌化層である第VII-1 a層は黒褐色(2.5Y3/1)中砂～シルトで、この母材である第VII-1 b層は灰オリーブ色(5Y4/2)中砂～細砂である。これらは東に向かって高く、低くなる西側は細砂葉理層のある黒褐色(10YR2/2)有機質シルトの第VII-2 b層となる。第VII-1 a層と第VII-2 b層からは、縄文時代前期の土器や石錘が出土する。

なお土層堆積を観察すると、火焰状に変形した堆積が確認でき、第V-2 b層の変形構造は第III a層に及ぶ場合もある。この変形構造は地震動に起因するものである。

第3節 第1面の調査

概要

第1面は第Ⅲ層下面で検出し、自然河川と溝、水田、土坑、ピットを確認した。

このうち1004溝は、昭和50(1975)年頃まで利用された用水路「小井手」の前身で、圃場整備以前の土地利用の原点は、少なくとも江戸時代にまで遡ることが明らかになった。水田は、2河川新段階の洪水砂である第Ⅲ-1b層が厚く堆積していた3区中央部で畦畔を良好な状態で検出できた。中には枝や杭を芯材とした畦も確認できた。一方で土坑やピットは少なく、この段階では調査地は専ら水田耕作に利用されたと考える。

以下、主要な遺構について詳述する。

1004溝(図14～17、図版1・2・4)

調査地中央から北東隅に向かう遺構で、断面が整った逆台形を呈することや、他の河川が地形の低い部分を流れていたのに対して、1区北側で地形がやや高いところを流れていたことから、水路として開削されたものと判断した。なお、平成22年度調査地の溝は、2河川、12河川と重複していたことから認識できず、平成23年度調査で判明した部分を元に推定する。

溝は3区南側ではほぼ北流し、途中で北東方向に向きを変え、1区北側で再びほぼ北流する。中世の自然河川である2河川との位置関係は、3区では河川の東側をほぼ平行し、1区南側では河川が埋まった跡を通り、1区中央付近で東側に抜ける。また昭和50年代まで利用された小井手は、この溝と全く同じところを開削しており(図16)、1004溝の最終形態といえよう。

溝幅は最も狭い3区南側で2mほど、幅が広い1区北側で5mほどある。深さは0.8mほどで、底面の標高は南側で1.71m、北側で0.95mを測る。1区北側では、東岸に川へ向かって緩やかに傾斜する低くなる部分がある。埋土は葉理を確認できるものが多く、下部の色調は黒色系であるのに対し、上部の色調は白色系である。

溝に伴う施設として、1区南側で護岸を目的とした構造物を確認した。

構造物は、両岸に拳大から抱えるほどの大きさのものまでさまざまな礫を使用しており、一部には礫の下に杭を打設する。礫群は北西岸で特に大きな石を多数置き、中には五輪塔の一部(地輪、火輪)

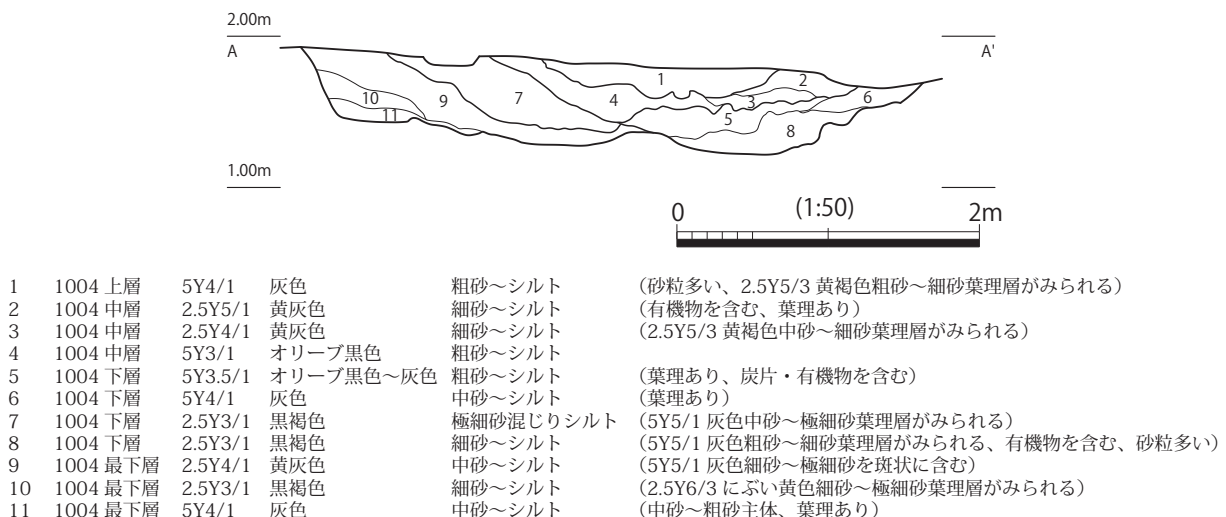


図14 1004溝断面

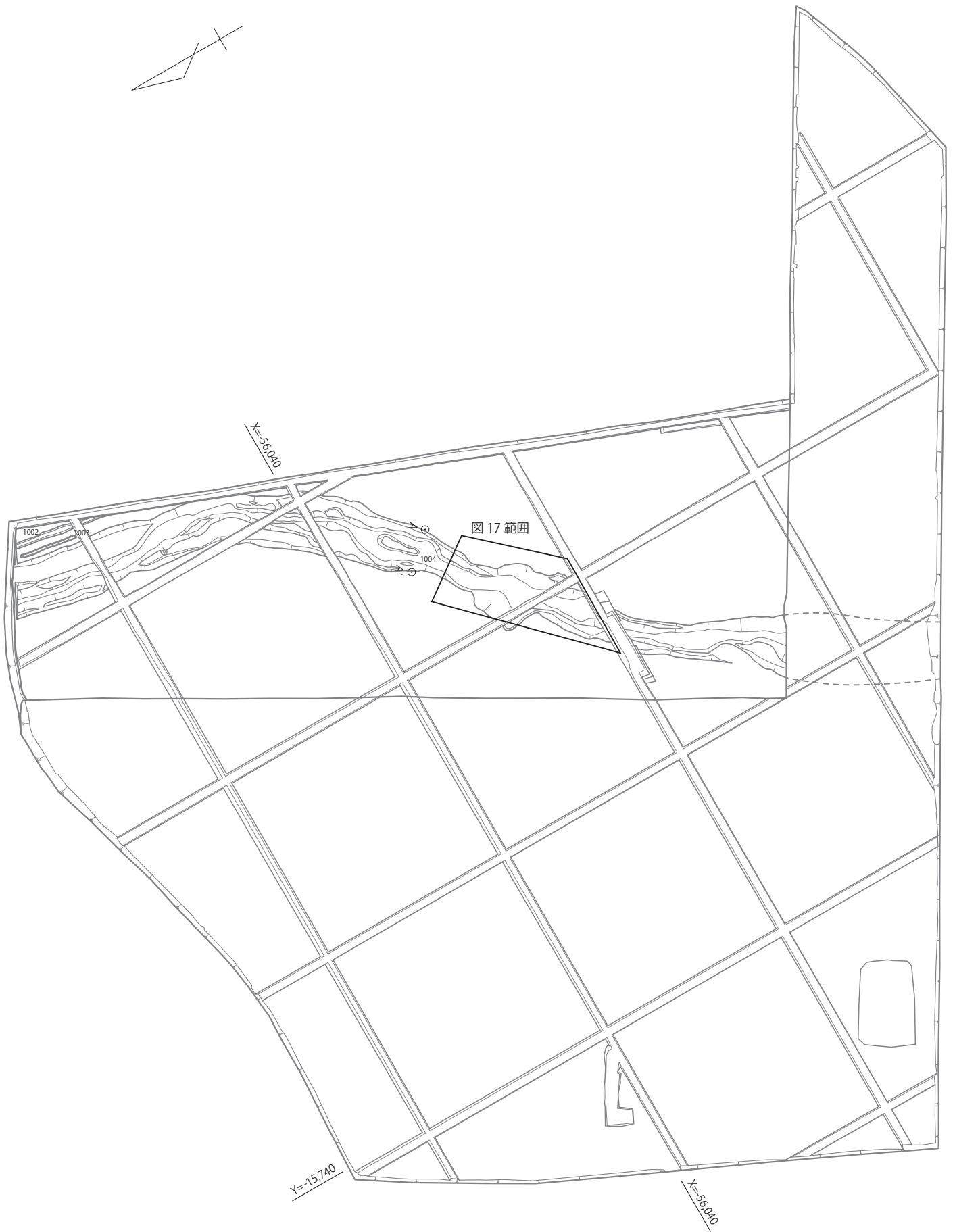




図15 第1面 1004溝平面

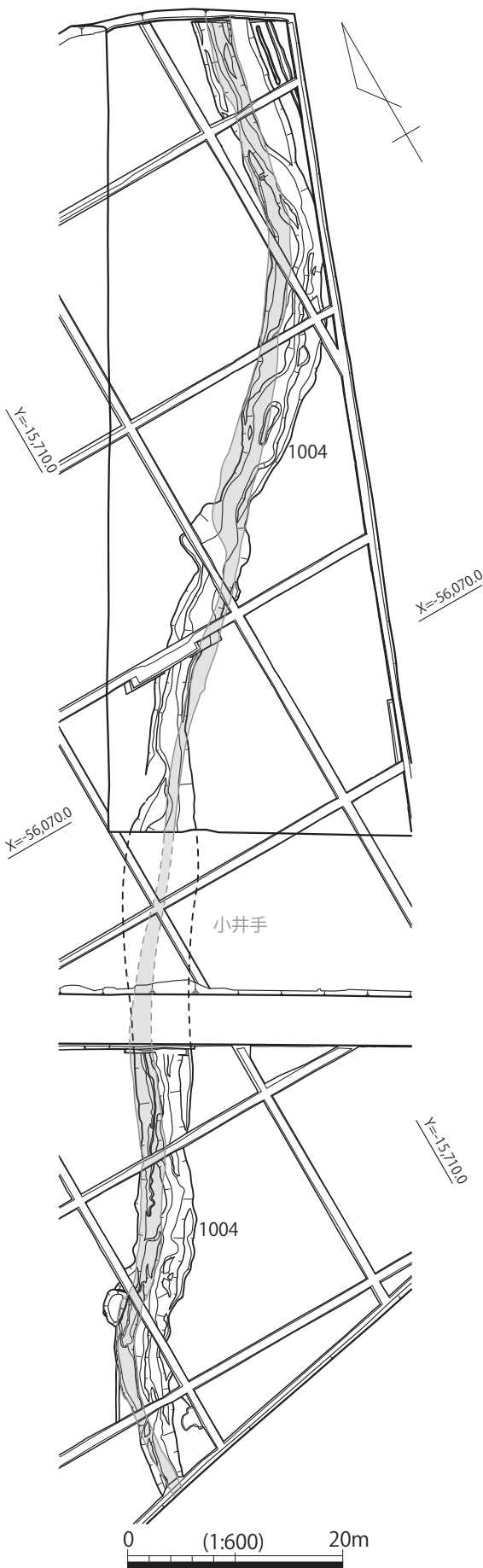


図16 小井手と1004溝の位置関係

を含む。礫群の中央付近で断面を観察すると、南東岸側の礫は岸からはやや離れたところに位置することを確認した。礫の下には砂を多く含むシルトが堆積しており、溝の一部が埋まった段階で護岸が行われたのかもしれない。

この構造物は、2河川跡を流れていた溝が1区南半で川の跡から東側に外れていくところにある。川の埋没部分は砂を主体とし、周辺に比べると地盤が弱い。溝は、ここから地形がやや高くなる東側に流れるように造られていた。これらのことから、構造物の設置は軟弱な地盤を補強し、川跡とは異なる方向へ水を導くために行ったと考える。

川の埋土から龍泉窯青磁や肥前系陶磁器が出土しており、後述する2河川の埋没時期を考慮すると17世紀頃に機能していただろう。

2河川（図18～20、図版3・4）

調査地中央からやや東寄りで確認した。1004溝に比べ東西に蛇行しており、断面形状があまり整っていなかったことから自然河川と判断した。川は1区南側で東にほぼ直角に折れ曲がり、10mほどで再び北流する。

この川の洪水砂である第Ⅲ-1b層は、特に3区で厚く堆積しており、これに埋没した水田を検出することができた。また3区では、第Ⅲ-1b層を供給したとみられる川の平面および断面の形状を認識することができた。そこで第Ⅲ-1b層を供給した川とそれ以前のを分けて掘削、調査することとした。以下前者を「新段階」、後者を「古段階」と呼称する。なお1・2区では、新旧の区別を平面と断面で認識することができなかった。

2河川新段階は幅3～4m、深さは0.6mほどで、底面の標高は3区南側で1.77m、3区北側で1.62mを測る。この段階に伴う護岸施設は確認できなかった。3区南側の川の中からは多くの礫が出土した（図20）。大きさは拳大から人頭大ほどで、多くの礫は被熱により赤変し煤が付着する。調査地周辺で使用したものを廃棄したと考えている。

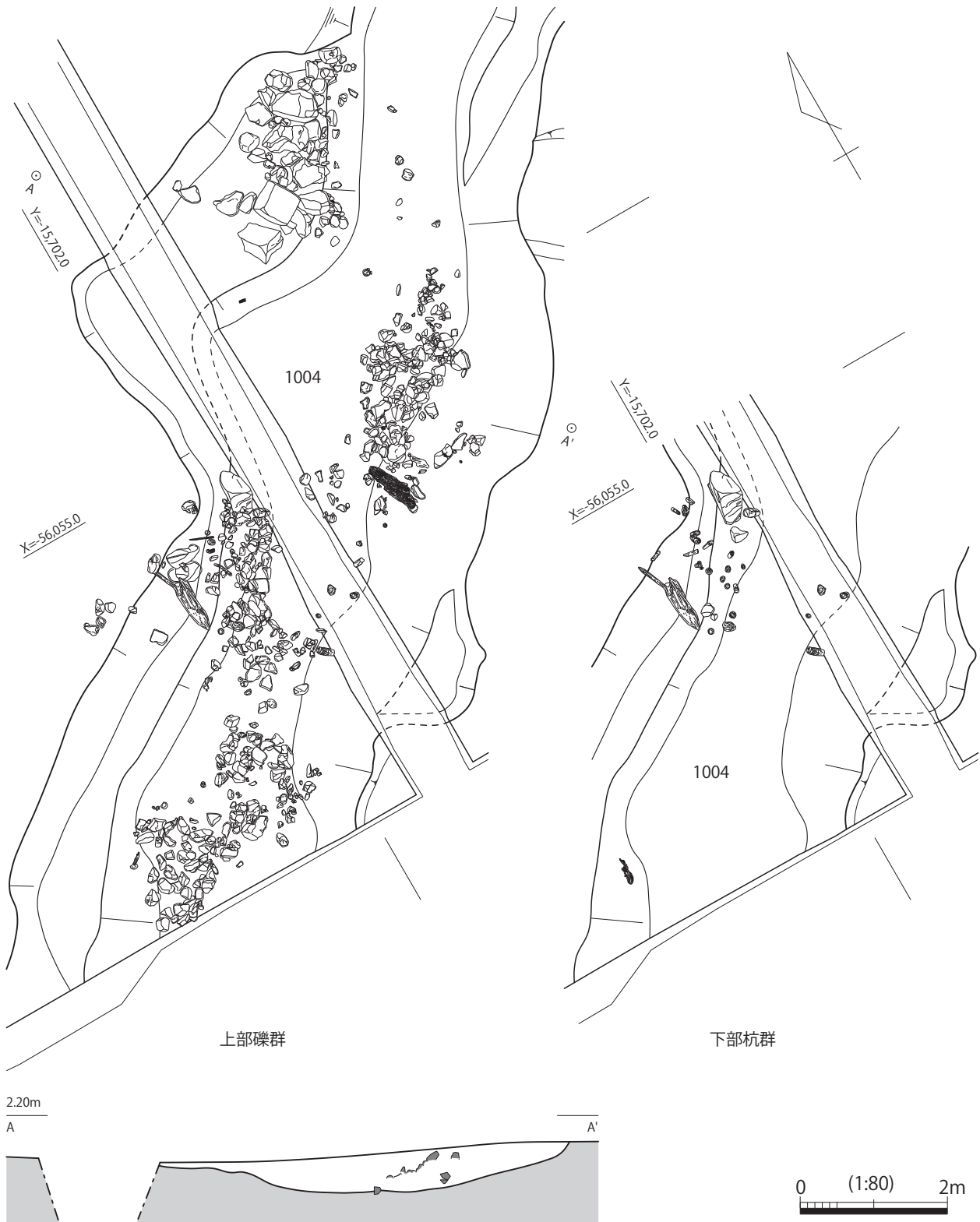
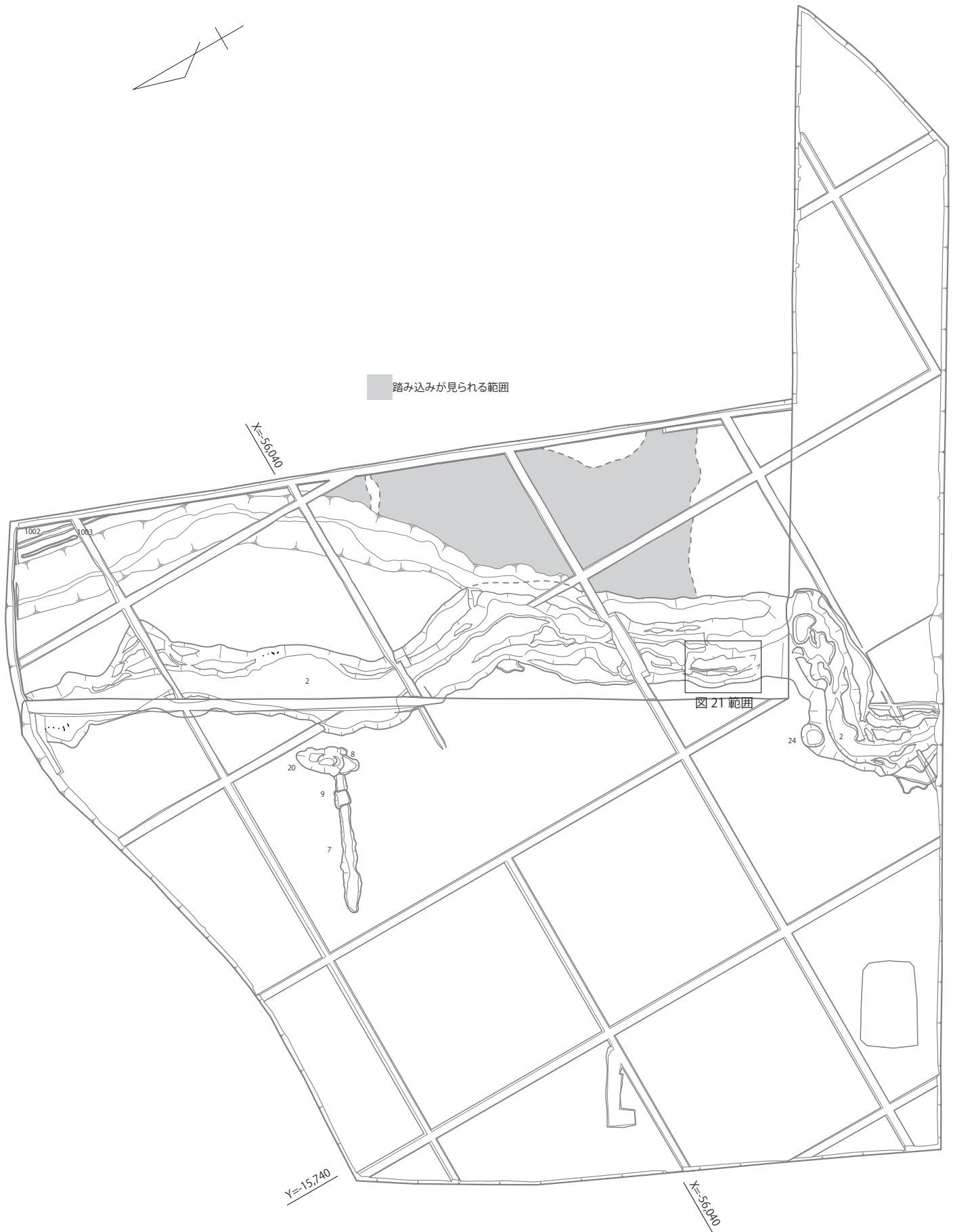


図 17 1004 溝内護岸礫群・杭群

2 河川古段階は幅 4.5 ～ 6 m、深さ 1.2 m ほどで、底面の標高は 3 区南側で 0.84 m、2 区北東部で 0.16 m を測る。川の両岸には、川に向かって緩やかに傾斜する幅 2 ～ 5 m の低くなる部分がみられ、3 区ではこの部分に第Ⅲ－2 a 層が堆積する。

古段階に伴う施設として、3 箇所の杭列と杭と木材を使った 1005 構造物がある。



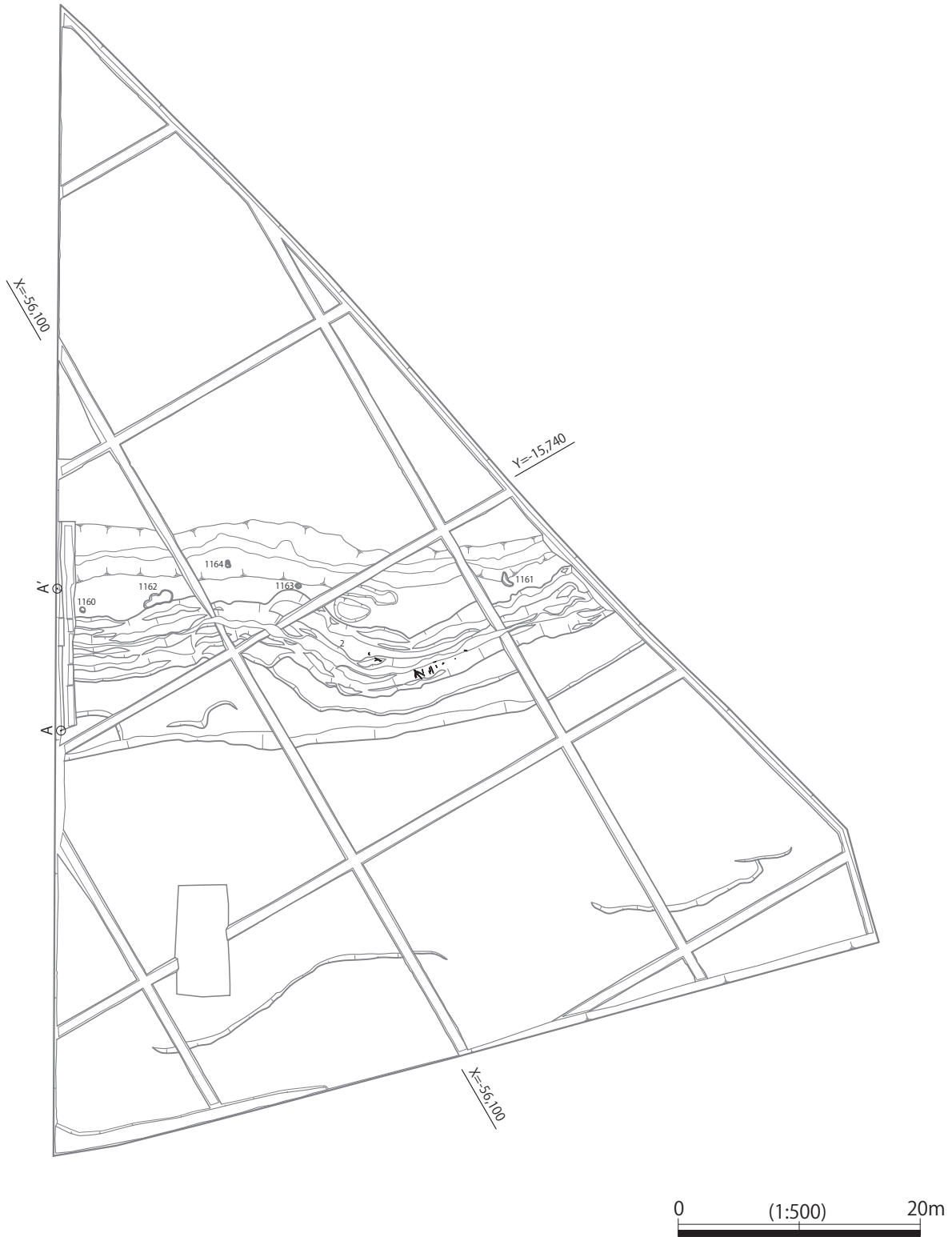


図 18 第 1 面 2 河川古段階平面

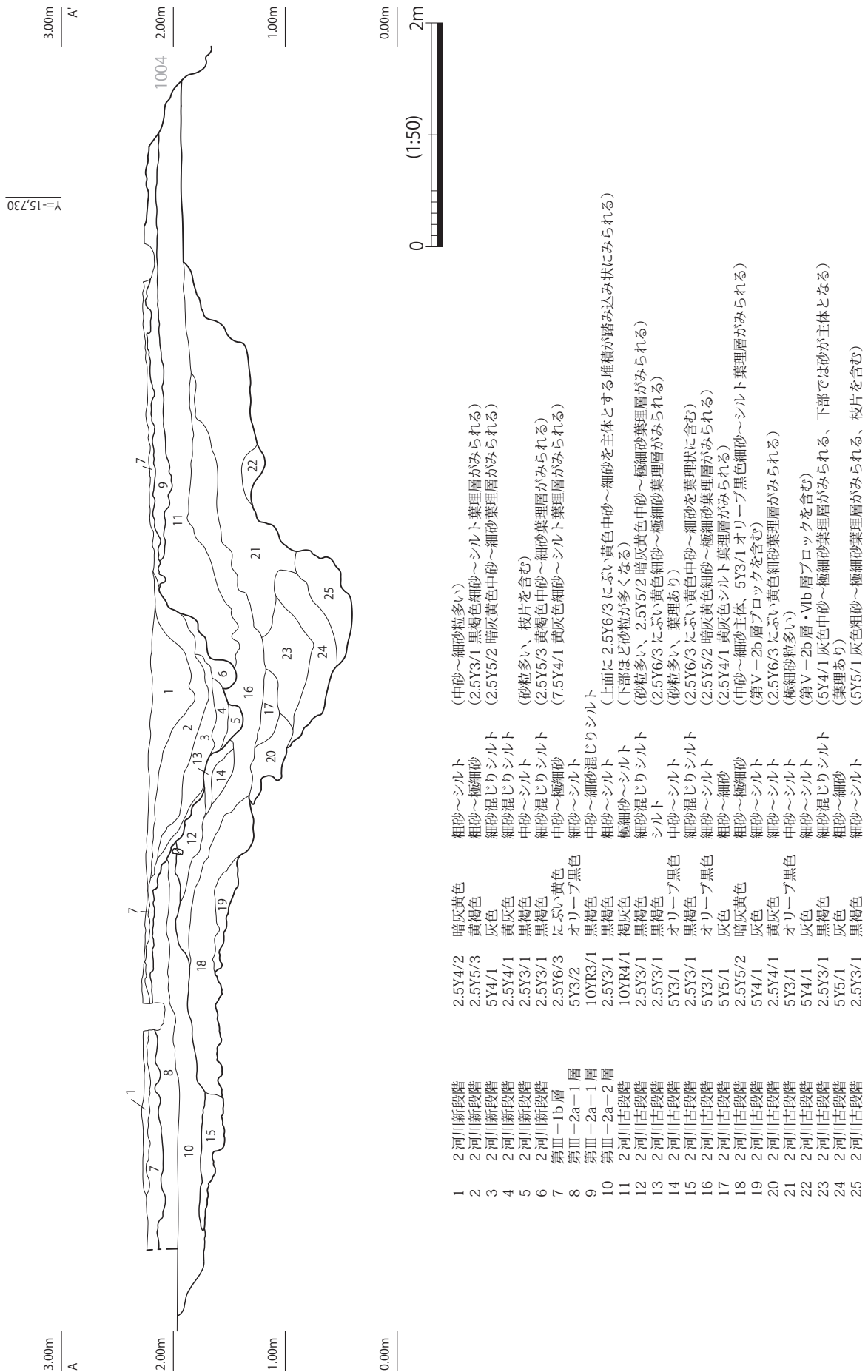


図 19 3 区 2 河川断面

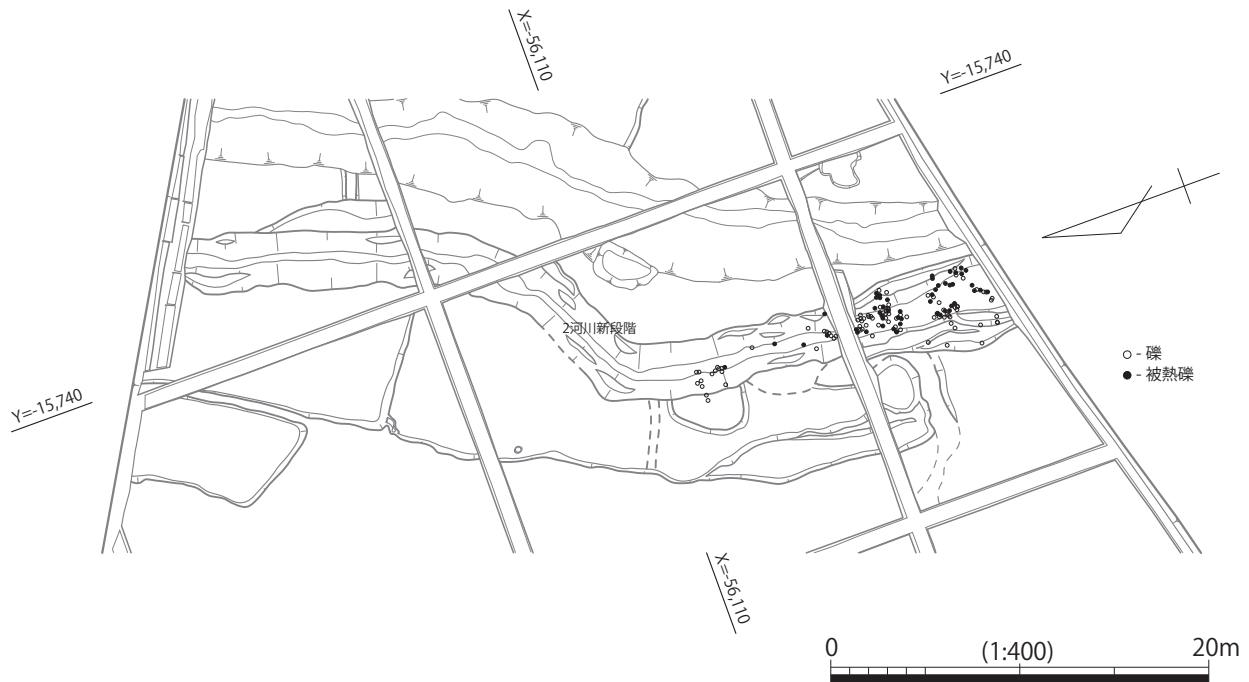


図 20 3区 2河川新段階内礫出土位置

杭列 (図版 7)

杭列は2区北東部の西岸、1区北側東岸、3区中央西岸の3箇所で、川岸付近に杭を打設したものである。本来は板材などを用いた護岸施設だったようだが、杭以外には何も残っていなかった。3区中央で検出した10数本の杭は、南側が立った状態だったのに対し、北側のものは川側に倒れ込んでいた(図版7下)。両者の杭の先端をみると、加工方法が異なっていることから、打設時期に差があると考えられる。

1005 構造物 (図 21、図版 5)

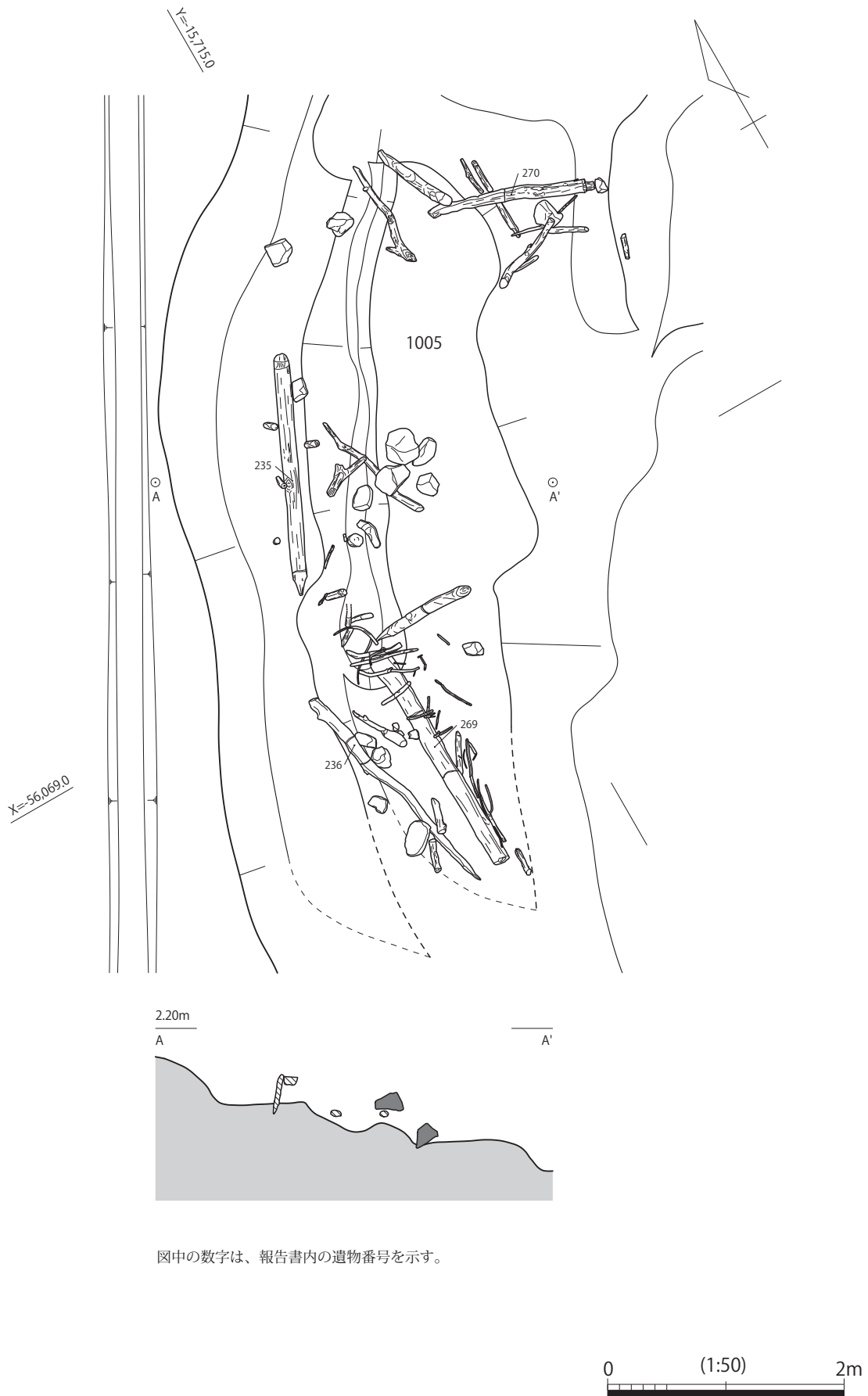
1区南側の西岸で検出した構造物である。3本の卒塔婆を転用した木材を川の流に沿うように置き、その両側に杭を打設して固定している。川の流に沿って3本の卒塔婆転用材を置き、その両側を杭で固定する。木材の下部の堆積には葉理が認められることから、構造物は川がある程度埋没した段階で構築されたのだろう。この北側には数本の杭が倒れた状態で出土しており、これらも一連の構造物だった可能性がある。

構造物は川岸から少し離れたところに構築し、構造物南端付近では岸との間に葉理がある粗砂～細砂が堆積する(図版5下)。このようなことから、この構造物は単に西岸を護岸するのではなく、川岸付近に幅0.8mほどの小さな溝を分流させるために造られたのであろう。ただ、川の外に水を出すような溝は確認されず、溝を開削した理由は不明である。

出土遺物

川の埋土内からは土師器杯や皿とともに白磁の口禿皿、古瀬戸、瓦質土器の煮炊具や播り鉢が出土した。上下の掘り分けを行った3区の古段階埋土からは土師器皿と白磁片が、新段階の埋土からは肥前陶磁器が少量出土する。このことから、この川は12世紀頃から流れており、最終的には17世紀頃に埋没したと考える。

また、川の埋土から多量の牛の骨もしくは歯が出土した。骨には四肢のほかに下顎骨や頭骨の一部を含む。これらは川の各所でバラバラ状態で出土するので、調査地内での祭祀行為は考えにくい。また遺存状態が悪く、骨の刃物痕の有無は観察できなかった。



図中の数字は、報告書内の遺物番号を示す。

図 21 1区 1005 構造物

水田（図 22・23、図版 4・6）

3区で検出したもので、2河川新段階の洪水砂である第Ⅲ-1 b層に被覆されていたので、畦畔が明瞭に確認できた。第Ⅲ-1 b層は南側ほど堆積が薄く、水田の痕跡も上層からの耕作などの影響によって不明瞭となる。

水田区画は2河川東側で3区画、西側で4区画検出した。いずれの区画でも第Ⅲ-1 b層が入り込んだ人や牛の足跡を確認した。

東側の水田は西側に比べて東西方向に広く、1133水田では約12mある。このうち南東にある水田は、もともと1134畦と1140畦、1143畦によって区画されたもので、第Ⅲ-1 b層被覆後に1131水田が造られていた。

西側の水田は、2河川新段階に沿った南北に細長い区画となる。1138水田と1153水田の間は段差があり畦は確認できなかったが、西端で2つの水田をつなぐ溝状遺構（1145）を確認した。1153水田から1138水田へ水を流す水口であろう。また、1153水田と1137水田の間に畦は確認できなかったが、1m幅で人や牛の足跡のない箇所（1154）があり、第Ⅲ-1 b層堆積以降の耕作によって失われたと考えた。1137水田北東部には高さ数cmの島状の高まりがある。

水田を区画する畦の多くは幅1m前後、高さ数cmの土盛りであったが、1137水田の南側にある1020畦と、これと一連と思われる2河川新段階西岸の畦は、杭と枝、石を芯材とする。

これらの構造物は、細い丸木や枝を20～30cm幅に置き、その両側に材を挟み込むように杭を打ち込む。1020構造物西側は、杭に細い枝を交互に編み込んでおり、こうした工法は小井手の護岸構造物でも確認した。また礫が構造物南側に並行していたので、これらも畦を構成する一部と判断した。

2河川新段階西岸の構造物の断面（A-A'）を勘案すると、構造物は河岸に水成層（3・4）が堆積して、一部埋まった段階に造営されたことが判明した。また構造物の北側では、この下に細い杭と枝がわずかに残る箇所があることから、こうした構造物は洪水などで埋没するたびに造り直したことがわかる。

一方、1020構造物の断面（B-B'）を観察すると、畦が構築された後の洪水などによる水成堆積（4）があり、これを補修したと思われる土（5）が覆うことを確認した。なお同じ水成堆積の1層は、上面で礫を検出していることから、最終段階の畦の一部となったと考えている。

土坑・ピット（図 18、図 24～26）

第1面の土坑は、2・3区で11基検出した。検出面の違いから、以下のように2種類に分類し、個々の特徴を記述する。

- ① Ⅲ-1 a層下面では、1004溝左岸にて2区土坑2基、3区土坑4基を検出した。このうち2区7溝を切る8・9土坑は礫や木材が雑然とした状態で出土した。3区の小規模な円形を呈する1017～1019土坑は近接する。さらに3区1004溝に接する1014土坑から、1m×2m程度の範囲に敷き詰められたような状態の枝材が杭1本とともにみつかったが、この用途は不明である。
- ② 2河川古段階では、3区同河川右岸に沿って1160～1164土坑を検出した。いずれも大小の差があり、不整形な1162・1164土坑は切り合い関係を確認できず、単一土坑とした。



図 22 3区 2河川新段階水田

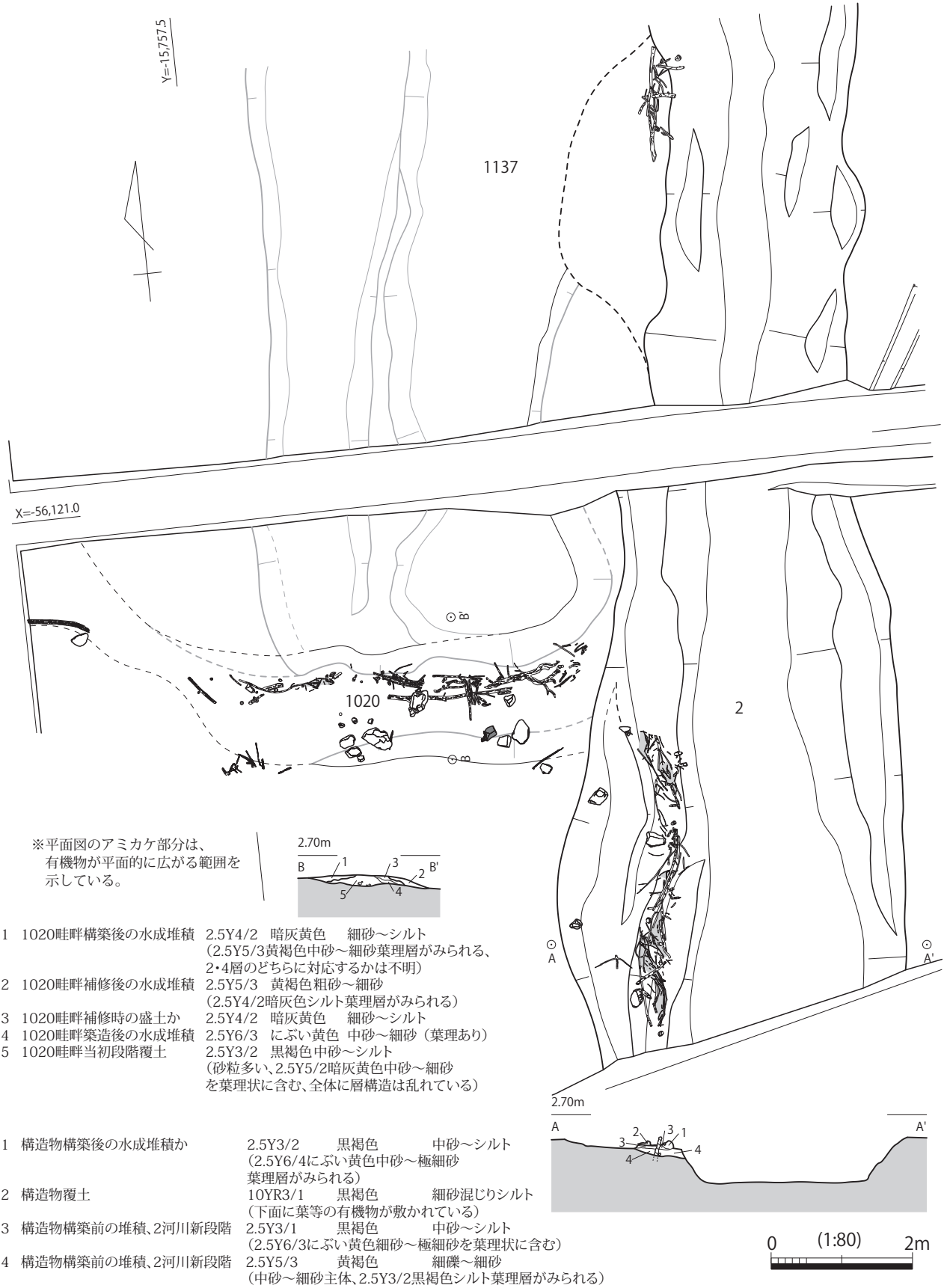


図 23 3区 1020 畦・2河川新段階西岸畦

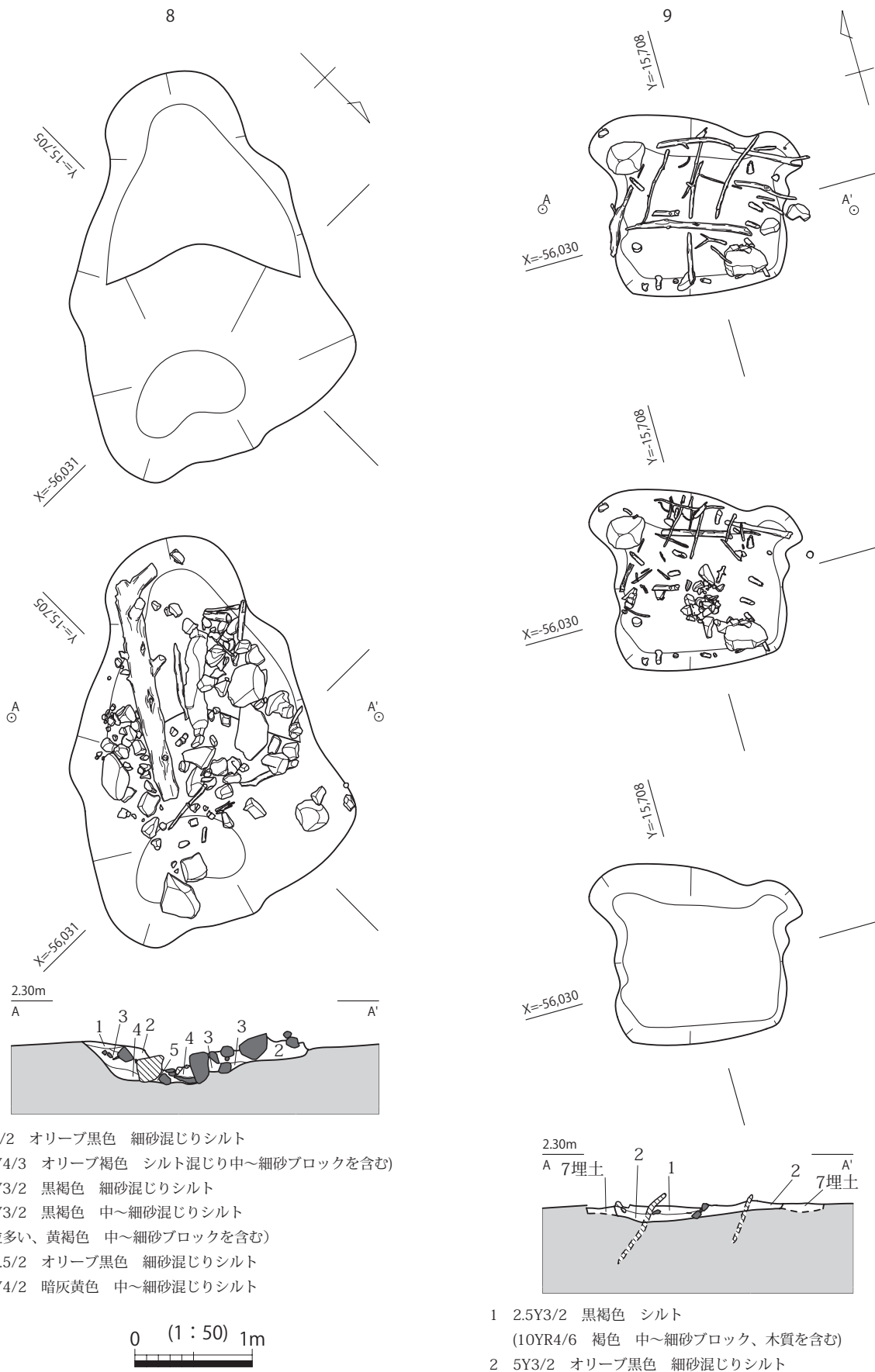


図24 2区 第1面検出遺構

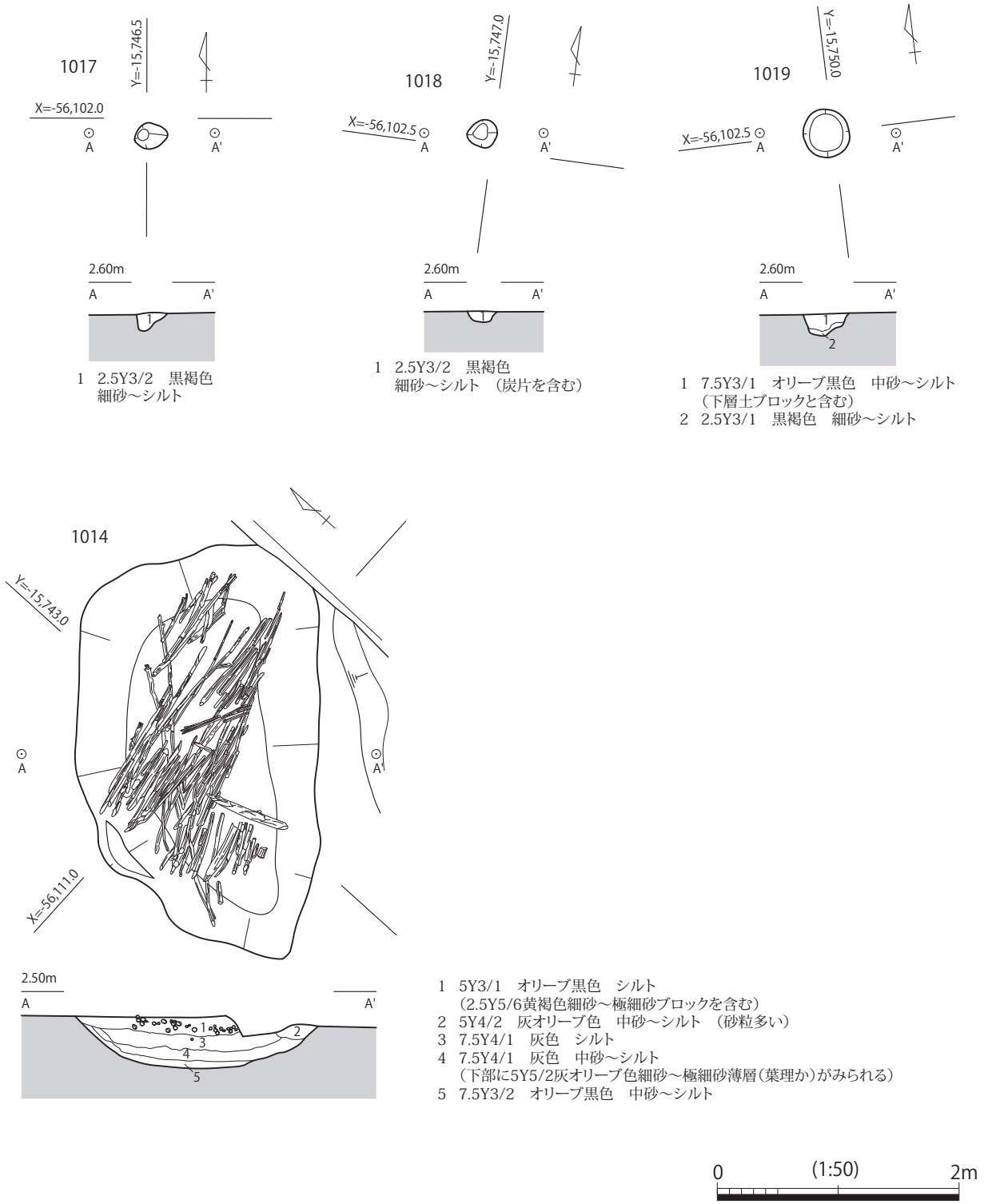


図25 3区 第1面検出遺構(1)

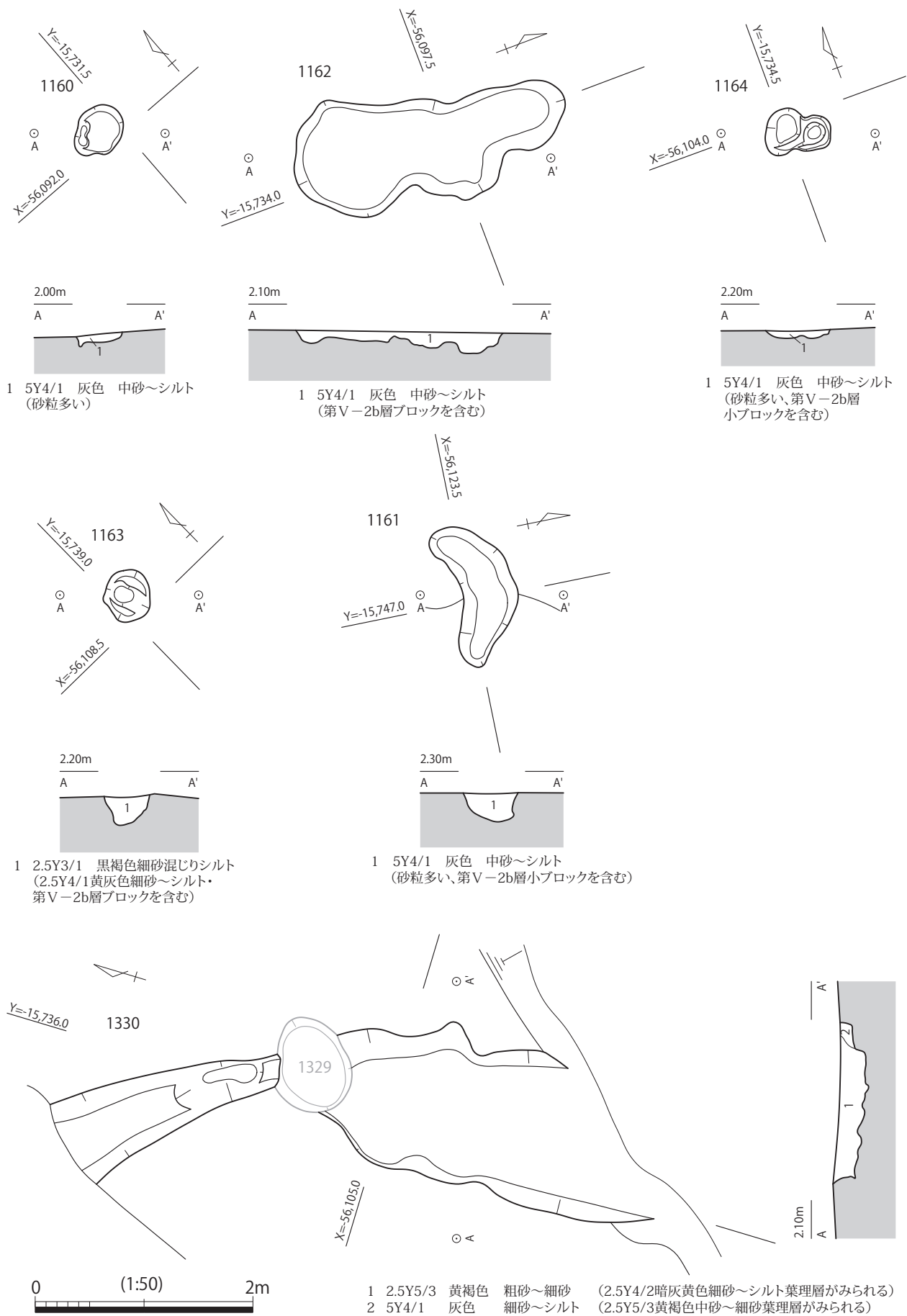


図 26 3区 第1面検出遺構(2)

第4節 第2面の調査

概要

第2面は第IV層下面で検出し、自然河川と掘立柱建物、溝、土坑、ピットを確認した。

奈良～平安時代の12河川に造った堰と思われる構造物から、川の水を利用した当時の人々の様子をうかがい知ることができた。同河川からは、完形に近い土師器や須恵器の供膳具が多量に出土している。

今回の調査で検出した建物は、3区の掘立柱建物1のみである。土坑の中には、第V-2b層の粘土を採掘するために掘削したと思しきものを多数確認した。

掘立柱建物1（図28・30、図版8）

3区北側の2H-1b区で確認した建物である。12河川埋土上面で検出し、12河川埋没後に造ったと考える。第IV層の時期と考え合わせると、中世初め頃の建物ということになる。

第IV層下面を精査したところ、直径0.2～0.3mの円形ピットが長方形に並ぶことを確認した。その規模からみて、この痕跡が柱穴ではなく柱痕と判断し、掘方を探すべく再び精査を行ったが、確認することができなかった。そこで、ピットを半裁し断面を確認したところ、多くはその先端部が尖っていた。そのため、この建物は柱を穴に据えたものではなく、杭のように先端を尖らせた柱を打設して立てたと考えた。

柱は東西方向に3本、南北方向に5本の計15本立てられていたが、そのうち東端と西端の南北列の柱は、他の柱に比べて打ち込みが浅いものが多く、東西方向の柱間は両端の柱間が中央よりもやや狭くなる。以上のことから、東西に廂がつく東西2間、南北2間の南北棟の総柱建物と判断した。

建物は桁行5.60m、梁間3.20mで、桁方向は座標北よりも15度東に振る。ただ桁行の柱間は2.8mあり、かなり長い印象を受ける。廂の柱間は0.54～0.60mである。

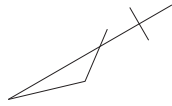
柱を杭のように打設していたため、柱穴からは遺物はほとんど出土しなかったが、北東隅にあたる1175ピットで漆器椀(240)が1点出土した。椀はピットの最上層でみつき、遺構精査時の掘削によって一部失われていたが、それ以外は完存していた。建物廃絶後に意図的に置かれた可能性がある。

12河川（図27・29・30、図版9・10）

調査地のほぼ中央に位置する。3区北側で大きく蛇行する箇所があるが、大きくみれば南南西から北北東方向に流れる。

河川埋土を観察すると、流芯堆積と思われる細礫～細砂層を複数確認することができた。中でも、最上層付近にある幅1～1.5m、厚さ0.6～0.8mの中～細砂を中心とした河川の最終段階の断面形状が確認できたので、2区の1H-3a区～4b区と3区は最終段階の流路とそれ以前のものとして分けて調査することとした。以下、最終段階を「新段階」、それ以前を「古段階」と呼称する。ただ2区の新段階の調査では、流芯堆積である砂層のみを掘り分けの対象としたため、平面形状を把握できていない。そのため、新段階の平面図は3区のみを提示した（図30）。

新段階の幅は3mほど、検出面からの深さは0.8mほどである。平面調査を行った3区では、河川に関連する施設は確認できなかった。



※1009～1012は、4-1 a層下面。その他は4-2 a層下面で検出したものである。
 213・214・216は12河川埋没後の遺構である。



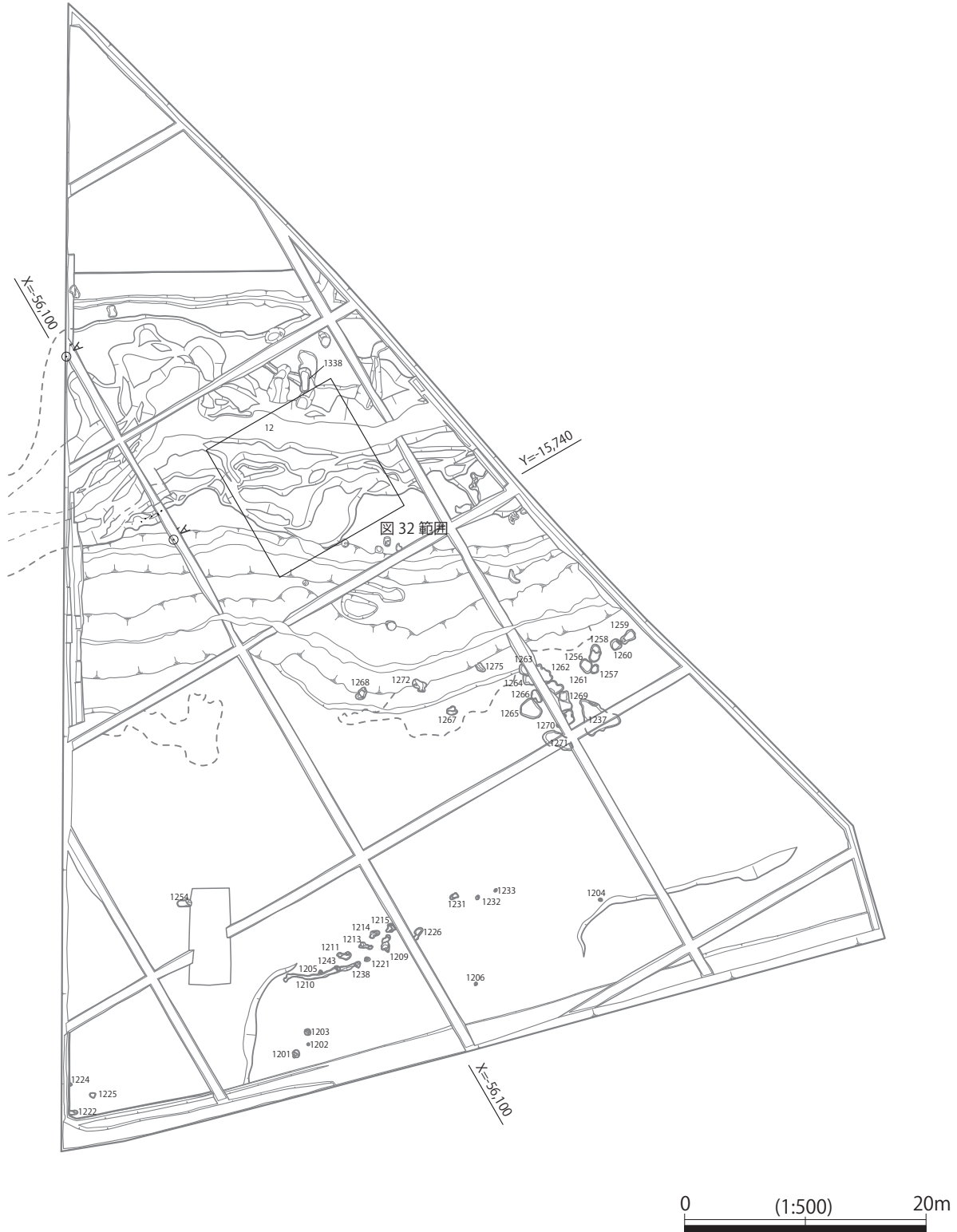


図 27 第 2 面 12 河川古段階 平面

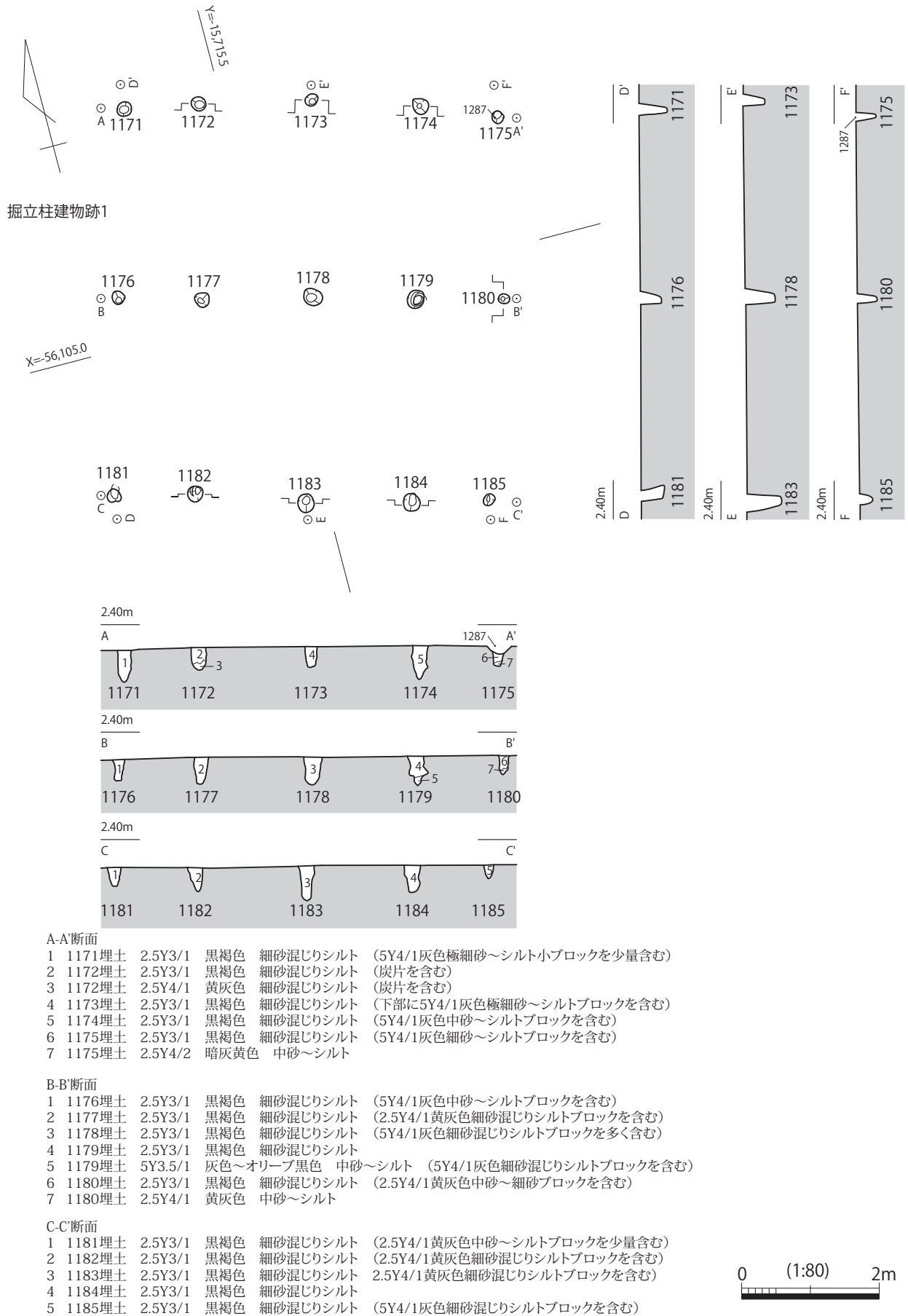
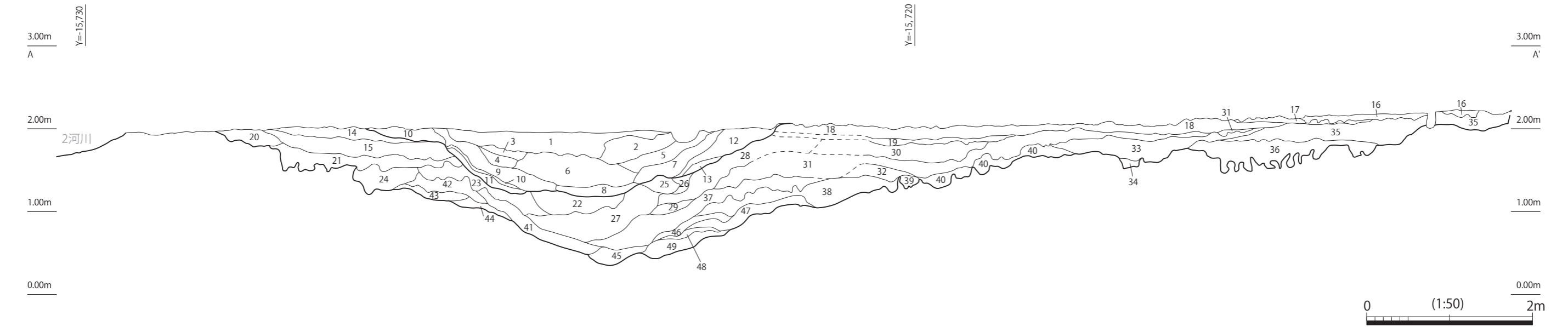


図 28 3区 掘立柱建物 1



1	12 河川	新段階	10YR4/1	褐灰色	極細砂～シルト	(10YR4/6 褐色細砂～極細砂葉理層がみられる)	26	12 河川	古段階	2.5Y6/4	にぶい黄色	細礫～細砂	(2.5Y3/1 黒褐色極細砂～シルト葉理層がみられる)
2	12 河川	新段階	5Y5/1	灰色	粗砂～細砂	(細砂主体、2.5Y4/2 暗灰黄色シルト葉理層がみられる、枝片を含む)	27	12 河川	古段階	2.5Y6/3	にぶい黄色	粗砂～シルト	(2.5Y4/1 黄灰色細砂～シルト葉理層がみられる)
3	12 河川	新段階	5Y4/1	灰色	極細砂～シルト		28	12 河川	古段階	2.5Y3/1	黒褐色	細砂～シルト	(10YR3/4 にぶい黄褐色中砂～細砂を葉理状・斑状に含む)
4	12 河川	新段階	5Y4/1	灰色	シルト	(2.5GY4/1 暗オリーブ灰色細砂～極細砂葉理層がみられる)	29	12 河川	古段階	2.5Y4/1	黄灰色	細砂～シルト	(砂粒多い、葉理あり)
5	12 河川	新段階	5Y3/1	オリーブ黒色	極細砂～シルト	(5Y4/1 灰色細砂～極細砂葉理層がみられる)	30	12 河川	古段階	2.5Y4/1	黄灰色	極細砂～シルト	(2.5Y6/3 にぶい黄色中砂～極細砂葉理層がみられる)
6	12 河川	新段階	2.5Y5/2～4	暗灰黄色～黄褐色	粗砂～細砂	(2.5Y3/1 黒褐色細砂～シルト葉理層がみられる、枝片を多く含む)	31	12 河川	古段階	2.5Y3/1	黒褐色	中砂～シルト	(2.5Y5/3 黄褐色中砂～細砂を斑状に含む、全体に攪拌された状態)
7	12 河川	新段階	2.5Y3/1	黒褐色	極細砂～シルト	(5Y5/1 灰色細砂～極細砂葉理層がみられる、枝片を含む)	32	12 河川	古段階	2.5Y5/3	黄褐色	粗砂～細砂	(葉理あり)
8	12 河川	新段階	5Y5/1	灰色	細礫～細砂	(10YR3/1 黒褐色細砂～シルト葉理層がみられる)	33	12 河川	古段階	2.5Y4.5/2	暗灰黄色	粗砂～シルト	
9	12 河川	新段階	5Y3/1	オリーブ黒色	細砂～シルト	(下部に 5Y4/1 灰色粗砂～シルトブロックを含む)	34	12 河川	古段階	2.5Y5/2	暗灰黄色	中砂～シルト	(砂粒多い)
10	12 河川	新段階	10YR4/2	灰黄褐色	粗砂～シルト	(中砂～細砂粒多い)	35	12 河川	古段階	2.5Y5/1	黄灰色	細礫～シルト	(炭片を含む)
11	12 河川	新段階	2.5Y3/1	黒褐色	細砂～シルト	(下部に 5Y4/1 灰色細砂～極細砂葉理層がみられる)	36	12 河川	古段階	2.5Y4/2	暗灰黄色	粗砂～シルト	(下部で砂粒が多くなる)
12	12 河川	新段階	2.5Y3/1	黒褐色	細砂～シルト	(2.5Y5/3 黄褐色粗砂～細砂葉理層がみられる)	37	12 河川	古段階	5Y4/1	灰色	中砂～シルト	(砂粒多い、2.5Y5/3 黄褐色中砂～細砂を斑状・攪拌状に含む)
13	12 河川	新段階	2.5Y3.5/1	黄灰色～黒褐色	シルト		38	12 河川	古段階	2.5Y4/1	黄灰色	細砂～シルト	(砂粒多い、2.5Y5/3 黄褐色中砂～細砂葉理層がみられる)
14	12 河川	古段階	5Y4/1	灰色	細砂～シルト		39	12 河川	古段階	2.5Y4/1	黄灰色	中砂～シルト	(砂粒多い、2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂～細砂を斑状に含む、全体に攪拌された状態)
15	12 河川	古段階	2.5Y4/1	黄灰色	極細砂～シルト	(2.5Y6/3 にぶい黄色細砂～極細砂葉理層がみられる)	40	12 河川	古段階	2.5Y4/2 暗灰黄色中砂～シルトと 5Y4/1 灰色細砂～シルトが攪拌された状態			
16	12 河川	古段階	5Y5/1	灰色	細礫～シルト	(砂粒多い)	41	12 河川	古段階	5Y3/1	オリーブ黒色	中砂～シルト	(5Y5/1 灰色細砂・第VI層ブロックを含む)
17	12 河川	古段階	5Y4/1	灰色	粗砂～シルト		42	12 河川	古段階	5Y4/1	灰色	中砂～シルト	(2.5Y5/4 黄褐色中砂～細砂を斑状に含む)
18	12 河川	古段階	5Y5/1	灰色	細礫～シルト		43	12 河川	古段階	10YR3/1	黒褐色	有機質シルト	(2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂～細砂葉理層がみられる)
19	12 河川	古段階	2.5Y4/1.5	黄灰色～暗灰黄色	細砂～シルト	(2.5Y5/3 黄褐色細砂～極細砂を斑状に含む)	44	12 河川	古段階	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	(第V-2b層・第VI層・2.5Y4/2 暗灰黄色細礫～細砂ブロックを含む)
20	12 河川	古段階	5Y4/1	灰色	中砂～シルト		45	12 河川	古段階	5Y6/1	灰色	細礫～細砂	
21	12 河川	古段階	2.5Y4/2	暗灰黄色	粗砂～シルト	(中砂～細砂粒多い、第V-2b層ブロックを含む)	46	12 河川	古段階	5Y4/1	灰色	細砂～シルト	(第V-2b層ブロックを少量含む)
22	12 河川	古段階	2.5Y3/1	黒褐色	細砂～シルト		47	12 河川	古段階	2.5Y4.5/1	黄灰色	中砂～シルト	(砂粒多い、第V-2b層ブロックを多く含む)
23	12 河川	古段階	2.5Y4/2	暗灰黄色	中砂～シルト	(2.5Y5/3 黄褐色中砂～細砂が攪拌された状態で入る)	48	12 河川	古段階	5Y5.5/1	灰色	シルト	(粗砂～細砂を葉理状に含む)
24	12 河川	古段階	2.5Y4/1	黄灰色	粗砂～シルト	(第V-2b層ブロックを含む、全体に攪拌された状態)	49	12 河川	古段階	2.5Y4/1.5	黄灰色～暗灰黄色	中砂～シルト	(第V-2b層・第VI層ブロックを含む)
25	12 河川	古段階	2.5Y4/1	黄灰色	細砂～シルト	(木片を少量含む)							

図 29 3区 x = -56,100 ライン 12 河川断面



図30 3区 12河川新段階平面

古段階の幅は5～7 mほどで、大きく蛇行する3区中央部では最大で10 mほどある。先にも述べたように、埋土にはいくつかの流芯堆積を確認できる。それぞれの流芯に対応する河川の断面形状を考えると、実際の川幅は3～5 mである。完掘状態で検出面からの深さは1.5～1.7 m、底面の標高は南端部で0.51 m、北端部で-0.03 mをそれぞれ測る。なお、1区と3区では河川東岸に3～5 m幅で1段低くなっており、河川に向かって緩やかに傾斜する。

河川に関連する遺構として、2区で杭列、3区で堰状の1249 構造物、1250 構造物と、これらに付随する木製の1248 構造物を確認した。また1H-8b区と1H-10c区には、護岸用と思われる杭が数本打設されていた。

杭列 (図 27・31、図版 9)

1H-5b区北側で確認したもので、直径約0.3 mの丸木の杭4本を流れに直交して打ち込む。構成する4本の杭のうち、東から2本目は川底付近で折れているが、他は打設時の長さを保っているようで、最も高い一番西側の上端は標高1.37 mを測る。この高さは西岸の15 平坦面の高さとはほぼ同じで、東岸と比べて約0.1 m低い。

3本の杭は川底よりも約1 m下まで打設するが、最も東側の杭だけは打ち込みが浅く、川底にわずかに刺さる程度であった。そのため当初は3本で機能しており、川底にある程度土砂が堆積した段階で1本を追加した可能性もある。

杭列の東側で2本の細い杭を検出した。底面より深く打設しており、杭列に関連する可能性がある。

1250 構造物 (図 27・32・33、図版 11)

2H-2c区にある構造物で、1249 構造物が埋没した河川堆積上に構築しており、流れにほぼ直交する。構造物は盛土上に枝を敷き、その上に丸木を置く。

丸木は直径10～15cmのものを扱い、長さはさまざまで、なかには3 m近いものもあった。これに二股の木材が1本使われており、丸木のうちの1本はこの股の部分を通るように置かれていた。丸木は盛土の芯材で、本来はこの上にさらに盛土を行っていたと考えられるが、すべて失われていた。

芯材の下の枝敷きには、面的に広がる黒色化した部分があった。枝とともに葉などの植物質を敷いた可能性がある。また、枝敷きは全部で3面確認した。最上面以外は丸木を伴わないことから、本来盛土と枝敷きの互層だったのか、あるいはたびたび構造物が流失し再構築を繰り返したとみられる。

1249 構造物 (図 27・32・34・35、図版 11)

同じく2H-2c区で検出した堰状構造物で、1250 構造物の北東に位置する。

12 河川下層の埋土掘削を行った際に密集した状態で枝材を検出した。精査の結果、丸木の上に枝材を置いたものと判明した。さらに周辺を調べたところ、この構造物は盛土上に構築されたにもかかわらず、北側ではその平面形を把握することなく、誤って盛土の一部を掘削してしまった。そのため、盛土の平面形状については把握できなかった。

構造物は流れに直交して盛土を行い、この上に丸木と枝材を用いて構築した。

盛土の横断面(A-A')をみると、木製構造物の下側の西半分は葉理のある細礫～シルトが堆積する。そのため盛土と水成堆積、構造物の関係を確認するため縦断面(B-B')を観察すると、枝材の下にはシルトが薄く堆積していた。このことから木製構造物の構築後は枝の間に水は通っておらず、構造物は水成堆積後に造られたものと確認した。以上の状況から、当初盛土のみで造られた構造物が流失し、それを木製構造物によって補修したのと考えられる。

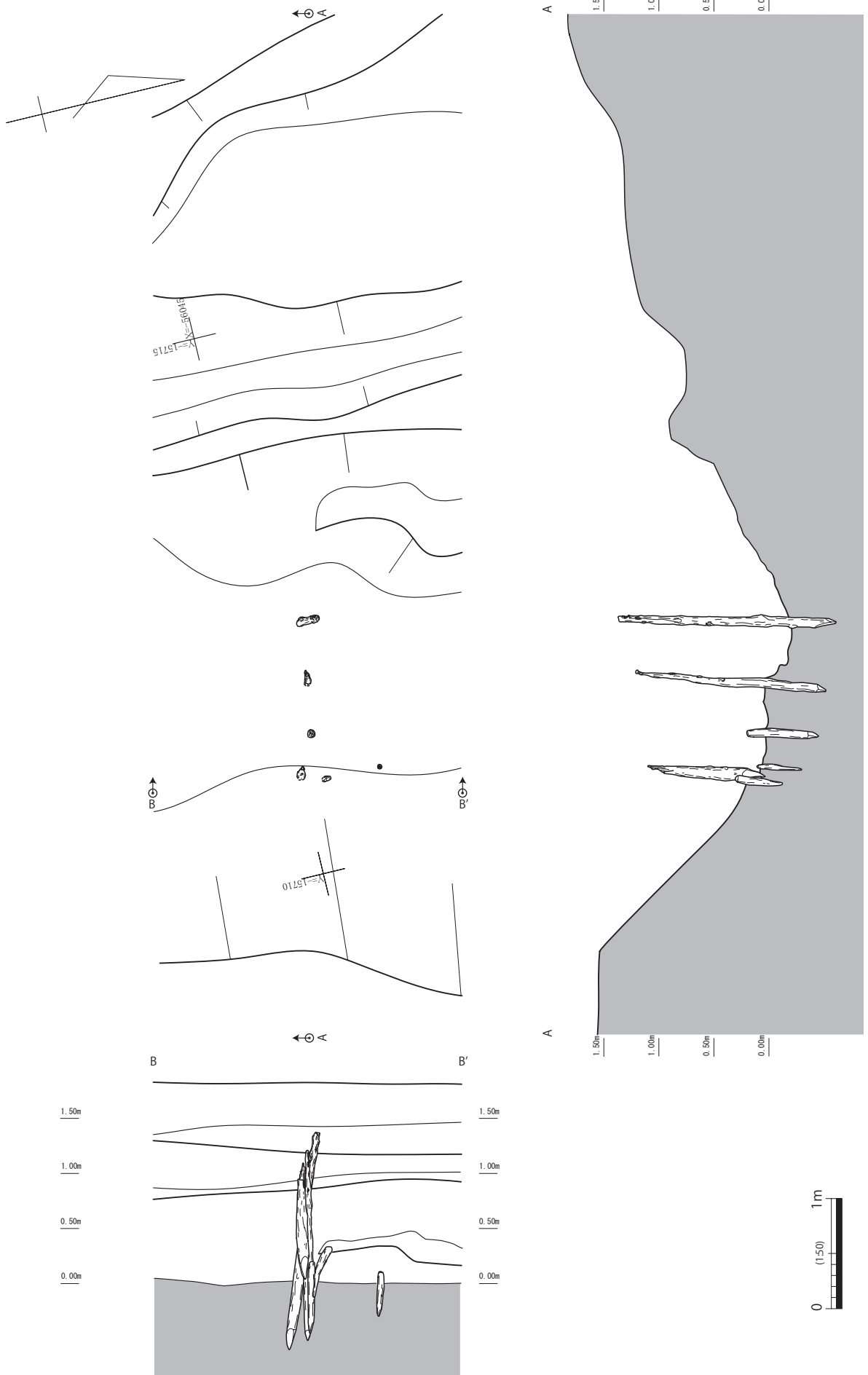


図31 2区 12河川内 杭列



図 32 3区 12 河川内 構造物群

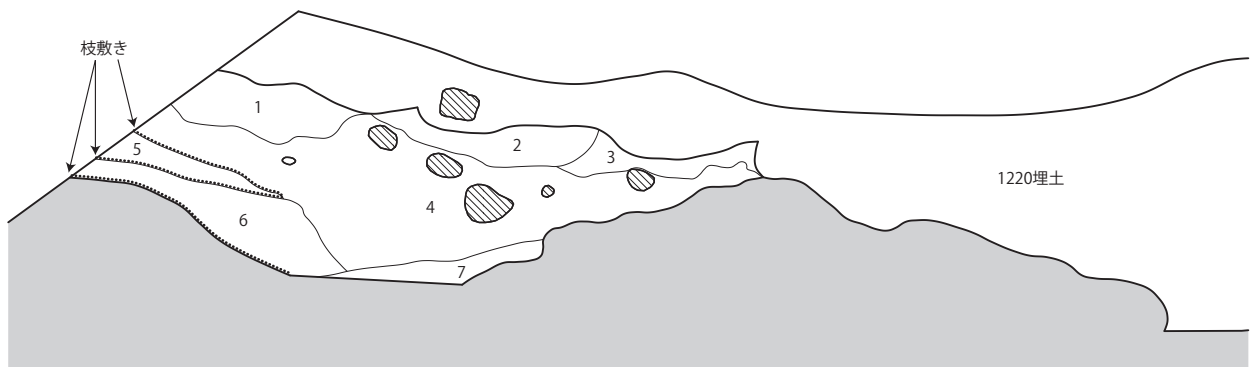
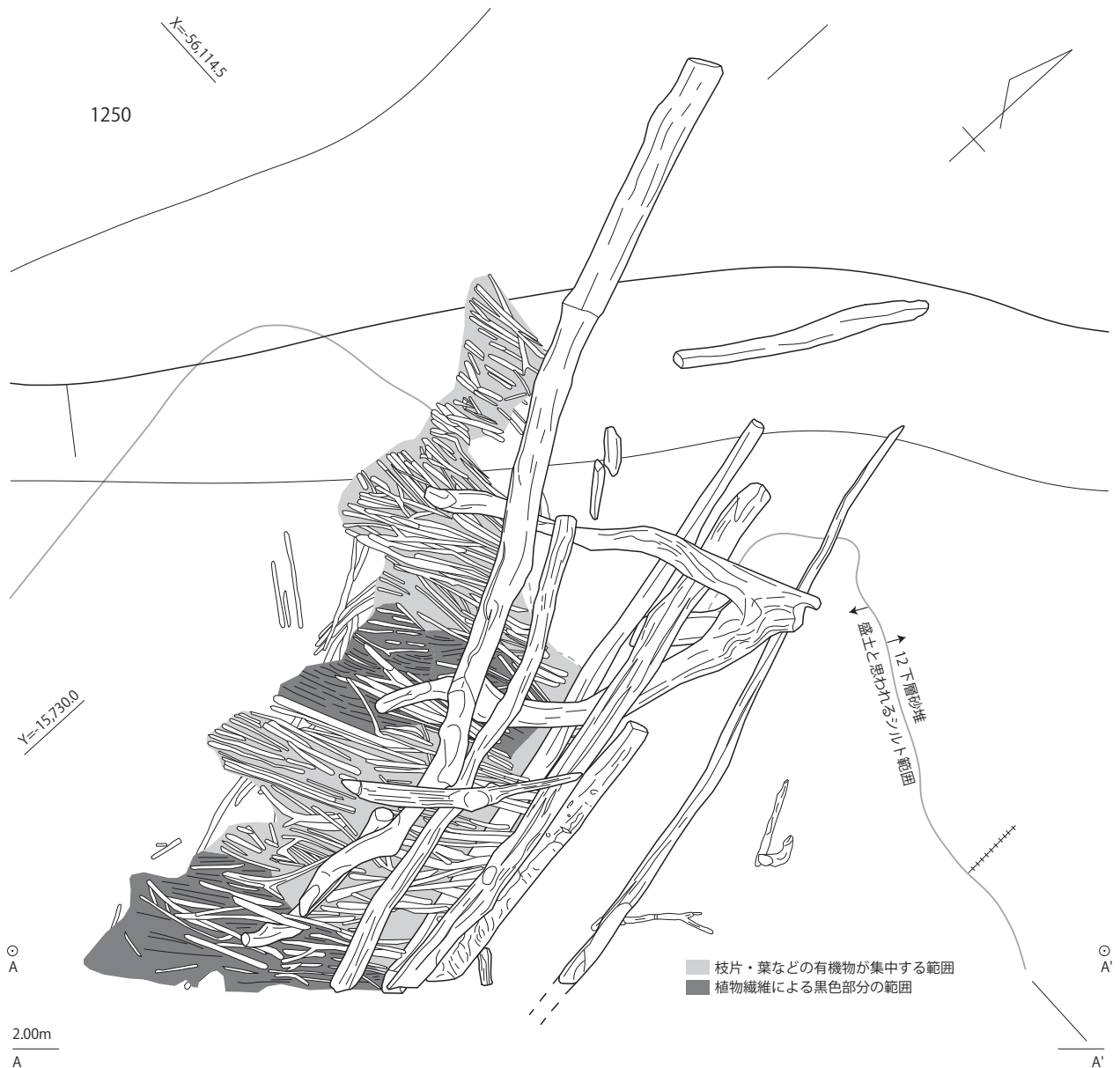
木製構造物は、直径 10cm ほどの丸木と直径 1cm ほどの枝を用いる。まず縦木を盛土が破堤した箇所には 1 本置き、この上に 2 本の横木を乗せ、その西側に横木をもう 1 本置く。2 本の横木の間には 2 本の丸木をハの字に置いて、枝材を敷くための土台とする。この上に長さ 1 m ほどの枝を敷き詰めるが、枝の間は黒色化していたので、一部は枝の下に植物質を敷いた可能性がある。おそらくこの上に盛土をしていたとみられるが、ほとんど失われていた。

破堤堆積内や構造物が埋没した河川堆積内から平安時代中期の土器が出土しており、少なくとも木製構造物は平安時代に構築したものと考えられる。

1248 構造物 (図 27・32)

2H-2d 区で検出した木製構造物である。造られたところは河川西岸が大きく西に広がる部分で、構造物は川の肩付近に構築されていた。

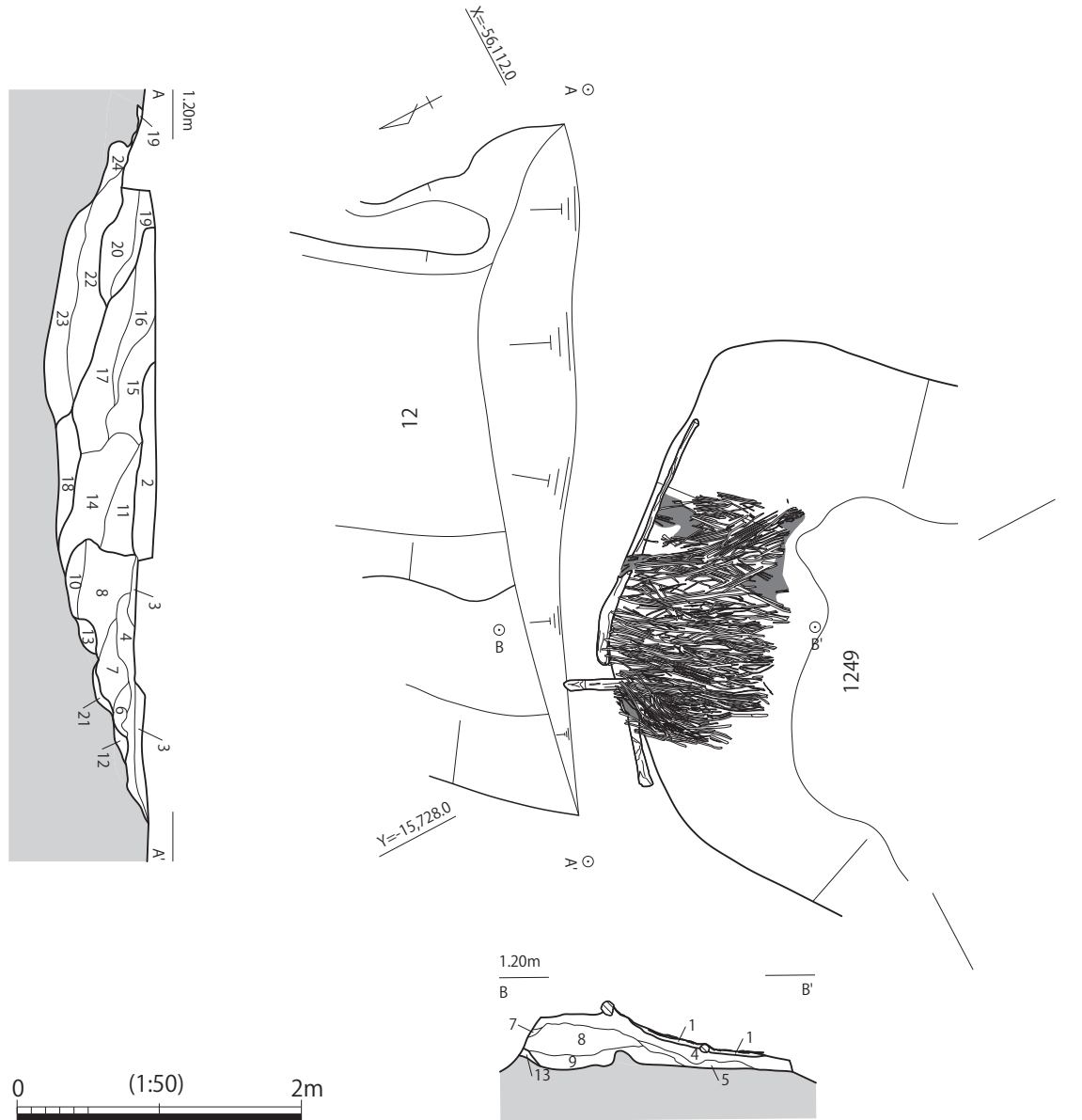
構造物は川岸に沿うように細い杭を数本打設し、細い丸木を横木とする。その上には枝材が散在していたが、全体に木材の残存状況が悪く、構造物に伴うものなのか、どのような構造だったのかを把



- | | | | | |
|---|---------|--------|---------|-------------------------------------|
| 1 | 5Y4/1 | 灰色 | 細砂～シルト | (2.5Y3/2黒褐色シルト(細砂葉理あり)ブロックを含む) |
| 2 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 中砂～シルト | (砂粒多い、2.5Y6/3にぶい黄色中砂～極細砂を葉理状・斑状に含む) |
| 3 | 5Y4/1 | 灰色 | 極細砂～シルト | |
| 4 | 2.5Y4/1 | 黄灰色 | 中砂～シルト | |
| 5 | 5Y3/1 | オリーブ黒色 | 極細砂～シルト | |
| 6 | 5Y4/1 | 灰色 | 中砂～シルト | (砂粒多い、5Y3/1オリーブ黒色極細砂～シルトブロックを含む) |
| 7 | 2.5Y3/1 | 黒褐色 | シルト | (有機物を含む) |

0 (1:20) 2m

図33 3区 1250 構造物



1	枝材下に敷いた貼り土	2.5Y3/1	黒褐色	極細砂～シルト	
2	構造物構築前水成堆積	2.5Y3/1	黒褐色	細砂～シルト	(2.5Y5/4 黄褐色細砂～極細砂葉理層がみられる)
3	構造物構築前水成堆積	5Y3/1	オリーブ黒色	極細砂～シルト	
4	構造物構築前水成堆積	2.5Y6/3	にぶい黄色	中礫～細砂	(2.5Y4/1 黄灰色細砂～シルト葉理層がみられる)
5	構造物構築前水成堆積	2.5Y4/1	黄灰色	細砂～シルト	
6	構造物構築前水成堆積	2.5Y3/1	黒褐色	粗砂～シルト	(2.5Y5/3 黄褐色中砂～細砂を斑状に含む)
7	構造物構築前水成堆積	5Y3/1	オリーブ黒色	中砂～シルト	(砂粒多い)
8	構造物構築前水成堆積	2.5Y3/1	黒褐色	中砂～シルト	(2.5Y5/3 黄褐色中砂～細砂葉理層がみられる)
9	構造物構築前水成堆積	2.5Y6/4	にぶい黄色	細礫～細砂	(葉理あり)
10	構造物構築前水成堆積	2.5Y6/3	にぶい黄色	中礫～細砂	
11	盛土	5Y4/1	灰色	細砂混じりシルト	(2.5Y4/1 黄灰色細砂～シルト・2.5Y4/2 暗灰色黄中砂～極細砂ブロックを含む)
12	盛土	5Y4/1	灰色	極細砂～シルト	(第V-2b層ブロックを含む)
13	盛土	2.5Y3/1 ~ 4/1	黒褐色～黄灰色	細礫～細砂	(第V-2b層ブロックを含む)
14	盛土	2.5Y3/1	黒褐色	細砂～シルト	(5Y4/1 灰色細砂～シルト・2.5Y5/3 黄褐色粗砂～細砂ブロックを含む)
15	盛土	5Y4/1	灰色	細砂～シルト	(2.5Y3/2 黒褐色細砂～シルト・2.5Y5/3 黄褐色中砂～細砂ブロックを含む)
16	盛土	5Y4/1	灰色	細砂～シルト	(第V-2b層ブロックを含む)
17	盛土	2.5Y4/1	黄灰色	中砂～シルト	(砂粒多い、第V-2b層ブロックを含む)
18	盛土前水成堆積	2.5Y5/3	黄褐色	細礫～細砂	
19	盛土前水成堆積	2.5Y4/2	暗灰黄色	細砂～シルト	(2.5Y5/3 黄灰色中砂～細砂葉理層がみられる)
20	盛土前水成堆積	2.5Y6/3	にぶい黄色	細礫～細砂	(葉理あり)
21	盛土前水成堆積	2.5Y5/3	黄褐色	細礫～細砂	(葉理あり)
22	旧盛土	2.5Y5/1	黄灰色	中砂～シルト	(砂粒多い、第V-2b層ブロックを含む)
23	旧盛土	2.5Y4/1	黄灰色	中砂～シルト	(砂粒多い、5Y4/1 灰色中砂～細砂・第VI層をブロック状・斑状に含む)
24	旧盛土	5Y4/1	灰色	細砂～シルト	(第V-2b層・2.5Y6/3 にぶい黄色中砂～細砂ブロックを含む)

図34 3区 1249 構造物

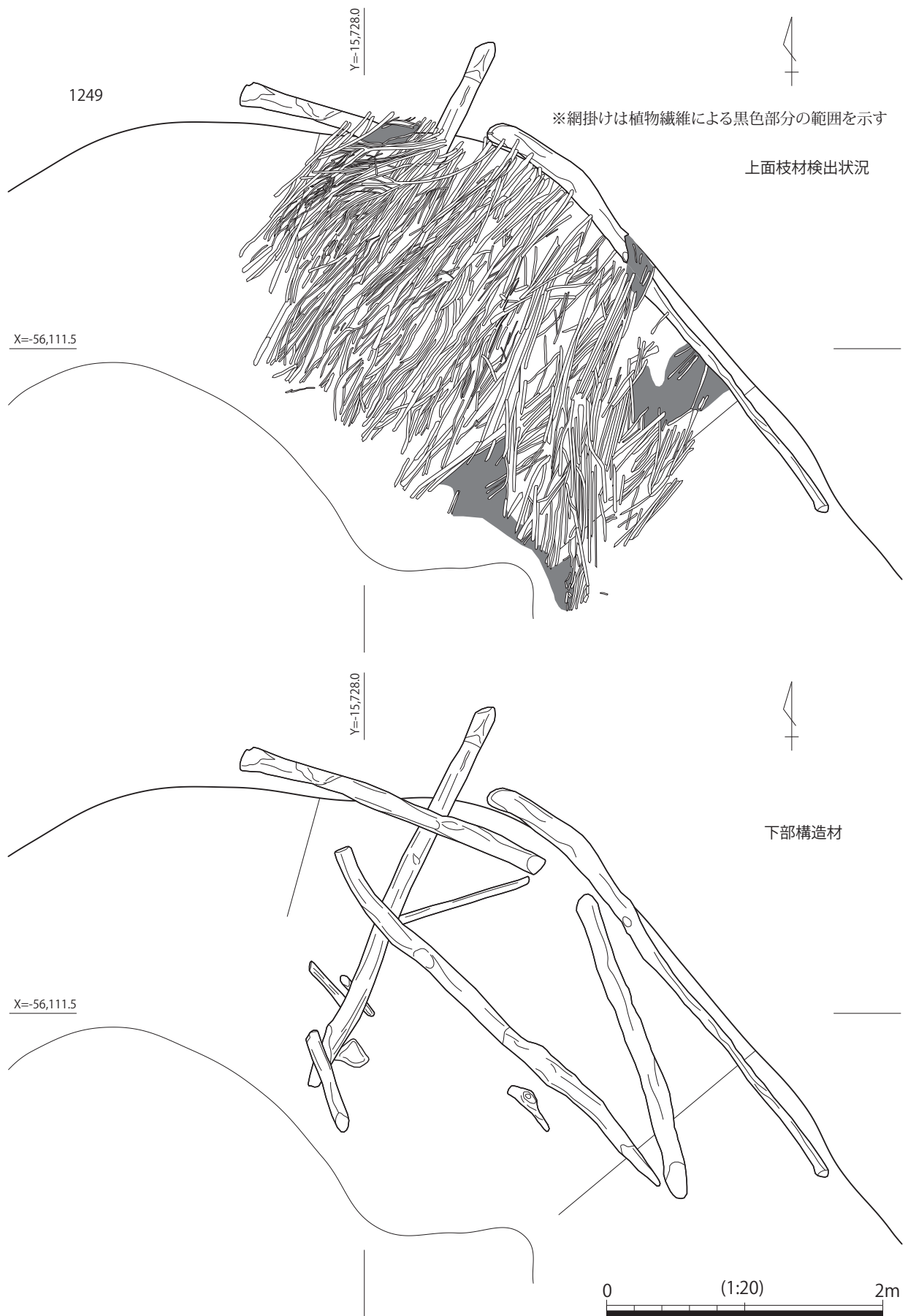


図35 3区 1249 構造物詳細

表2 12 河川内遺物出土点数表

出土土器総点数				古墳～飛鳥時代坏類				奈良時代坏・椀類				平安時代坏・椀類			
d	c	b	a	d	c	b	a	d	c	b	a	d	c	b	a
2		55	37	2		7	2	2		3	3	2			0
3		226	38	3		41	9	3		18	10	3			6
4		109		4		17		4		9		4			3
5		172		5		26		5		21		5			1
6		52		6		4		6		6		6			0
7		100		7		8		7		6		7			9
8	5	554	4	8	1	27	0	8	1	48	0	8		3	20
9	5	94		9	1	5		9	0	8		9		3	6
10	153			10	11			10	17			10		7	
1	5	262	5	1	0	9	1	1	0	29	0	1	1	46	0
2	74	538		2	2	20		2	13	40		2	5	32	
3	108	53		3	4	0		3	9	3		3	5	1	

握することができなかった。

1248 構造物付近は標高約 1.6 mを測る。堰の可能性が高い 1250 構造物上面は標高約 1.5 mあり、さらに盛土があったと考えられる。そうすると、ここで水を堰き止めれば 1248 構造物付近まで水を溜めることが可能で、同構造物を取水口として西側に取水することができる。ただ取水した水を流す溝は確認できず、1248 構造物の用途は不明である。

出土遺物 (図版 12)

遺物は主に流芯堆積層から出土し、特徴としてほぼ完形の坏と蓋が多く出土したことがあげられる。中には土師器坏が 2つ重なって出土した (図版 12 下) ものもあった。

図 36・37 は、破片を含めて出土地点が判明する主な遺物を平面と断面に投影した。断面は新段階および古段階の河川中央の底面を示すが、新段階は 20 mごとの断面を元に想定した箇所がある。また、10 m区画内で出土した須恵器と土師器の坏と蓋の点数を表 2 に示す。

なお、便宜上受部のある坏とこれに伴う蓋を古墳時代から飛鳥時代、つまみが付く蓋とこれに伴う高台付坏や平底の坏を奈良時代の遺物とする。つまみの付く蓋は内面にかえりがあるものと、かえりがなく端部を折り曲げたものがあり、近畿地方の年代観では前者は 7 世紀後半、つまり古墳時代終末期あるいは飛鳥時代となる。ただ河川では完形に近い両者がまとまって出土したことから (図版 12 上)、これを重視して一括でカウントすることとした。また新段階から出土した遺物が少なく、一部では掘り分けていないことから、今回は 12 河川から出土したもののすべてを一括でカウントした。

古墳時代から飛鳥時代の坏や蓋は、北側の 1H-3b 区から 4b 区で特に多く、南に向かって少なくなる。完形あるいはそれに近い個体も同様であり、2H-2c 区は多く出土しているがすべて破片である。奈良時代の遺物は他の時代に比べて川全体で出土しており、特に中央部の 1H-8b 区は格段に多い。ただし多くは土師器の破片であり、必ずしも個体数を反映するものではない。出土地点が判明しているものでは、奈良時代までの遺物は川底近くに多いことが分かる。

平安時代の土器は 1H-8b 区より南で多くなり、特に 2H-1c 区付近は完形品を中心に非常に多くなる。北側では平安時代の個体数は少ないが、そのほとんどが完形に近いもので、墨書土器 (193) もある。出土地点が判明しているものをみると、川底よりもやや高いところで出土している。また土師器坏は、体部が丸みを帯びるもの (中森編年の「坏 B 類」) が体部が直線的に外傾するもの (同「坏

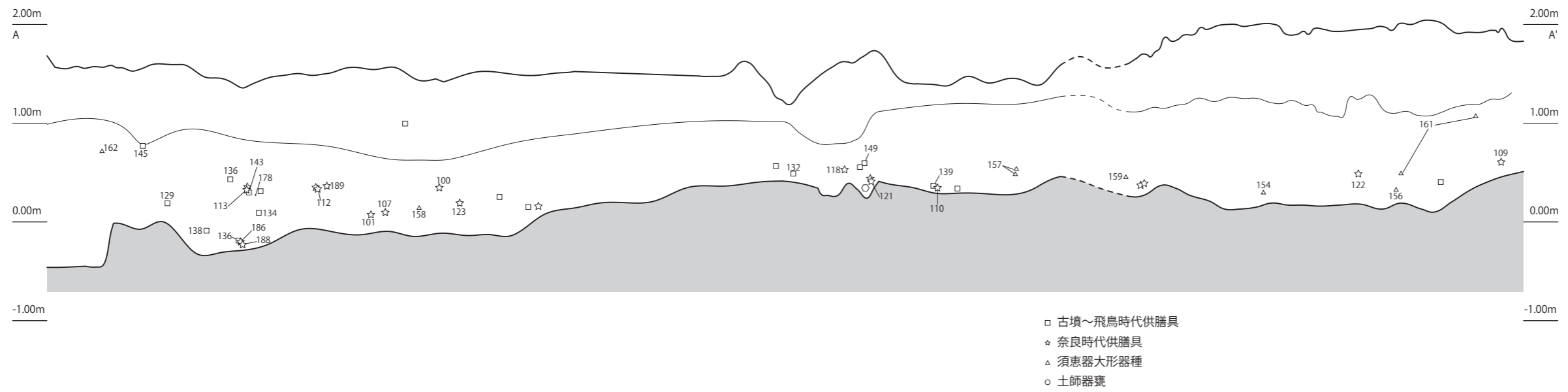
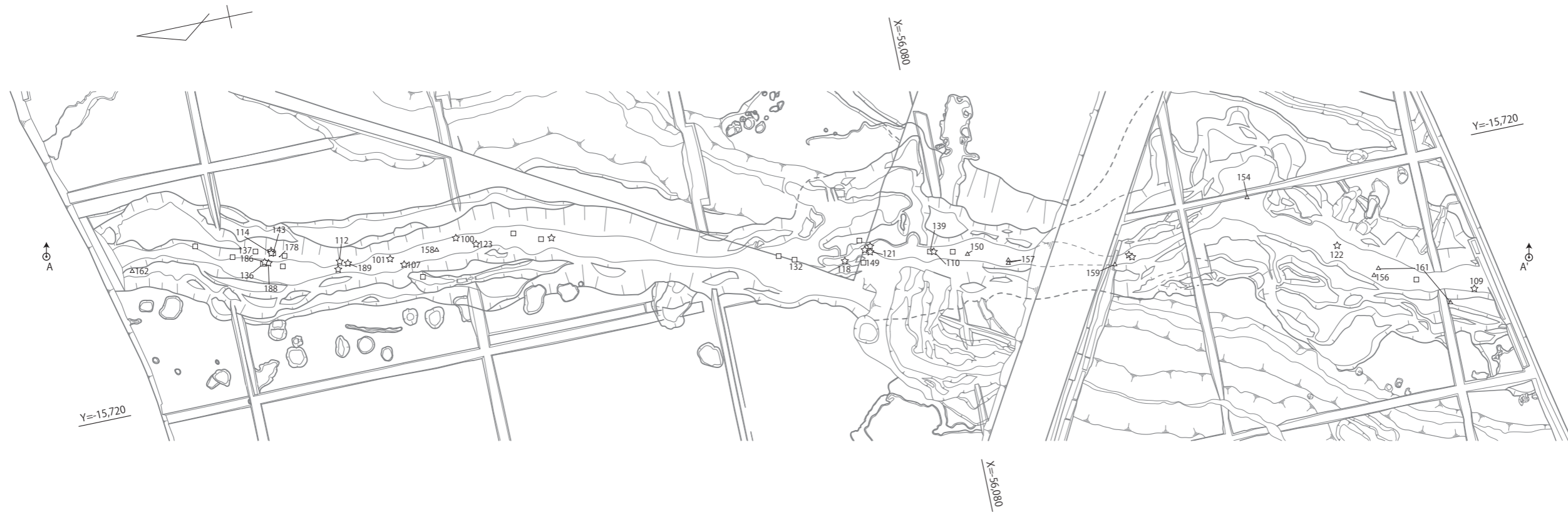


図 36 12 河川内 古墳～奈良時代遺物出土位置

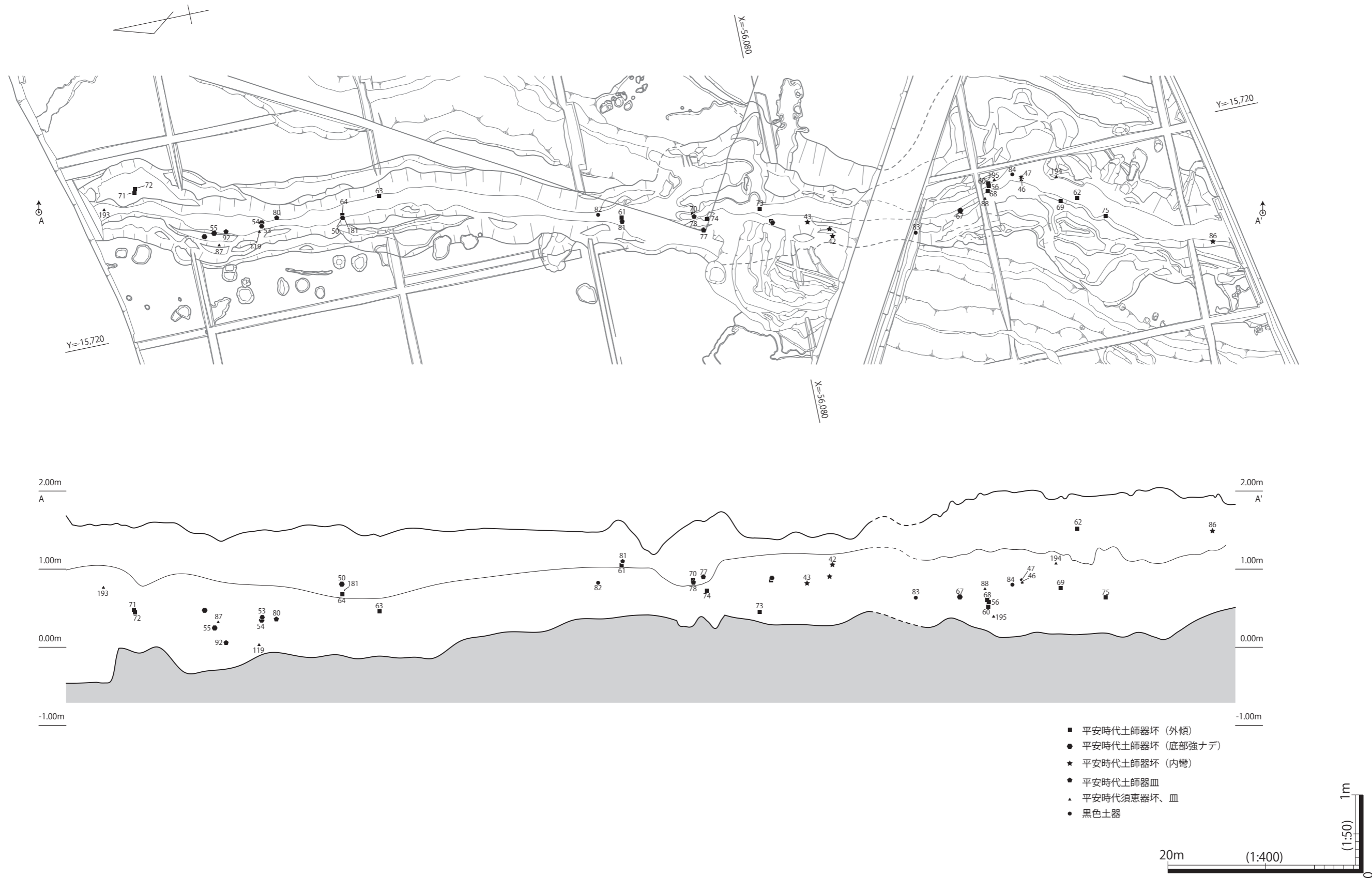


図 37 12 河川内 平安時代遺物出土位置

A類)よりも高い位置で出土する傾向がある。

遺物が多い場所と河川内の構造物の位置を比べると、1H-8b 区の杭群の周辺では奈良時代や平安時代の完形に近い坏類が、1249 構造物と 1250 構造物のすぐ下流側にあたる 2H-1c 区では、平安時代の坏類がまとまって出土する。またやや離れるが 1H-5b 区の杭列の下流側でも、ほぼ完形の奈良時代の坏や蓋が出土しており、構造物の構築と完形品の土器群には何らかの関連がありそうだ。

古代の遺物としては、このほかに須恵器の壺、甕、横瓶、提瓶、土師器甕、土玉、土錘、製塩土器、ミニチュア土器がある。また、縄文土器や弥生土器、石庖丁、石斧が少量出土した。

15 平坦面・21 溝 (図 27・38・39、図版 13)

1H-4b～5b 区で検出した。

12 河川の調査中、西岸側の斜面で平坦になる場所を検出した。この部分には土層観察アゼがあり、堆積状況を確認したところ、平坦面には砂を埋土とする遺構の存在を想定した。そのため 12 河川埋土を掘り下げて平坦面を検出し、遺構精査を行った結果、溝状遺構の存在を確認した。

15 平坦面は、12 河川西岸肩から約 0.5 m 下がった地点にある。南北長約 14 m、東西幅は狭いところで 1.5 m、最も広い南側で約 2.8 m を測る。

平坦面からやや浮いた状態で、完形の須恵器短頸壺 (209) などの土器や加工材が出土した。ただ、平坦面は 12 河川古段階の埋土によって埋没したので、これらがどちらに伴うものかは判断し難い。

21 溝は 15 平坦面を縦断する溝状遺構で、両端は 12 河川につながる。幅は 0.8～1.0 m で、12 河川とつながる部分付近では 1.5 m ほどに広がる。底面は凹凸があり、中央あたりでピット状に 0.1 m ほど窪み、その 1 m 北側で 1 段下がる。深さは南側で 0.12 m と浅いのに対し、底面が 1 段低くなる北端では 0.5 m ほどある。溝の底面と 12 河川の底面との標高差は南側で 0.74 m、北側で 0.72 m ある。

埋土は中～細砂を主体としており、葉理が確認できる。堆積状況から 21 溝は、12 河川古段階が岸から流入する土砂による埋没以前に埋まっていたことが分かる。

遺物はほとんどが底面から浮いた状態で出土しており、特に南側では検出面直下でまとまって出土した。土器は主に須恵器の蓋と坏で、須恵器甕、土師器甕などとともに木製代掻具 (248) が出土した。土器は 12 河川出土のものと同接合するものが多い。また人頭大までの石が、北側の西岸斜面を中心に出土した。

疑似畦畔

1 区南東部で疑似畦畔で区画された 1022～1026、1029 水田を確認した。この部分は第IV層直下で砂の堆積が広がっており、第1面で第IV層に多数の踏み込みが検出された範囲 (図 18) とほぼ一致する。そのため、第IV層での耕作によって砂が畦畔状に高まりが残ったものとみられる。1 区南東隅からほぼ北に延びる幅 5m ほどの大きな疑似畦畔があり、ここから北東～南西方向に幅 1.5m ほどのものが延びる。これらに囲まれた水田はいずれも不整形である。

土坑・ピット・溝 (図 27・30・40～74)

第2面の土坑・ピットは 1～3 区で計 203 基検出した。1 区は平成 22 年度に南端部分を調査した際、12 河川付近で第IV a 層系埋土の土坑および灰白色系埋土の土坑を検出し、それぞれを図 40・41 に図示した。続く平成 23 年度調査では、1・3 区で検出した土坑とピットの掘削場所ならびに

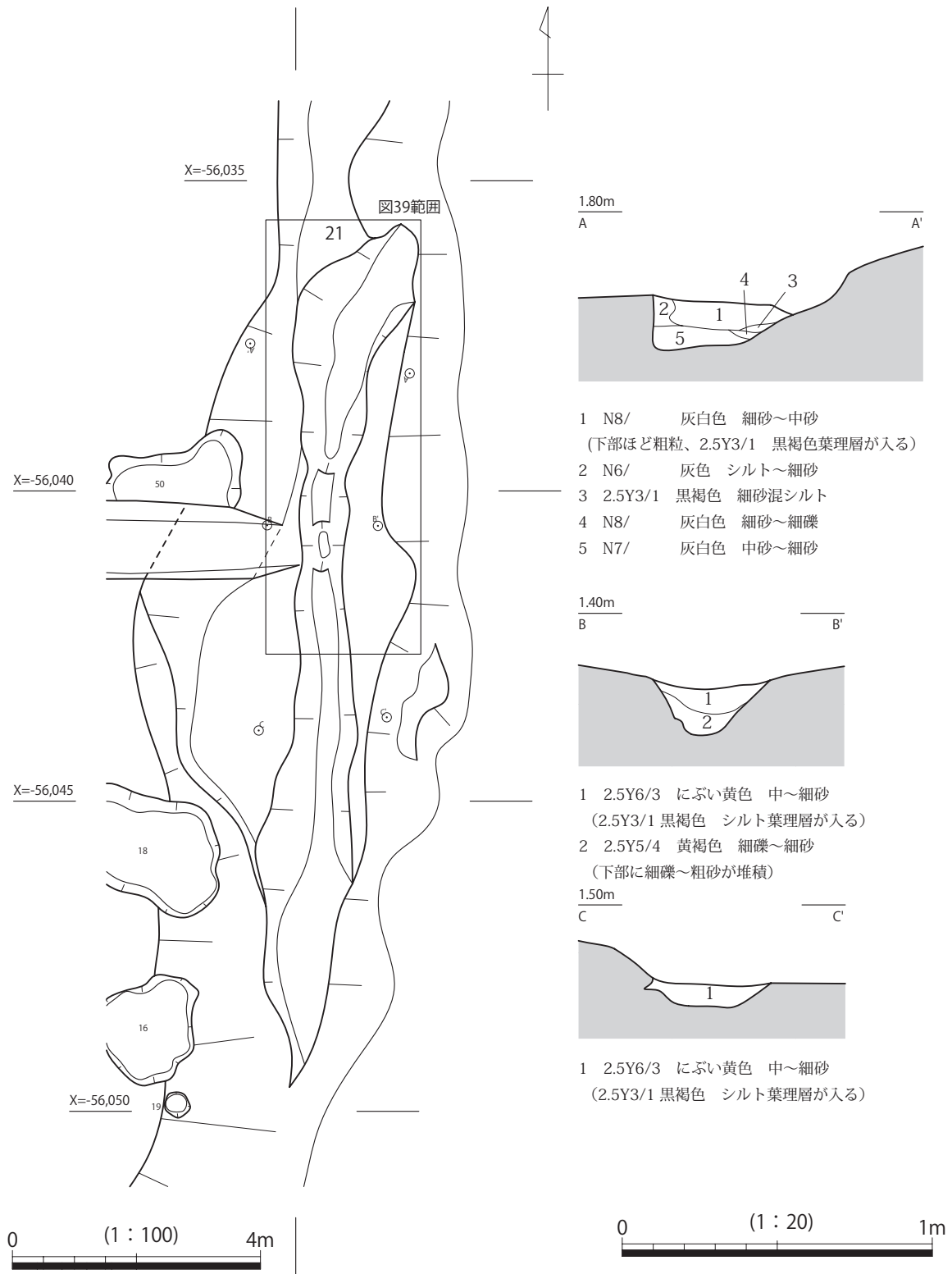
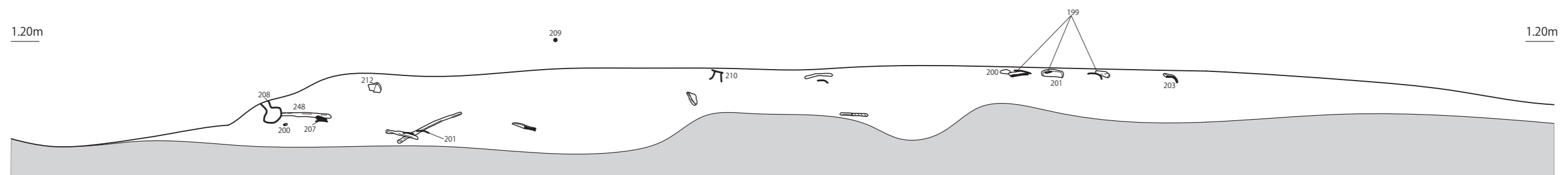
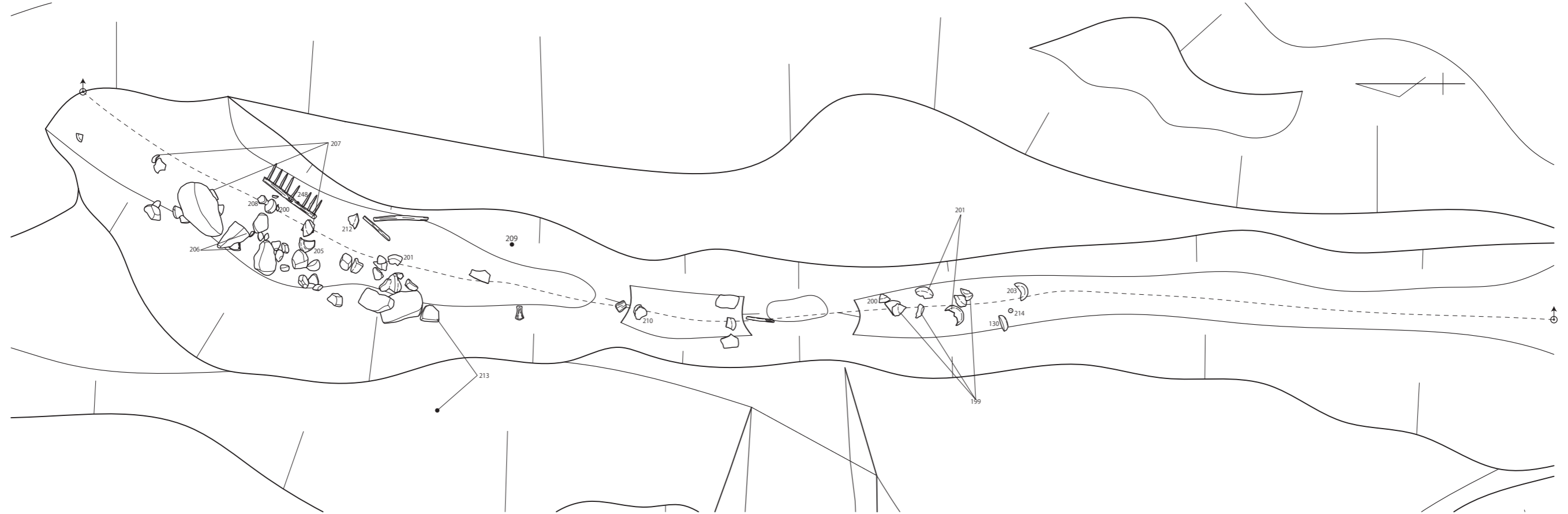


図38 2区 15平坦面・21溝



図中の数字は遺物番号を示す。

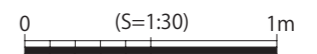


図 39 2区 15 平坦面・21 溝 遺物出土状況

掘削深度および埋土に注目し、以下に記すように分類、整理した。1区は、疑似畦畔の砂層が調査区を南北に蛇行しながらのびる。そこでまず、第IV層系埋土の土坑、ピットが砂層上面から掘削されたか否か、さらに砂層下面まで掘削が及ぶか否かで分類し、また第V層上面から掘削された土坑埋土がブロック土か否かの、計5種類に整理した。なお上記の遺構がすべて第IV-2 a層下面検出に対し、図42には第IV-2 a層上面検出遺構をまとめて図示した。

- ① 砂層上面遺構で第IV a層系埋土の土坑とピットのうち、砂層下面まで掘削が及ばないもの。小規模な土坑が多いが、一部大形のものもある。砂採集が目的か（図43～45）。
- ② 砂層上面遺構で第IV a層系埋土の土坑とピットのうち、掘削が砂層下面（第V-2 b層）まで達するもの。砂層下面まで掘削が及ばない土坑に比べ、大形のものが多い（図46～49）。
- ③ 砂層以外で検出した第IV a層系埋土の土坑とピット。大形の1123土坑以外は7 a区に集中しており、ブロック土を埋土とする土坑と隣接して検出した。掘削深度は浅い（図49・50）。
- ④ 砂層以外で検出したブロック土を埋土とする遺構で、調査区全域で確認できる。既述したように第IV a層系埋土の土坑と混在する箇所があり、切り合う遺構はほとんどなく、掘削深度も差違はない。第V-2 b層の粘土の採掘を目的としたものか（図51～54）。
- ⑤ 淡い色調のシルトを埋土とする土坑で、調査区各所で検出した遺構。1157・1158・1159土坑は風倒木痕か（図55・56）。

2区は12河川古段階で検出した遺構を、ブロック土を埋土とするか否かの2種類に分類した。

- ① 12河川左岸沿いを中心に検出した土坑で、ブロック土を埋土とする一群を指す。大きさ、形状および掘削深度は一定しない（図57～59）。
- ② 調査区南西端付近で検出した土坑群で、ブロック土を埋土としない一群。総体的に小形の遺構が多く、掘削深度も一定しない（図60～63）。

3区は12河川新段階および古段階の各段階で検出した遺構を、埋土の状態から5種類に分類した。また12河川新段階で5条の溝を検出した（図67）。このうち、1170・1195・1199・1220溝の埋土は12河川への流水を示唆するが、1193溝は掘立柱建物1との関連を想定すべきかもしれない。

- ① 12河川新段階の、第V-2 b層・第VI b層系ブロック土を埋土とするもので、分布は3区12河川両岸に散在しており、規模、形状とも一定しない。1242・1246土坑のように粘土採掘坑と判断したものもある（図64）。
- ② 12河川新段階の、ブロック土を含まない一群で、3区12河川両岸に散在する。このうち1186・1189・1196～1198ピットは、掘立柱建物1北辺に集中する。1165～1169・1190・1194・1241土坑は12河川左岸南側に集中し、平面、断面とも不定形である。1190土坑は掘立柱建物1東辺に面するが、両者の関係を示す資料はない（図65・66）。
- ③ 12河川古段階。ブロック土を埋土とし、掘削深度が第VI層に達するもの。12河川左岸の調査区南端に位置し、遺構間ではほとんど切り合わない。第V-2 b層採掘を目的とするものか。平面、断面の形状は不定形（図68～70）。
- ④ 12河川古段階。ブロック土を埋土とし、掘削深度が第V層中で収まる土坑。やはり切り合わない。平面、断面の形状は不定形（図71・72）。
- ⑤ 12河川古段階の、ブロック土を含まない埋土の土坑。12河川左岸、丘陵縁辺部に集中する。平面・断面の形状は不定形で、埋土は単層が多い（図72～74）。

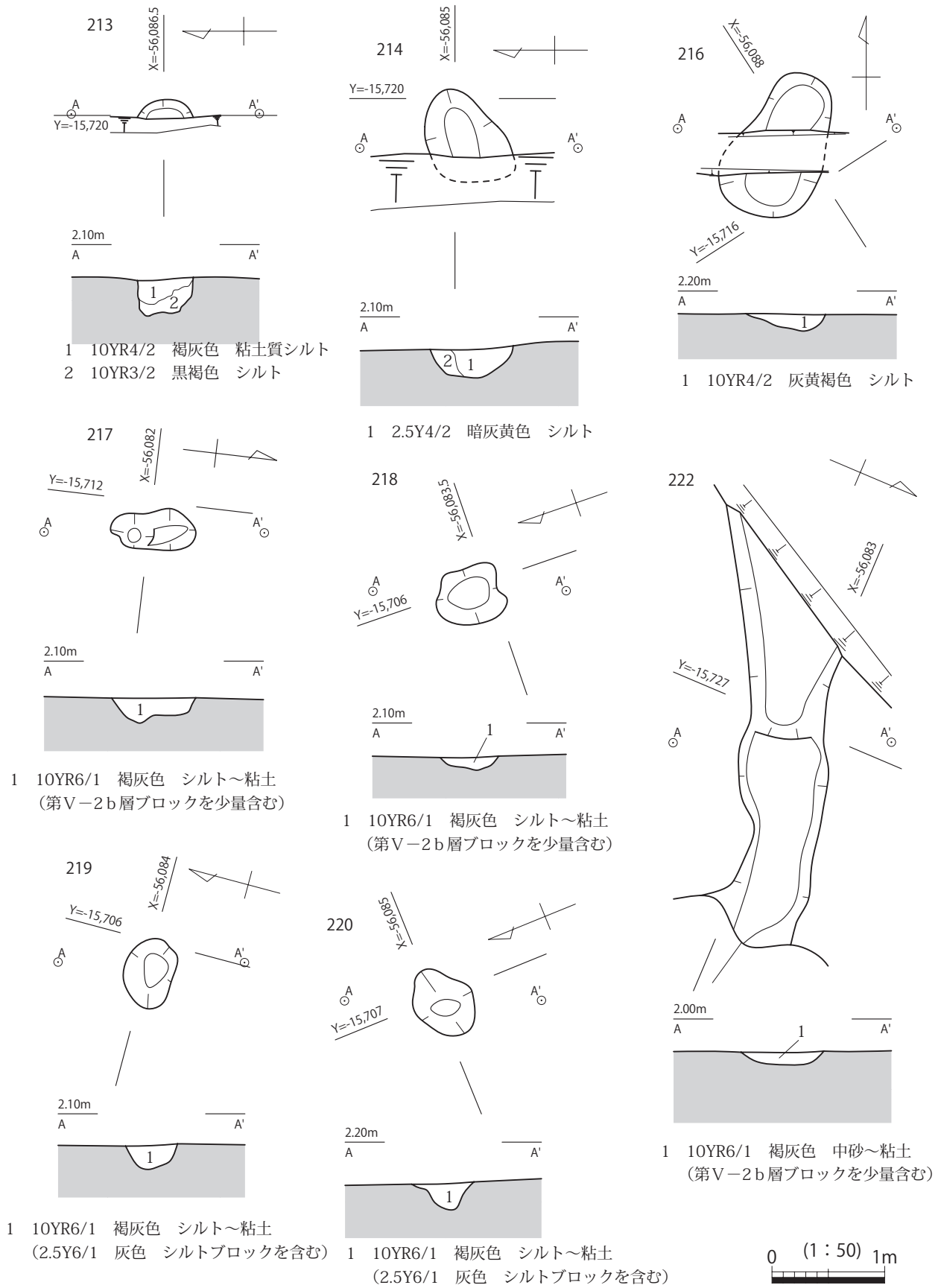


図40 1区 第2面検出遺構(1)

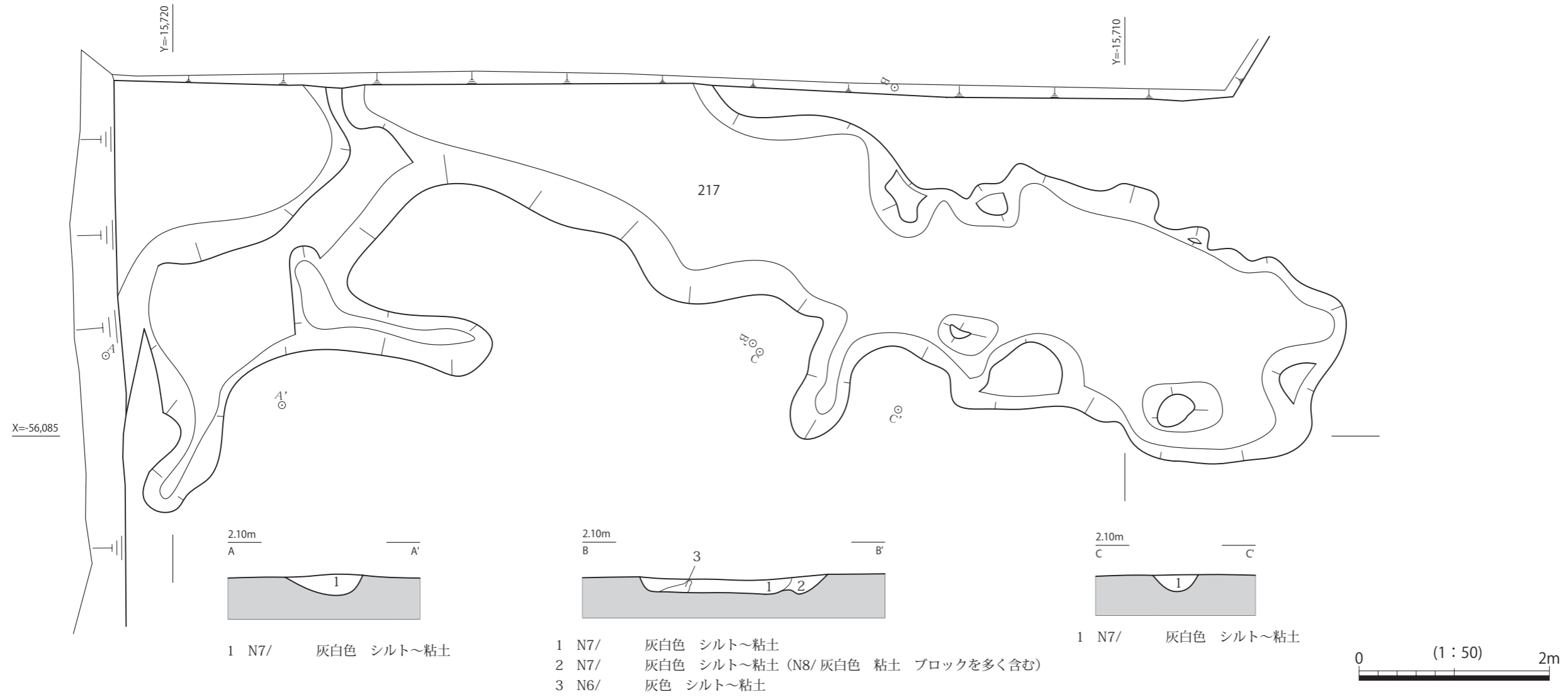


図41 1区 第2面検出遺構(2)

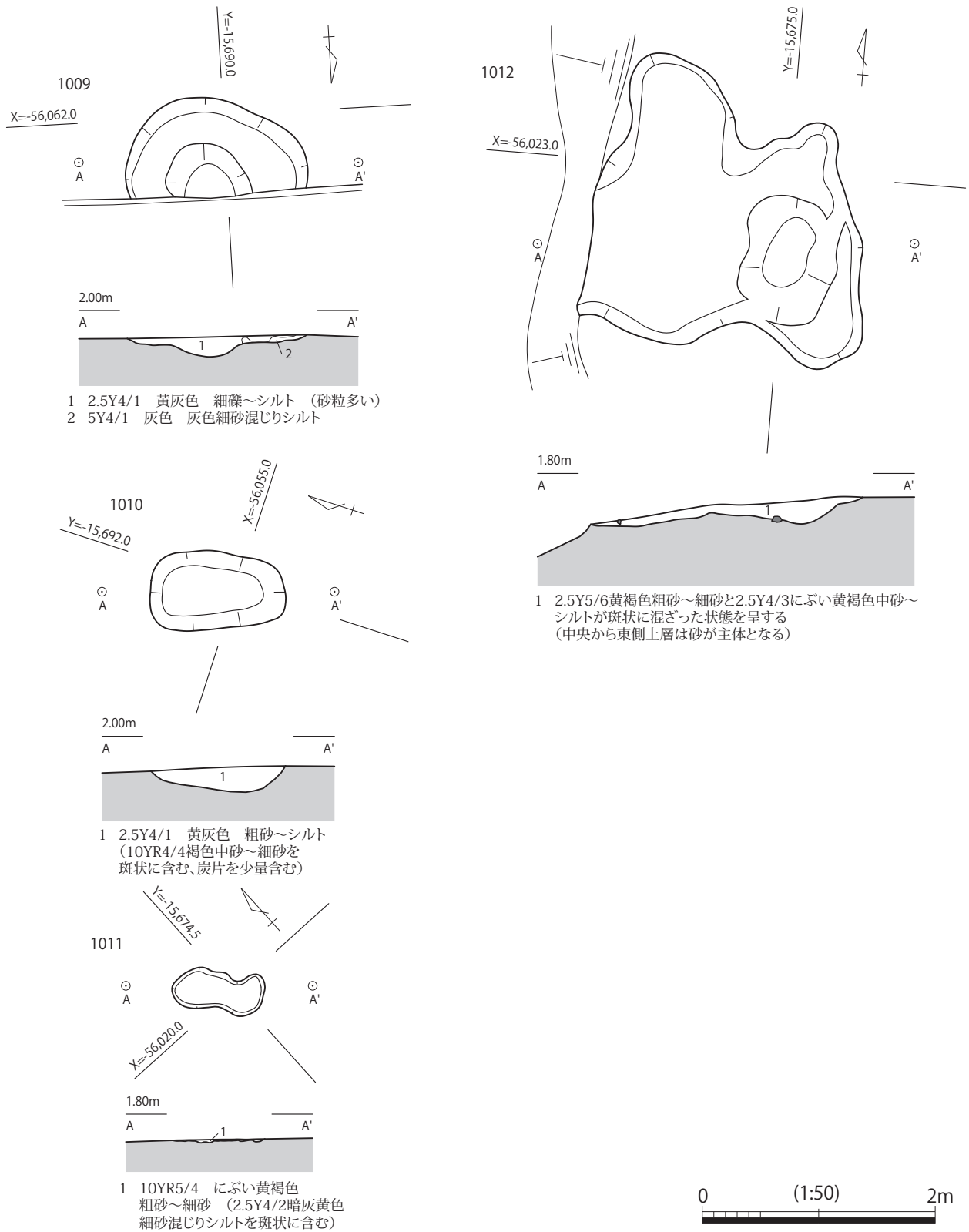


図42 1区 第2面検出遺構(3)

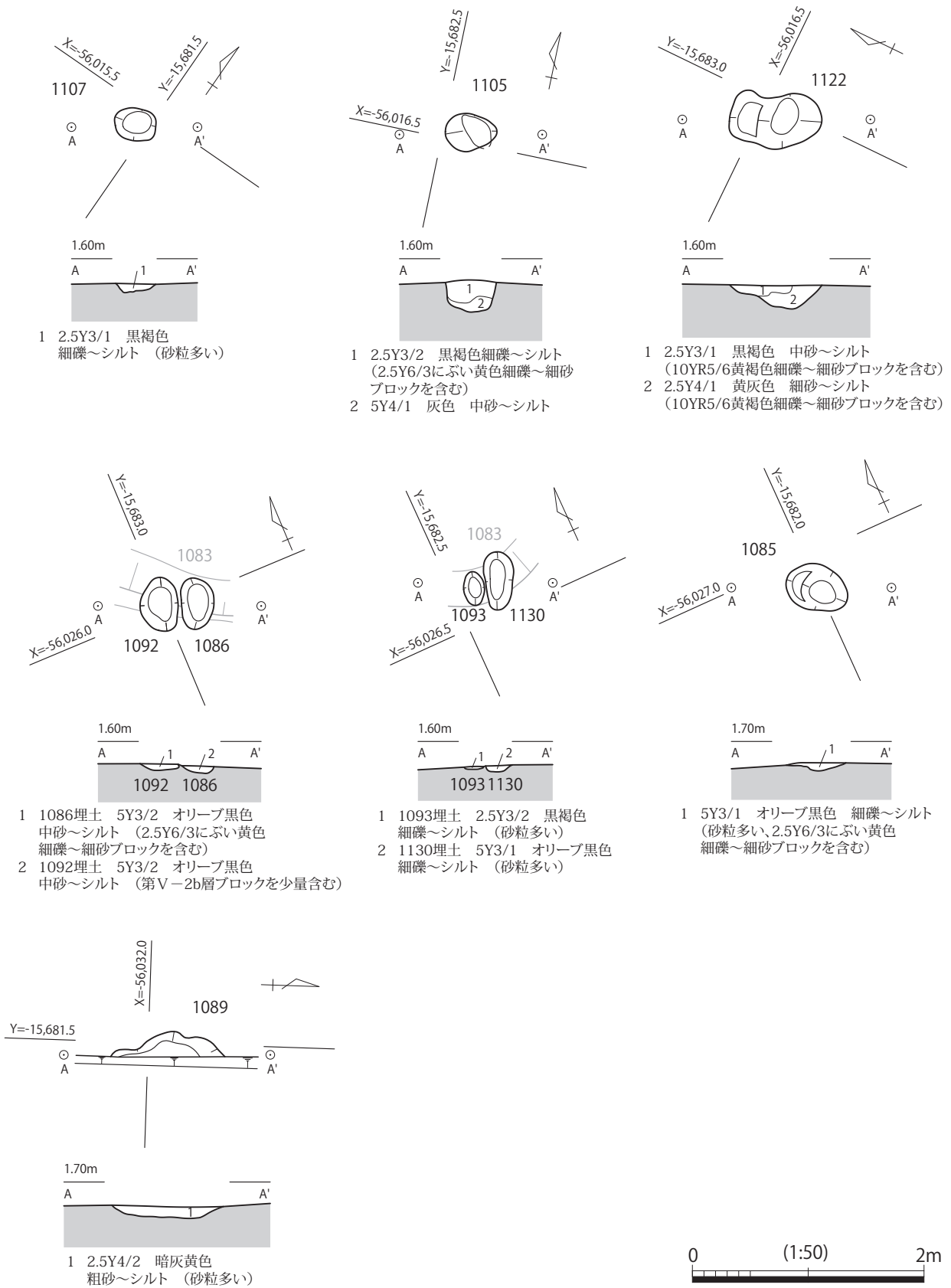


図43 1区 第2面検出遺構(4)

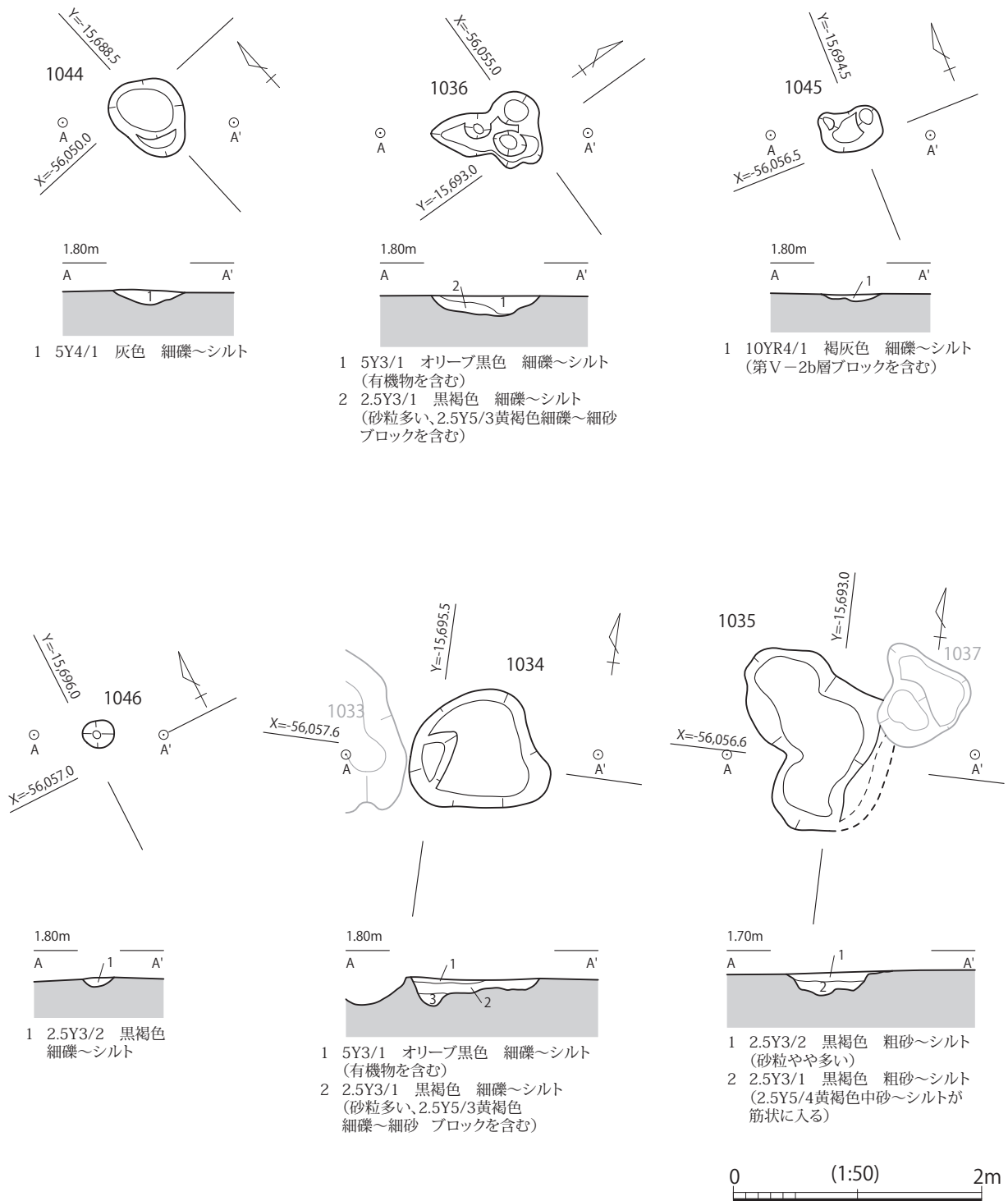


図44 1区 第2面検出遺構(5)

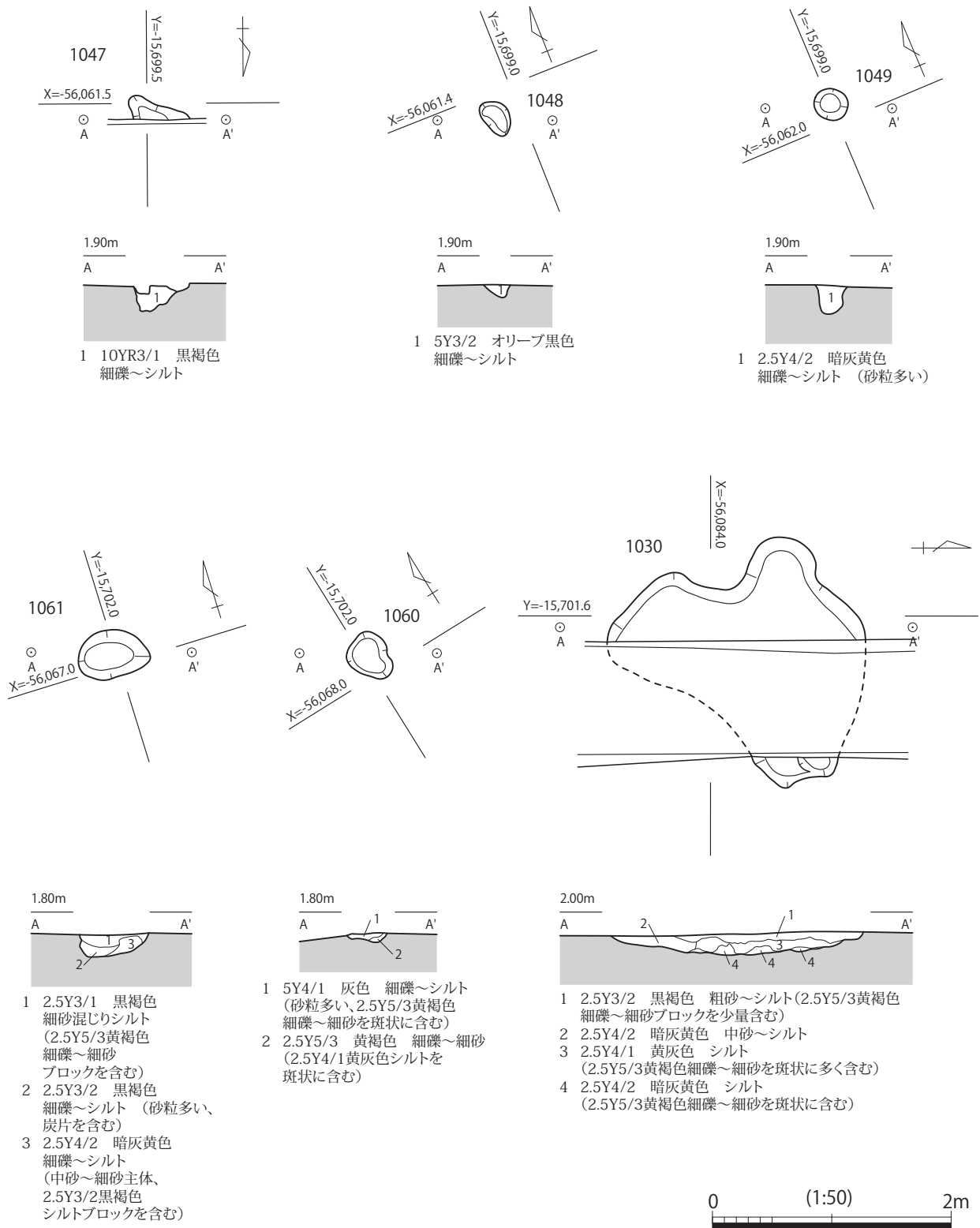


図45 1区 第2面検出遺構(6)

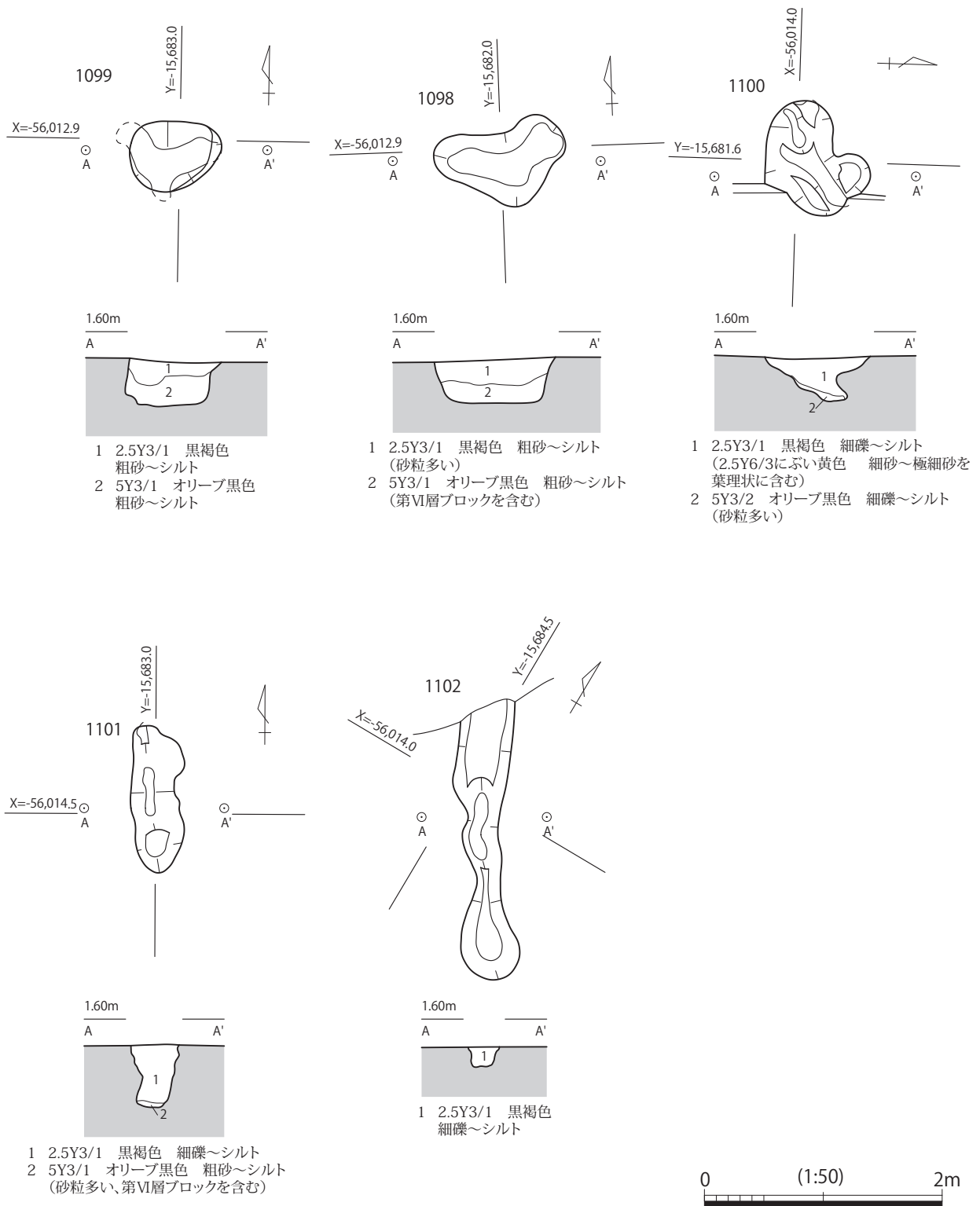


図46 1区 第2面検出遺構(7)

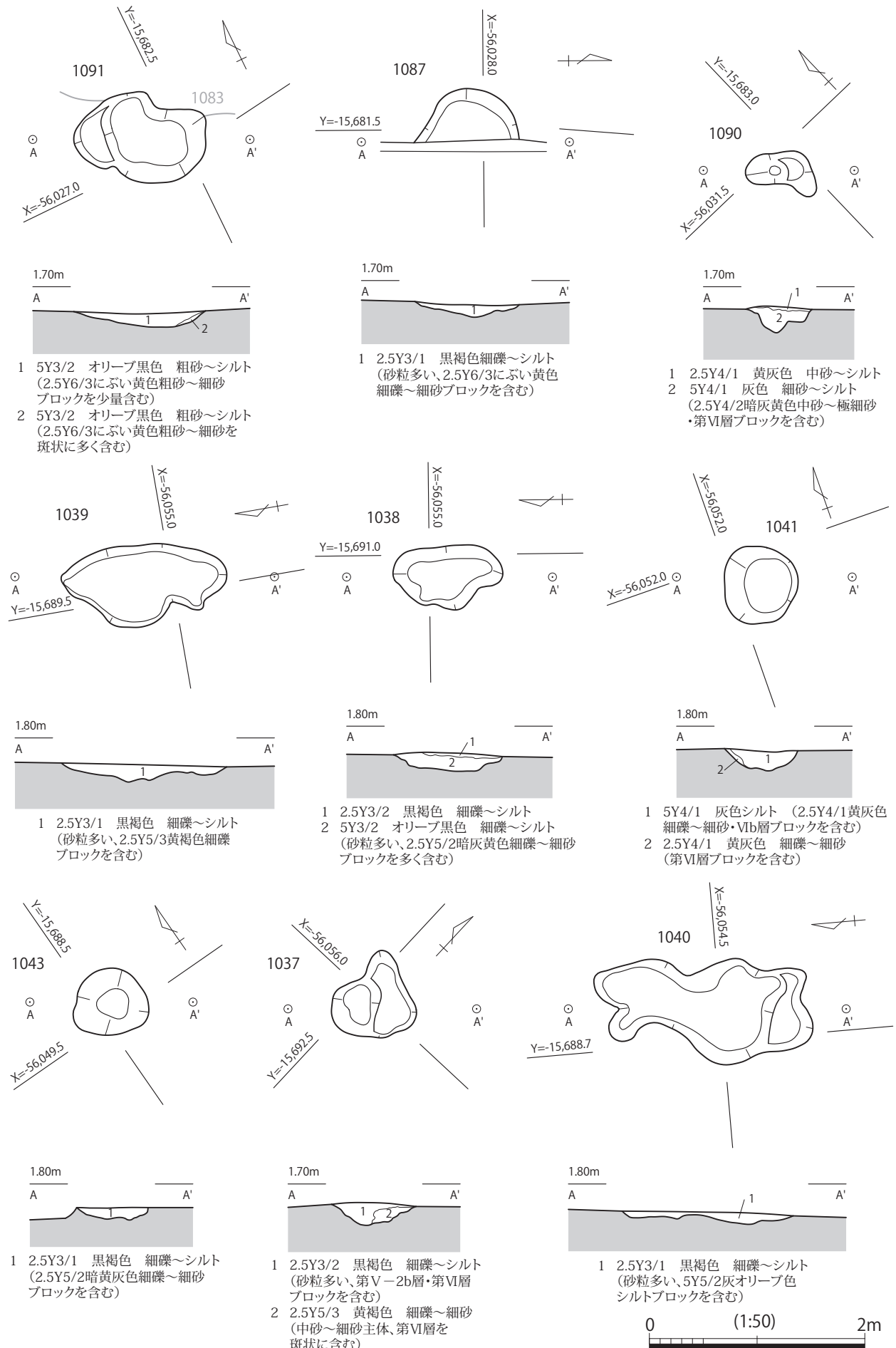


図47 1区 第2面検出遺構(8)

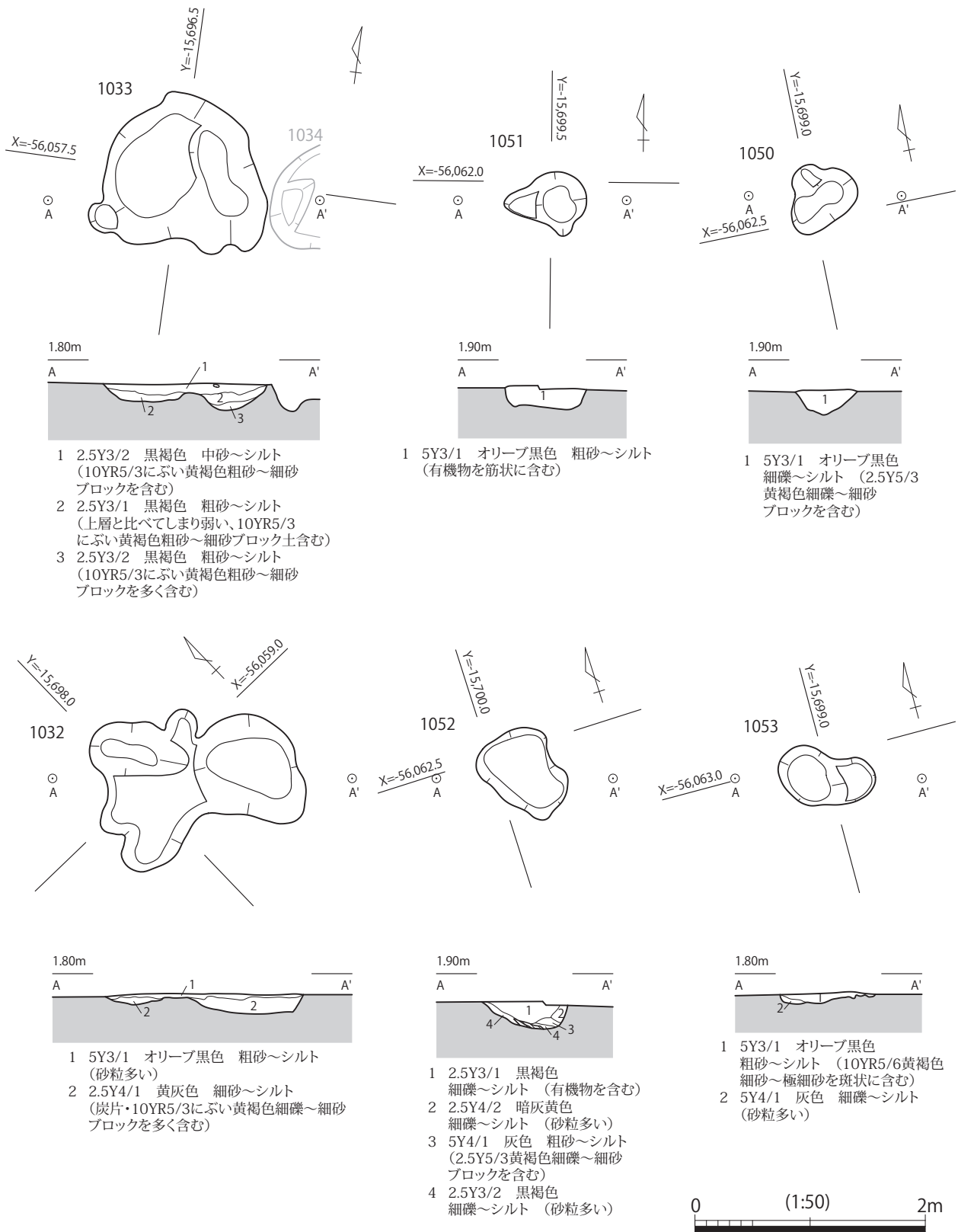


図48 1区 第2面検出遺構(9)

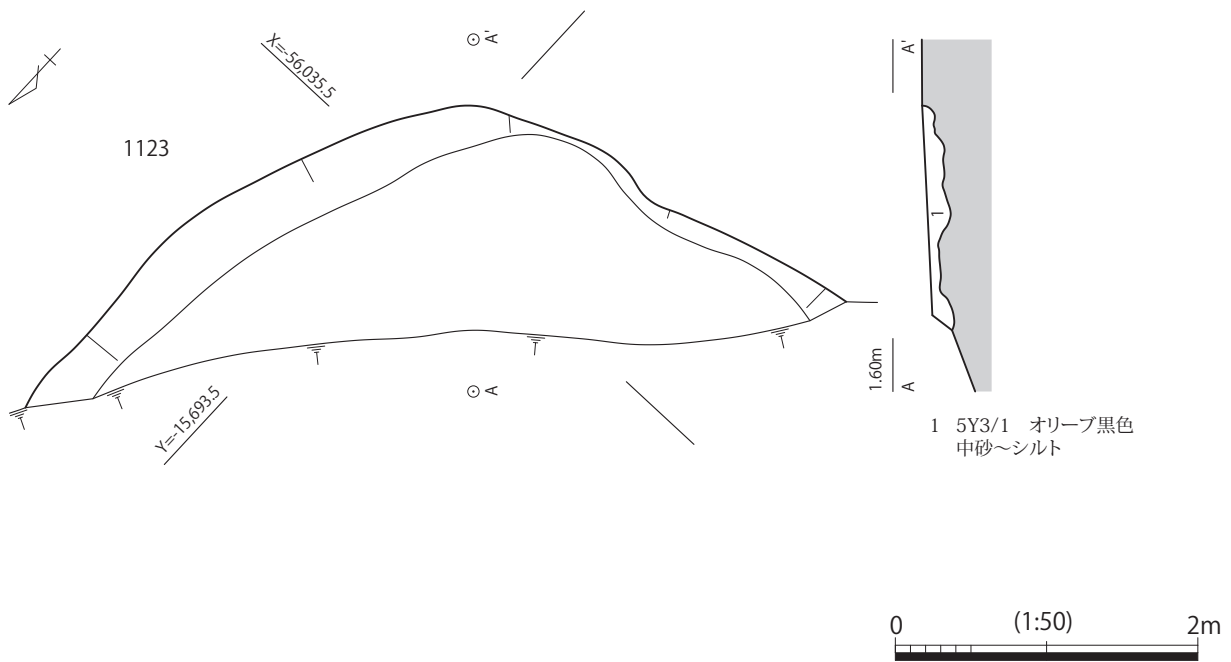
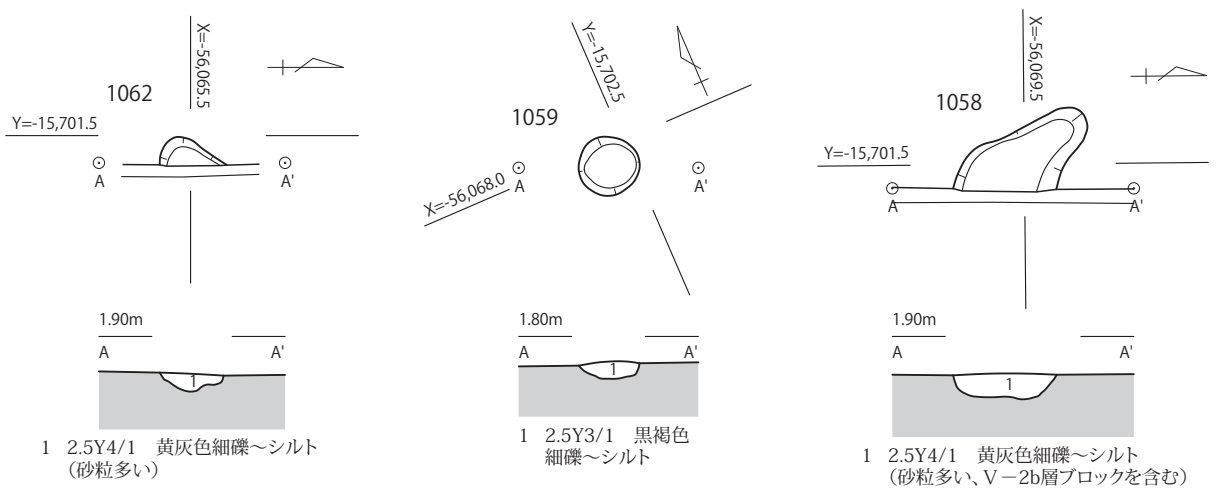


図49 1区 第2面検出遺構 (10)

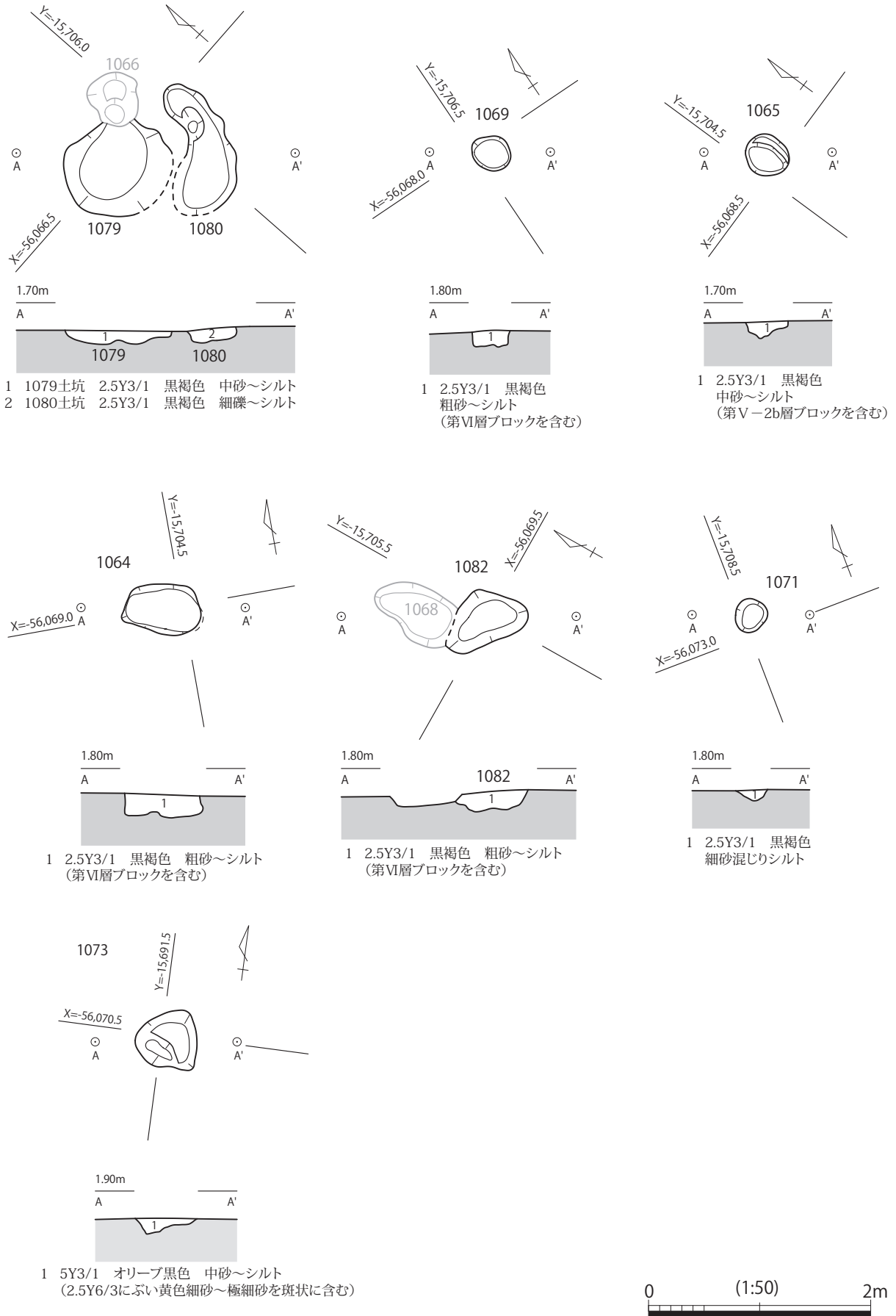


図 50 1区 第2面検出遺構 (11)

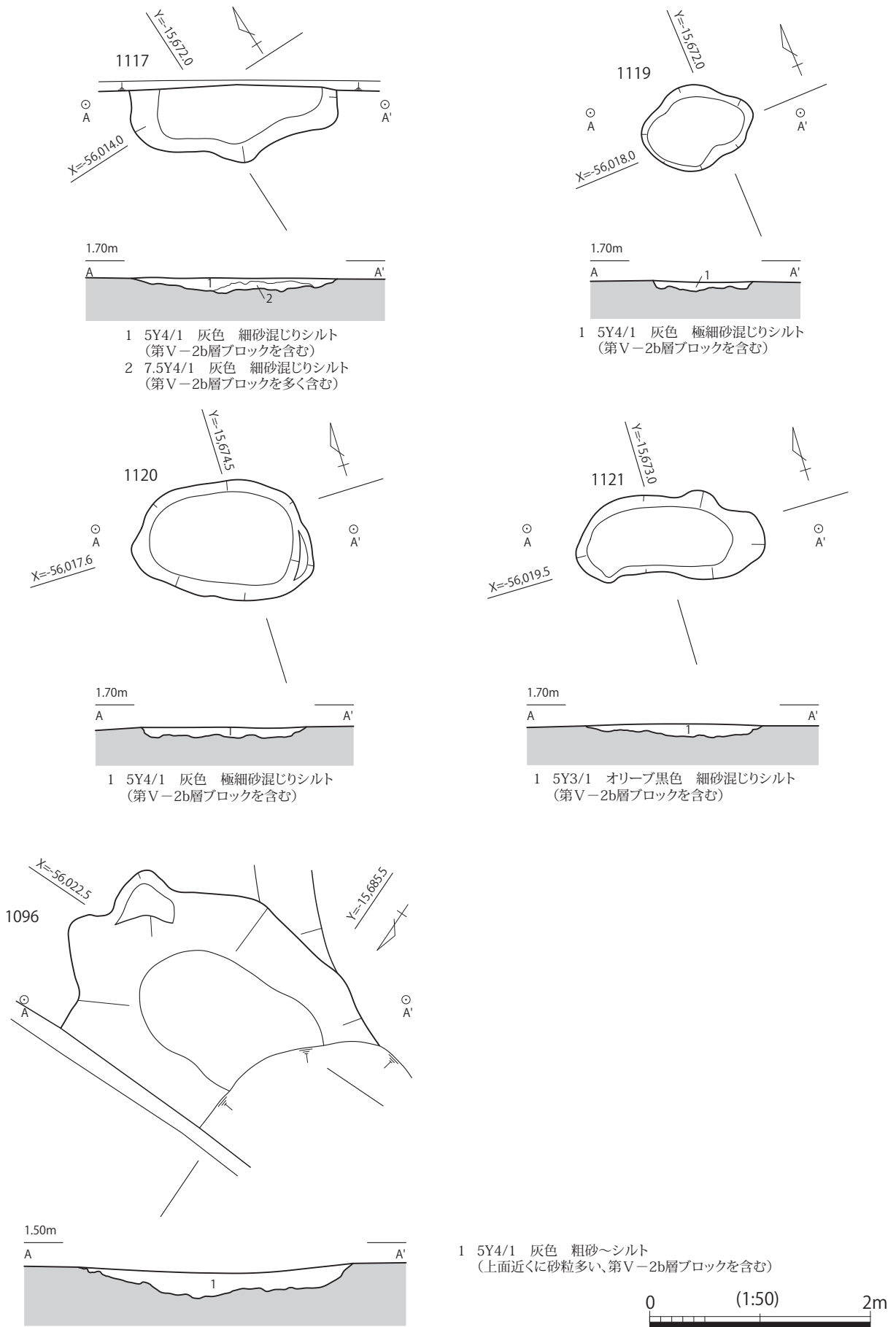


図 51 1区 第2面検出遺構 (12)

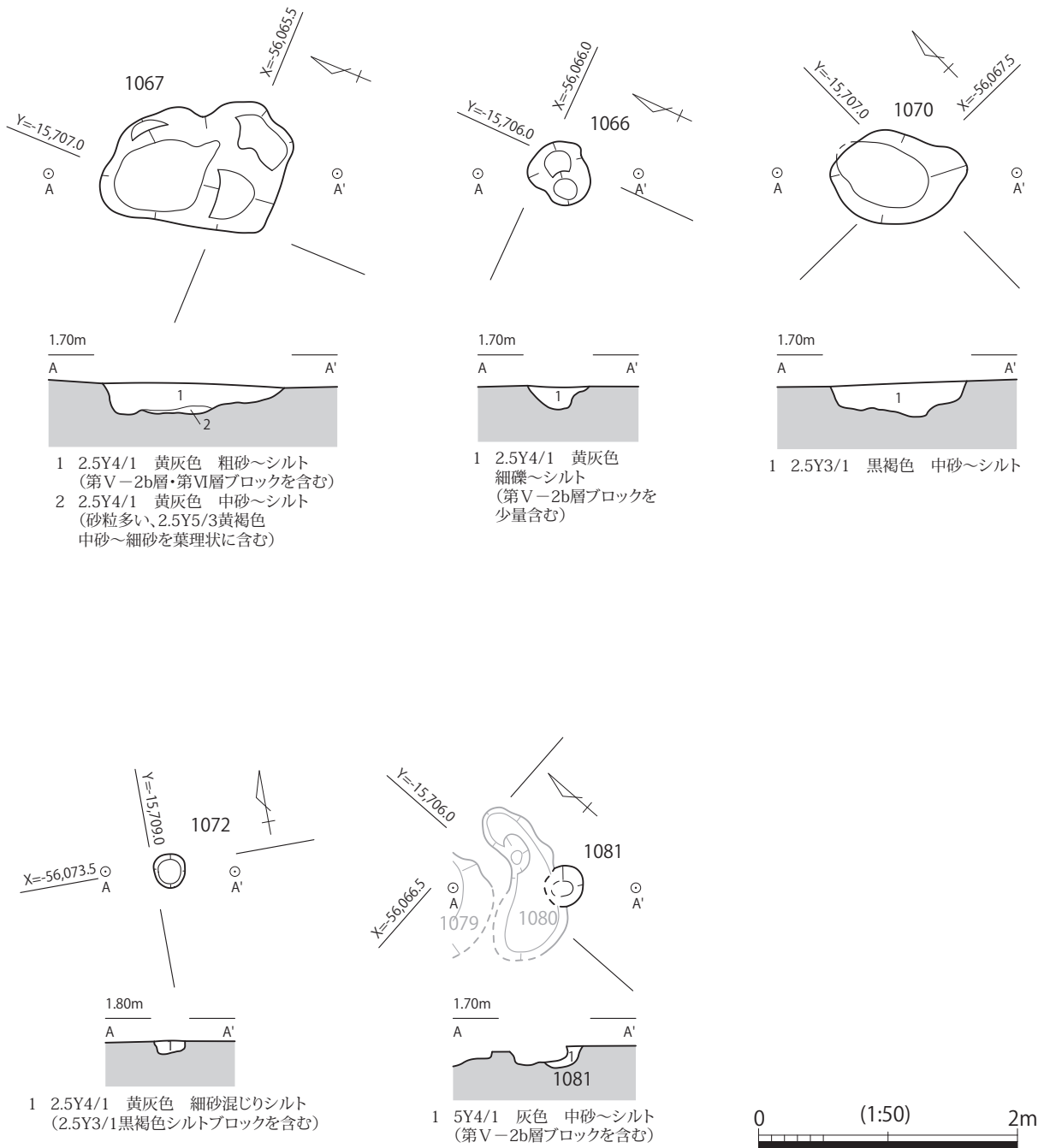


図 52 1区 第2面検出遺構 (13)

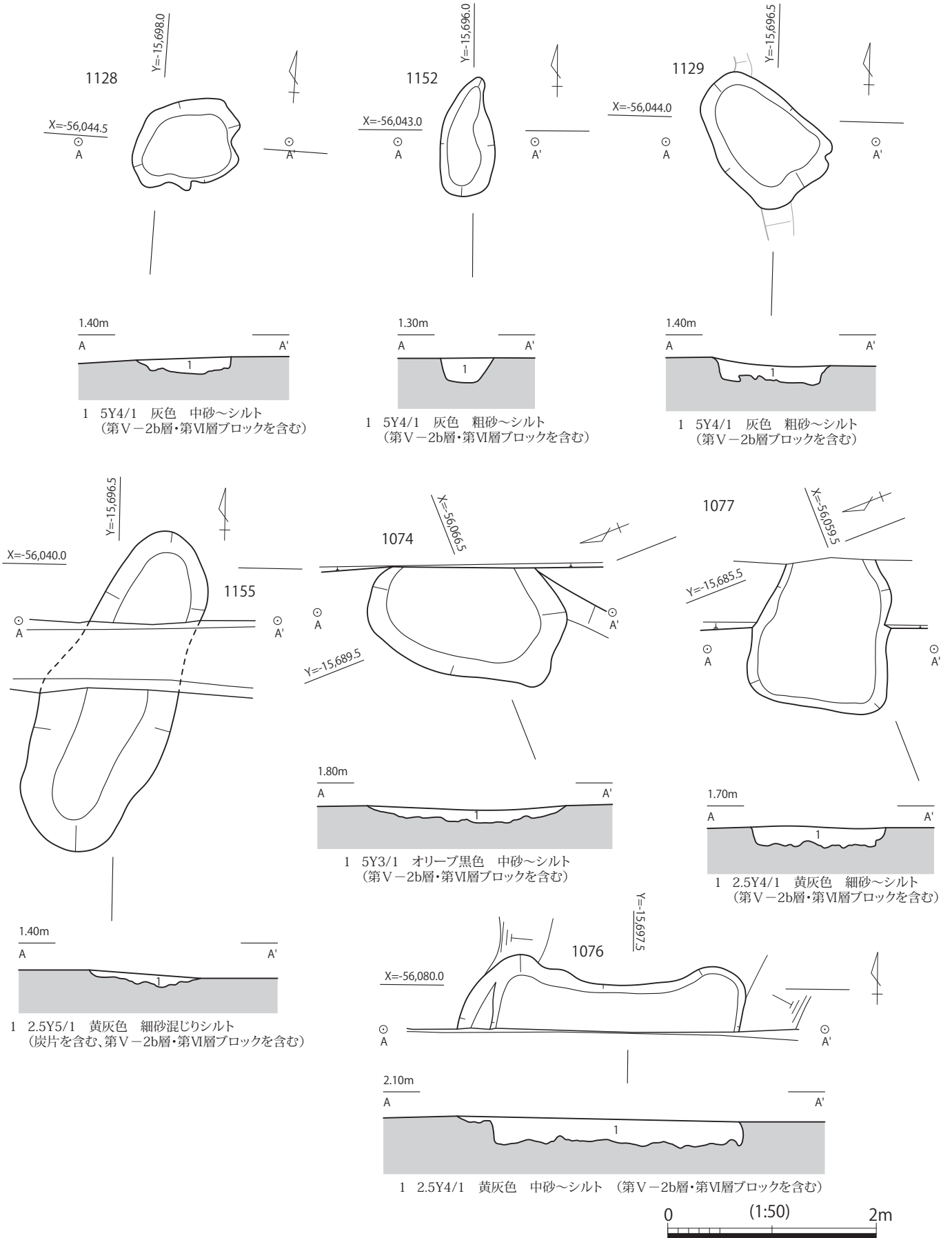


図53 1区 第2面検出遺構(14)

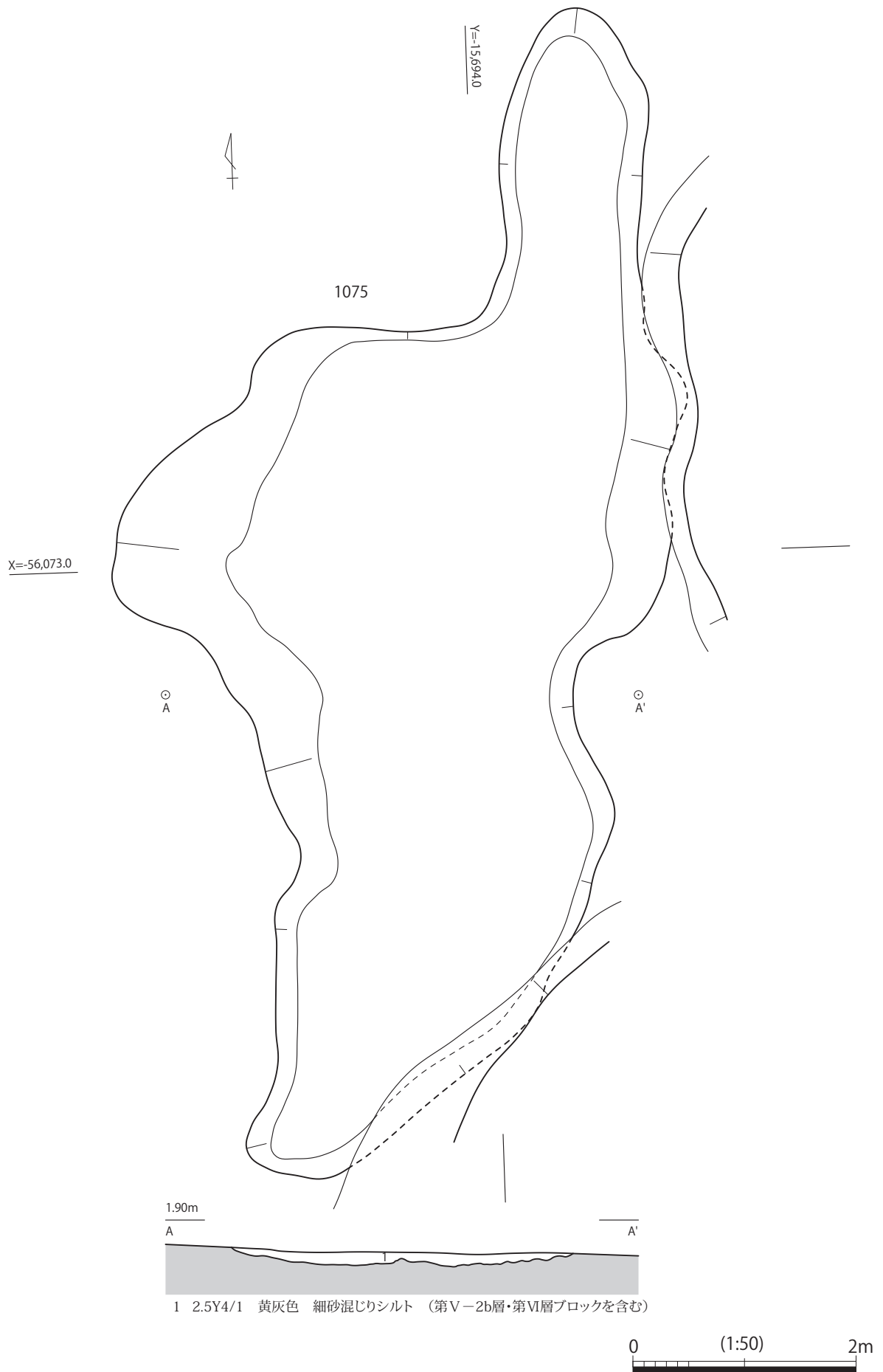


図54 1区 第2面検出遺構 (15)

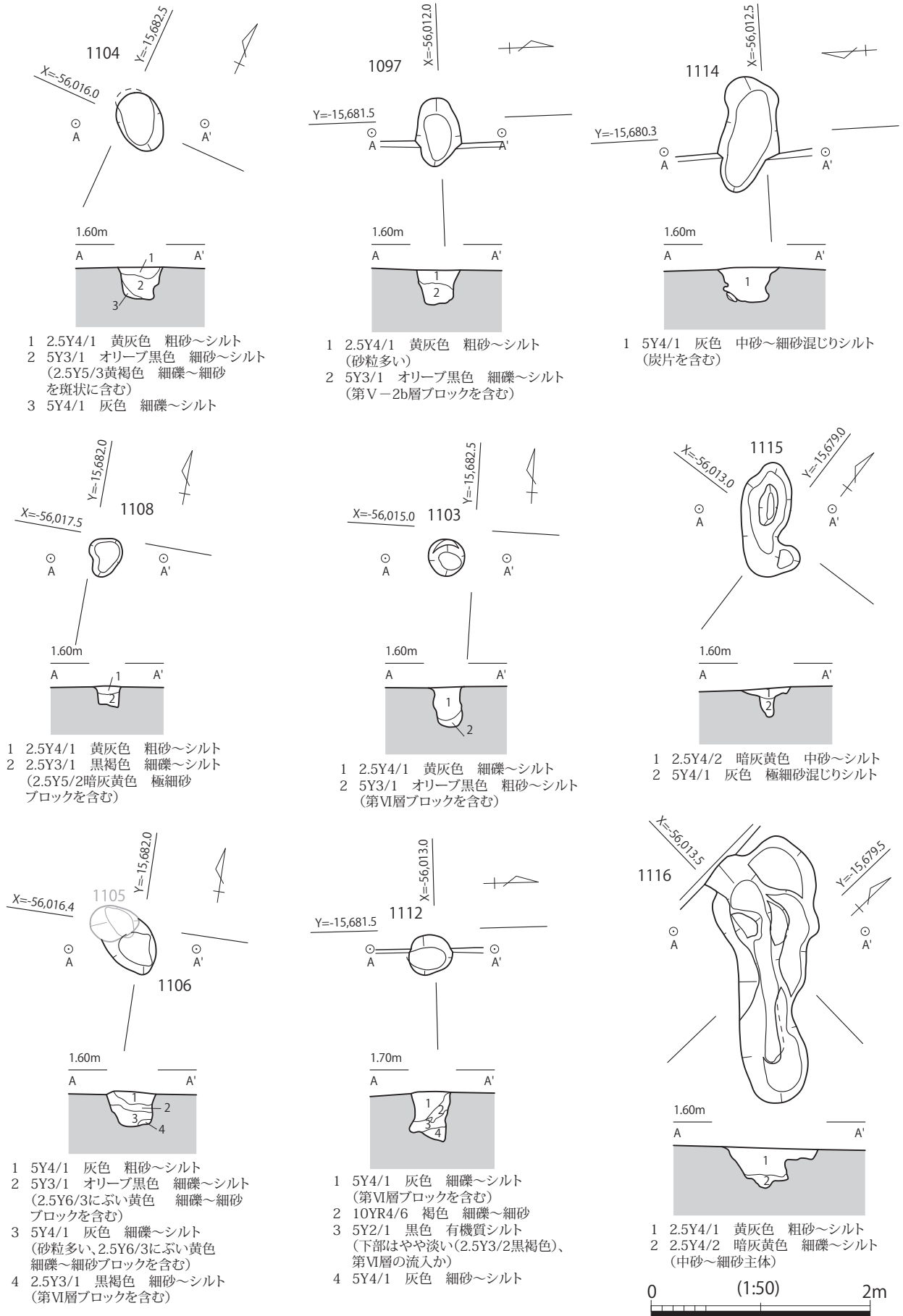


図55 1区 第2面検出遺構 (16)

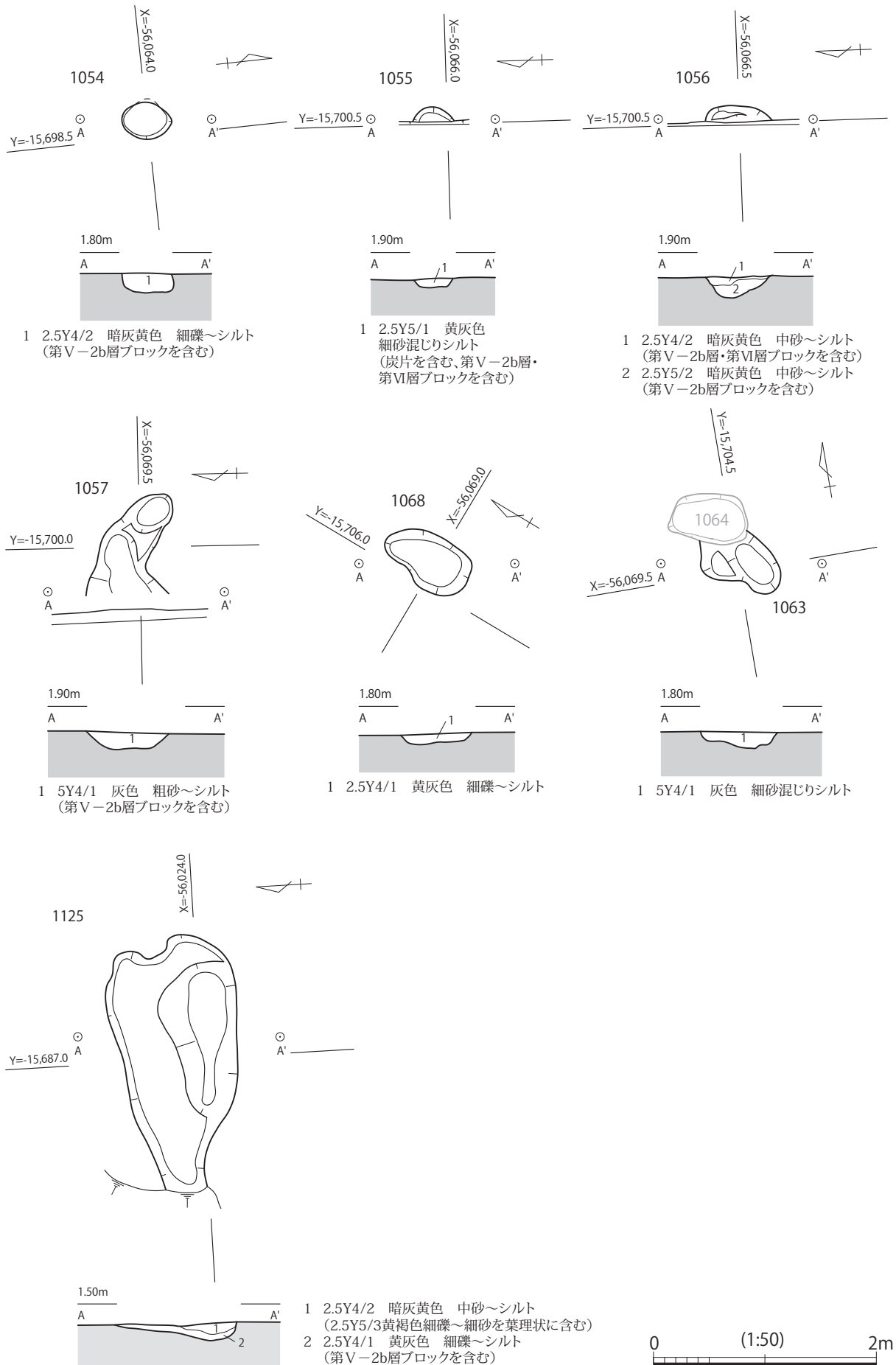


図56 1区 第2面検出遺構 (17)

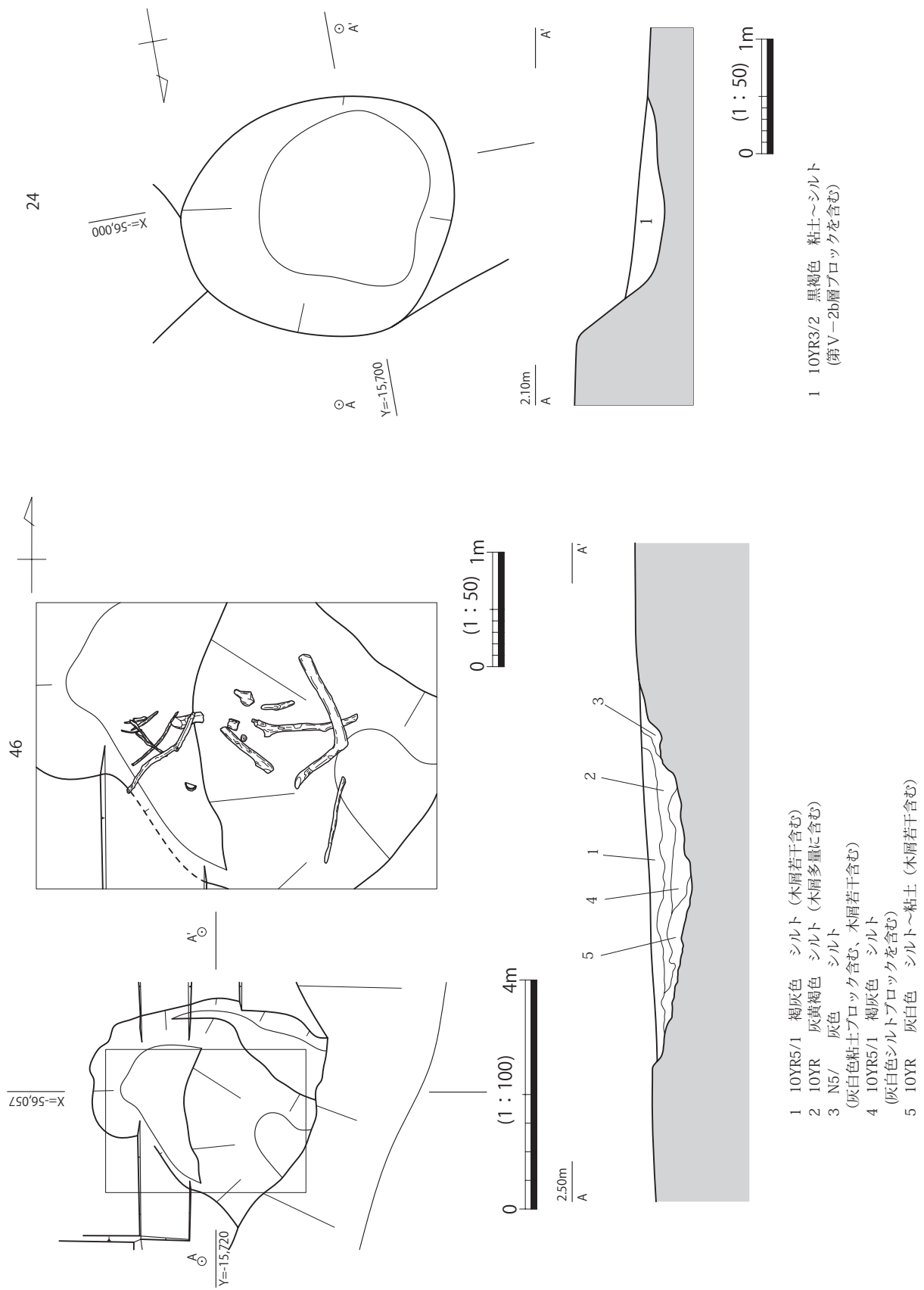
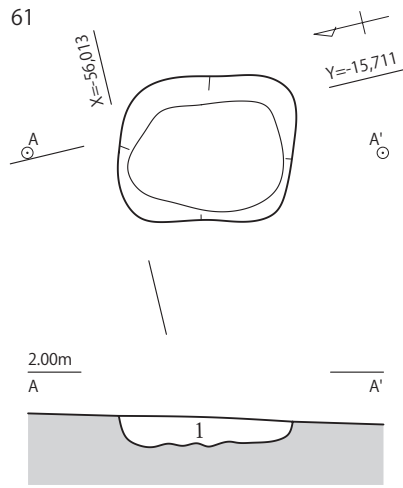
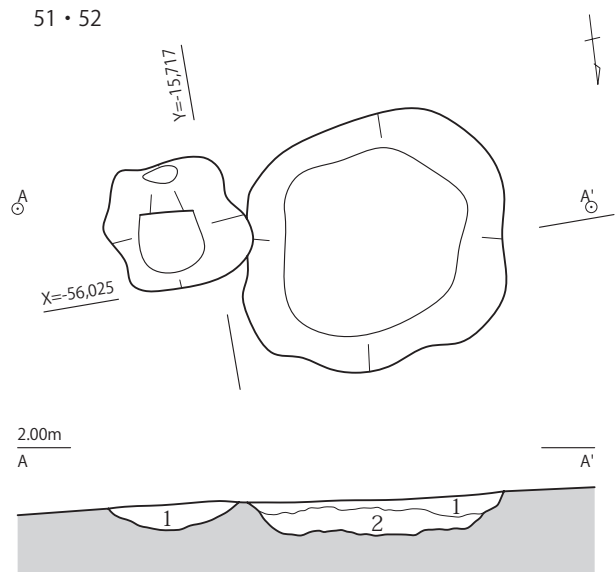


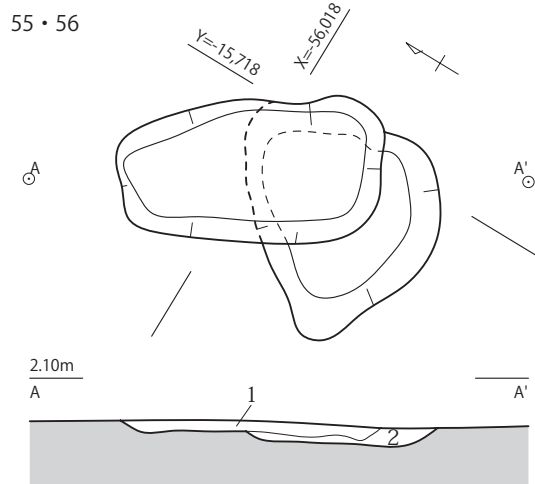
図57 2区 第2面検出遺構(1)



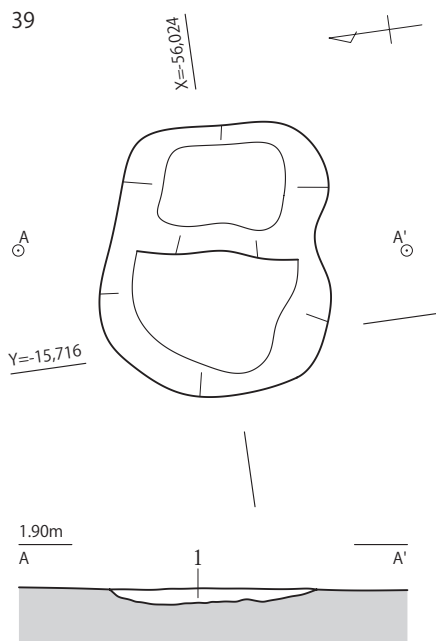
1 N6 灰色 シルト～粘土



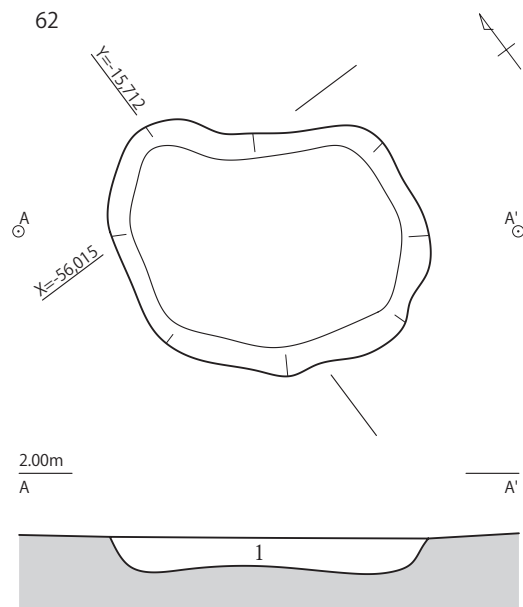
1 5Y5/1 灰色 シルト～粘土
2 5Y6/1 灰色 粘土～シルト (第V-2b層ブロック多く含む)



1 10YR5/1 褐灰色 細砂混シルト (灰色ブロック土含む)
2 N5/ 灰色 シルト (灰白色粘土ブロック土含む)



1 10YR6/1 褐灰色 砂質シルト

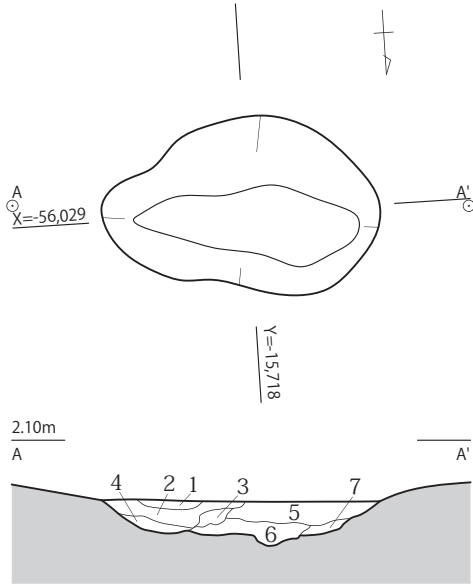


1 N6 灰色 シルト～粘土 (第V-2b層ブロック多く含む)



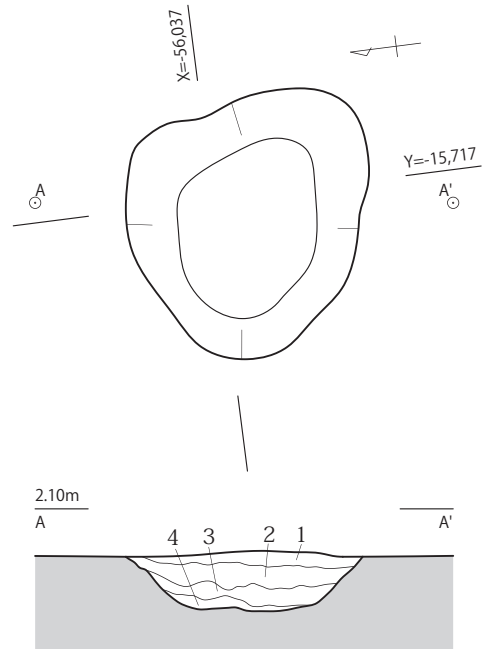
図58 2区 第2面検出遺構(2)

40



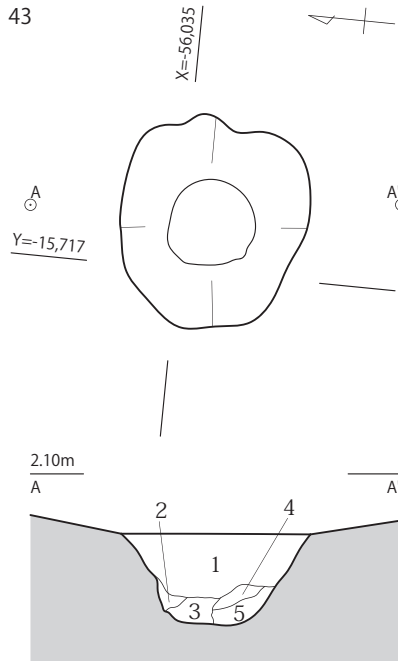
- 1 N2/ 黒色 シルト
(10YR8/4 浅黄橙色 シルトを多く含む、灰か)
- 2 5Y7/1 灰白色 粘土～シルト (1層土ブロック含む)
- 3 5Y6/1 灰色 シルト～粘土
- 4 5BG6/1 青灰色 シルト～粘土 (ややグライ化)
- 5 2.5Y6/2 灰黄色 粘土～シルト (第V-2層ブロック多く含む)
- 6 5BG6/1 青灰色 粘土～シルト (第V-2層ブロック少量含む)
- 7 5Y5/1 灰色 粘土～シルト

48



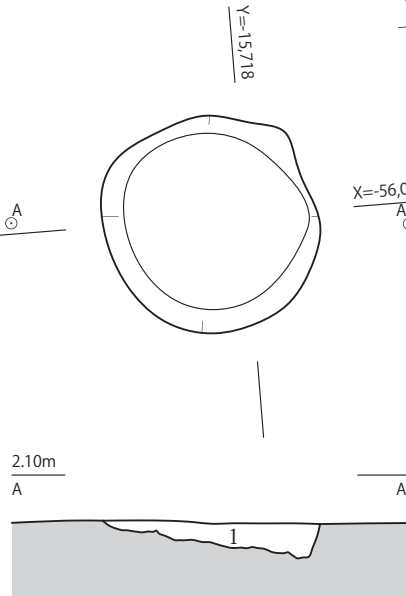
- 1 10YR5/1 褐灰色 シルト (灰色ブロック土含む)
- 2 N5/ 灰色 シルト～粘土
- 3 N6/ 灰色 粘土 (灰色粘土ブロック土含む)
- 4 N4/ 灰色 粘土 (灰色シルトブロック土含む)

43



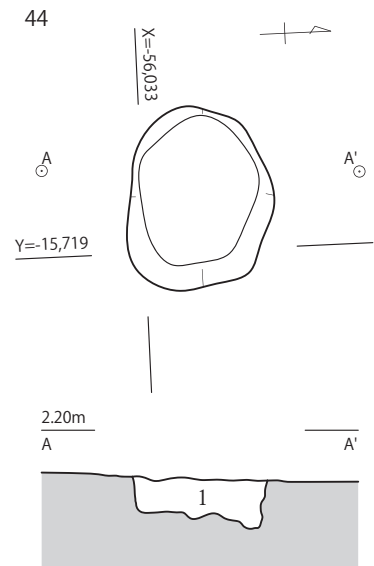
- 1 10YR5/1 褐灰色 シルト～粘土
- 2 10YR6/1 褐灰色 粘土 (灰白粘土ブロック含む)
- 3 10YR7/1 灰白色 粘土 (褐灰色シルトブロック含む)
- 4 10YR7/1 灰白色 粘土
- 5 10YR3/1 黒褐色 粘土 (第V-2層ブロック含む)

41



- 1 10YR5/1 褐灰色 シルト～粘土

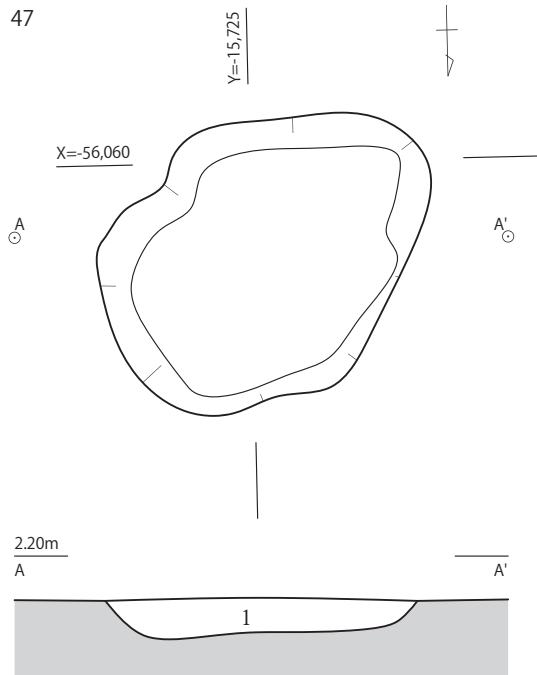
44



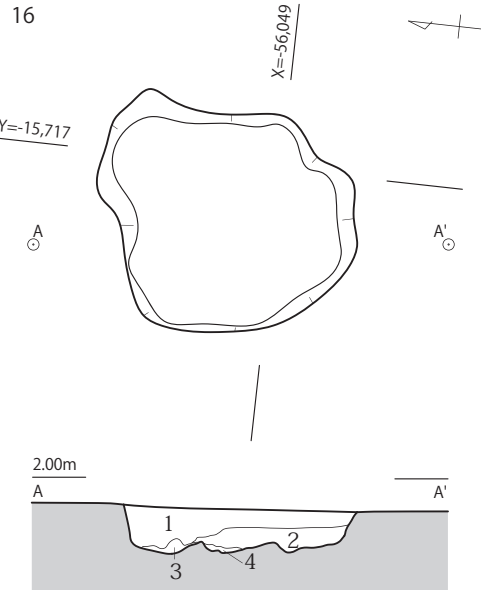
- 1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト



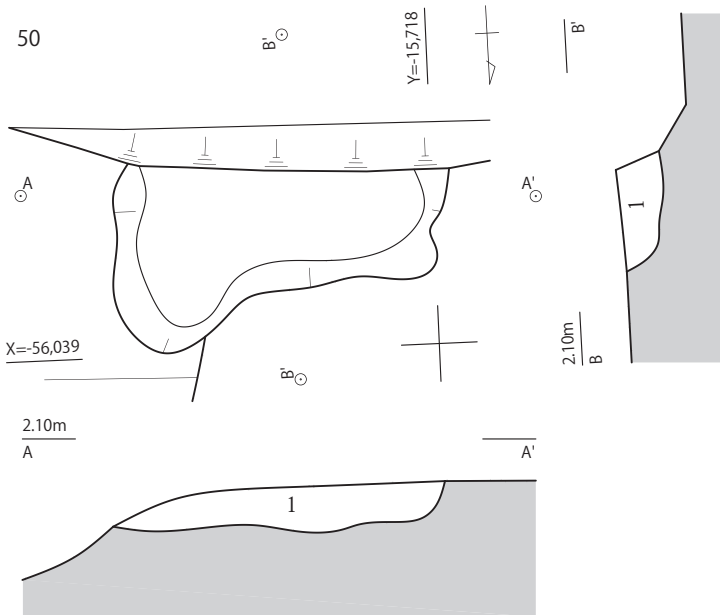
図59 2区 第2面検出遺構(3)



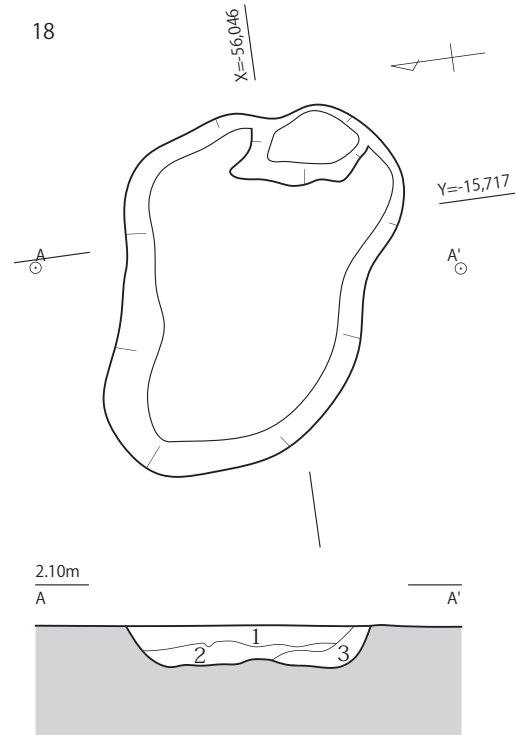
1 10YR4/2 灰黄褐色 シルト (第V-2b層ブロックを多く含む)



- 1 10YR5/1 褐灰色 シルト～粘土
- 2 10YR6/1 褐灰色 粘土 (灰白粘土ブロック含む)
- 3 10YR7/1 灰白色 粘土 (褐灰色シルトブロック含む)
- 4 10YR7/1 灰白色 粘土



1 2.5Y 3/1 黒褐色 細砂～シルト
(5Y 4/1 灰色細砂混じり シルトが斑状に混じる、Ca結核あり)



- 1 10YR5/1 褐灰色 シルト～粘土
- 2 10YR6/1 褐灰色 粘土 (灰白粘土ブロック含む)
- 3 10YR7/1 灰白色 粘土 (褐灰色シルトブロック含む)



図60 2区 第2面検出遺構(4)

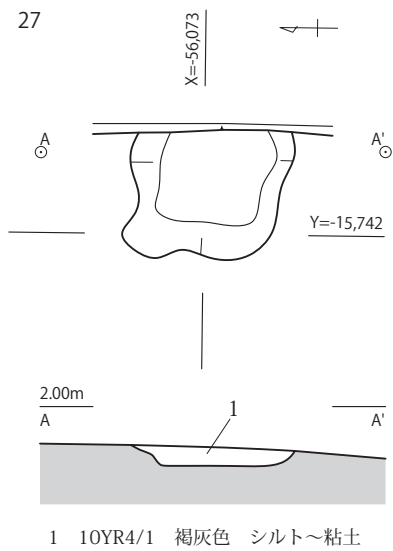
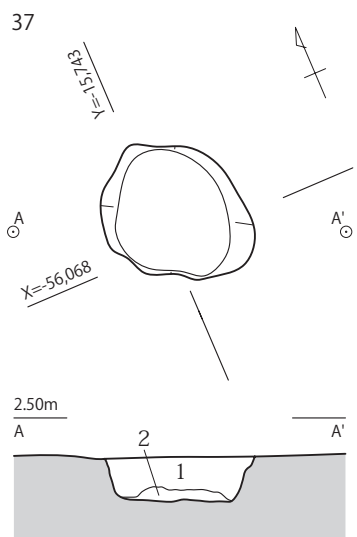
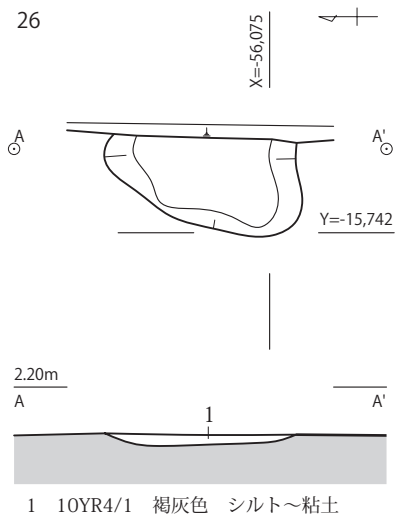
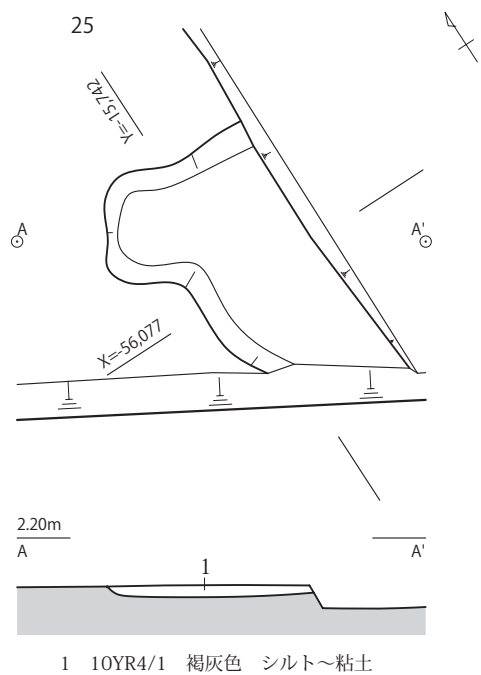


図61 2区 第2面検出遺構(5)

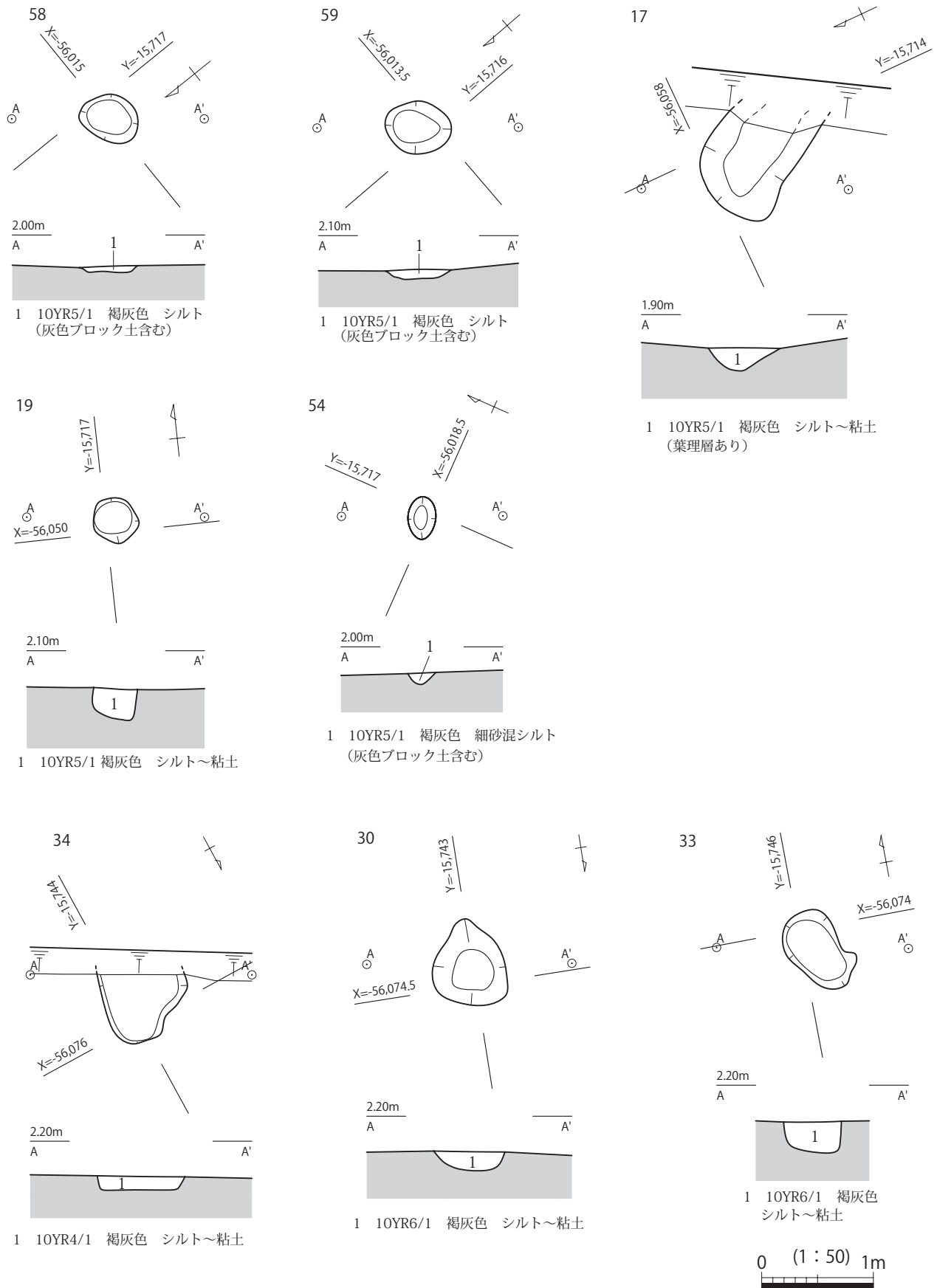


図 62 2区 第2面検出遺構(6)

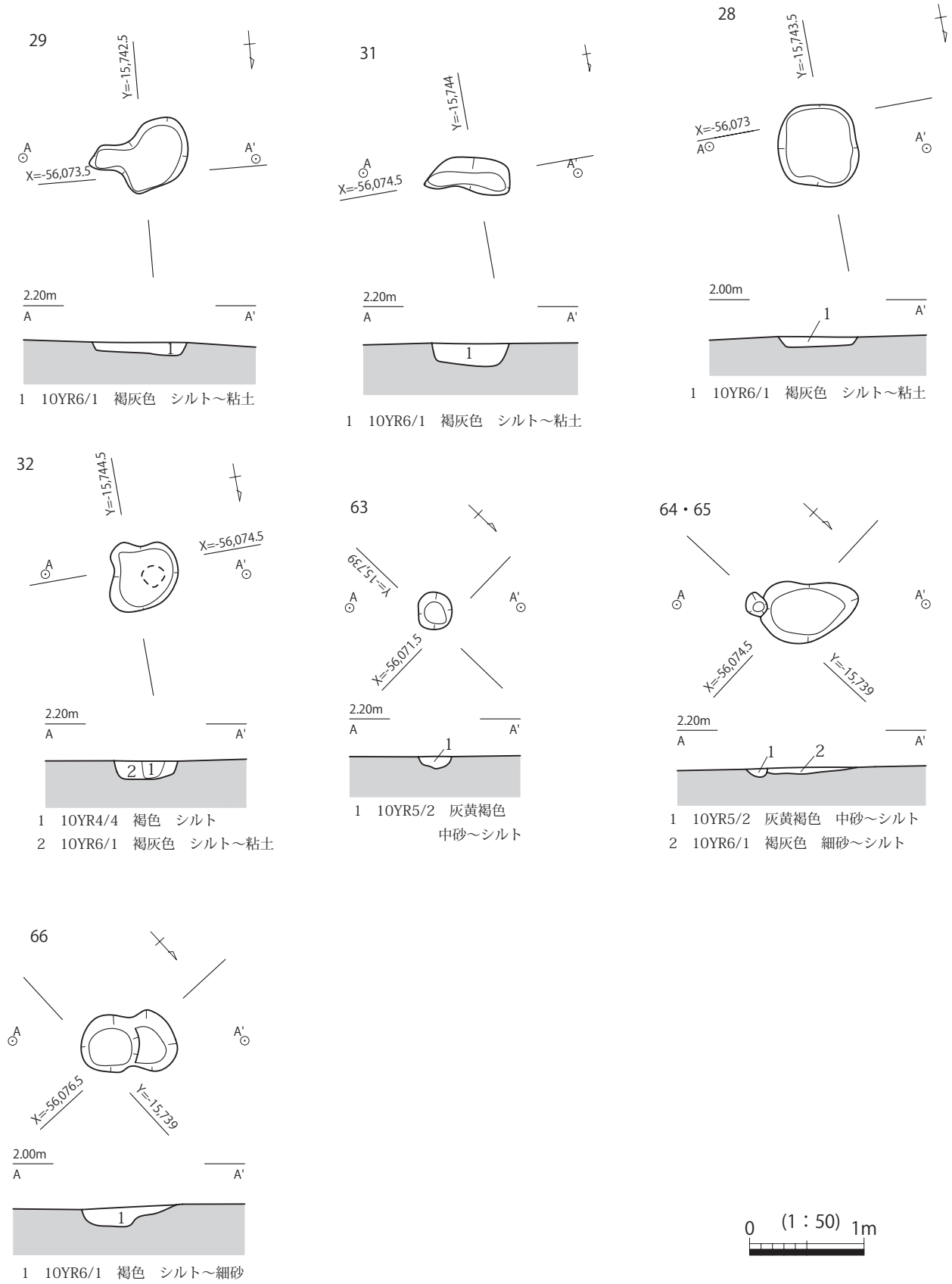


図63 2区 第2面検出遺構(7)

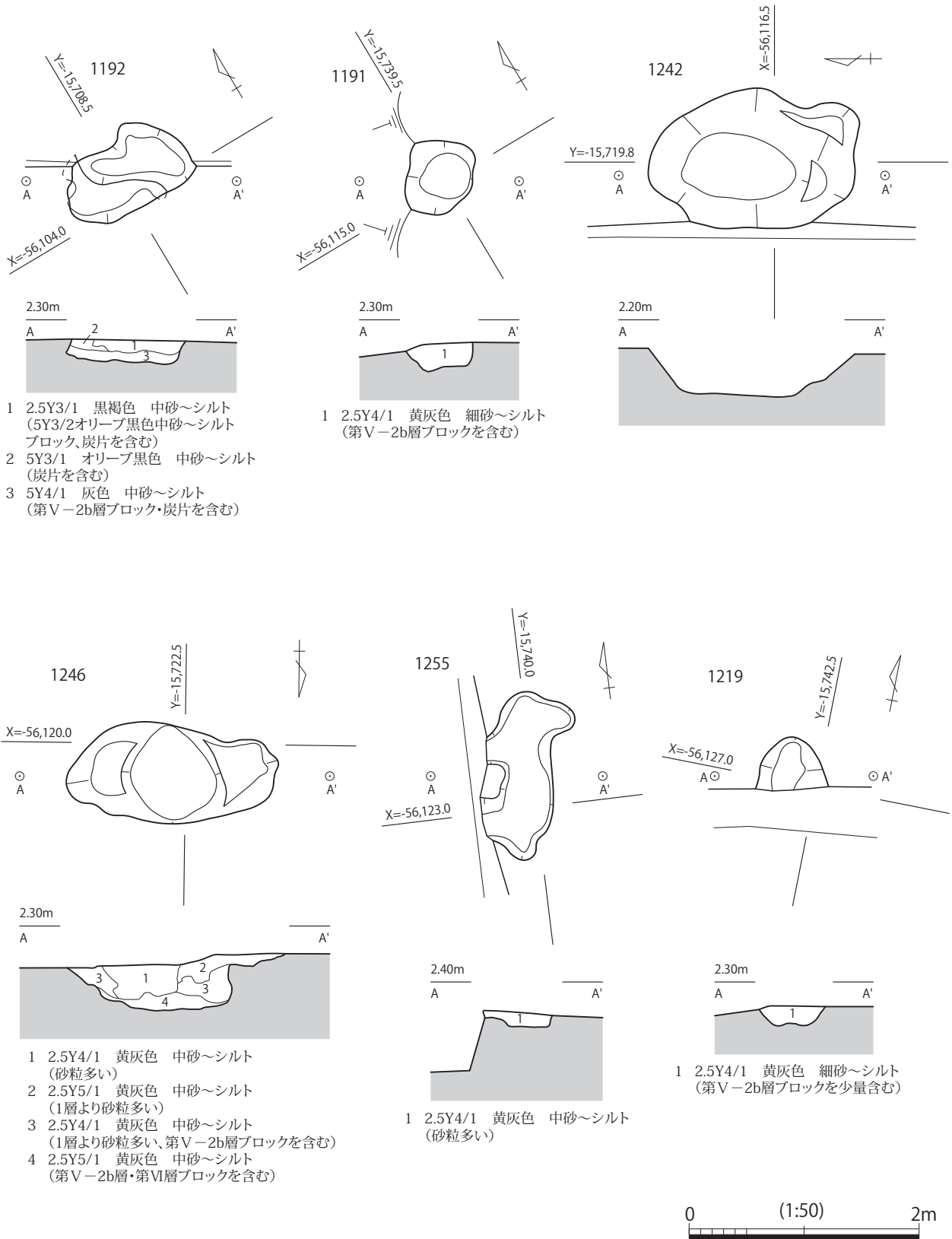


図64 3区 第2面検出遺構(1)

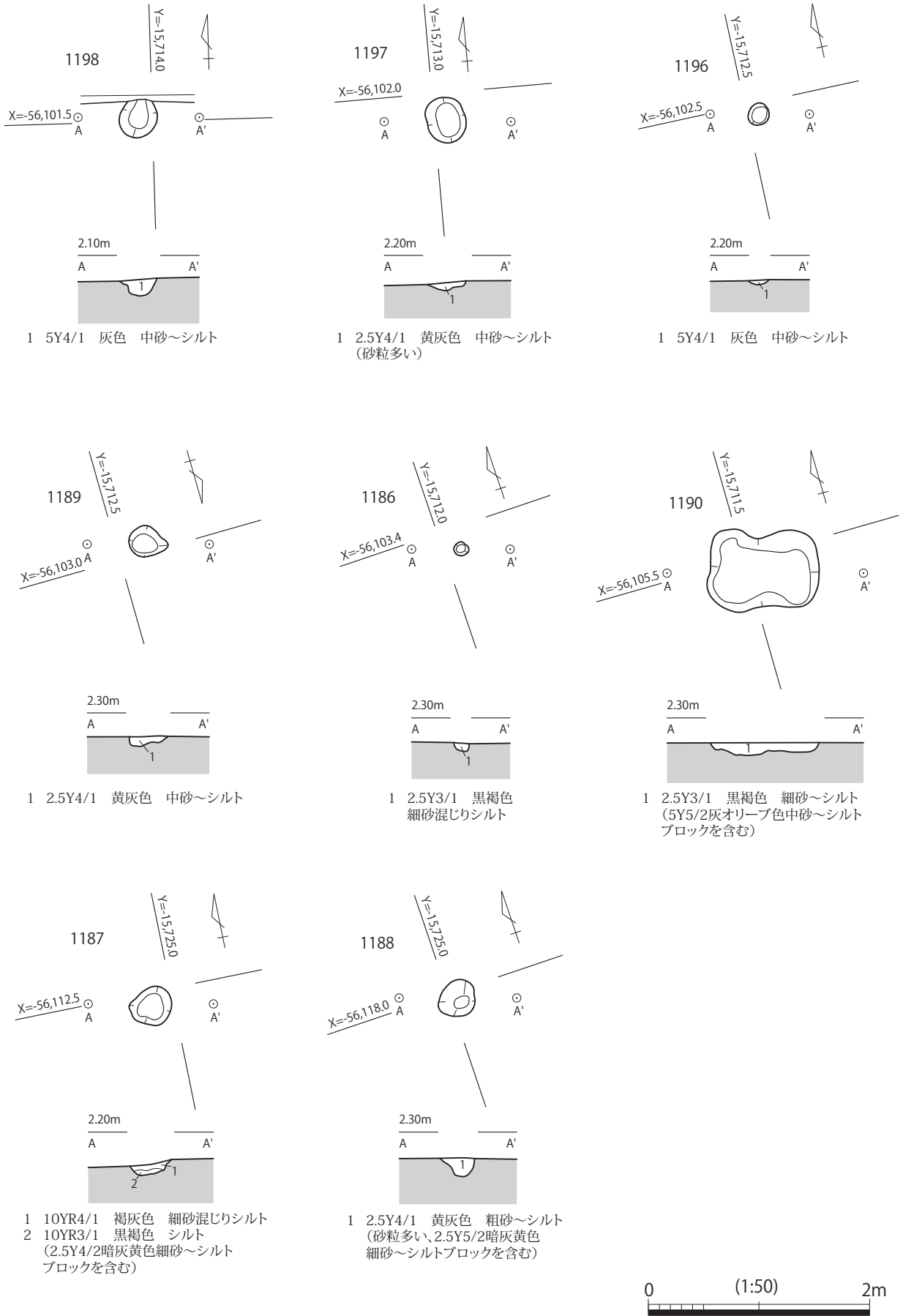


図 65 3区 第2面検出遺構(2)

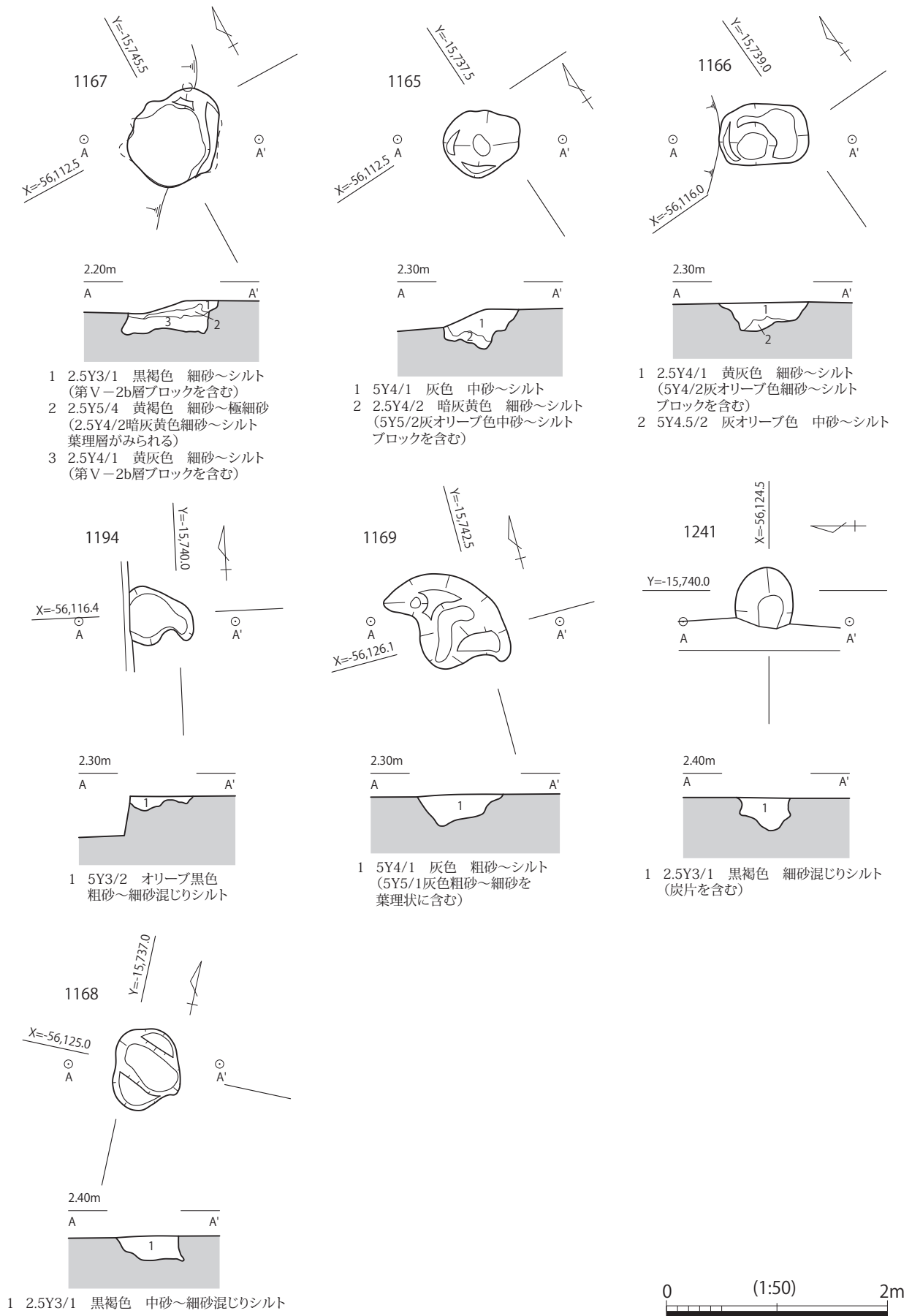


図66 3区 第2面検出遺構(3)



図67 3区 第2面検出遺構(4)

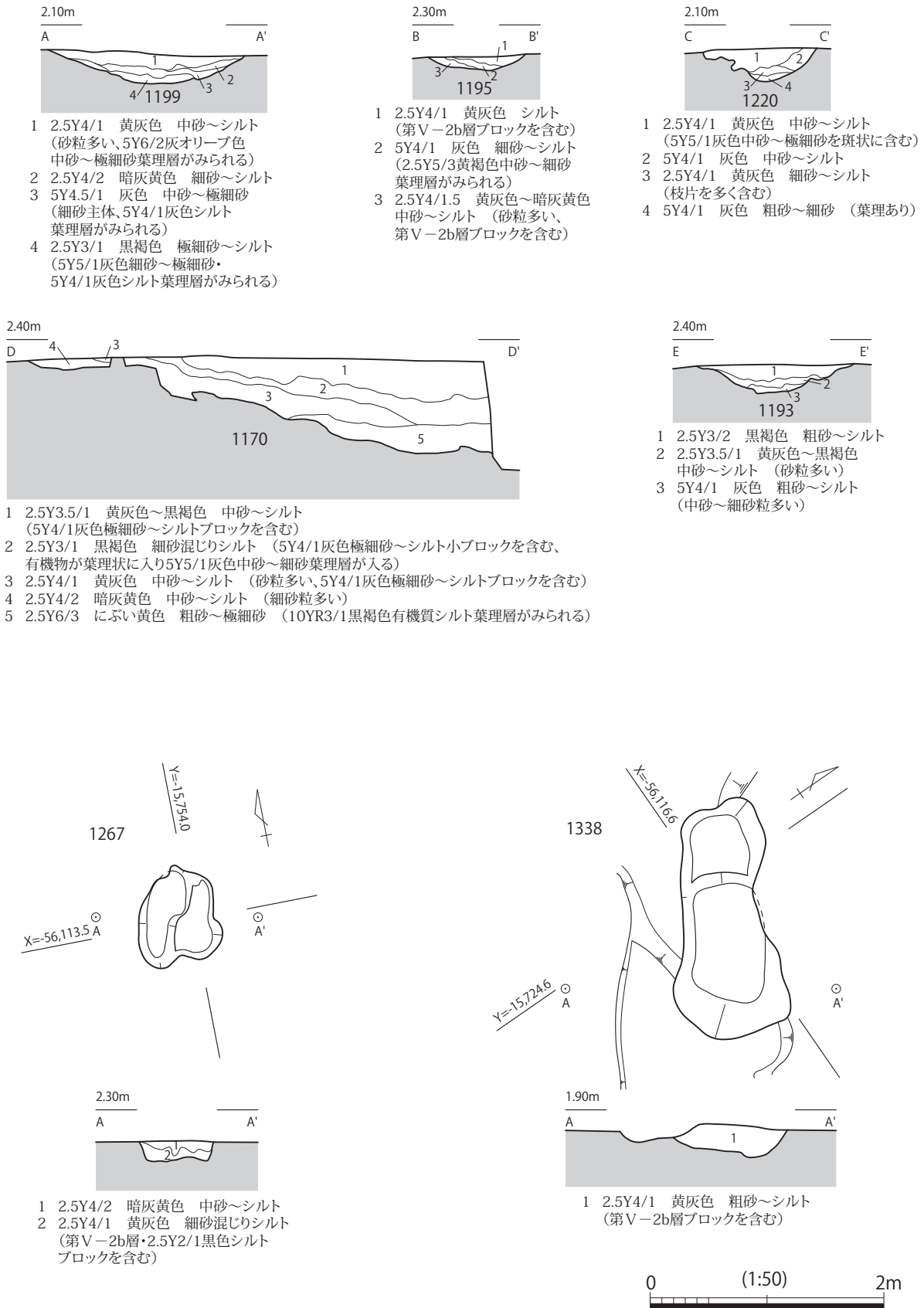


図 68 3区 第2面検出遺構 (5)

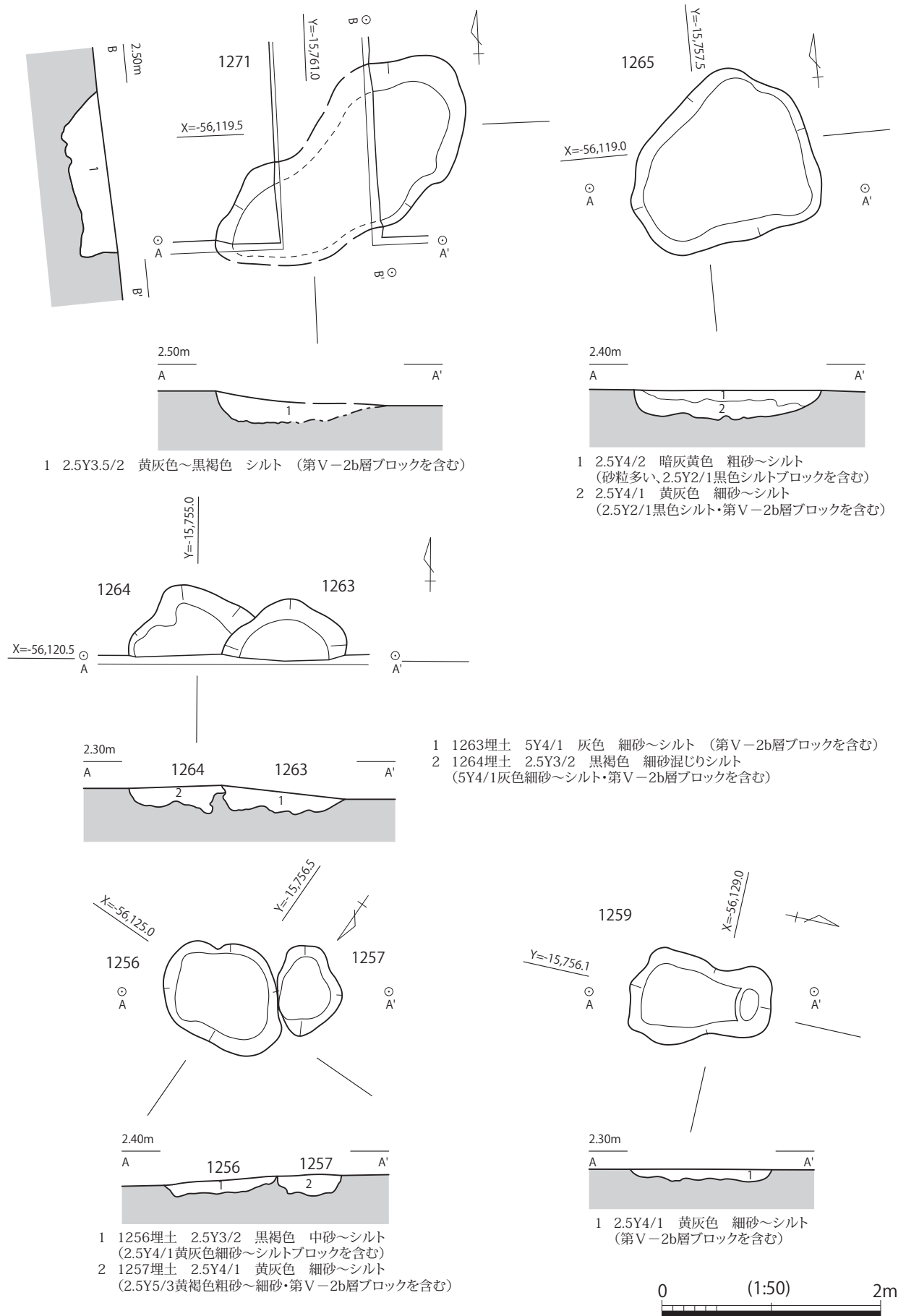


図 69 3区 第2面検出遺構(6)

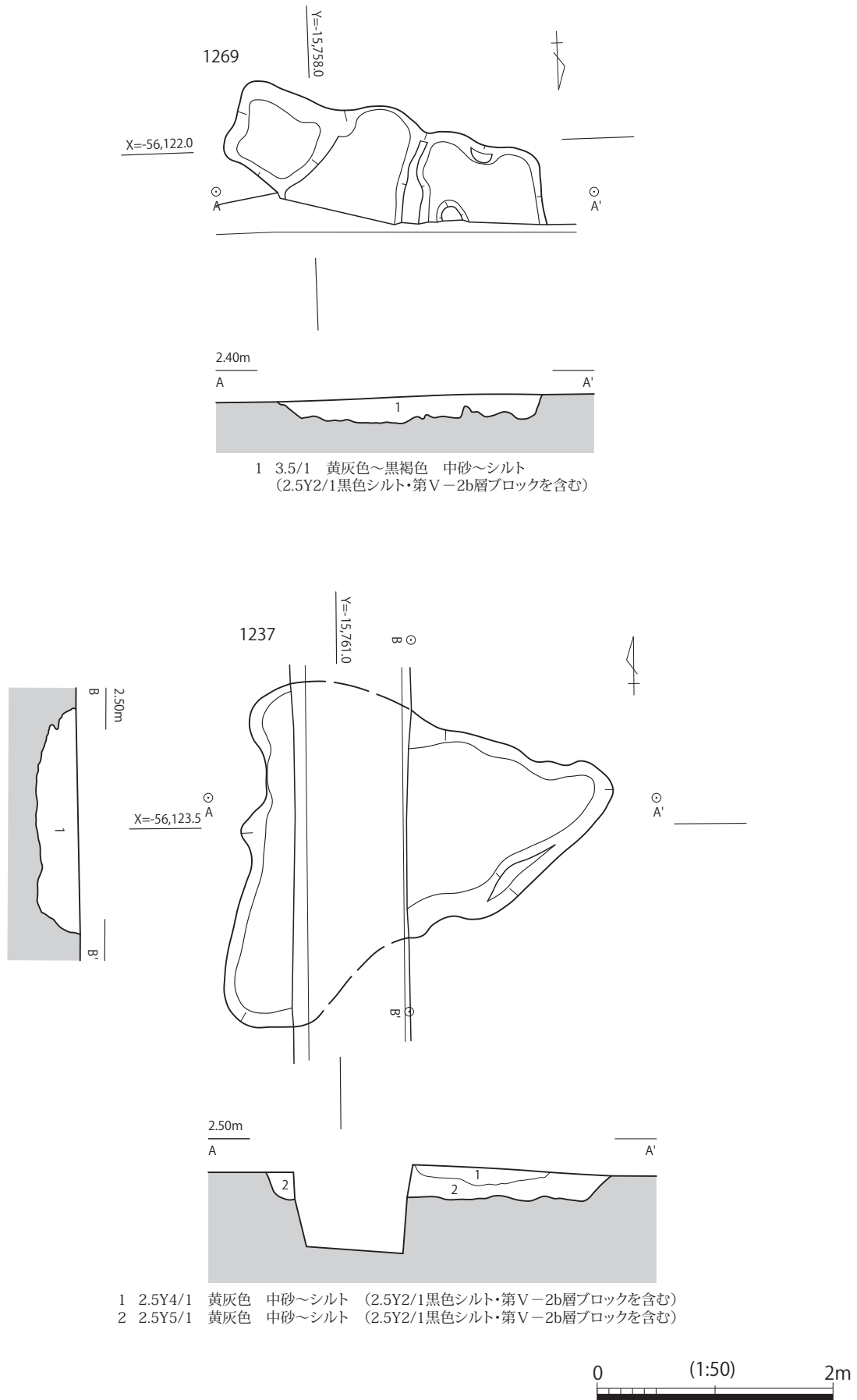


図70 3区 第2面検出遺構(7)

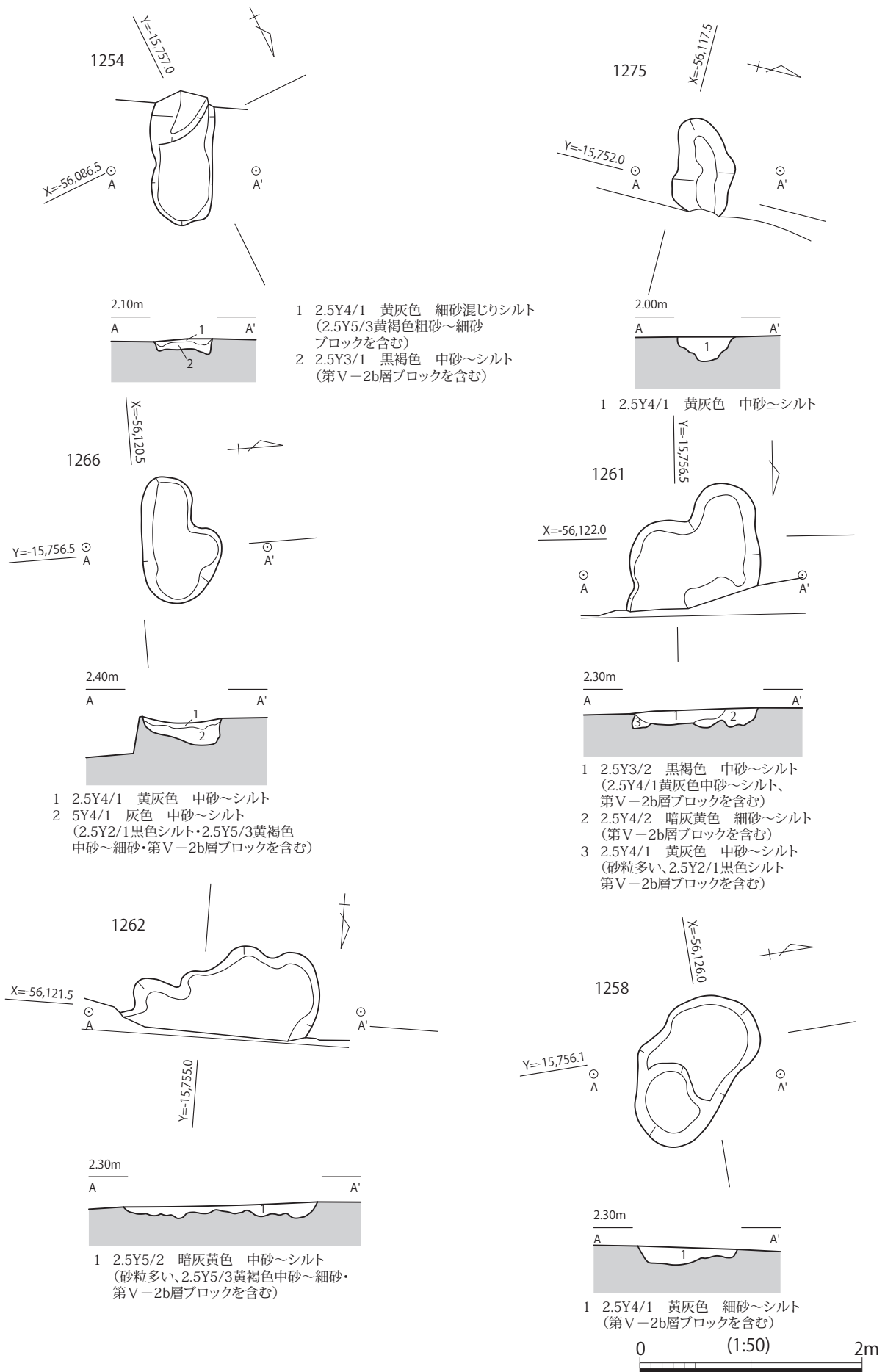


図71 3区 第2面検出遺構(8)

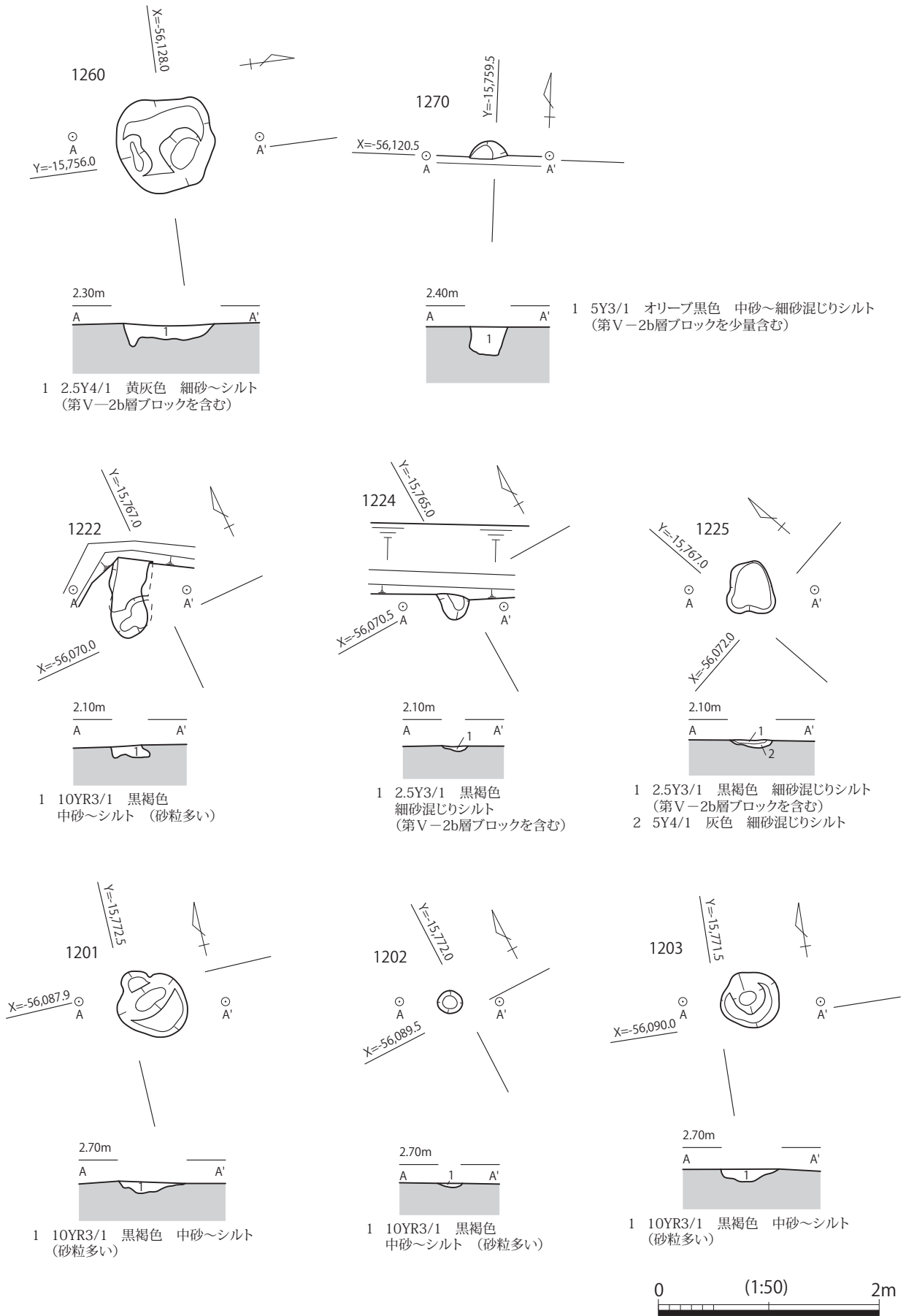


図72 3区 第2面検出遺構(9)

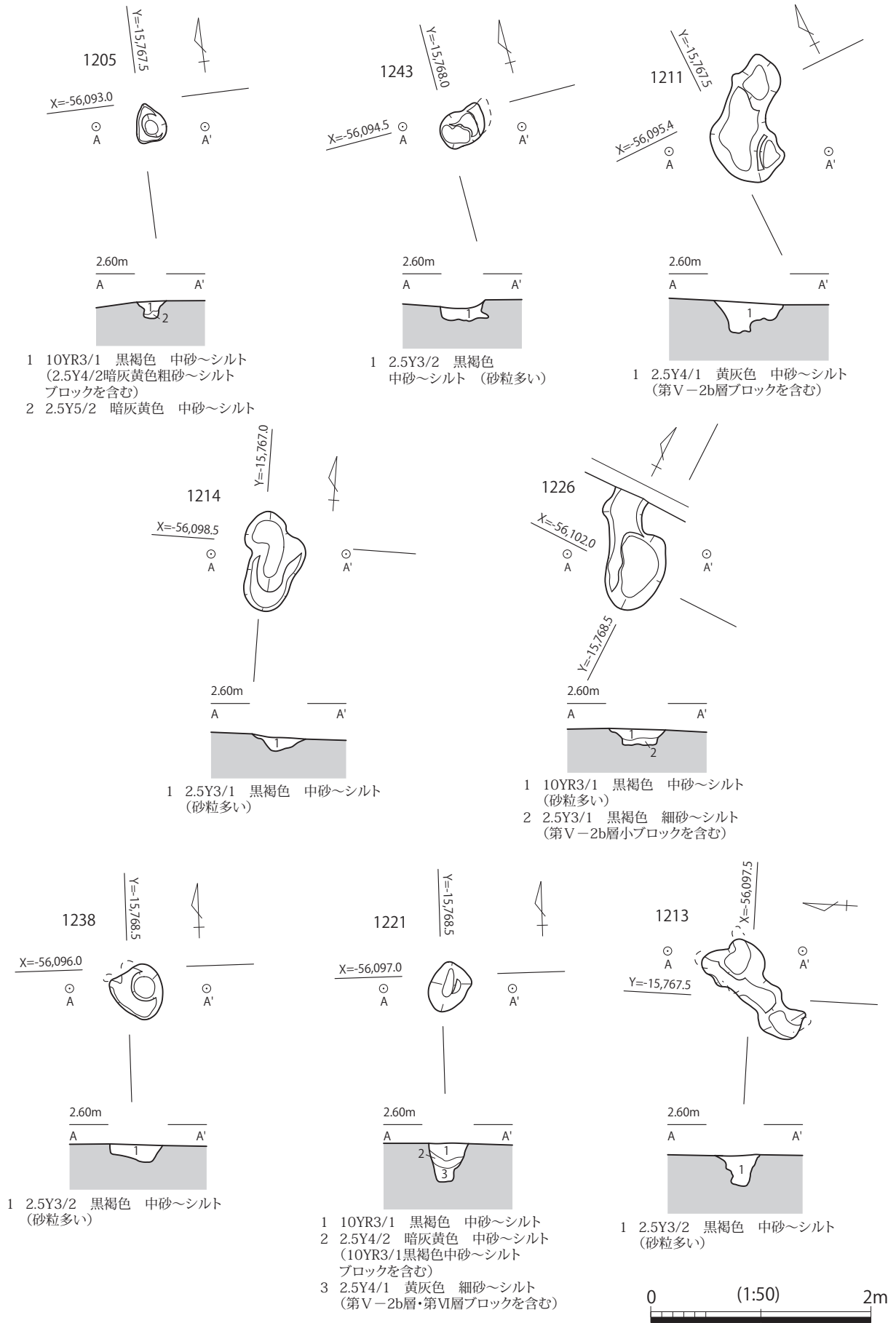


図73 3区 第2面検出遺構(10)

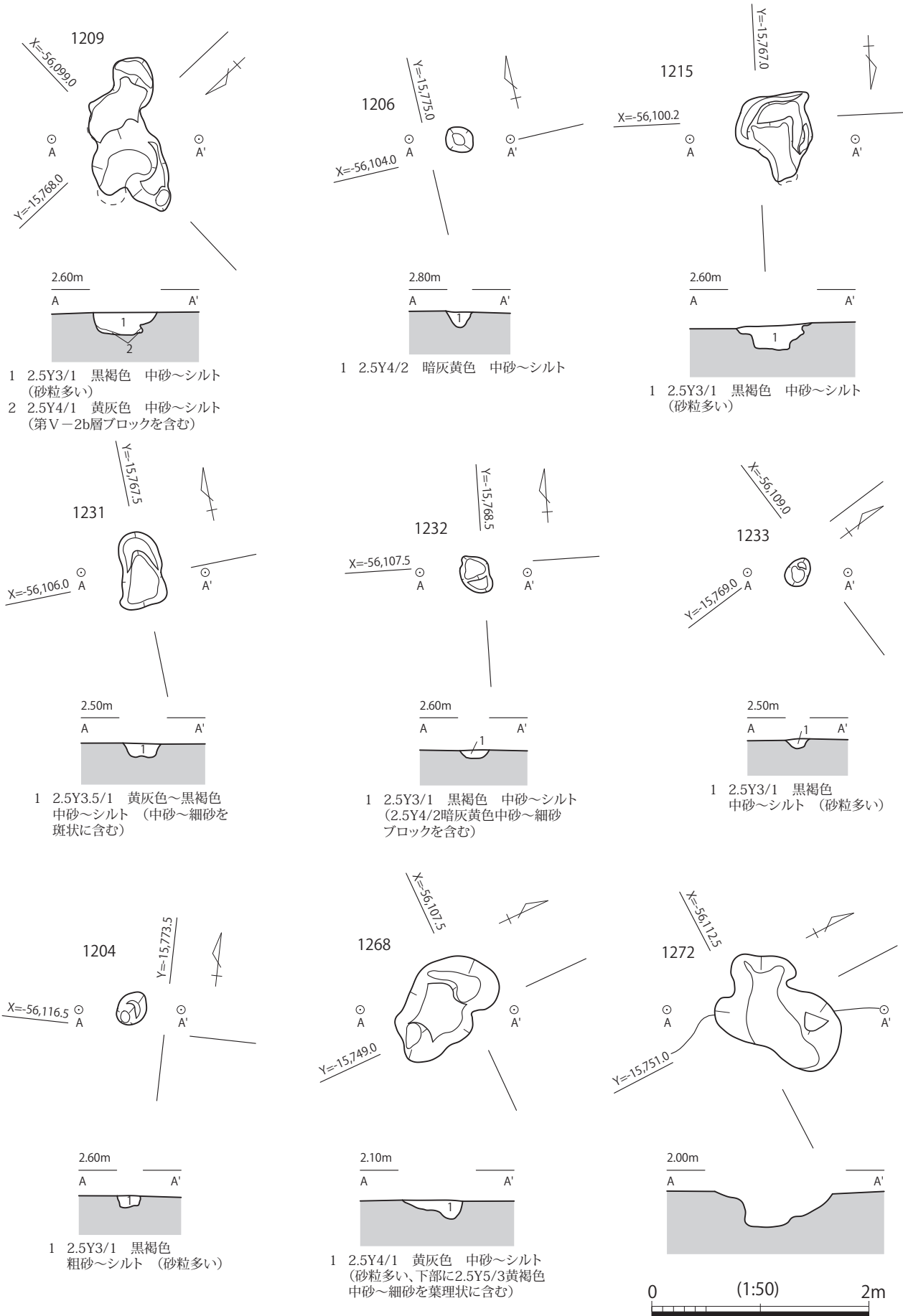


図74 3区 第2面検出遺構 (11)

第5節 第3面の調査

概要

第3面は第V-2b層上面で検出した。第2節で述べたように第V-2b層は自然堆積層であり、この上面の土壌化層を除去した状態で調査を行い、自然河川と溝、擬似畦畔、土坑、ピットを確認した。

2区では細い溝が2条並ぶように検出され、道の可能性がある。土坑では、第2面と同じような粘土採掘坑と思われるものを2区と3区で検出した。建物は検出できず、第2面と同じように調査地で人々が居住したとは考えにくい。遺構出土遺物は少ないものの第V層出土遺物などから、古墳時代後期から飛鳥時代頃にかけて人々の活動が調査地に及んだものと考えられる。

1124 河川 (図 76)

1区の整地層下面で検出した河川で、2河川とほぼ重複する。2河川の東岸側や川底に埋土の一部が残っていた程度で、幅や深さは不明である。また、埋土中からは表面が摩耗した縄文土器が少量出土したが、12河川から出土したものと同様に上流から水流で運ばれたものと考えており、川が流れていた時期についてもよくわからなかった。

122 溝・128 溝・223 溝 (図 76)

2区中央部、1H-2c区から6d区に位置する溝で、南南西から北北東へほぼ真っ直ぐに延びる。切り合い関係にある遺構は、すべてこれらの溝を切る。

東側にある122溝はほぼ真っ直ぐ延びる溝で、途中で東側に分岐する。この溝は本体とほぼ平行するように南に延びる。ここでは本体部分を「122西溝」、分岐したものを「122東溝」と呼び分ける。この2本の溝の間は約1mある。

128溝は122西溝の西側にあり、ほぼ真っ直ぐに延びながら、2区北端あたりでやや西に振る。

223溝は2区北端で検出した溝で、122西溝と128溝の間にある。

これらはいずれも幅0.4m前後、深さ0.08m前後で、断面形は皿状を呈する。全体に残存状況が良くなく、特に122西溝は一部で途切れる箇所がある。

122西溝と128溝は平行して延び、溝の間隔は広いところで約2m、狭いところは約1mある。北側では128溝が西側にやや振れるため、間隔が広がる。223溝はこの部分にあり、122西溝と223溝との間隔は約2mを測る。

以上のことから、硬化面が認められないものの、128溝と223溝は道路側溝の可能性を考えておきたい。

擬似畦畔 (図 76)

2区で1箇所、3区で2箇所確認した。

このうち、2区で検出した77水田、78水田を区画する畦畔と3区で検出した1335畦畔は丘陵裾付近にあり、丘陵に直交する。3区の1323畦畔は南北方向の擬似畦畔である。いずれもわずかに高まる程度で、周辺に足跡などの痕跡は認められなかった。

水田の形状は不明であるが、いずれの畦畔も直線的であり、比較的大きな区画の水田が営まれていたのかもしれない。

土坑・ピット・溝 (図 75 ~ 101)

第3面の土坑・ピットは、1～3区で計 135 基検出した。

1区は3基の土坑を検出した (図 75)。ブロック土を埋土とするが不整形なため、風倒木痕の可能性もある。

2区の土坑・ピットは、12 河川左岸に分布し、埋土の違いから2種類に分類する。両者は混在し、遺構間はほとんど切り合わない。

① ブロック土を埋土とする一群で、第VI b層上面まで掘削が及ぶ。粘土採掘坑か。平面形は不整形、規模は1 mを超える大形のものが大半を占める。深さは0.3 m未満 (図 77 ~ 81)。

② 若干のブロック土を含むが、総じてブロック土を埋土としない一群で、第VI b層上面まで掘削が及ばない。規模は1 m未満のものが目立つ (図 82 ~ 92)。

2区の溝は 186・199 溝を検出した (図 93)。

3区の土坑・ピットは、掘削深度が第V-2 b層下面まで及ぶか否か、ブロック土を埋土とするか否かで3種類に分類する。

① ブロック土を埋土とし第V-2 b層下面まで掘削が及ぶ一群で、12 河川左岸に分布する。大形で不定形な土坑が多く、掘削深度は概ね0.2 m以下である。遺構間はほとんど切り合わない (図 94 ~ 97)。

② ブロック土を埋土とするが、第V-2 b層下面まで掘削が及ばない一群。第V-2 b層下面まで掘削が及ぶ一群と混在し、ほとんど切り合い関係もない (図 98)。

③ ブロック土を埋土としない一群で、12 河川左岸を中心に分布し、一部12 河川内や同右岸にもある。ブロック土を埋土とする一群に比べ散在傾向。不整円形で小形のものが多く (図 99・100)。

3区の溝は 1339・1340 溝を検出した (図 101)。

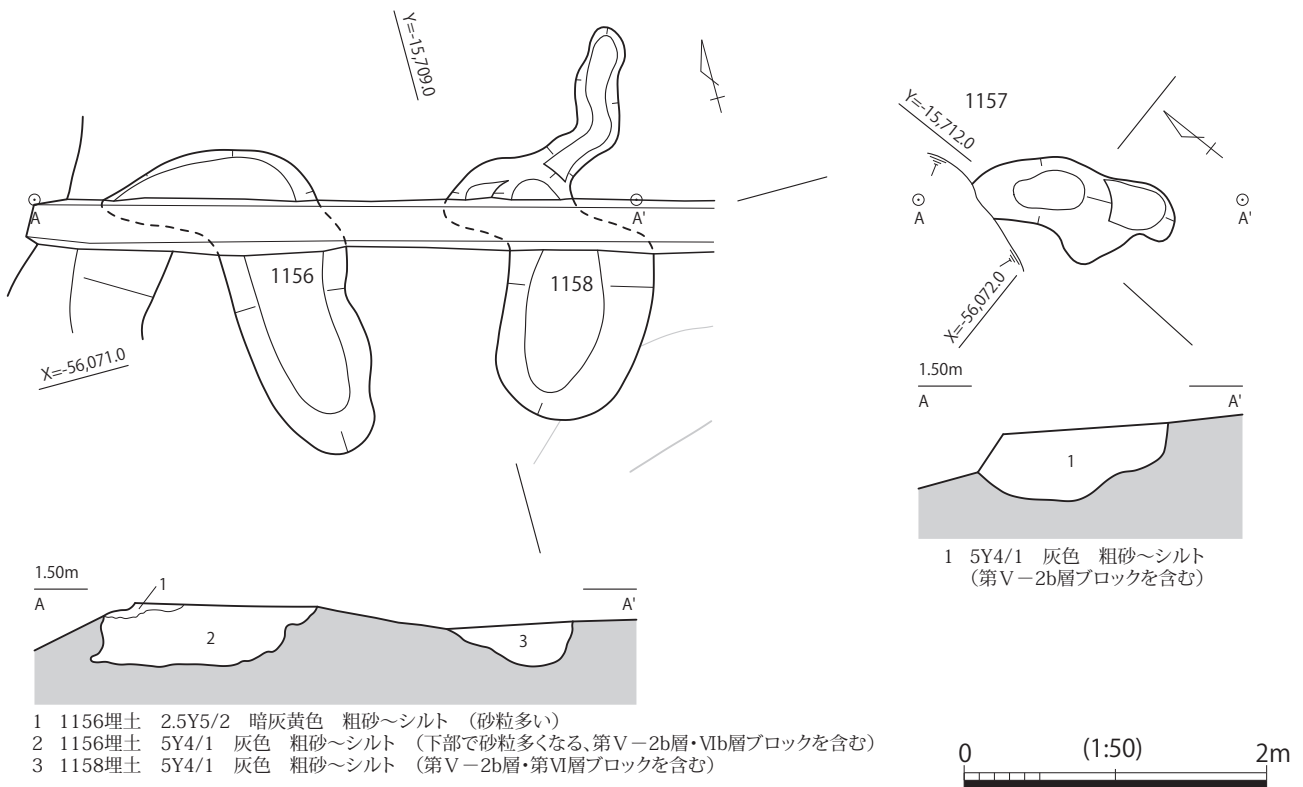


図 75 1区 第3面検出遺構

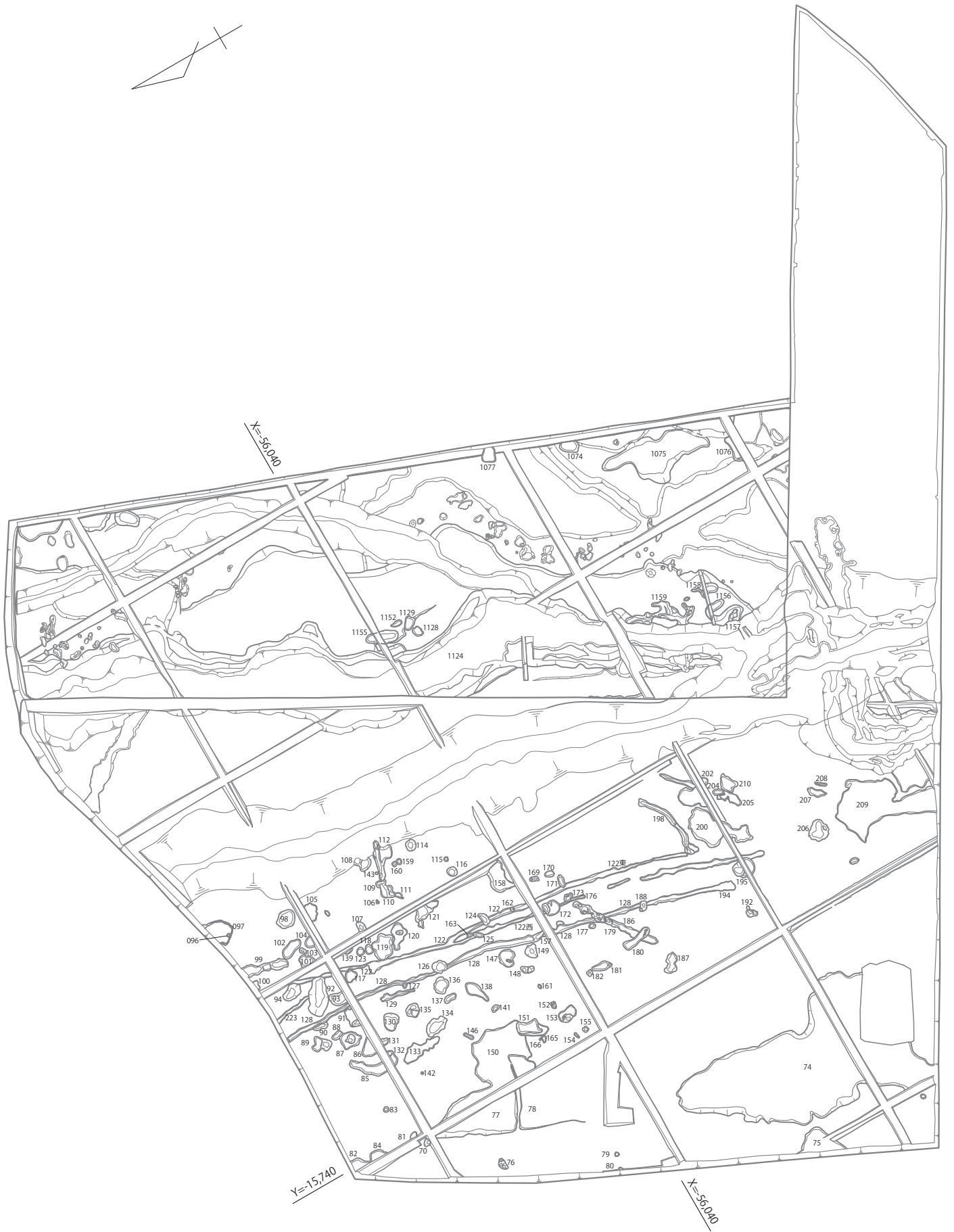




図76 第3面 平面

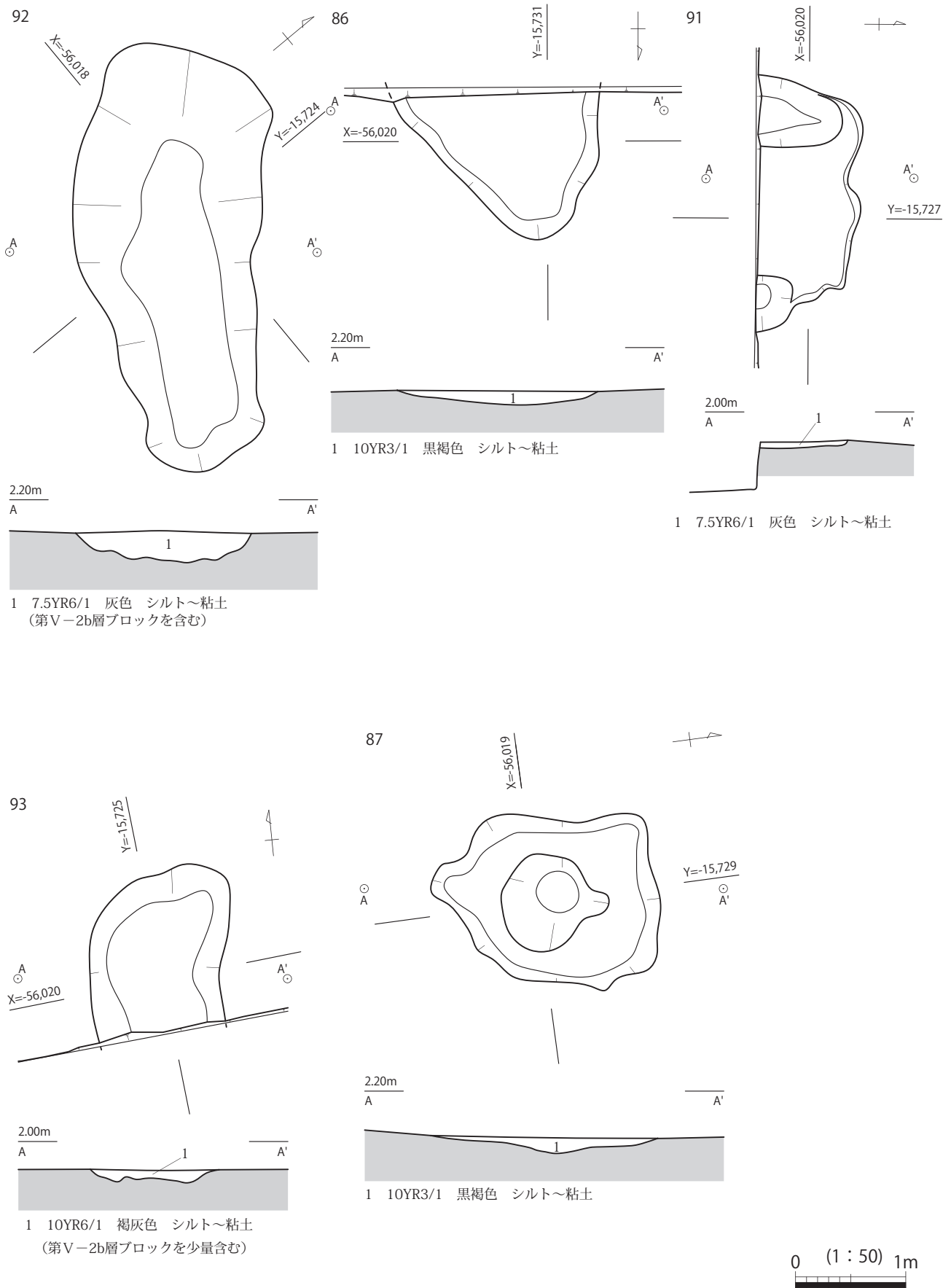


図77 2区 第3面検出遺構(1)

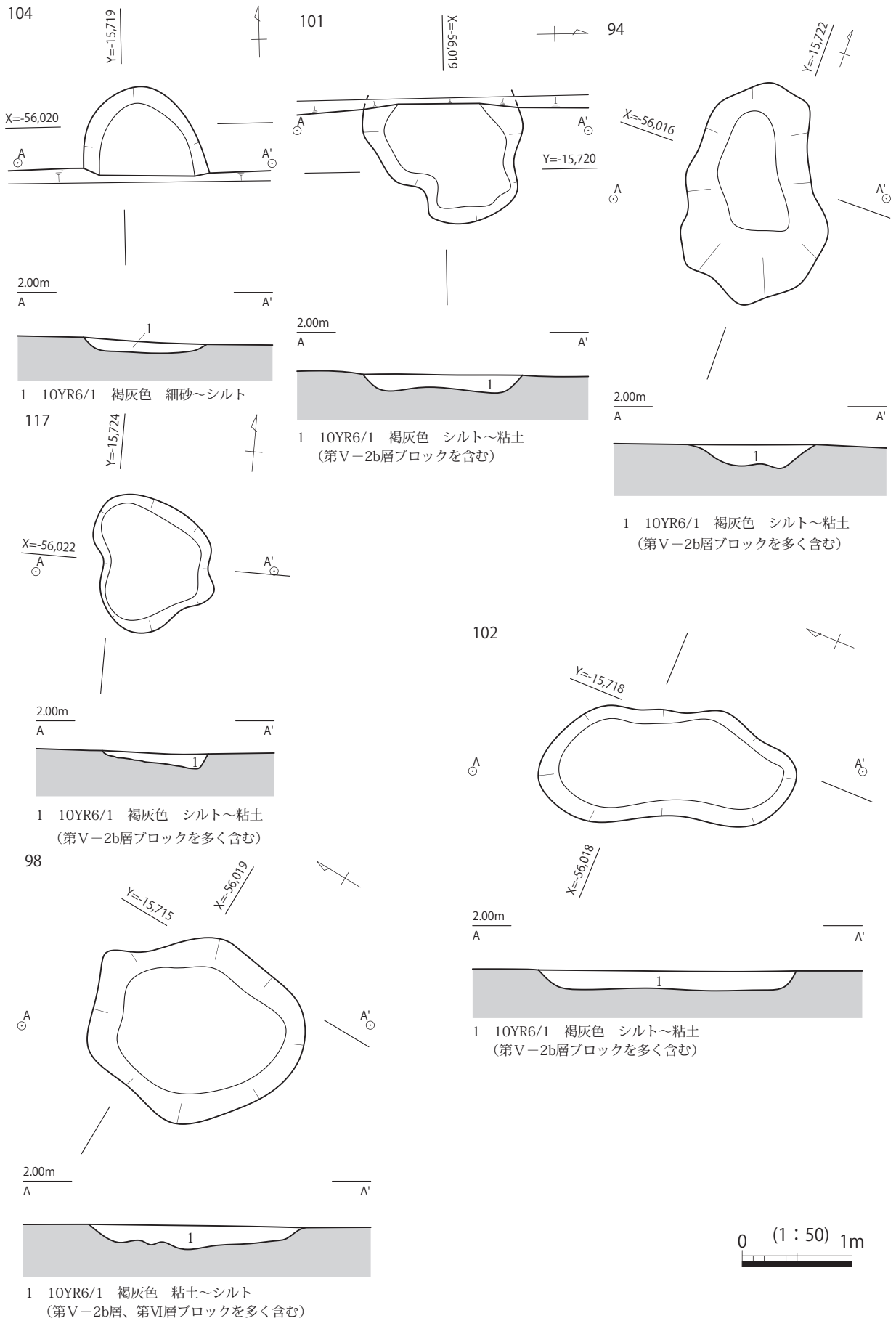


図78 2区 第3面検出遺構(2)

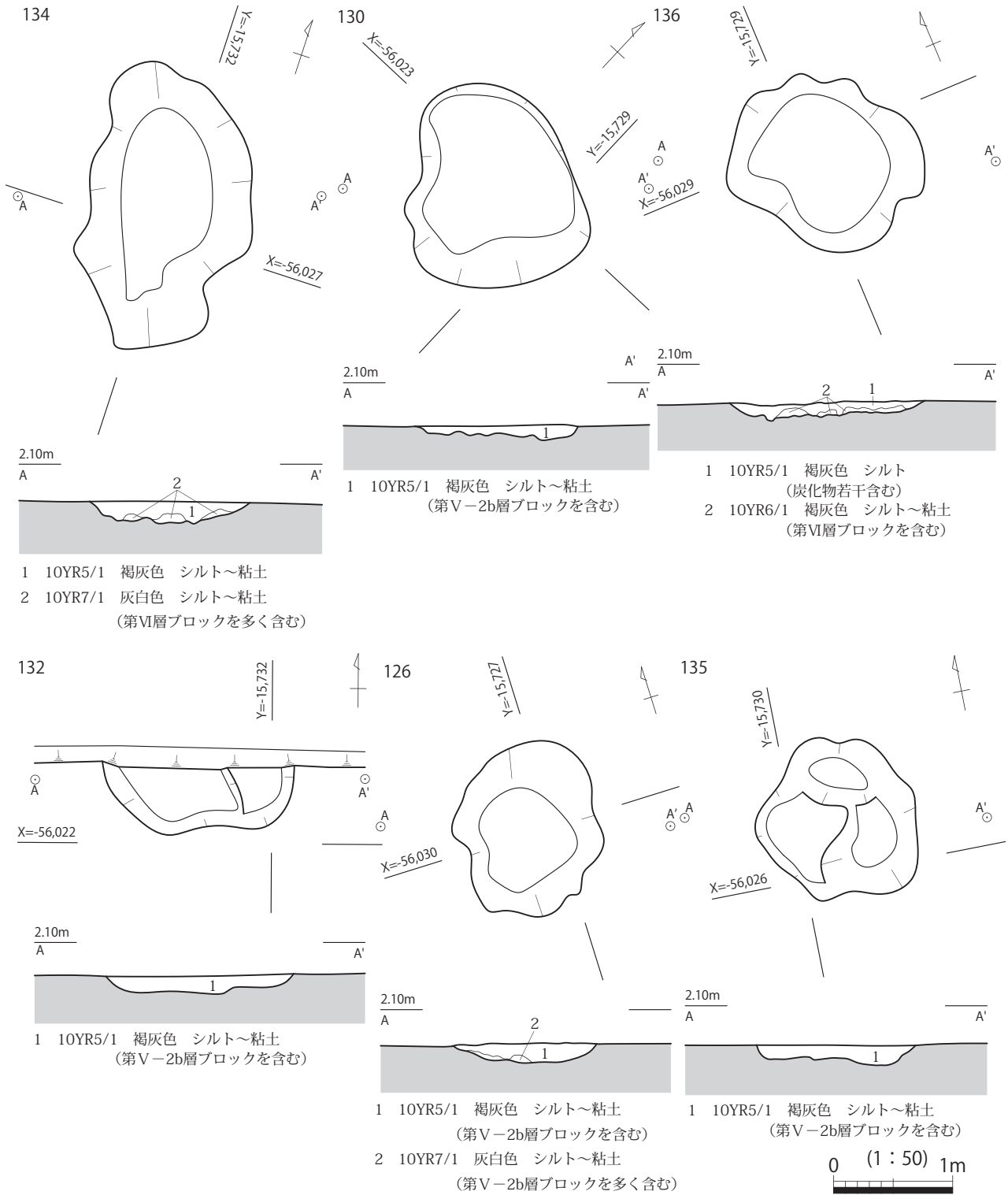


図79 2区 第3面検出遺構(3)

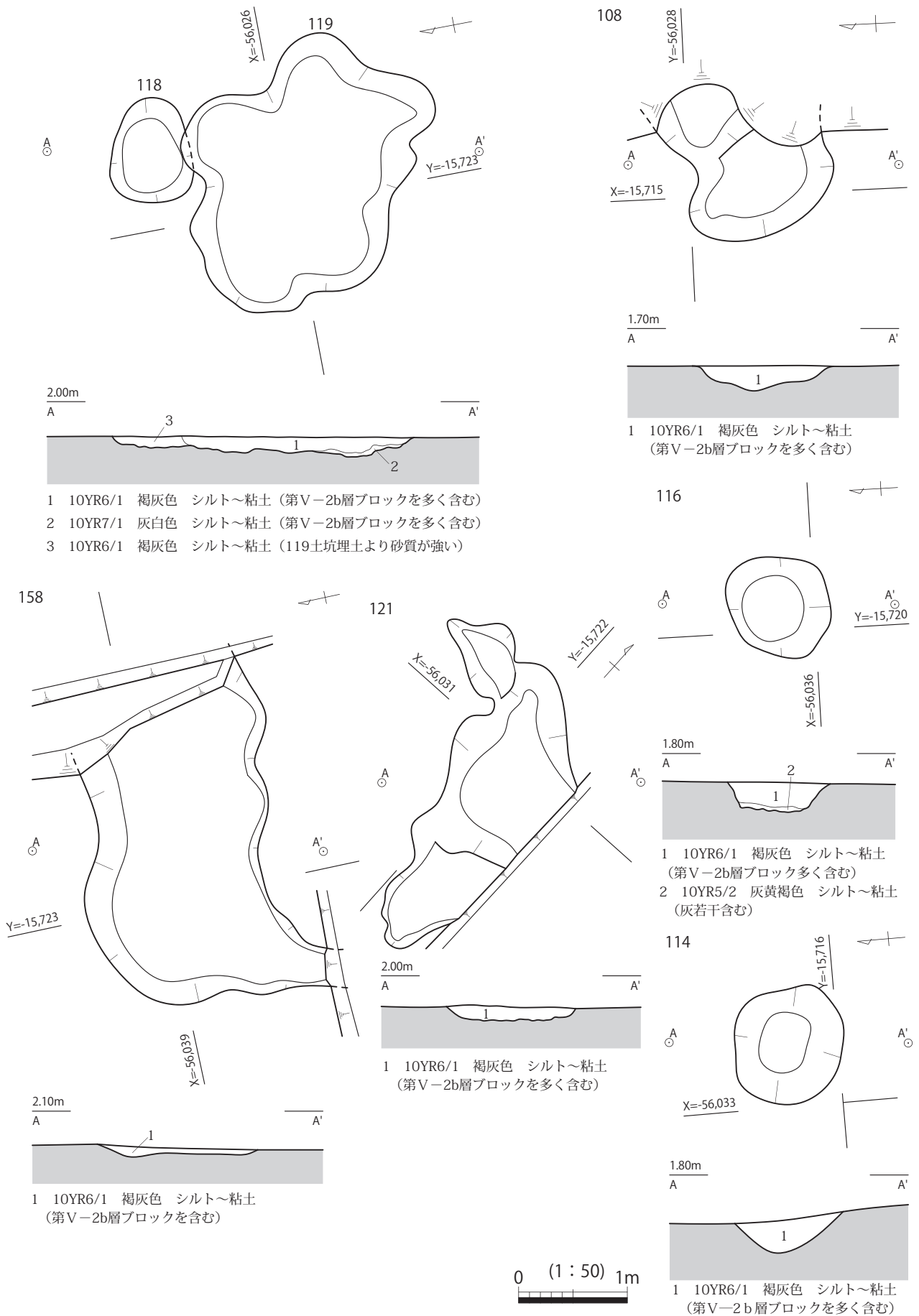


図80 2区 第3面検出遺構(4)

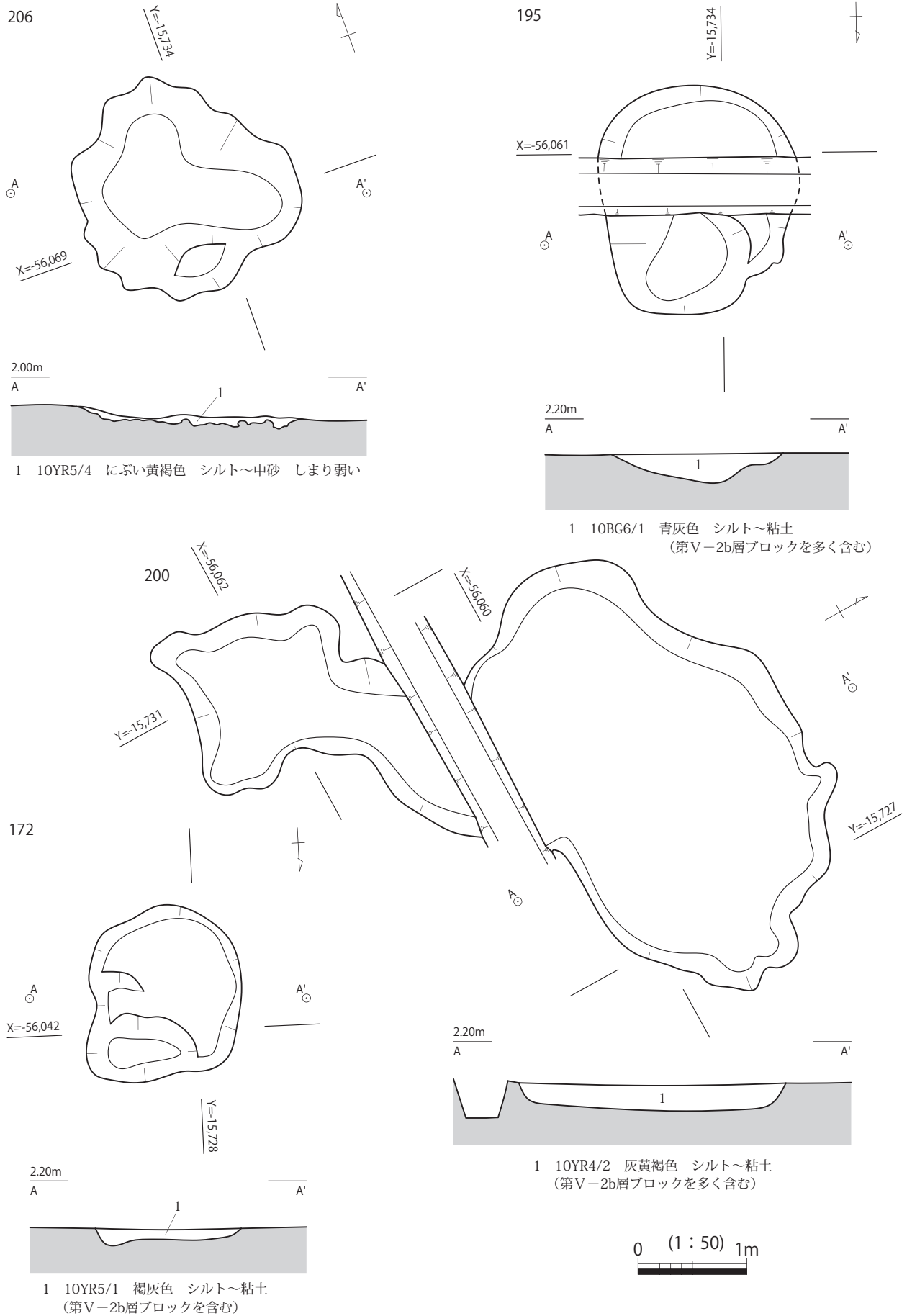


図81 2区 第3面検出遺構(5)

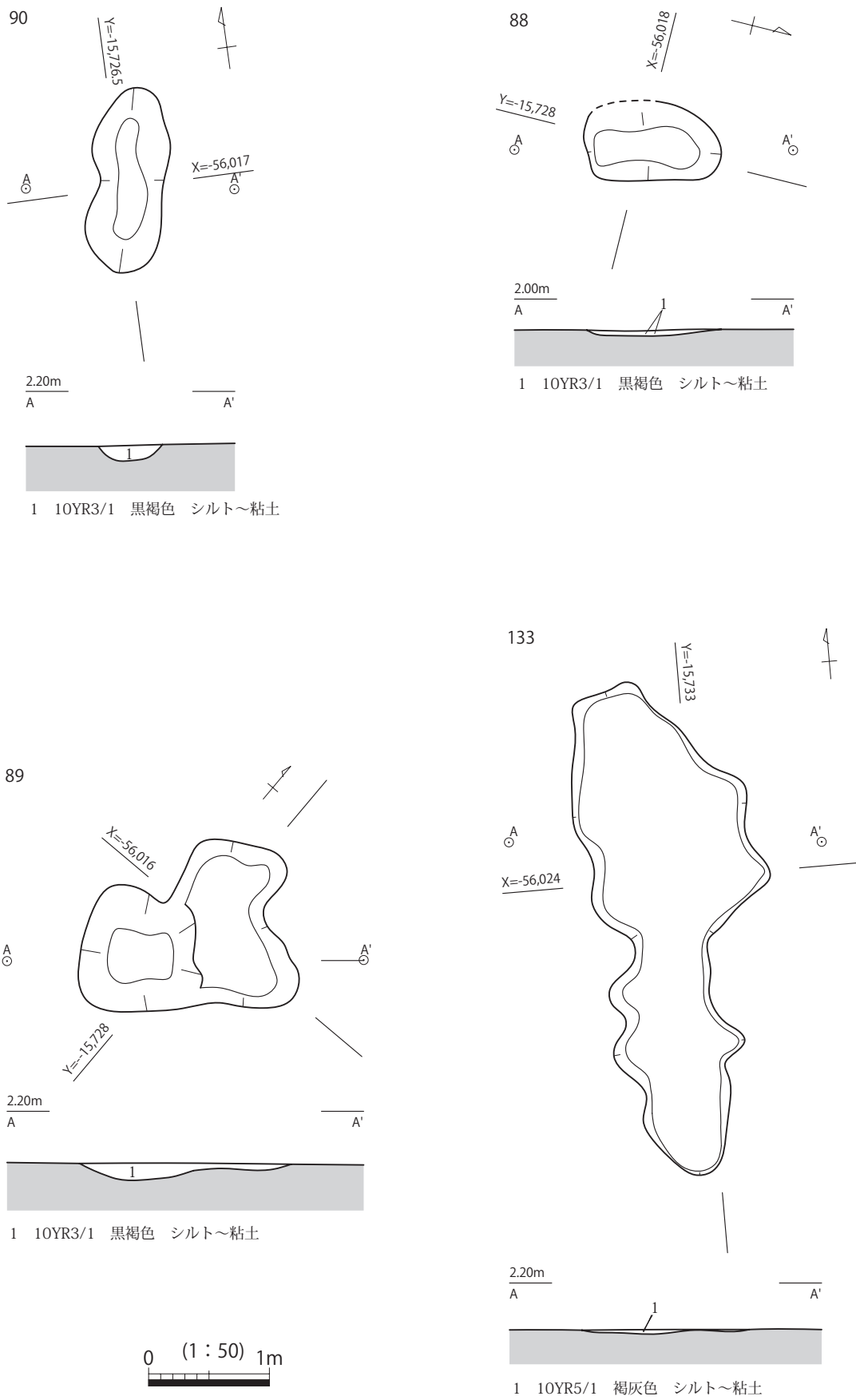


図82 2区 第3面検出遺構(6)

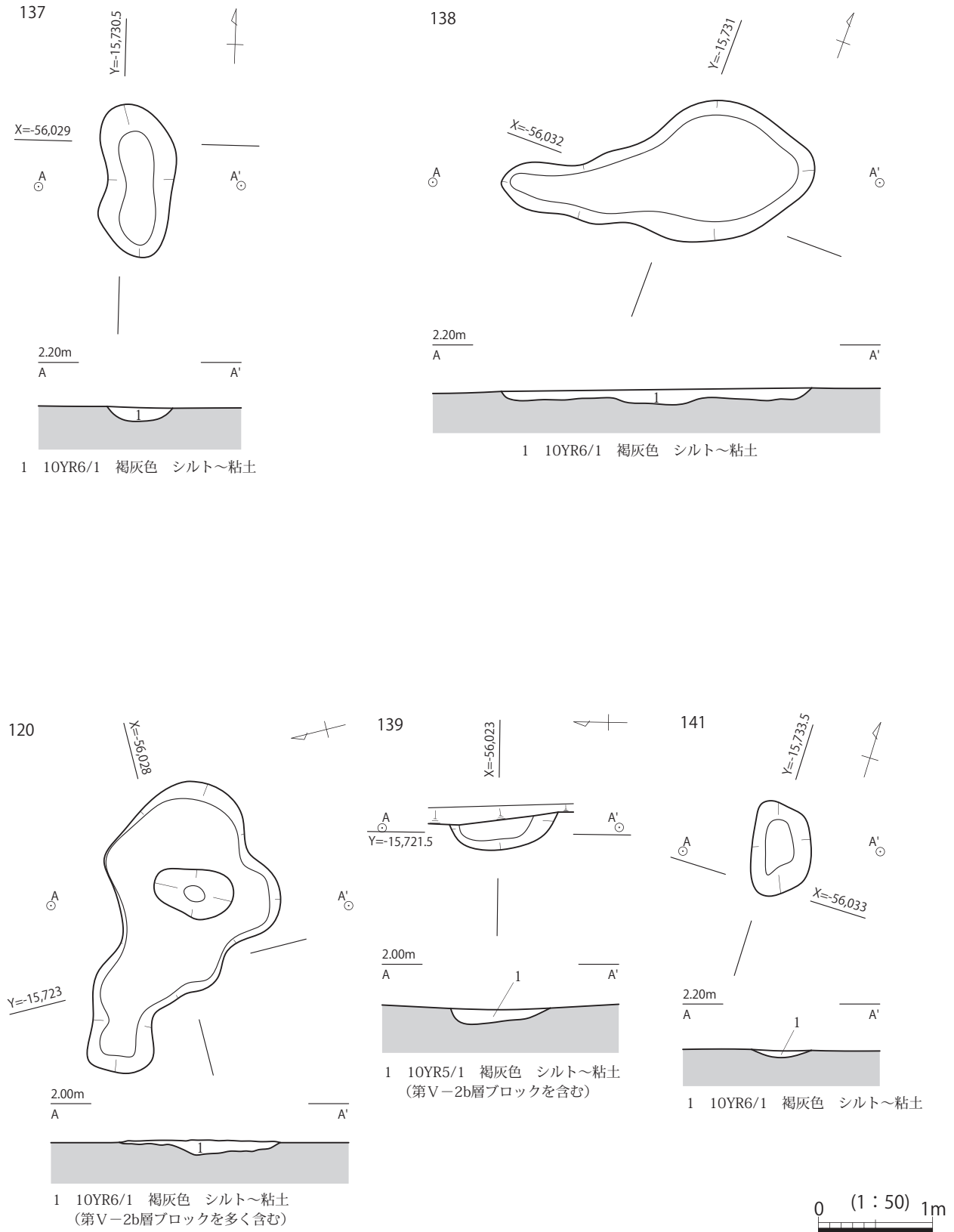


図83 2区 第3面検出遺構(7)

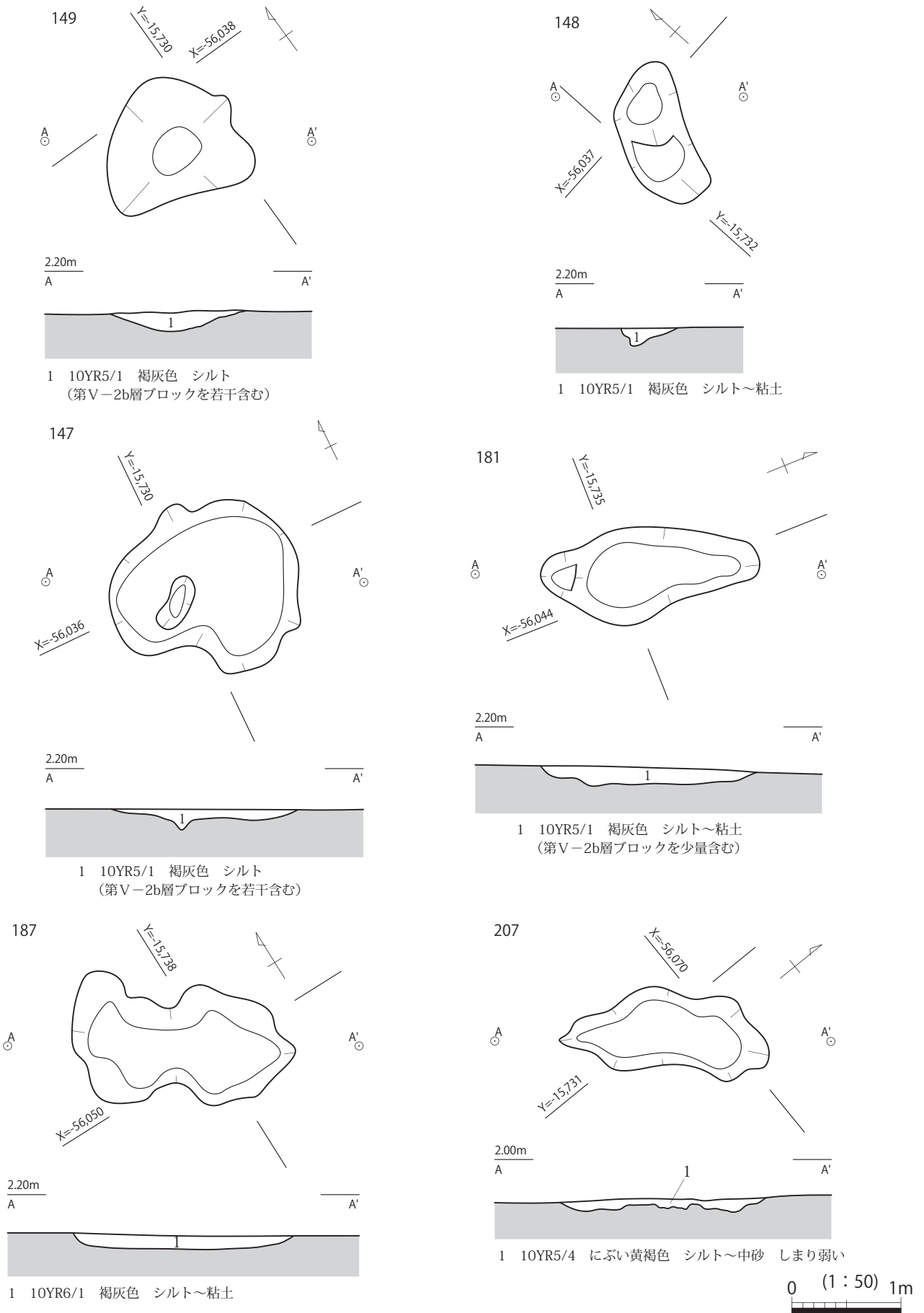


図84 2区 第3面検出遺構(8)

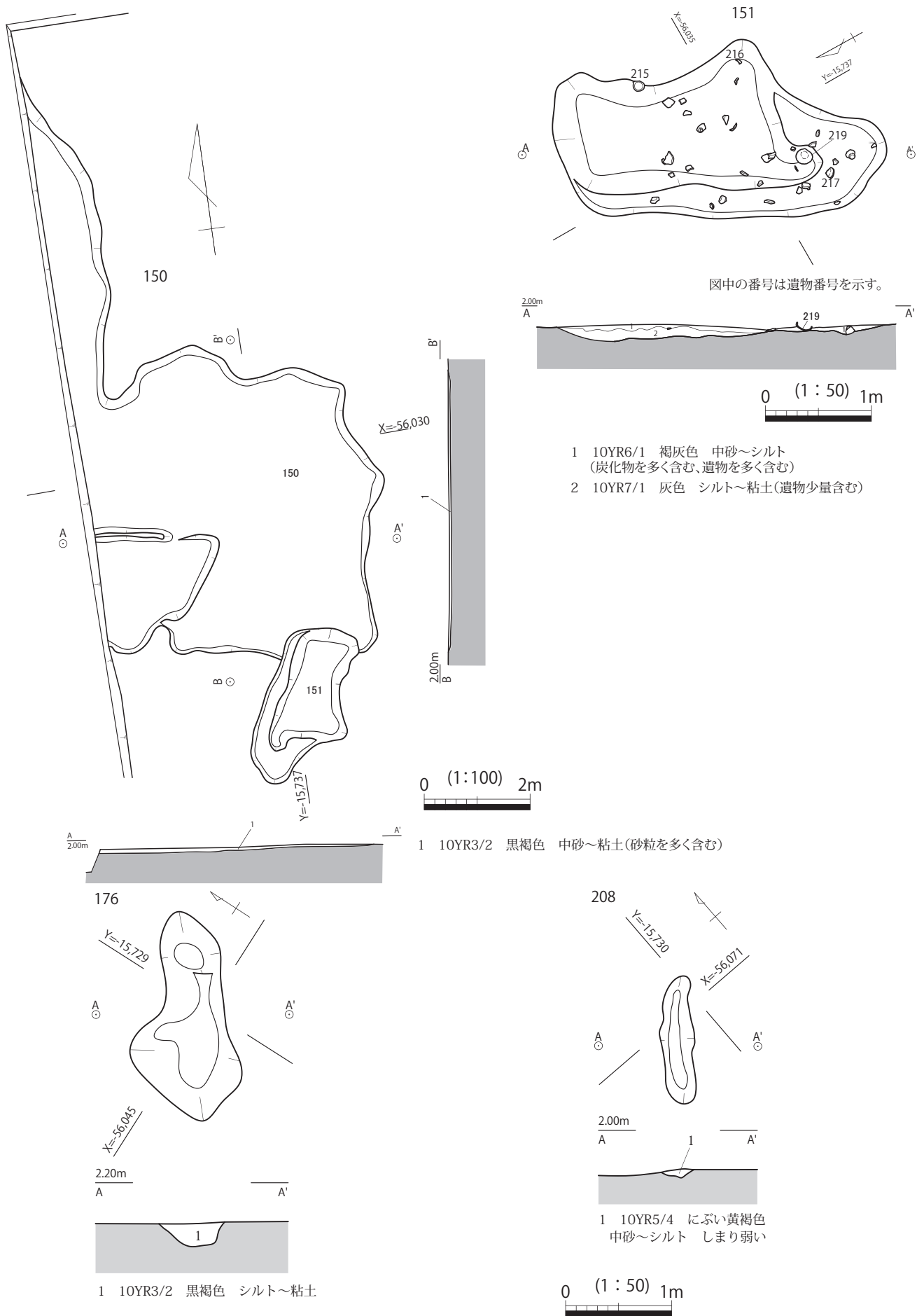


図85 2区 第3面検出遺構(9)

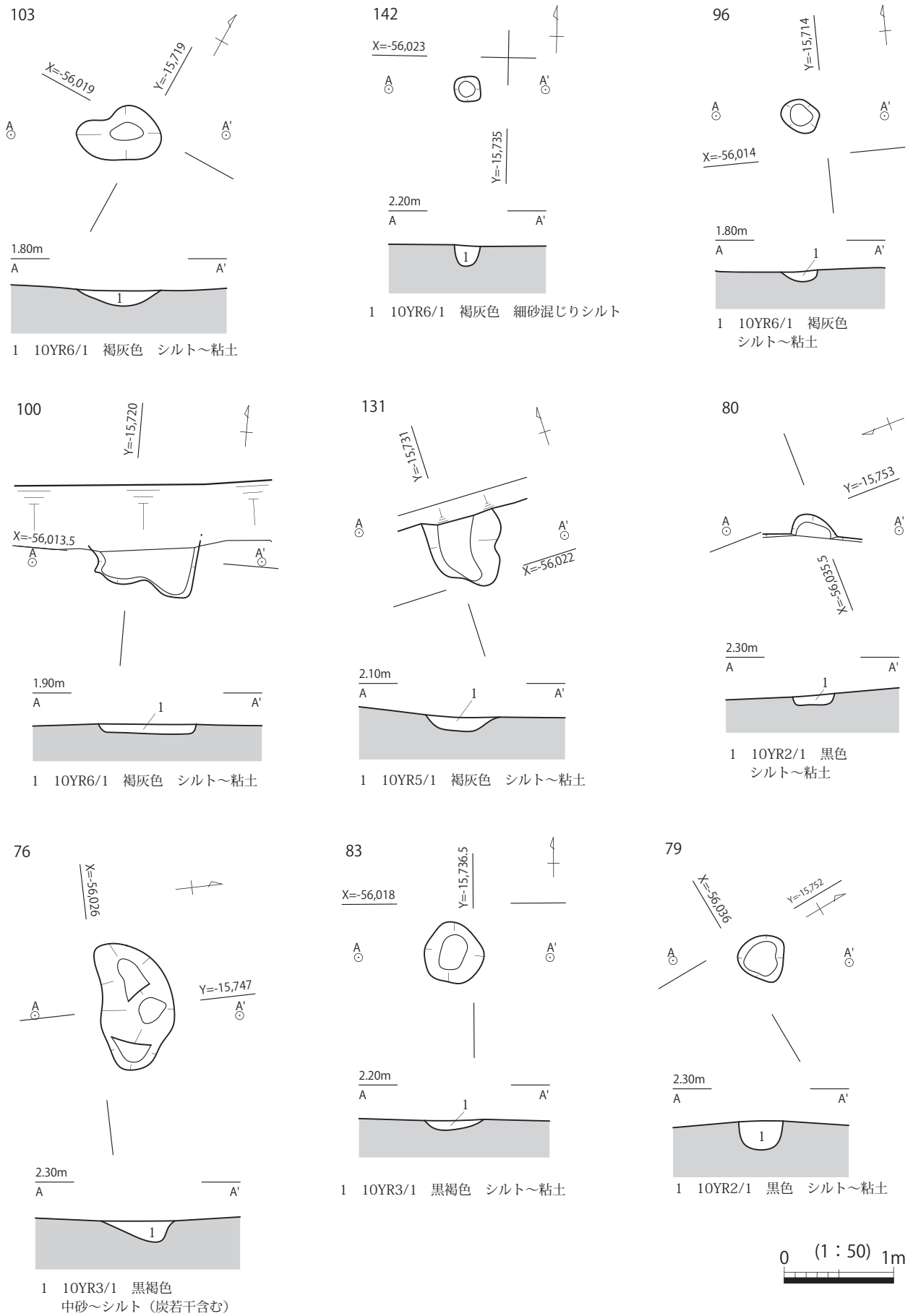


図86 2区 第3面検出遺構(10)

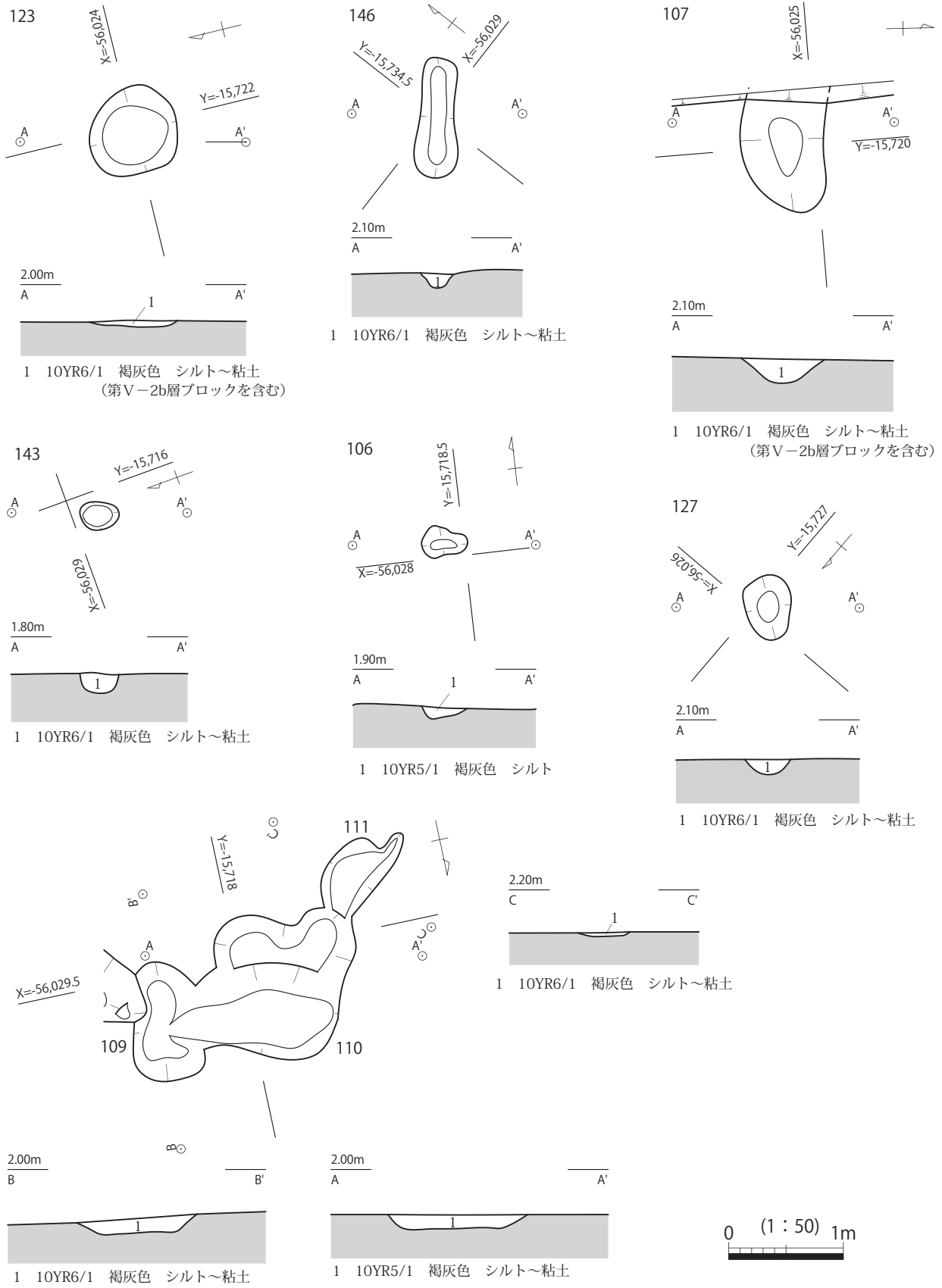


図87 2区 第3面検出遺構(11)

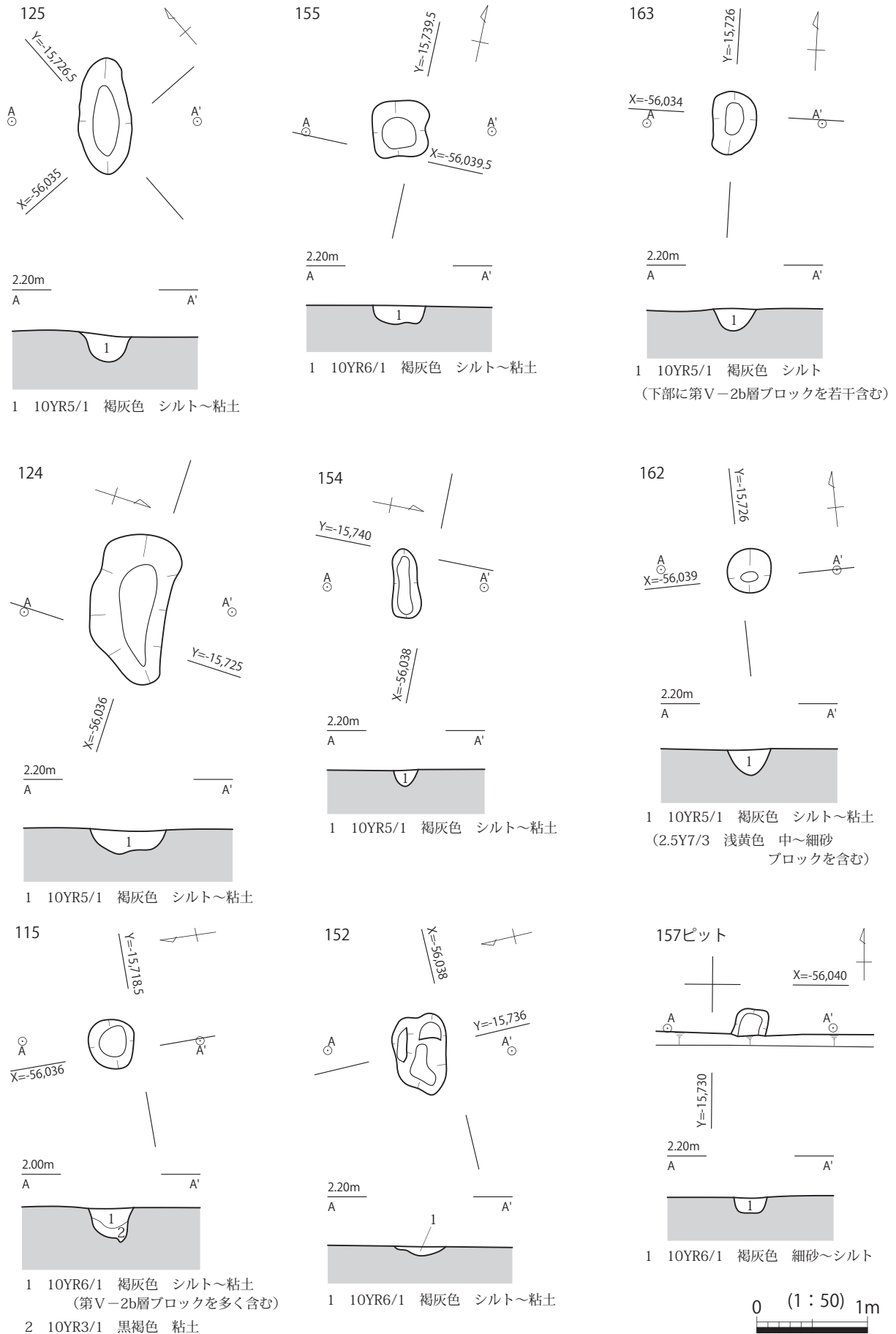


図88 2区 第3面検出遺構(12)

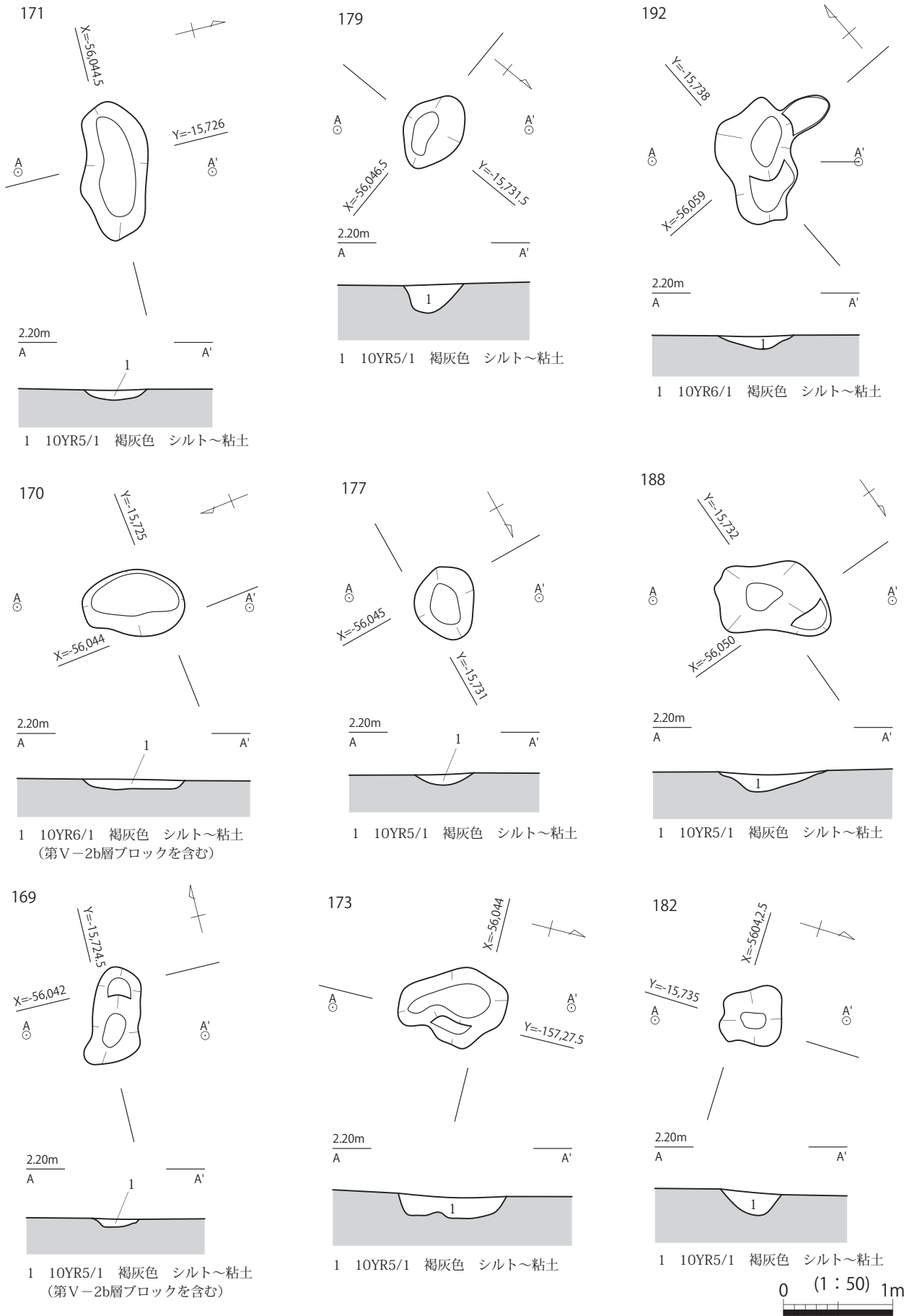


図89 2区 第3面検出遺構(13)

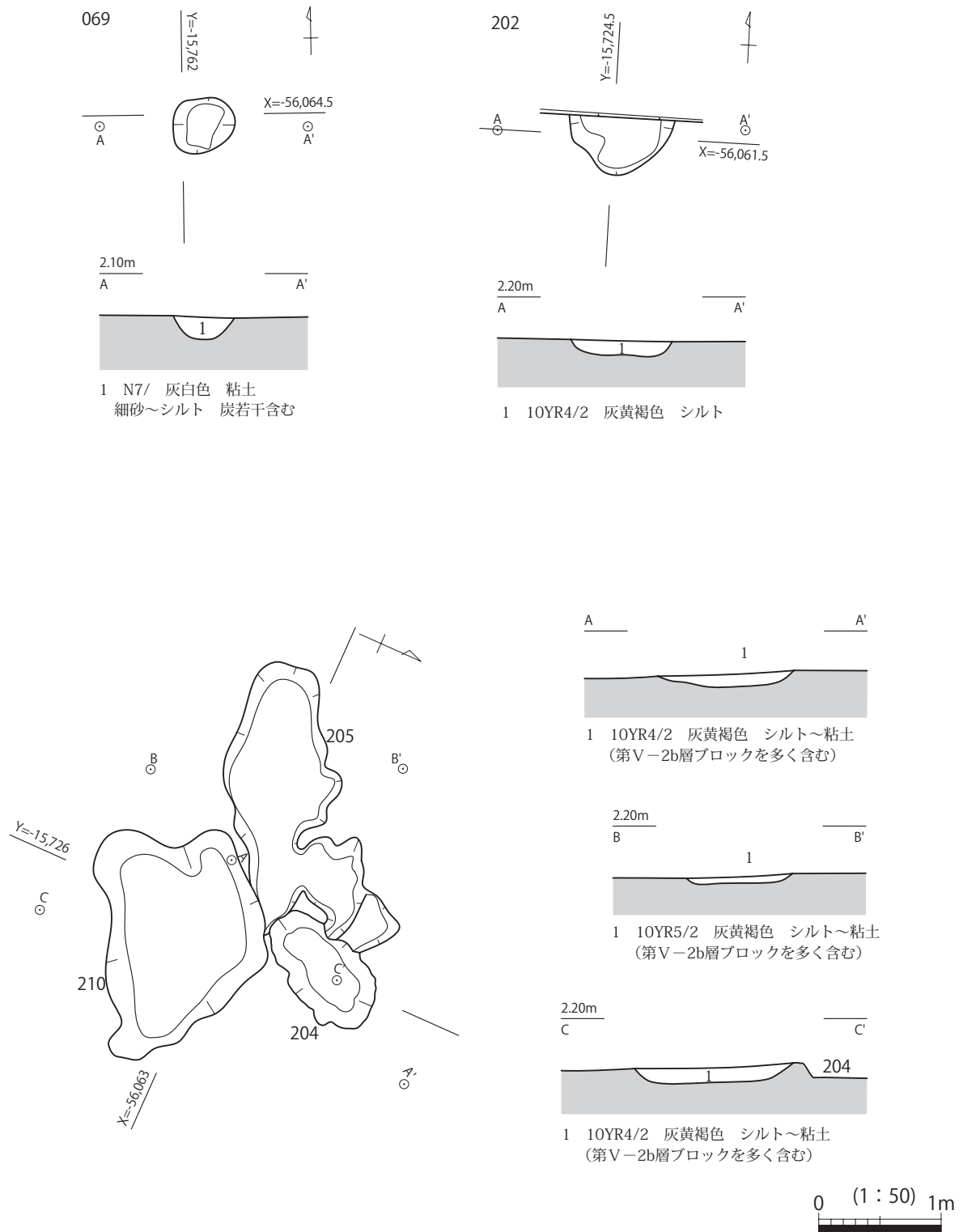


図90 2区 第3面検出遺構 (14)

112

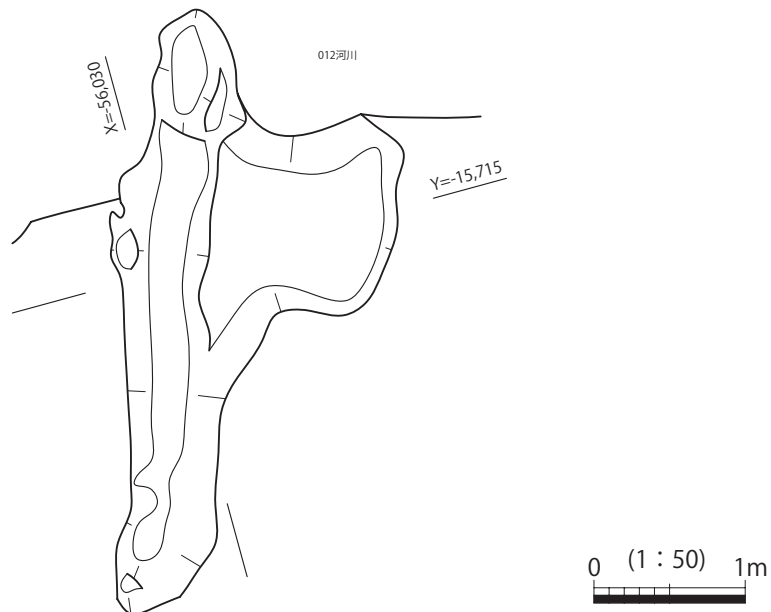
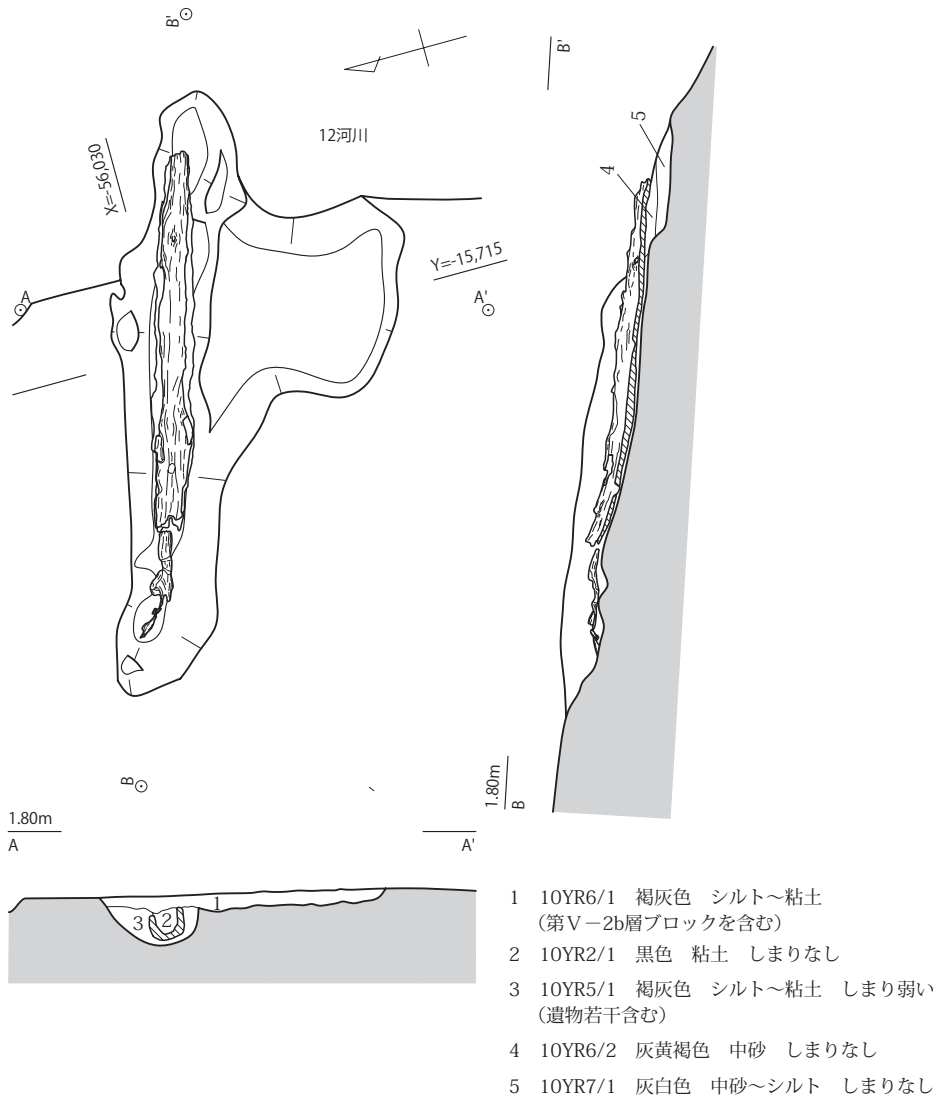


図91 2区 第3面検出遺構(15)

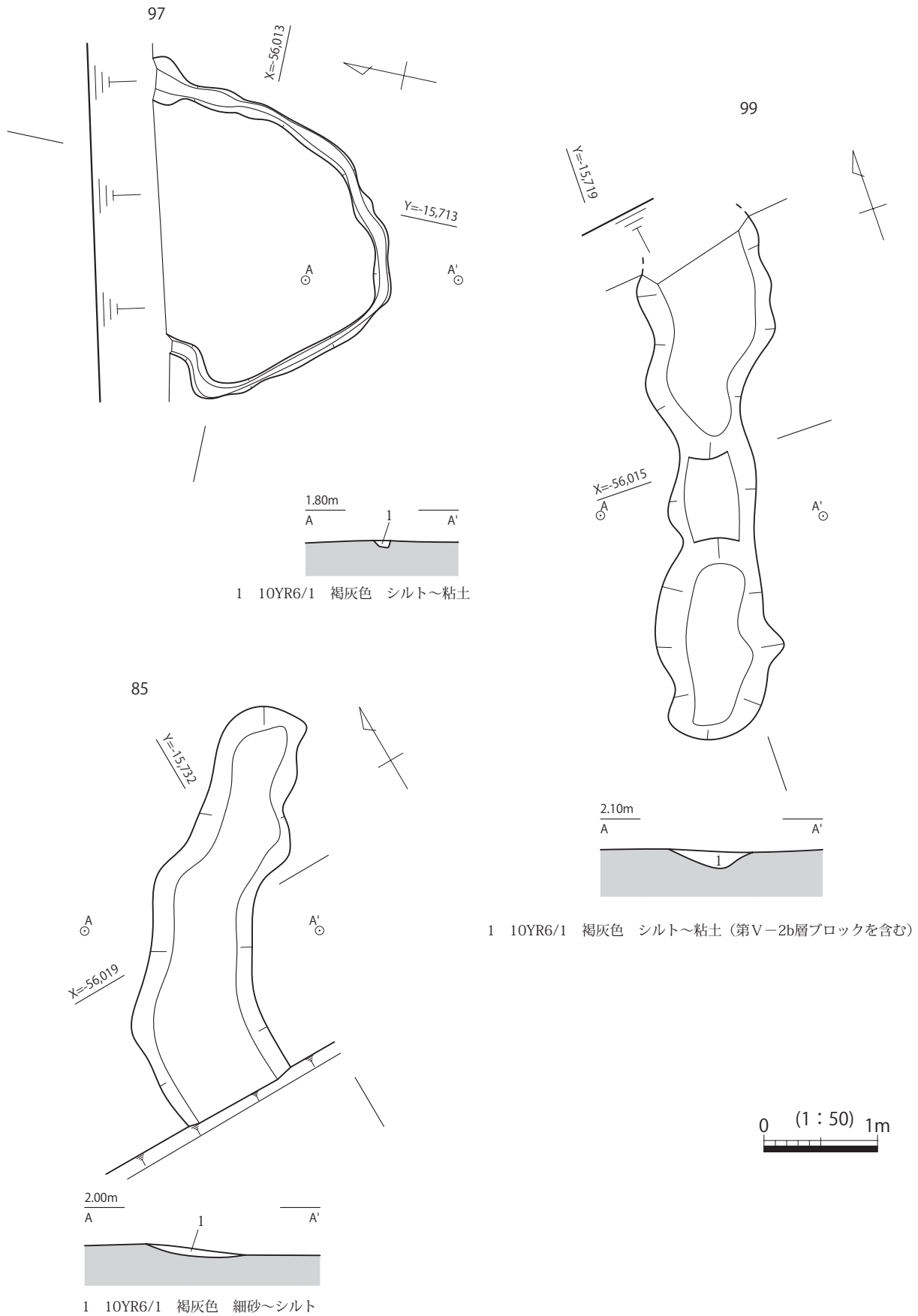


図92 2区 第3面検出遺構(16)

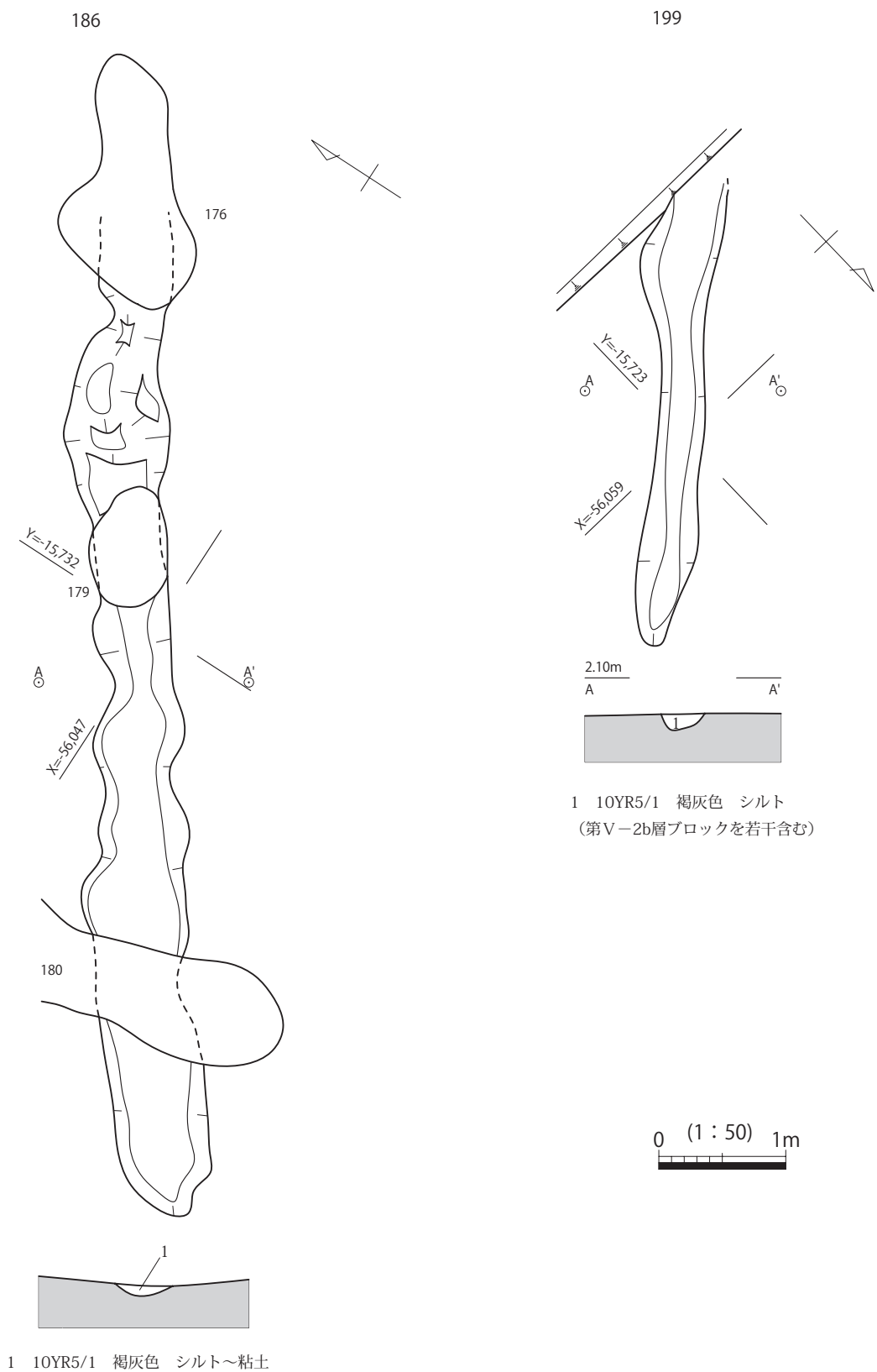


図93 2区 第3面検出遺構 (17)

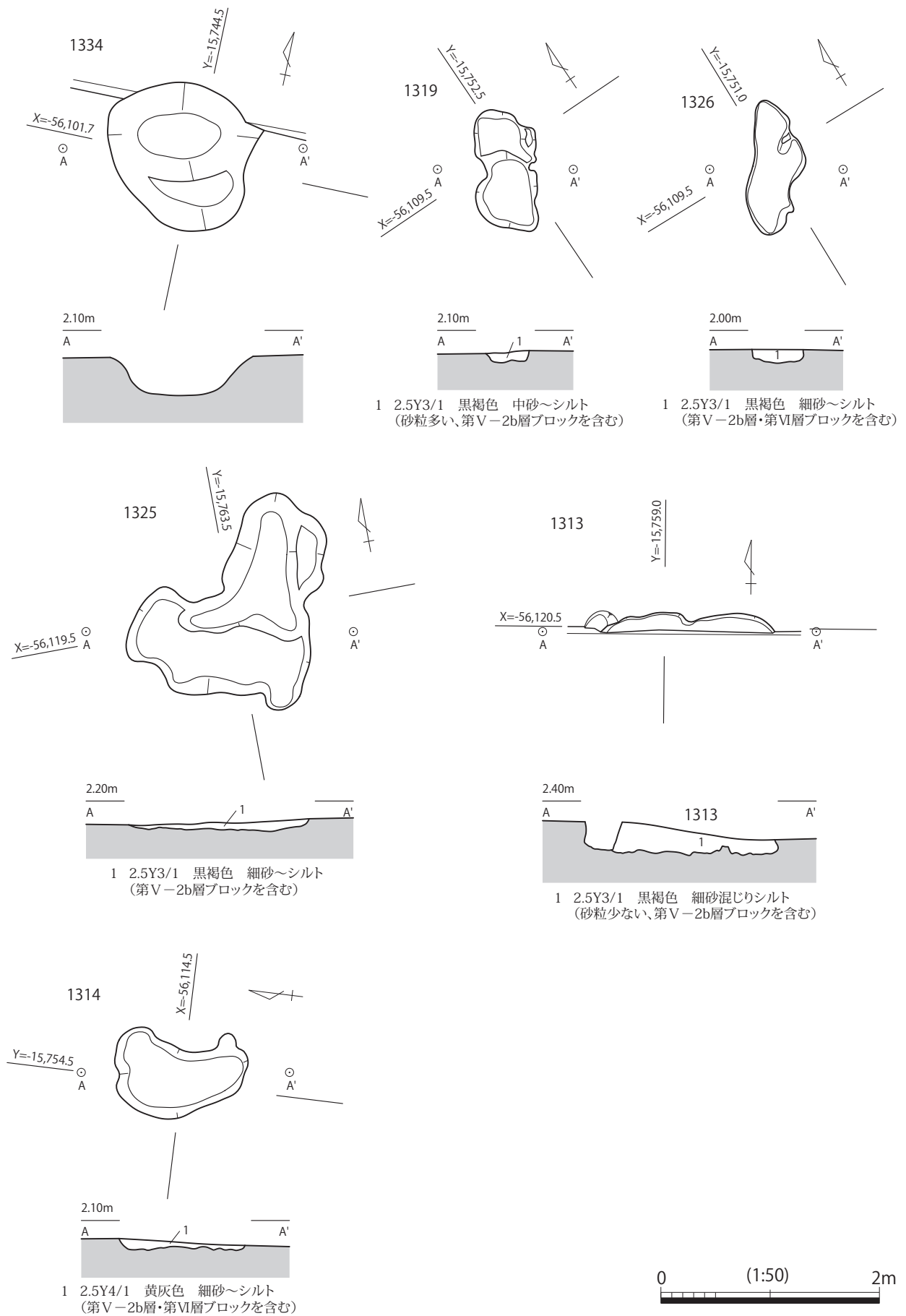


図94 3区 第3面検出遺構(1)

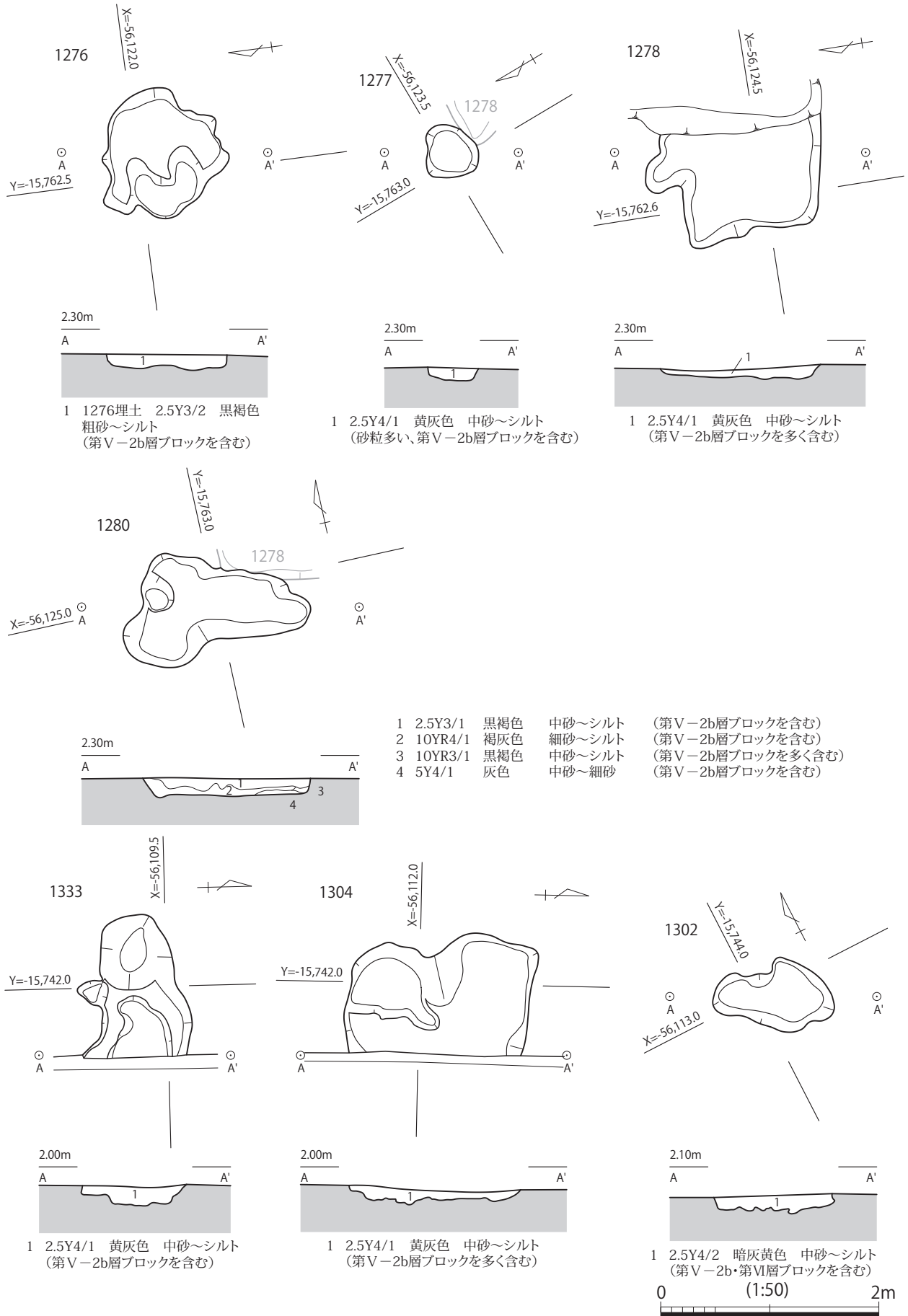


図95 3区 第3面検出遺構(2)

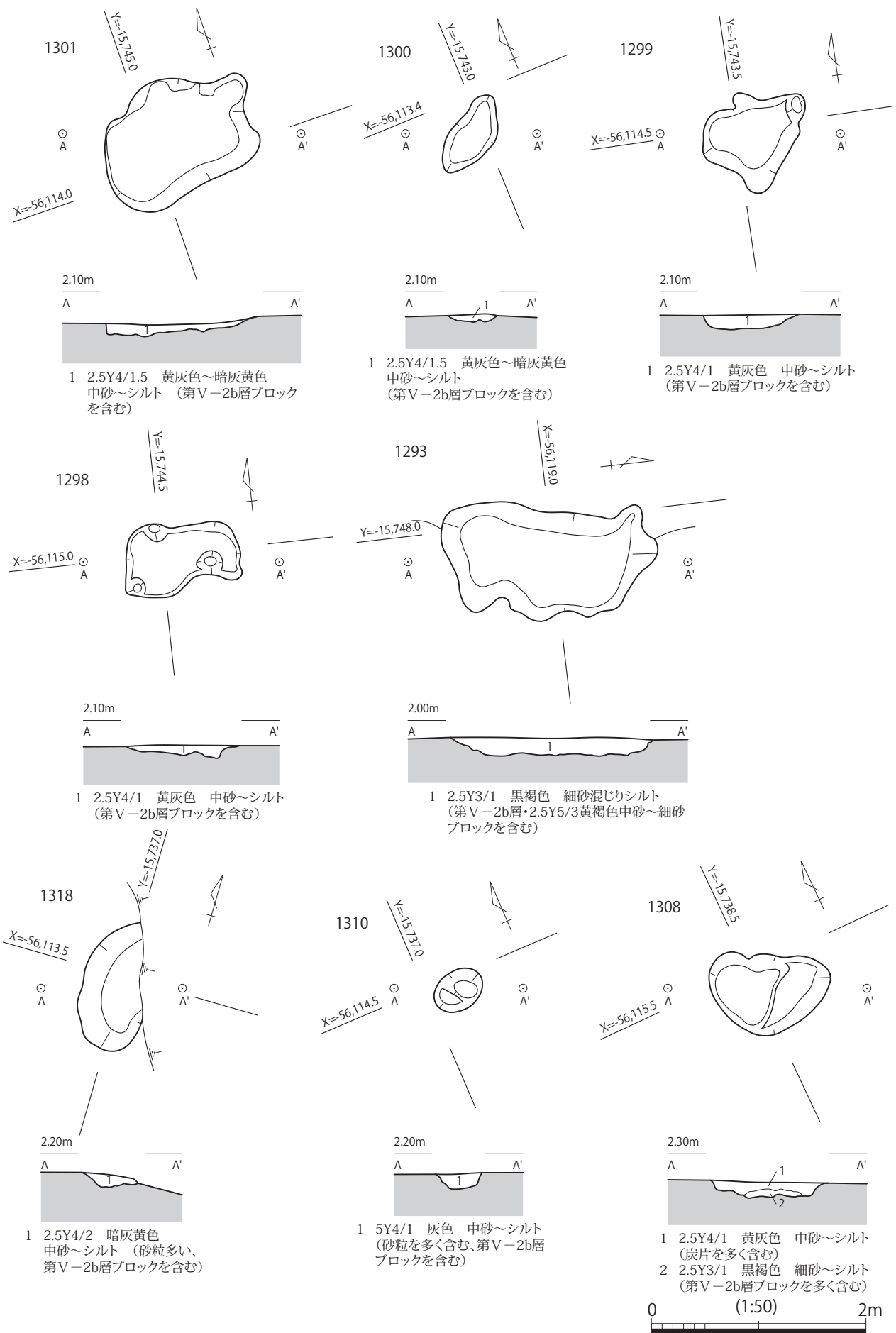


図96 3区 第3面検出遺構(3)

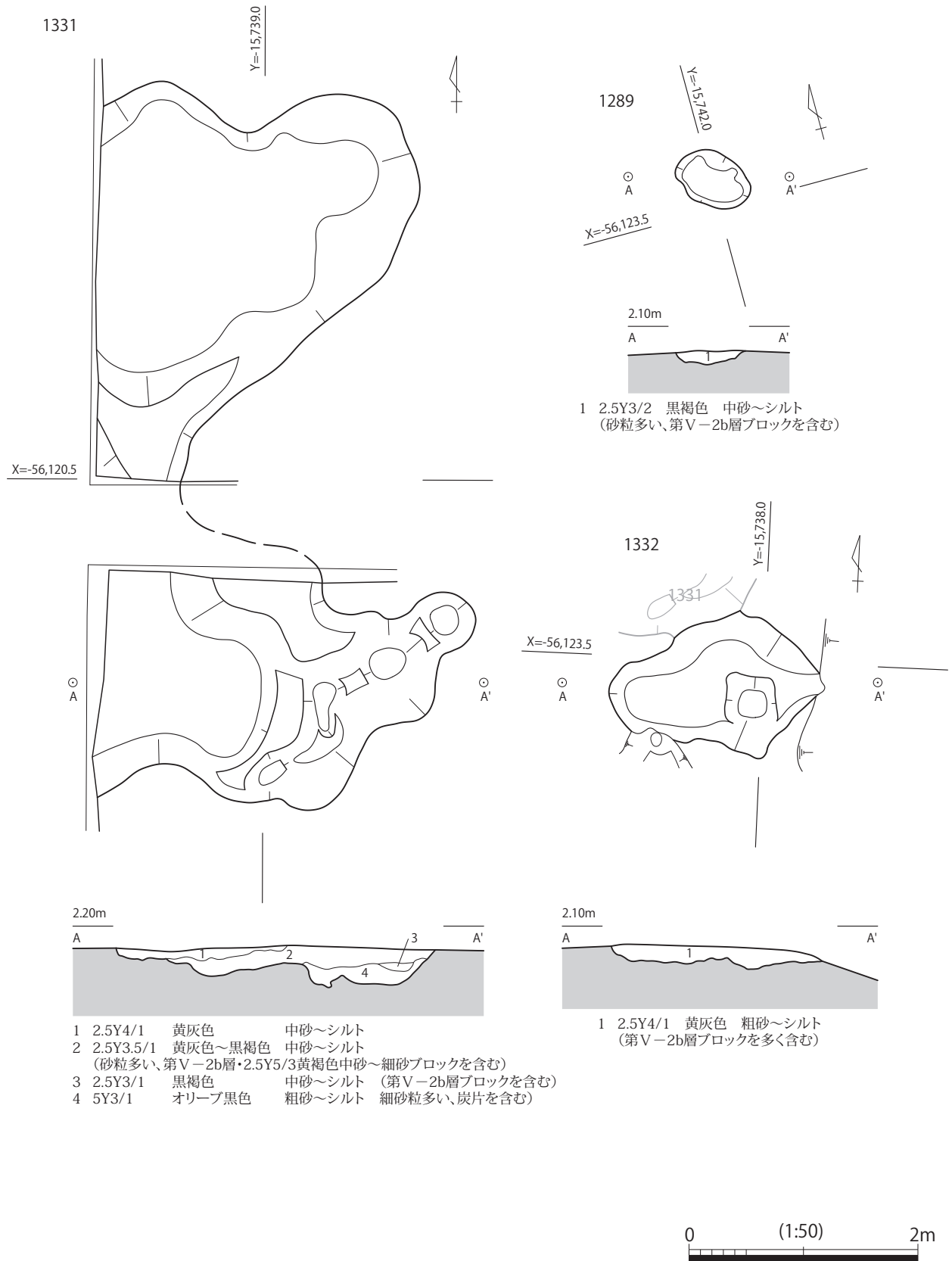


図97 3区 第3面検出遺構(4)

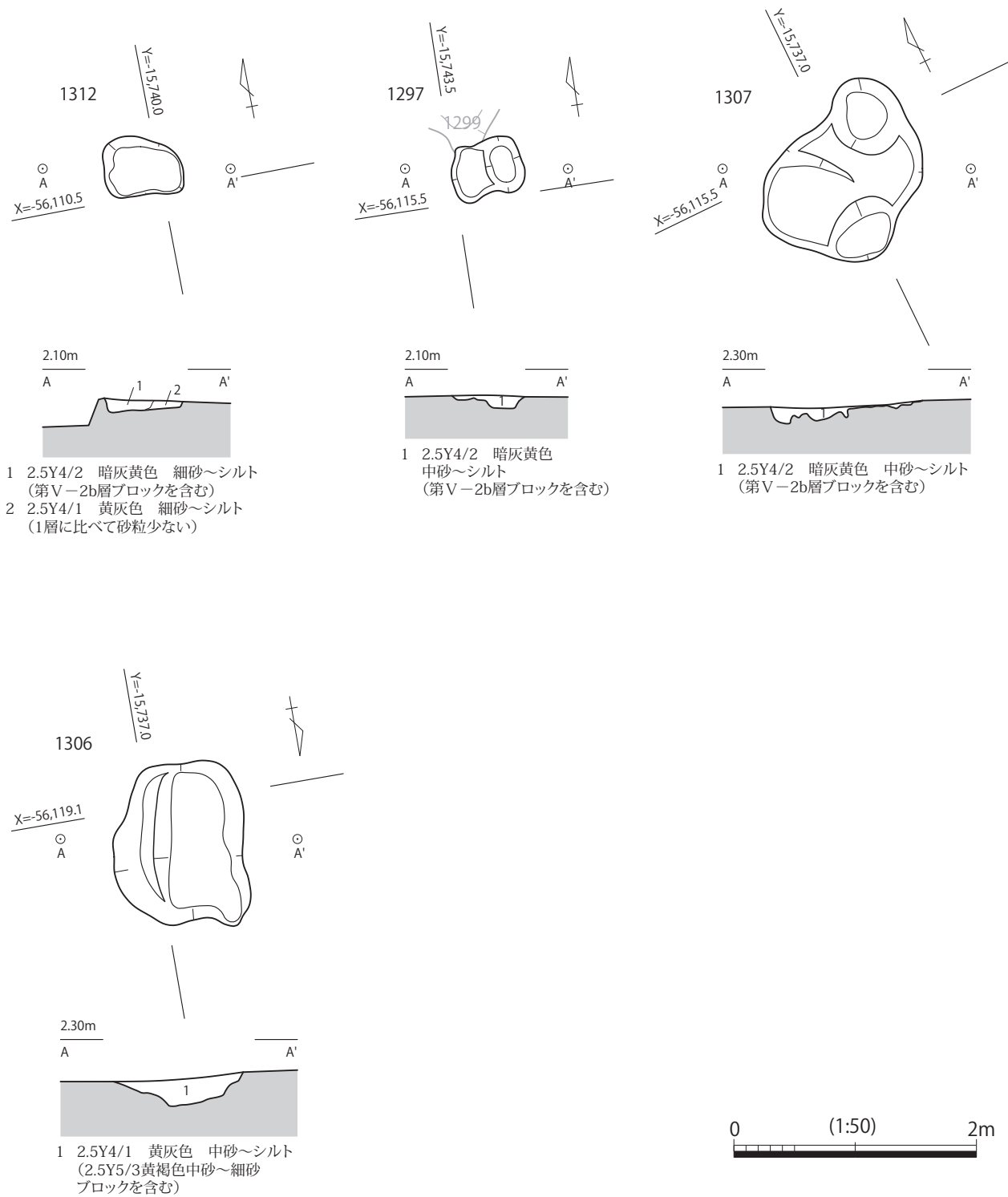


図98 3区 第3面検出遺構(5)

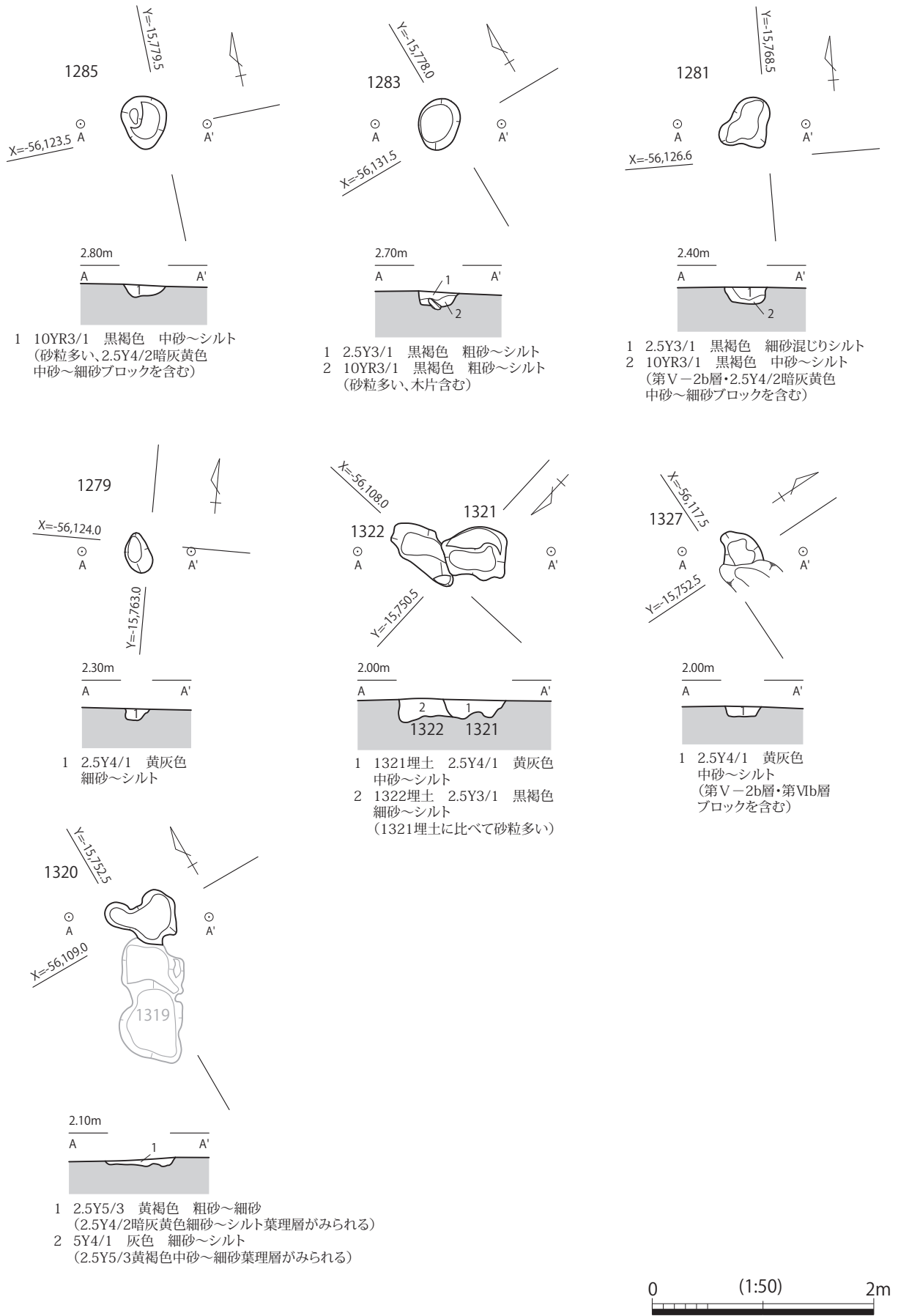


図99 3区 第3面検出遺構(6)

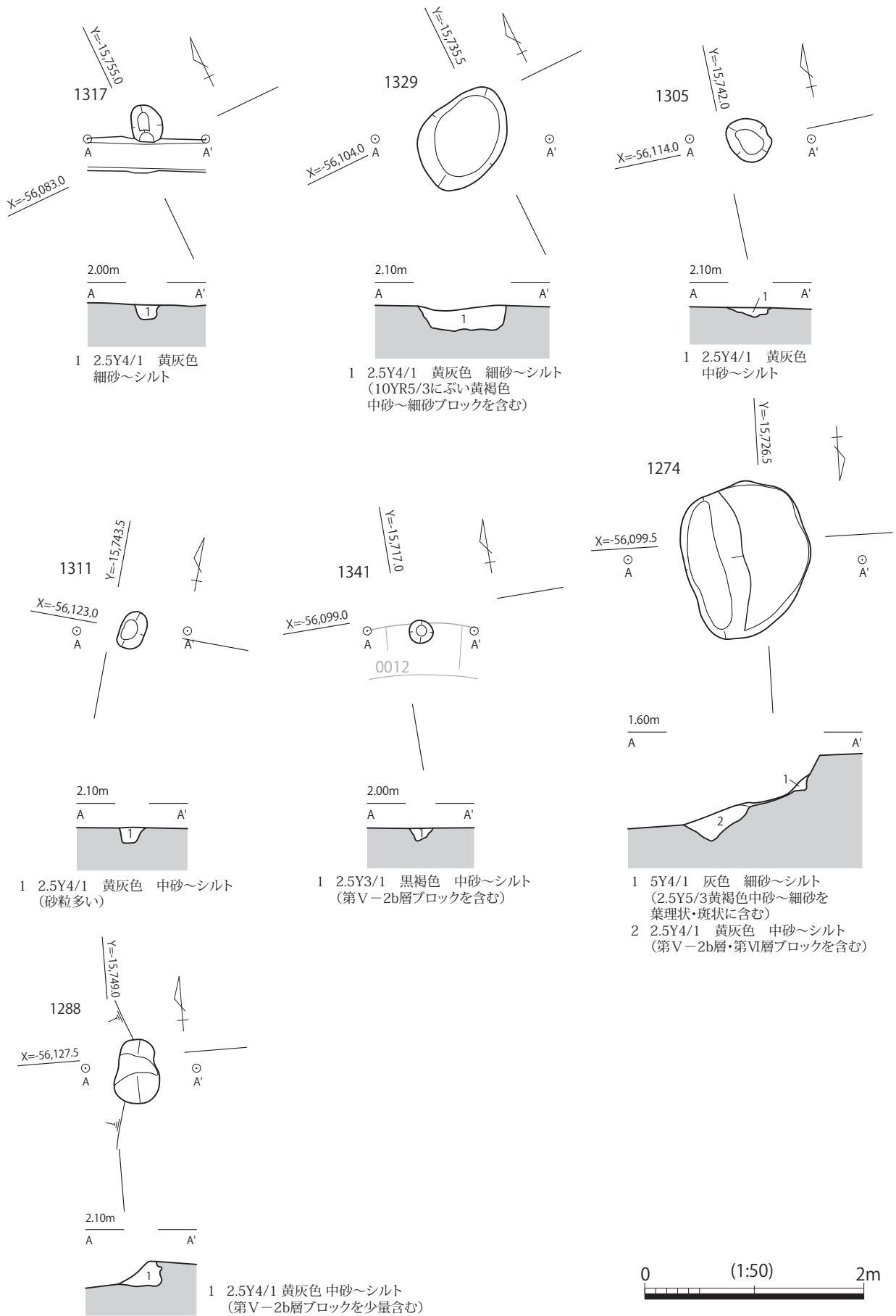


図 100 3区 第3面検出遺構 (7)

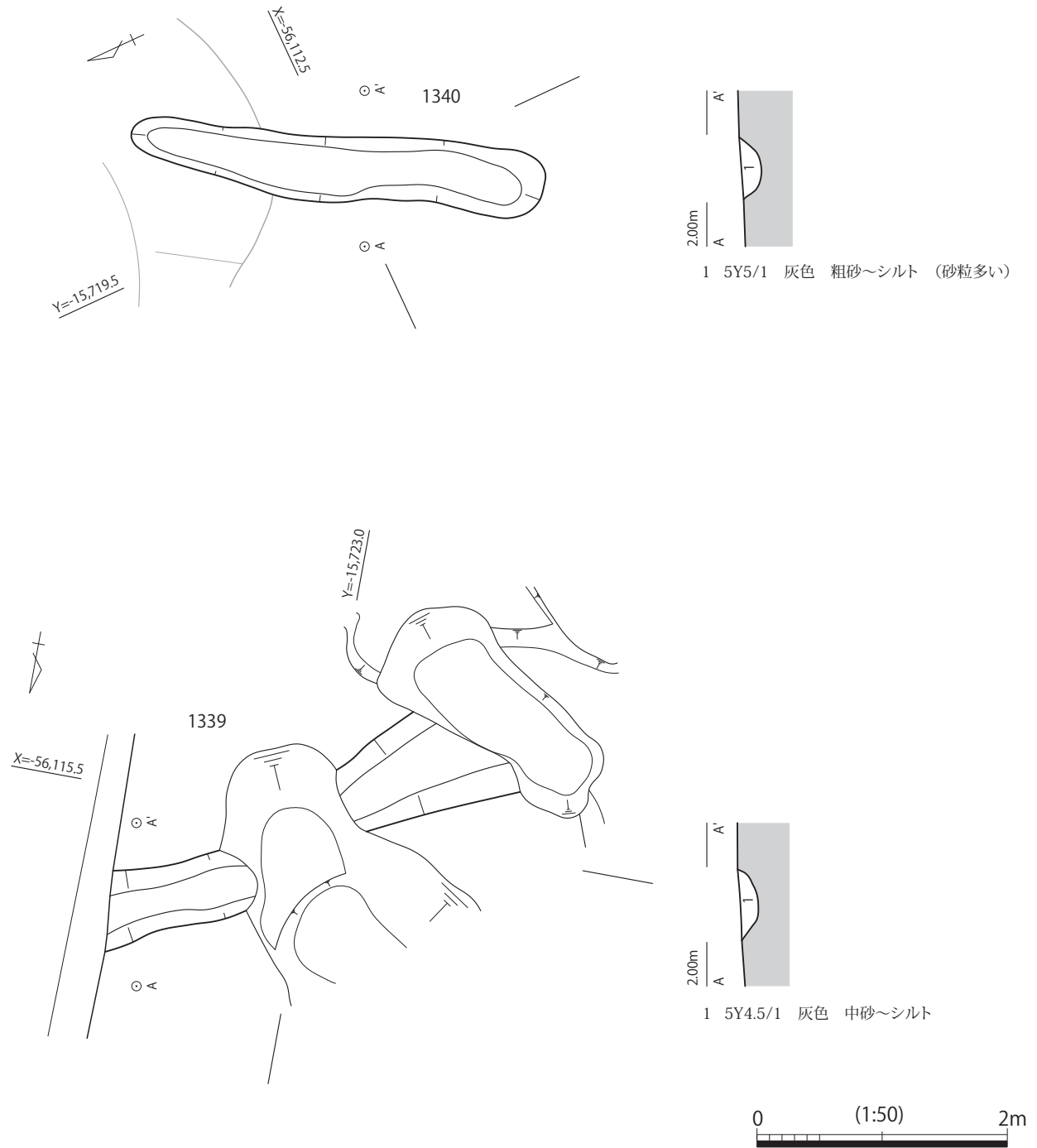


図 101 3区 第3面検出遺構 (8)

第6節 出土遺物

第1項 土器、土製品

1004 溝出土遺物（図102、図版15中）

1～3は唐津焼で、1は見込みに胎土目、3は見込みに砂目がある。286・287は龍泉窯の青磁で、286には外面にヘラ描きの草花文、287には外面にヘラ描きによる蓮弁文を施す。

2 河川出土遺物（図102、図版15下）

瓦質土器鍋、白磁、土師器坏、土師器皿を図化した。土師器坏（6）は体部が丸みを帯び、内外面とも回転ナデによる凹凸が明瞭である。土師器皿には直径10cmほどのものと、8cm以下のものがある。前者はいずれも手づくね成形で、器高が高く口縁部のヨコナデが明瞭である。後者は回転台成形と手づくね成形があり、手づくね成形が8割以上を占める。手づくねの皿の中には、瓦質土器に似た焼成で灰色を呈するもの（11）がある。

第IV層出土遺物（図102、図版16上）

第IV層は古代の遺物が大半を占めており、中世土器は全体に少ない。比較的判別が容易な中世陶磁器、土師器皿、瓦質土器の第IV区画ごとの出土点数は、2区北側の1H-3c区から4d区あたりと南西部の1H-10f区付近、3区の東側の2H-2c区付近に多い。

瓦質土器の煮炊具は鍋と羽釜があるが、鍋の方が多い。鍋は口縁が外傾するもの（17）と受け口状になるもの（18）が出土する。

土師器坏（19～22）は、いずれも回転台を使用せずにつくられたものである。

皿（23～31）は2河川出土資料と同じように大形で深いものと、小形で浅いものがあるが、ここでは後者だけを図化した。回転台成形と手づくね成形があり、細片を含めて両者の数を調べたところ、手づくねの皿が圧倒的に多く、回転台成形は手づくね成形の1/10程度であった。

32～37は古墳時代から平安時代の遺物である。高台付坏（33）は、高台の内と外で坏部底外面の高さが異なり、底部の器厚が薄くなる。こうした形状のものは数点確認したが、いずれも焼成がやや軟質である。蓋（36）は、ごく低いつまみが付いており、外面に円形の刺突がある。

38～40は土錘である。第IV層から出土した土錘には楕円球形（38）、円柱形（39）、紡錘形（40）があり、楕円球形は大形品に多い。

12 河川出土遺物

平安時代の供膳具（図103・104、巻頭図版3）

土師器坏は、体部が直線的で外傾するもの（以下外傾タイプ、54～77）と内彎するもの（以下内彎タイプ、41～51）に大別できる。53は外傾タイプになり、須恵器坏（87・89）とほぼ同型である。第IV章第4節で触れたが、河川内の出土位置をみると、内彎タイプが外傾タイプよりも上位の流芯堆積から出土する傾向がある。また、1249 構造物構築前の破堤堆積内から出土したものが外傾タイプ（57、58）であるのに対し、1249 構造物埋没後の河川堆積層から出土したものは内彎タイプ（45）であることから、両者は前後関係を想定できる。法量でみると口径が14cm前後と12cm前後、11cm前後の3つに分かれ、同一口径ならば内湾タイプの方が外傾タイプより器高が低くなる。こう

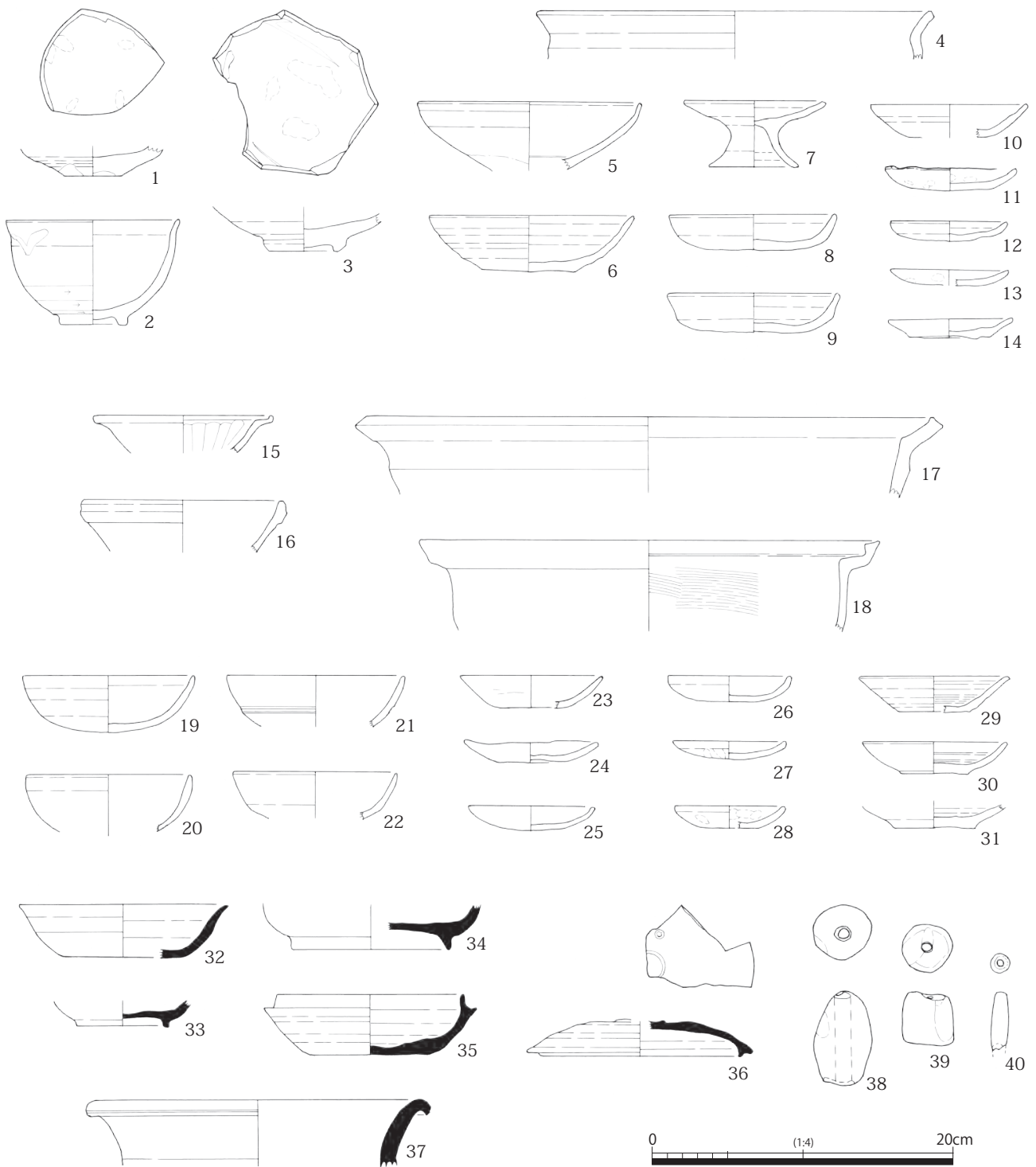


図 102 1004 溝・2 河川・第IV層出土遺物

した変化は中森の土師器坏の変遷試案と合致する。

また外傾タイプには、体部に比べて底部外面に強い回転ナデを施すもの（54～60）と全体に一律なナデ調整を施すもの（61～77）とがある。底部外面を強くなでるものは河川北側に集中するが、出土した高さは一律にナデ調整するものと同一標高から出土しており、これらが時期差となり得るかは現状では不明である。

高台付坏は1点のみ（75）で、体部が外傾する坏に高い高台が付く。

土師器坏を観察すると、接合した粘土が剥離したと思われるもの（59・76）や、破面に粘土接合

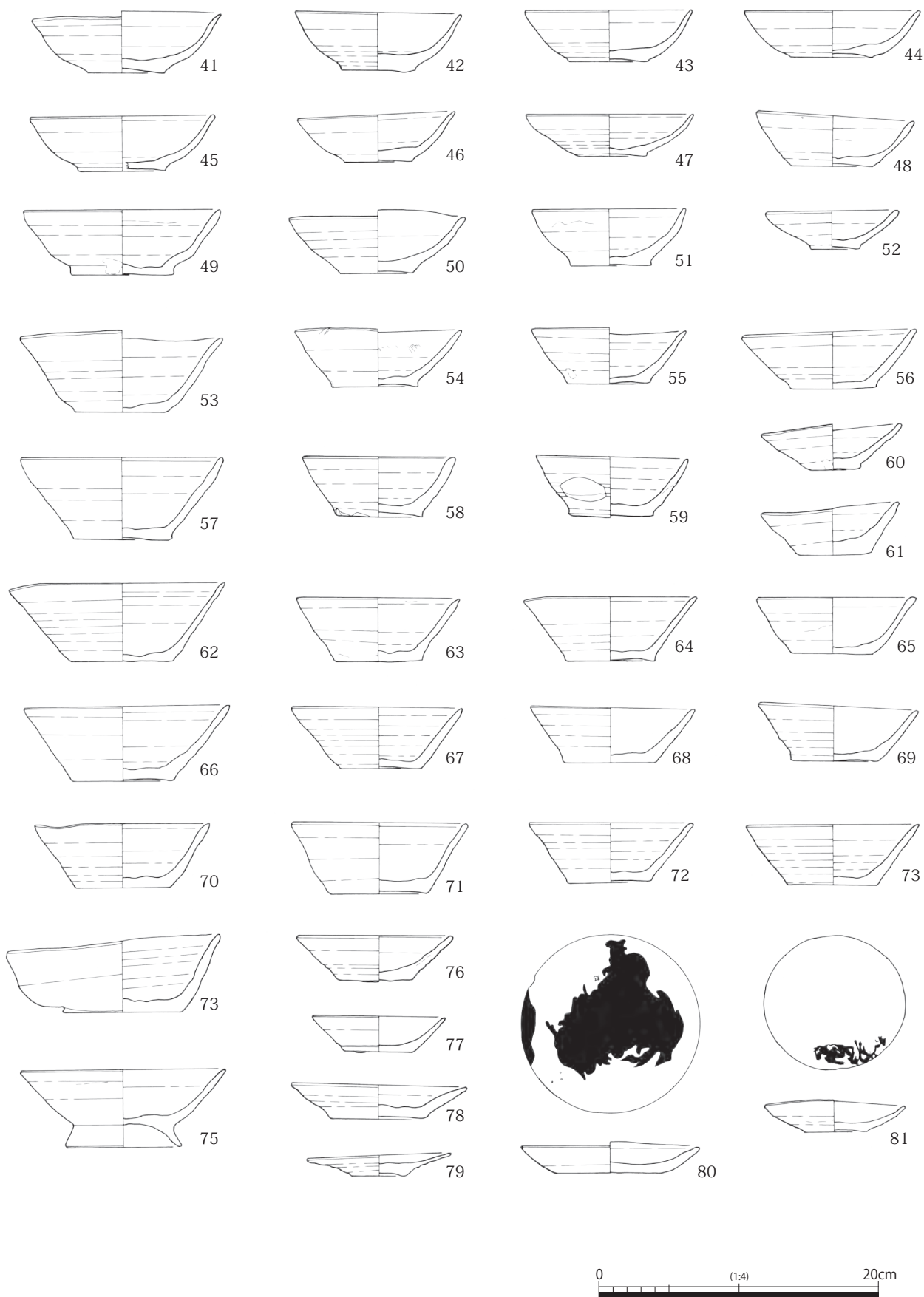


図 103 12 河川出土遺物 (1)

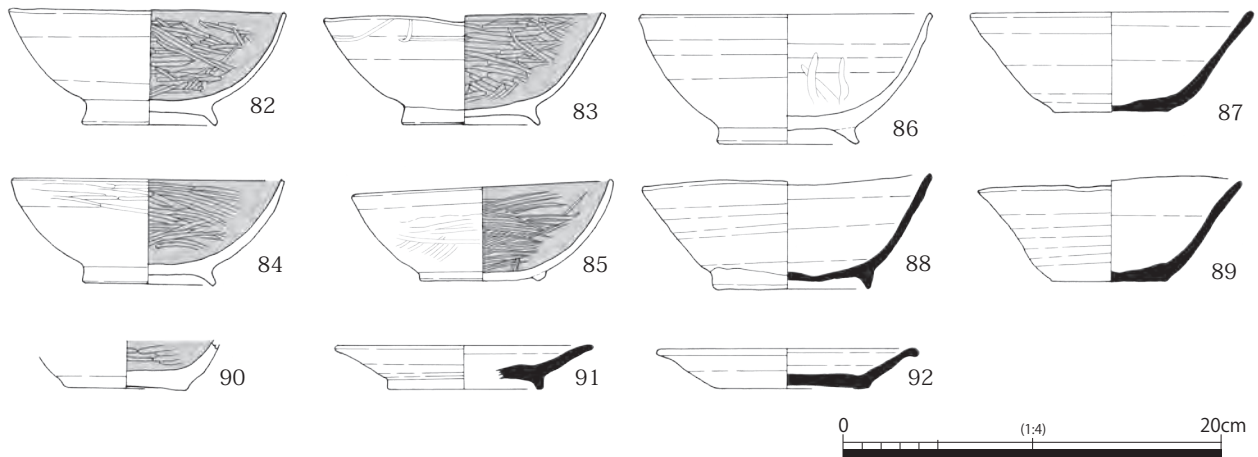


図 104 12 河川出土遺物 (2)

が不十分だったためにできたと思われる隙間があるもの (75)、また、粘土接合の痕跡が器面に残るもの (49 など) を確認した (図版 22 上)。

鳥取市岩吉遺跡出土の回転台成形の土師器皿には、粘土接合痕が残ると報告がある^{註1}。今後既存資料の観察などが必要となるが、これらの土器は粘土塊から水引き成形したのではなく、粘土紐を積み上げ、回転力を用いて成形した可能性が高いと考える。

土師器皿は、底部外面を強くなでて体部が丸みを帯びるもの (81) と、底部が丸みを帯び体部が直線的に外傾するもの (80) が出土した。いずれも内面に煤が付着する。

黒色土器はいずれも内面のみに炭素吸着させるもので、碗 4 点 (82 ~ 85) と坏と思われる底部 1 点 (90) を図化し、この他に小片が数点出土した。

82 ~ 84 と 85 は成形、調整方法が異なる。82 ~ 84 は回転台成形で、体部に比べて厚手の底部に高めの高台を貼り付ける。体部内外面と底部内面はミガキを施すが、内面のミガキは原体幅が太い。一方、85 は外面底部に糸切り痕がなく、底部や体部外面に指頭痕が残ることから、回転台を用いずに成形したようだ。器厚は薄く、体部と底部でほとんど差がなく、高台はかなり低い。外面にはケズリの痕跡が残り、内外面ともミガキを行うが、特に内面のミガキは細く鋭い。

85 のような成形技法は、専ら回転台を使用するこの地域の技法とは全く異なる。また胎土の色調や混和物の様子も他とは異なる。非在地系の技術で作られたものと考えられ、このような諸特徴を備える摂津北部からの搬入品の可能性が高く、10 世紀後半ごろのものともみられる (橘田正徳氏ご教示)。

こうした技法の黒色土器碗は、鳥取市山ヶ鼻遺跡^{註2} や岩吉遺跡^{註3} の出土品にもみることができる。しかし実見した限り、高住平田遺跡出土土器に比べやや厚みがあり、外面のやや赤みがかった焼成は似ているものの、肉眼で見る限り胎土は在地のものに近いように思う。あくまで 85 との比較なので、山ヶ鼻遺跡や岩吉遺跡出土品が搬入品かどうかを特定できない。ただ、少なくともこれらの土器が非在地の技法を用いて作られたことは間違いなく、因幡地域と摂津地域を含む他地域との交流を示すものとみてよいだろう。

一方、82 ~ 84 のような回転台使用の黒色土器碗は在地産と考えてよく、同形態で黒色処理を施さない土師器碗 (86) が出土している。

須恵器坏は高台が付く 88 と平底の 87・89 がある。ともに底部から体部への立ち上がり部分は丸みを帯び、体部は直線的あるいはやや外反する。多くは軟質に焼き上がるのに対し、硬質に焼き上がる 88 は胎土に大きな砂粒を含む。器形は在地のものに類似するが、砂粒の多い胎土は他の個体とは異なる。

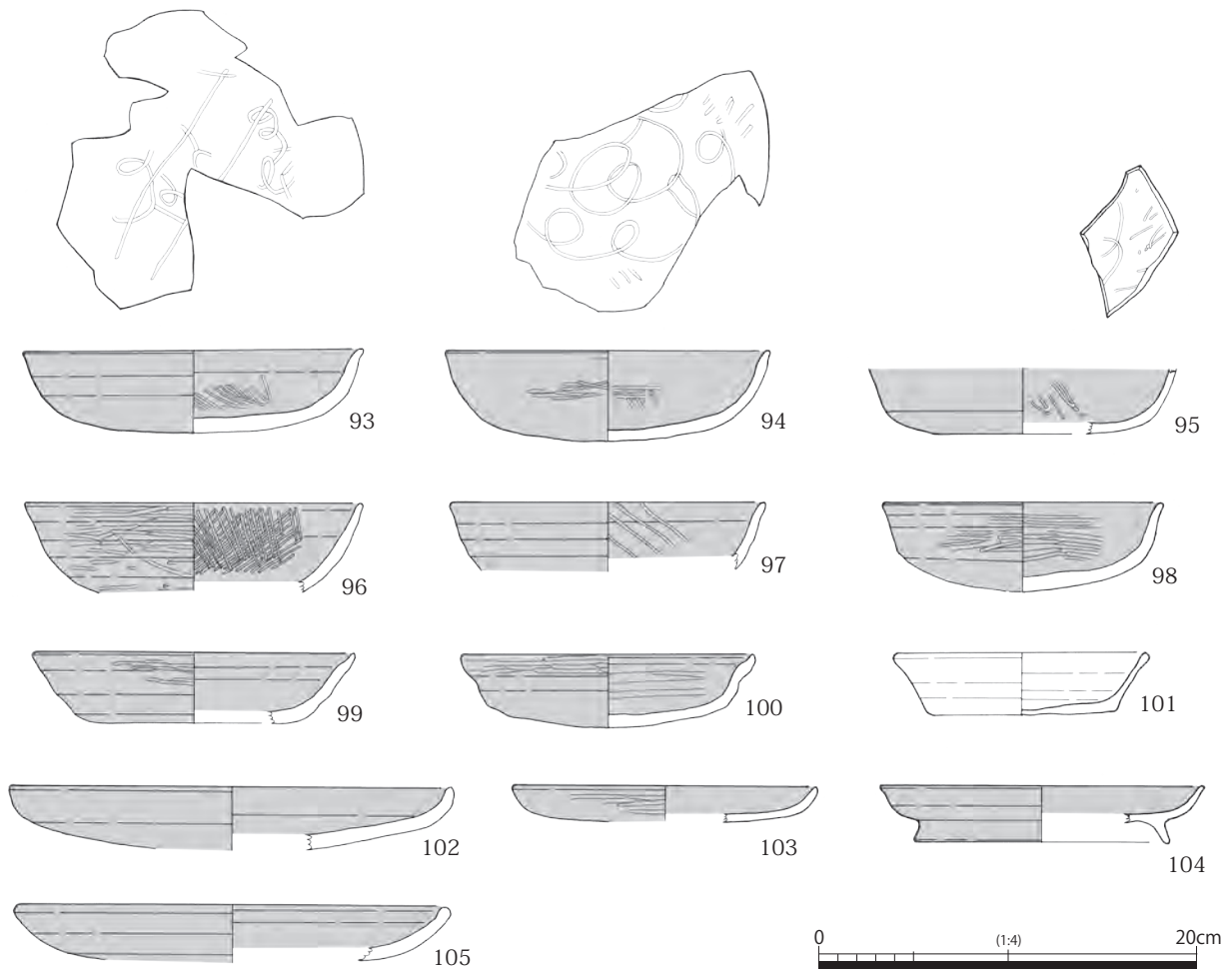


図 105 12 河川出土遺物 (3)

皿は高台付 (91) と平底 (92) があるが、出土量は少ない。

古墳～奈良時代の供膳具 (図 105・106、図版 19)

土師器環は、丸底で体部が丸みを帯びるもの (93～100) と、平底で体部が直線的なもの (101) がある。

丸底の環のほとんどは内外面ともに赤色塗布し、暗文を施すものが多い。暗文は体部内面に放射状、見込みに螺旋状に施文する。93 は螺旋状暗文ののちさらに線状の暗文を施す。放射状暗文のほとんどは左上がりだが、96 は右上がりの暗文を施したのちで左上がりの暗文を施文する。口縁部は端部を丸くおさめるもののほか、端部内面を強めになでてやや平らになるもの (93、94) や、外上方に開き端部が上方に立ち上がるもの (99・100) がある。

平底の環は丸底に比べて器壁が薄く、赤彩を施さない。

皿には高台が付くもの (104) と付かないもの (102・103・105) がある。高台付は少なく、無高台に比べ器壁が薄い。ほとんどは赤く塗られていた。

須恵器蓋、環はつまみが付く蓋と高台付環の組み合わせ、小形で平底の環、受部がある環とその対となる蓋の組み合わせに分かれる。

つまみが付く蓋には、口縁端部を折り曲げるもの (106～111) と口縁部内面にかえりが付くもの (112～117) があり、つまみの形状は粘土円盤を貼り付けたもの (106・107・112・113) と、粘土紐を輪状に貼り付けたもの (109～111・114～117) がある。114 は粘土円盤を貼り付け、中

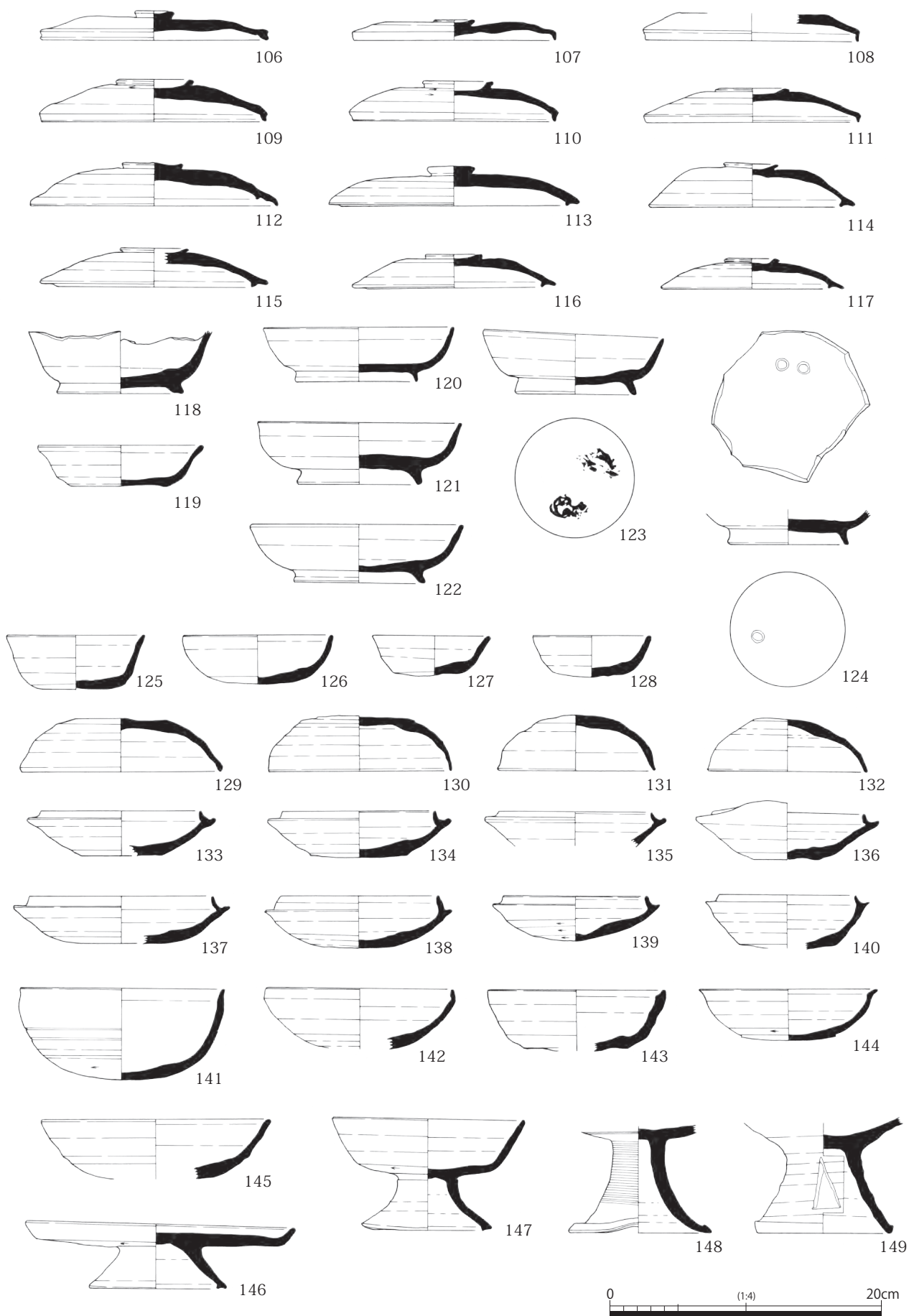


図 106 12 河川出土遺物 (4)

心部を強くなでて成形する。端部を折り返しているものの口縁内法、かえりがあるもののかえり部外側で計測した直径は、12cm 前後と 15cm 前後、17cm 前後の 3 種類ある（口径を大きさとしなかったのは、当該箇所が坏の口縁部と接するからであり、坏の大きさと比較する上で有効と判断したためである）。器高と形状をみると、106・107 が低く天井部が平らであるのに対し、109～117 は高めで天井部が丸みを帯びる。

高台付坏は平底で体部の立ち上がりが内彎し、高台が体部の立ち上がりよりもかなり内側に付くもの（120～122）と、底部がやや丸みを帯び高台が体部の立ち上がりに近いところに付くもの（123）がある。高台端部は丸くおさめるものが多い。口径は 120 が 14cm、121・122 が 15cm を測り、123 は 13cm とやや小さい。118 は口縁部を故意に打ち欠いたものである。坏としたが、他のものよりもかなり器壁が厚く、壺などの底部の可能性もある。

119 は平底の坏で、底外面に回転糸切り痕が明瞭に残る。

125～128 は小形坏である。126～128 は一見蓋のようだが、底部を比較的平らに仕上げることで、対となる大きさの受け部を持つ坏が出土しなかったことから坏と判断した。

129～140 は受部を持つ坏とその対となる蓋である。このタイプの坏や蓋には、21 溝出土遺物と接合したものがある（129）。そのため、一部には 21 溝の遺物群から転落したものを含む可能性がある。坏には底部から体部が丸いもの（137～139）、平底で体部が直線的に外傾するもの（133・134・136）がある。受部は外上方に延び、中には端部が上方に立ち上がるもの（133）もある。蓋は口縁部と天井部の境で明瞭に屈曲するもの（130・131）と不明瞭なもの（129・132）がある。坏底部外面および蓋天井部外面は、回転ヘラ切り後に粗いナデ調整を行うものが多く、一部はヘラ切りの外周部分のみ回転ヘラケズリを行う。

143・144 は無蓋坏と判断した。144 は坏の立ち上がりが欠落した形状をしており、鳥取市八坂 118 号墳出土品にこれと似た坏あるいは高坏がある^{註4}。

鉢（141・142）は、いずれも硬質に焼き上がる。142 は口縁端部が屈曲し器高が高いこと、蓋に比べて体部の湾曲が強いことから鉢とした。

145～149 の高坏のほか、図化できなかったが長脚 2 段 2 方透かしの破片も出土した。脚部には 148 のようにカキメを施すものもあるが、多くは回転ナデ調整のみである。また短脚の多くは透かしがなく、149 のように透かし穴が 1 つだけのものがいくつみられるだけであった。坏部は蓋に似たもののほかに皿状のもの（146）、体部が直線的なもの（147）がある。

供膳具以外の須恵器、土師器（図 107～109、図版 18 下、20・21）

供膳具以外の須恵器は、横瓶、壺、提瓶、臚、甕が出土した。横瓶は図化したもの以外にも、焼き上がりや調整などから数個体分の体部片が出土している。これほどの数の横瓶が出土するのはこの資料群の特徴の 1 つといえるだろう。壺には広口壺、細頸壺があり、中には頸部を故意に打ち欠いたもの（157・159）がある。

土師器甕は破片を中心に出土している。外面は主にハケ目調整で、板状工具によるものもある。内面はケズリを基本とするが、172 ではケズリの痕跡はみられなかった。

その他、土製支脚（177）、ミニチュア土器（178～181）、製塩土器（182～184）、土錘（298）、土玉、鞆羽口（302・303）が出土した。ミニチュア土器（178～180）は手づくね成形であるのに対し、181 は回転台成形で、焼き上がりは平安時代の土師器坏と類似する。製塩土器のうち、183

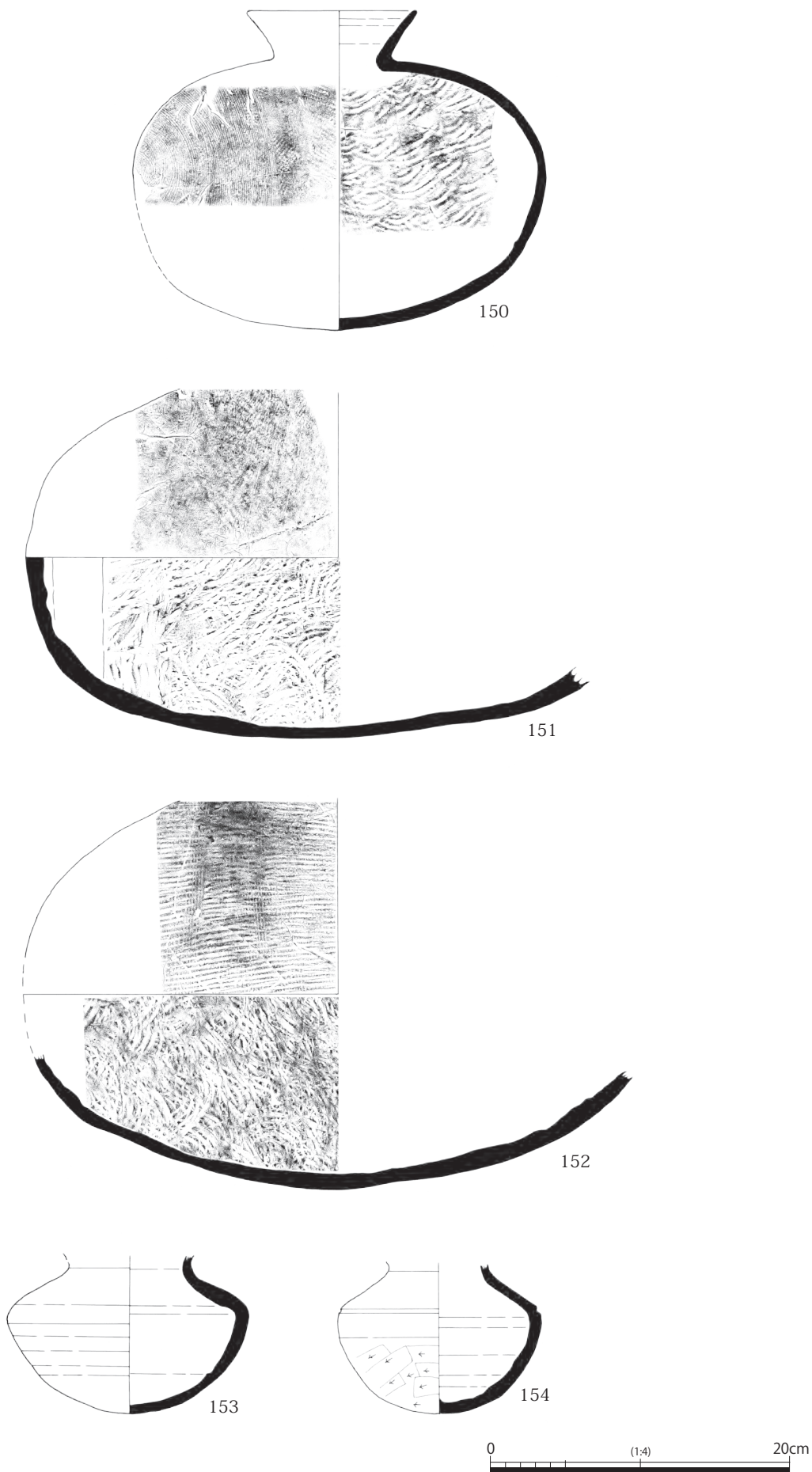


図 107 12 河川出土遺物 (5)

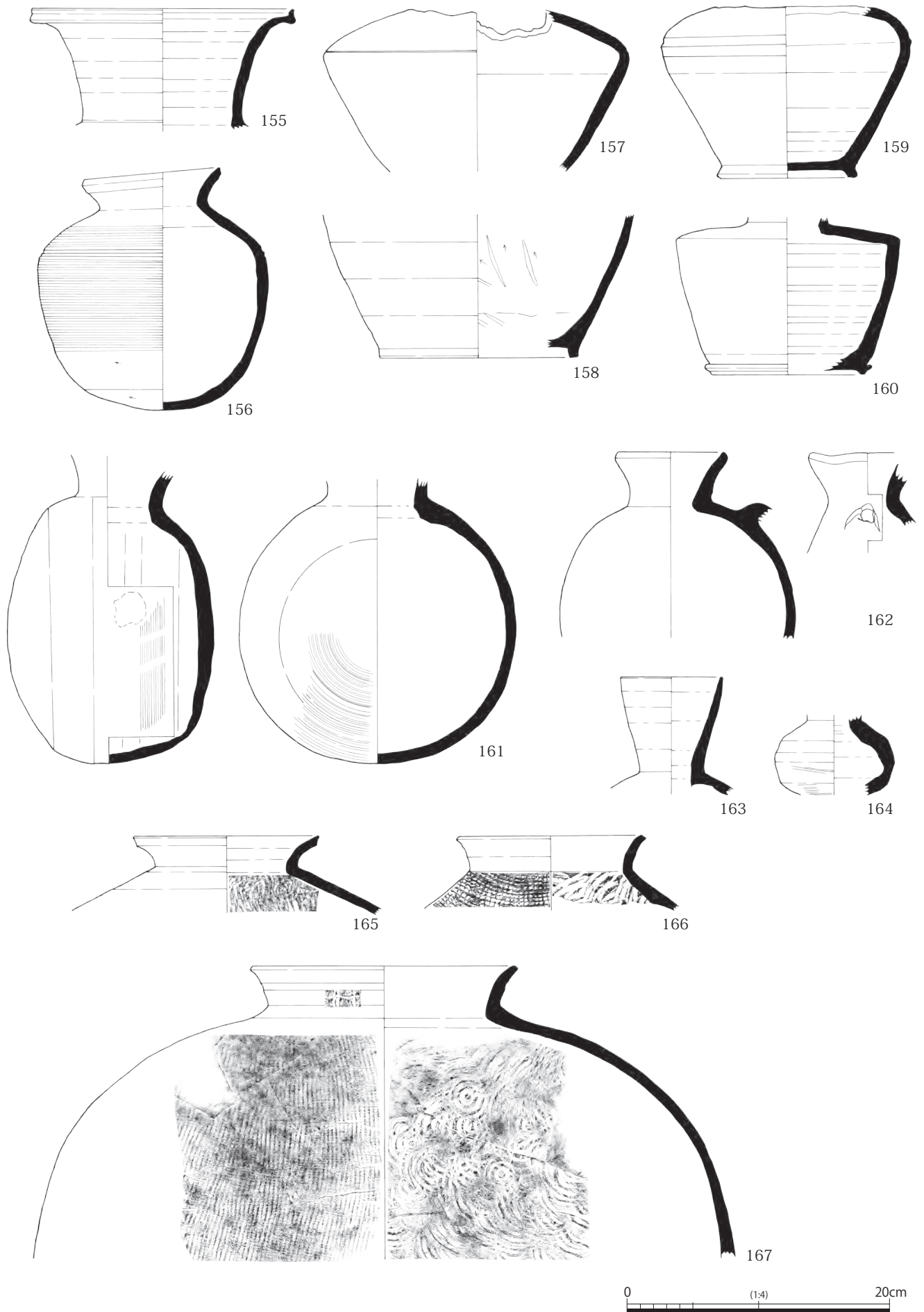


図 108 12 河川出土遺物 (6)

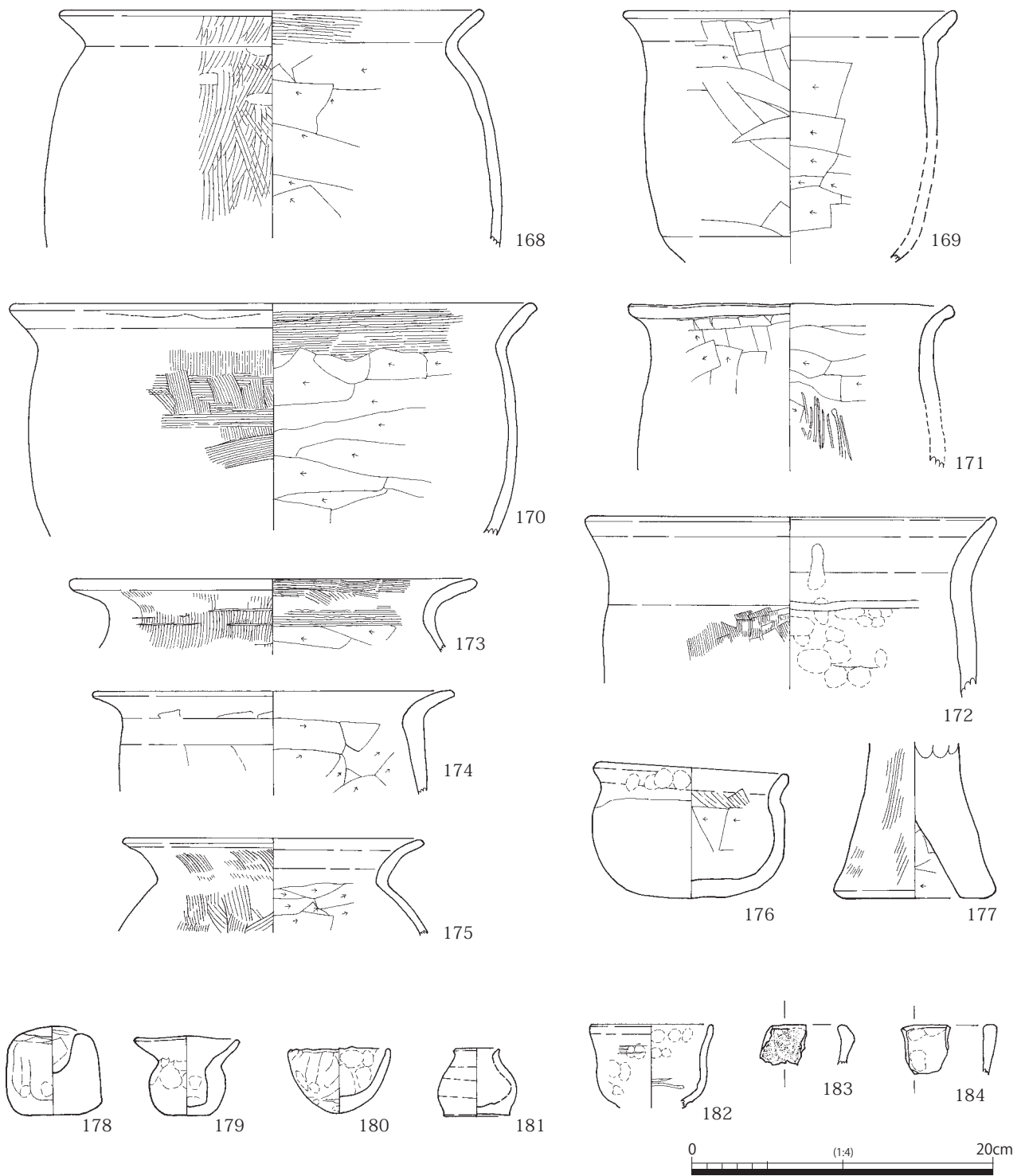


図 109 12 河川出土遺物 (7)

の内面には布目痕跡が残る。鞆羽口は先端部が還元し、鈇滓などは付着していない。302 は基部が円弧状に凹み、別の部品から外れたと思われる。

また 12 河川などから破面を含めすべての面が被熱し、一部で発泡した須恵器甕の破片が出土した(図版 21 下)。中には別の須恵器片が付着したのものもある。これらは窯の中で焼台に転用したものと考えている。

記号、文字が書かれた土器(図 110、巻頭図版 2 下、図版 22 下、23)

12 河川を中心に、記号または文字を記した土器が出土した。ほとんどが須恵器で、土師器には若干漆が付着したものがみられるだけであった。また、記号は飛鳥時代終わり頃から奈良時代初め頃の

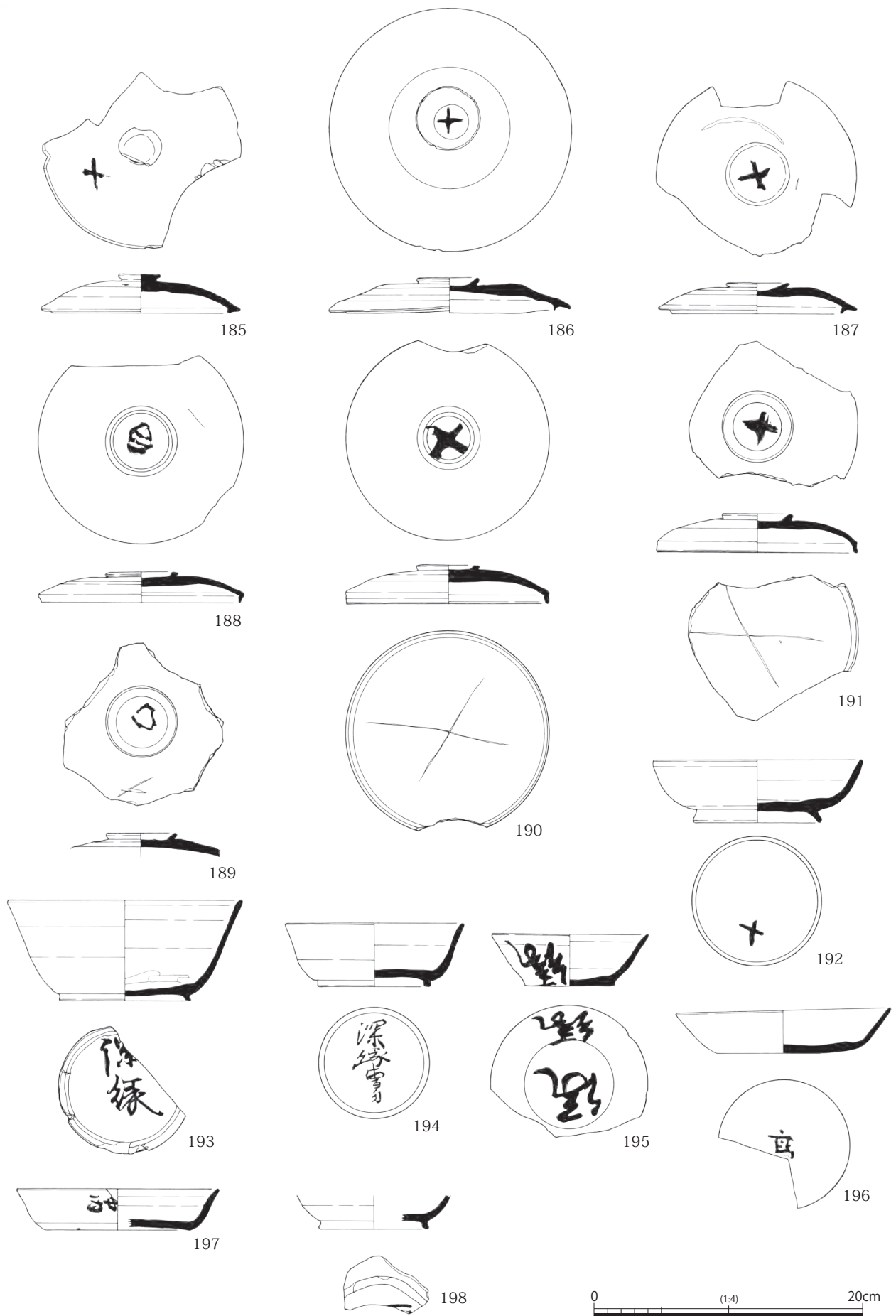


図 110 12 河川他出土遺物

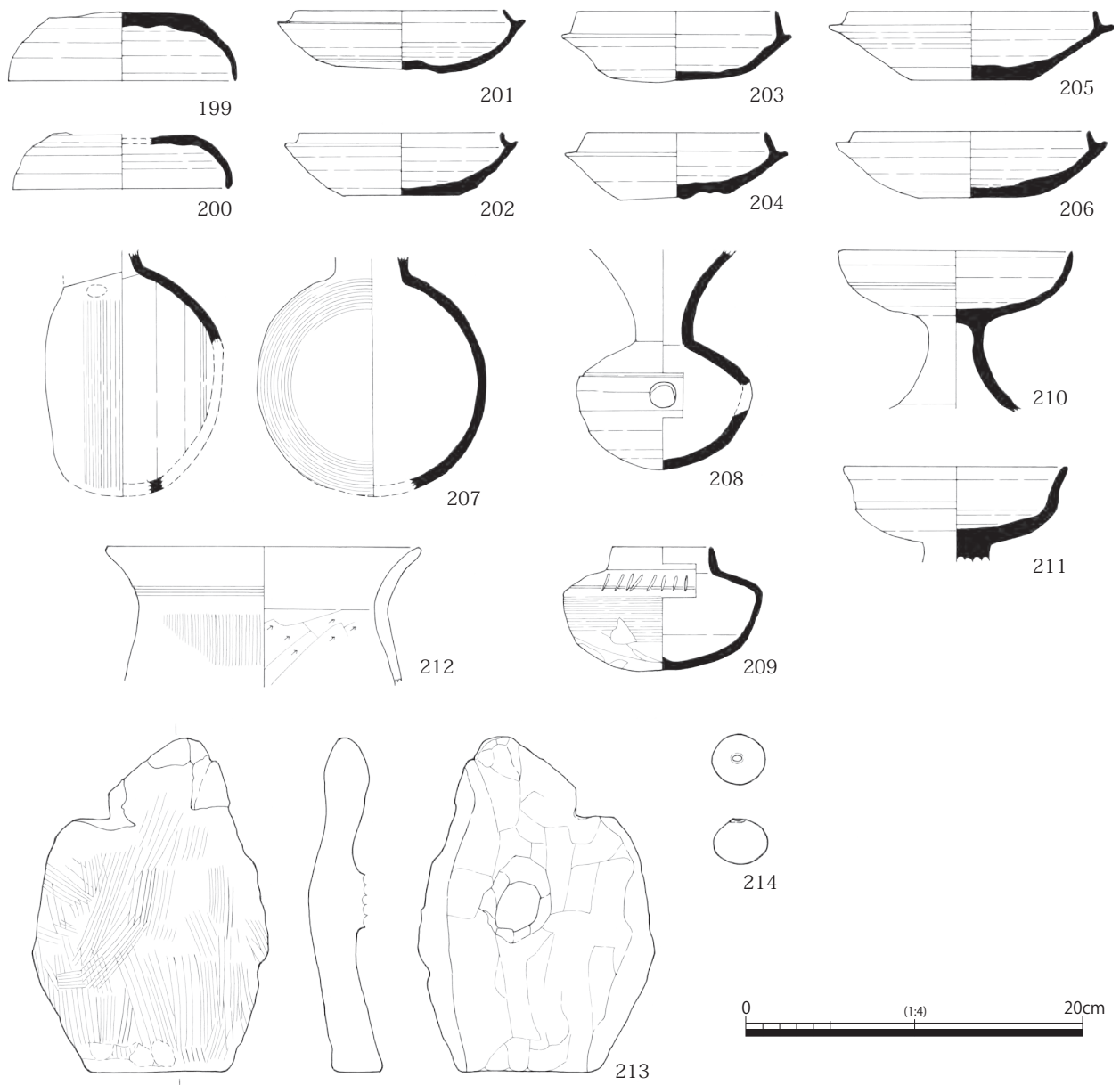


図 111 15 平坦面・21 溝出土遺物

土器に、文字は平安時代のものにほぼ限定される点も特徴である。

記号のほとんどは蓋の外面に漆を用いて、185以外輪状つまみの中を書く点で共通する。記号は「×」が多く、188は円に2本の線のようなもの、189は三角形のものを書く（これらを文字とみなすと188は「百」、189は「乙」とみることも可能だが、現状では特定を避けておく）。さらに189は外面に、190・191は内面にヘラ書きで「×」を描く。蓋以外に記号を書くのは坏底部外面で、墨で「×」と記す。

文字が書かれたのは、須恵器坏または高台付坏である。多くは底部外面だが、体部外面に書く場合もある。193は「深縁」、194は「深縁曹司」と記す。194の下の2文字が「曹司」だとすると、「深縁」は場所を表すのかもしれない。195は底部外面と体部外面に「縁」と書く。体部の文字は正位置に置くと上下逆となる。何かの行為で使用したとすれば、坏をひっくり返して底部の文字もみえるようにしていたのだろうか。196は底部外面に「高」、197は坏体部外面に「中内」が横向きに書かれている。このほか、第IV層からも墨書土器片が数点出土した。

21 溝、15 平坦面出土遺物（図 111、図版 24）

蓋には、口縁と天井部の境の屈曲が明瞭なもの（199）と不明瞭なもの（200）がある。200は他

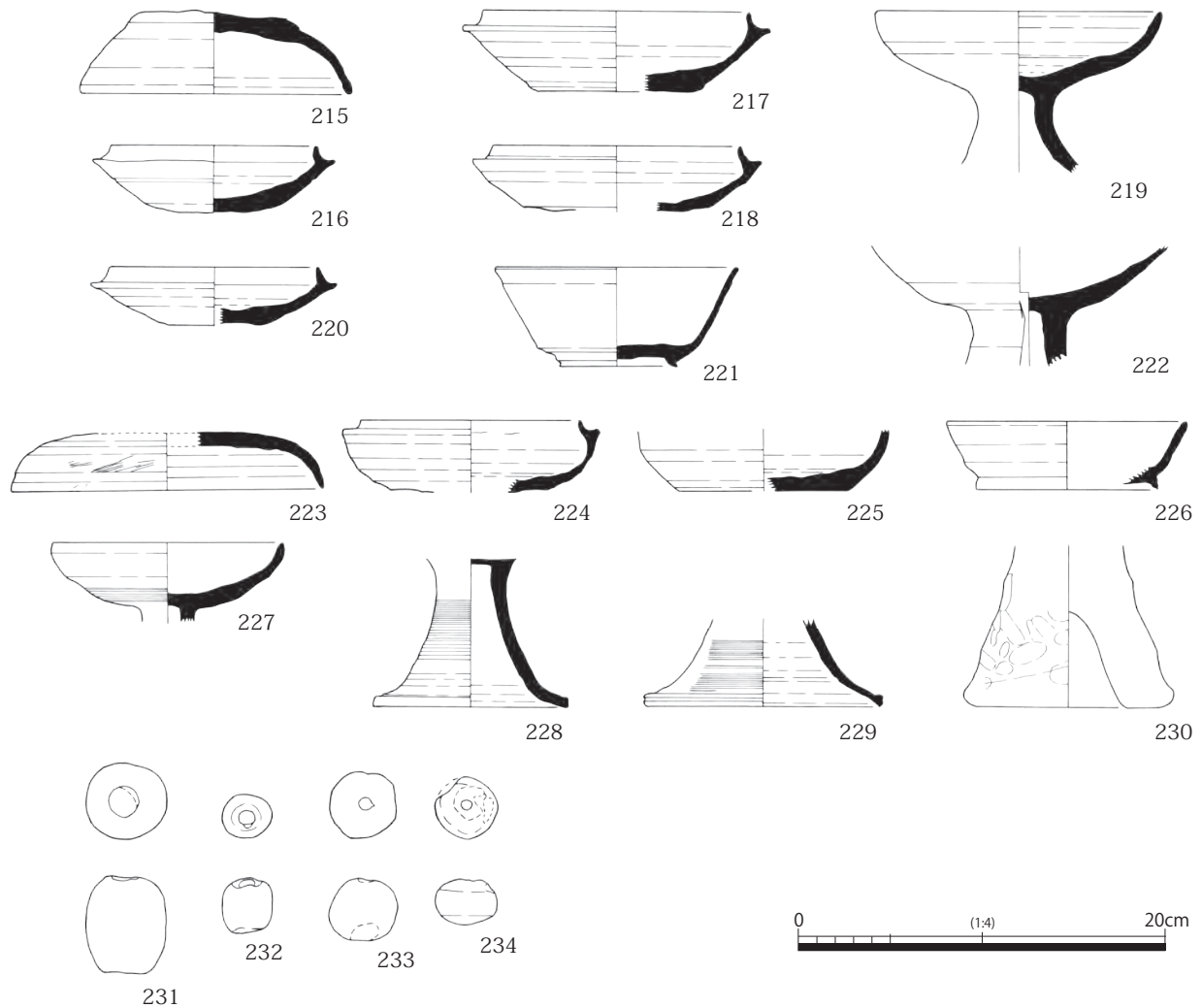


図 112 その他の遺構・第V層出土遺物

と比べて器高が低い。坏は底部から体部まで丸いもの（201・206）、底部が平らで体部が丸いもの（202）、底部が平らで体部が直線的に外傾するもの（203～205）がある。受部は、ほぼ水平に延びるもの（203～205）と外上方に延びるもの（201・202・206）がある。203は他と比べて口縁端部が薄い。坏の底部内面、蓋の天井部内面に同心円当て具痕が残るものが多い。

提瓶（207）は吊り手が失われており、体部背面側が大きくふくらむ。口縁は腹側に寄った位置に付けられ、腹側に傾く。甕（208）は頸部が体部よりも大きく開くタイプで、体部に穿たれた孔の上側に1条の沈線が巡る。短頸壺（209）の体部の上側には、ヘラで8本の刻み目を施しており、正面を意識したものかもしれない。壺の体部下半は不定方向のヘラケズリを行う。210の脚部には透かし穴はみられず、坏部の口縁部と底部の境には沈線が巡る。竈状土製品（213）の内面には突起の痕跡が残る。その他の遺構から出土した遺物（図 112）

215～219は151土坑、220は150土坑から出土した。221は40土坑から出土したもので、軟質焼成である。222は第3面の2区南西部にある窪地（74たわみ）から出土したもので、幅数mmのスリット状の透かし孔を1箇所穿孔する。

第V層出土遺物（図 112）

蓋（223）は器高が低く扁平なもので、今回の調査では扁平な蓋は少なかった。坏（224）は、他の遺構などから出土したものとは比べ受部が極端に短い。高台付坏（226）の高台は端部が内傾してお

り、端部外側だけが接地する。高坏脚部（228・229）は他の須恵器とは異なり、黄橙色に近い色調に焼き上がり、外面にカキメを施す。

なお、平成22年度出土遺物のうち、飛鳥時代から平安時代の土器胎土と遺跡内の土について岡山理科大学の白石純氏に蛍光X線分析を実施していただいた。その結果、須恵器についてはカルシウムとカリウムの量の割合がある一定の範囲内に集中し、奈良～平安時代の須恵器では、カルシウムの量の割合によって2つに分かれる可能性があるという。また粘土採掘の対象になったと思われる第V-2b層はカルシウムとカリウムの量の割合が須恵器胎土の集中する範囲内に収まる。

第2項 木製品（図113～115）

卒塔婆状木製品は4点（235・236・269・270）出土し、うち2点を図化した。ほぼ完存の2点の頭部は山形を呈し、表面に2条の刻線を施す。235は裏面にホゾ穴があることから転用材か。236は、基部付近を段状に加工し平滑に仕上げる。文字の一部が残存したが判読不能。269は先端部を欠損し、基部付近を段状に加工して平滑にする。270は先端部・基部いずれも欠損。

237は板材の中央にホゾ穴？を穿った建築部材か。

238は3箇所緒孔のある、足板単独で用いる田下駄。足の下部分が凹む。239は、前壺を台の中央に後壺を歯の内側に開けた連歯下駄。隅丸で、前幅より後幅の方が狭い。

漆器椀は総黒漆（240）のほか、外面高台に黒漆を塗布しない292や、朱漆で絵付けをした288～291・293がある。また294は調度具の脚部か。

糸巻きは3点出土した。241は軸孔がなく、両端も角棒状を呈する横木で未製品か？ 軸孔付近で破折した大形横木片（242）のほか梓木（244）がある。

243は、箱状の組み物の一部か。長方形折敷片（245）は、各辺中央に側板を固定するための孔と桜皮紐が残る。刃物による傷多数。円形曲物の蓋（247）は、3箇所の結合孔で側板を固定。

台付皿（盆？）（246）には、内面に赤漆で描かれた巴文の一部が遺存、幅広の高台付の盆。高台部分に穿孔あり。

代搔具（248）は、台木の長さ44.5cm、9本の歯は4.5～5cm間隔で装着、5番目の歯の部分に着柄孔がある。歯の長さは約9cmで台木装着後に楔で固定する。

斎串もしくは斎串状木製品は3点出土した。圭頭（249）は、左右には上下からの切り込みを数回入れるもの。先端の形状は欠損のため不明。（250）は先端が剣先状を呈する斎串片。251は上端が丸く尖り、下端は箸状を呈する斎串状木製品。完形品。笹塔婆（253）は墨痕のある上半のみ。箸状木製品は、やや扁平な252とそうでない254の2点出土。

烏帽子を被った人形代（255）は、杉の柂目板を切り抜いて立烏帽子の男性の横顔を表現する。曲物桶などの円形の底板を再利用したものか。

その他、目の細かいすき櫛（257）や、小形調度具の一部と思しき木製品（256）を図化した。

第3項 金属製品（図116）

袋状鉄斧（258）、刀子（260）ともに錆化した刃部の一部は欠損し、錐状工具（259）は破折する。

鉄製馬鍬は6本出土したうちの2本を図示（261・262）した。断面長方形を呈し、程度の差はあれ使用のためか先端が片側へ曲がる。耳環（263）は完形品。

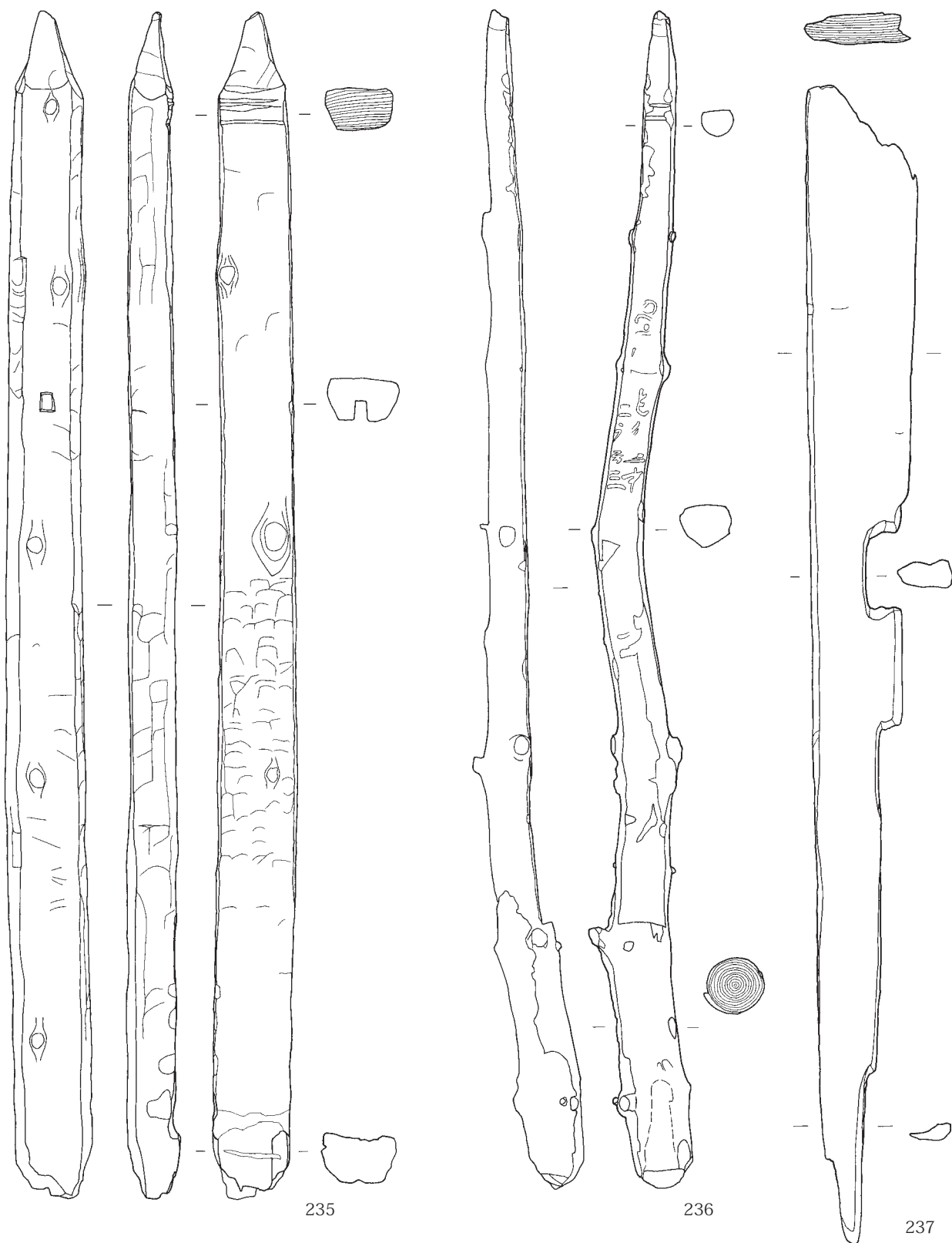


図 113 出土木製品 (1)

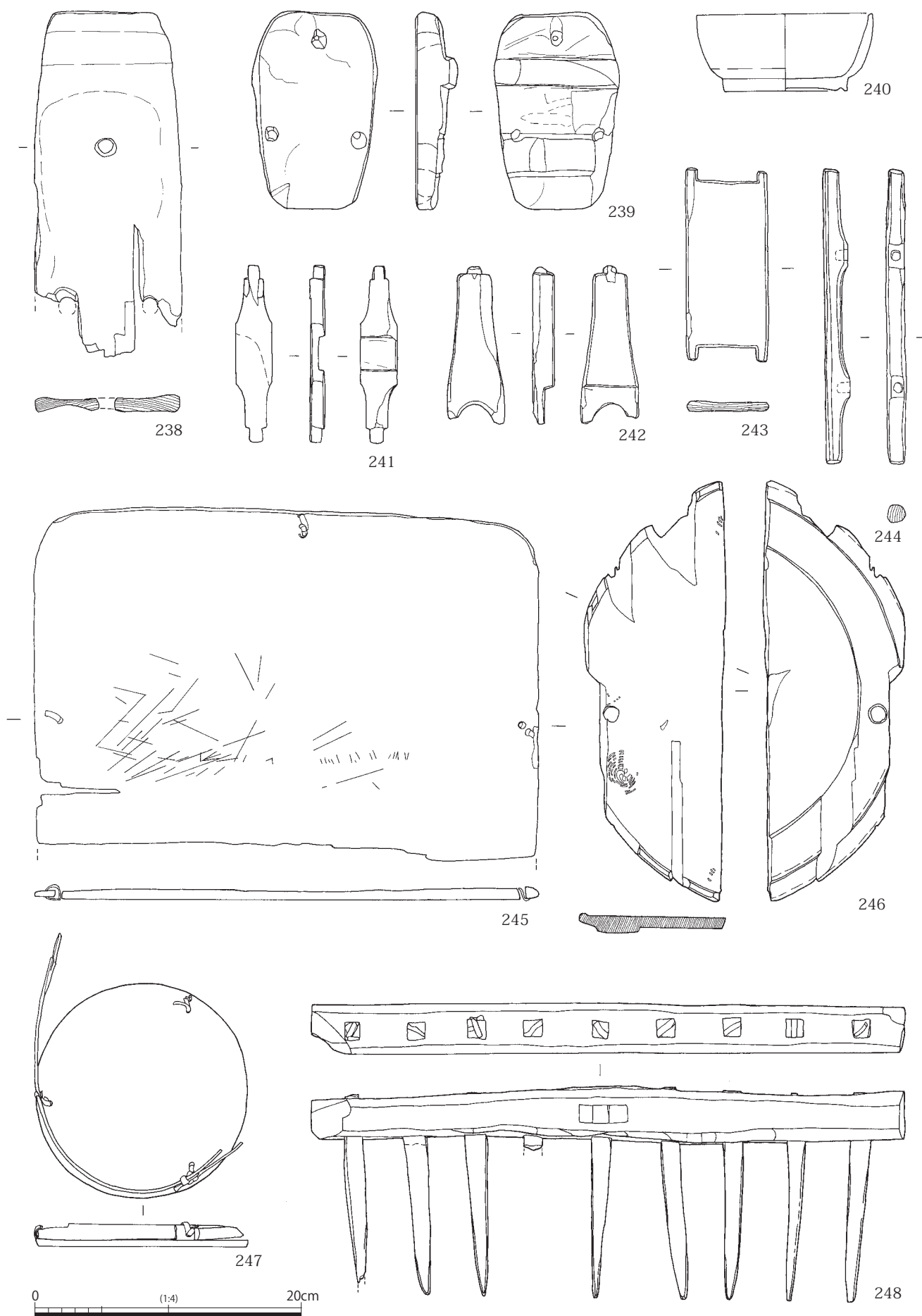


図114 出土木製品(2)

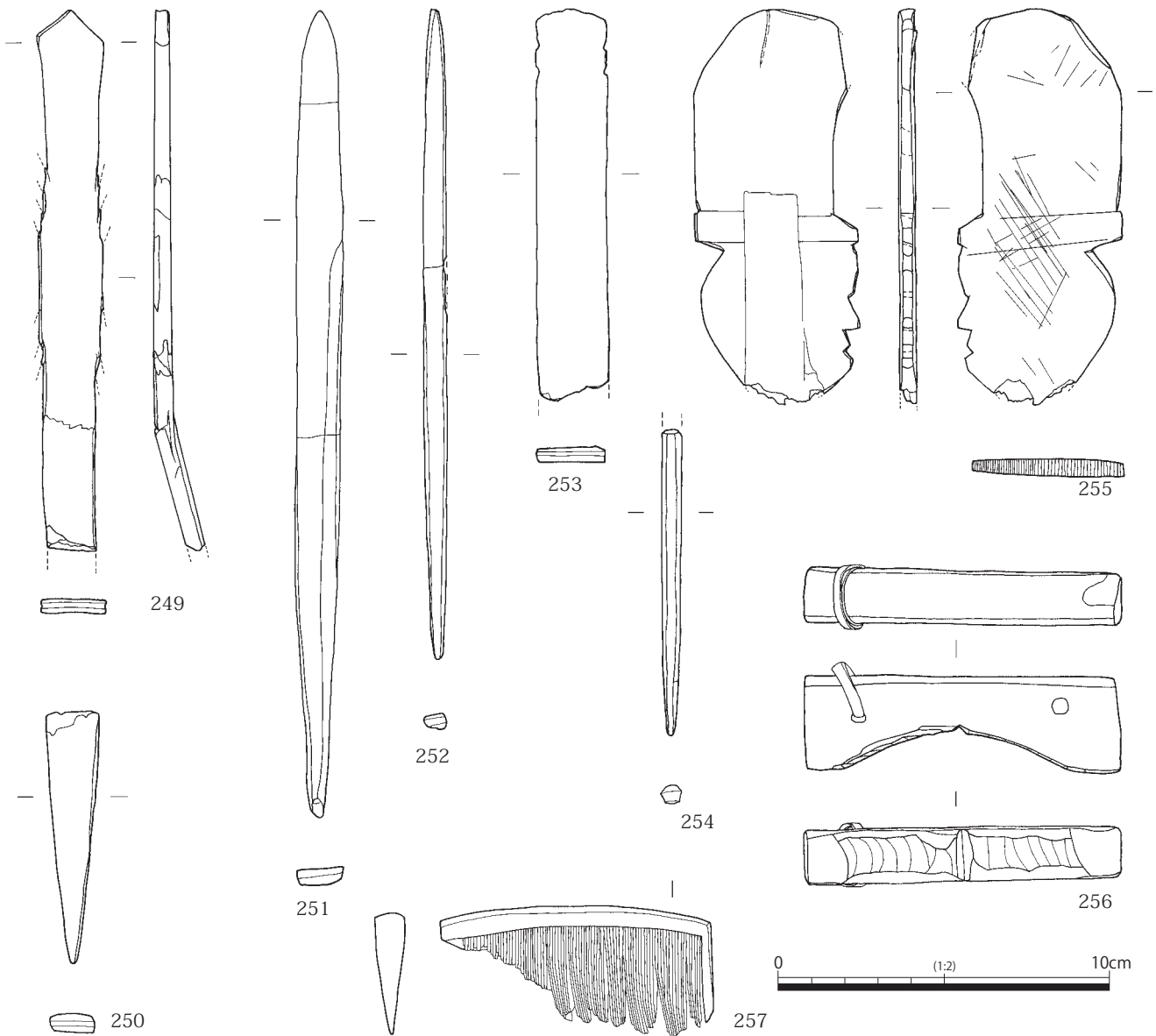


図 115 出土木製品 (3)

古銭は元豊通宝 (265)、大観通宝 (266)、宣和通宝 (267) 以外に、天禧通宝 (1017 年初鑄)、皇宋通宝 (1039 年初鑄)、至和通宝 (1054 年初鑄)、嘉祐通宝 (1056 年初鑄)、熙寧元宝 (1068 年初鑄)、元祐通宝 (1086 年初鑄) が出土した。

264 は唐様太刀の鞘に付く山形金で、遊鑿は欠落する。荅紐有孔の銅印 (268) の印面は方形を呈し、木を陽刻する。紐の孔及び印面の一部が欠損する。ともに平安時代の所産か。

註

- 1 『岩吉遺跡Ⅳ』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1997 年所収の SX-01 出土資料の遺物番号 129 が該当する。
- 2 『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1996 年所収の SK14 出土資料の遺物番号 69 が該当する。
- 3 前掲『岩吉遺跡Ⅳ』所収の SD-2 出土資料の遺物番号 20 と SD-05 出土資料の遺物番号 42 が該当する。
- 4 『八坂 118 号墳発掘調査報告書』財団法人鳥取市教育福祉振興会 1994

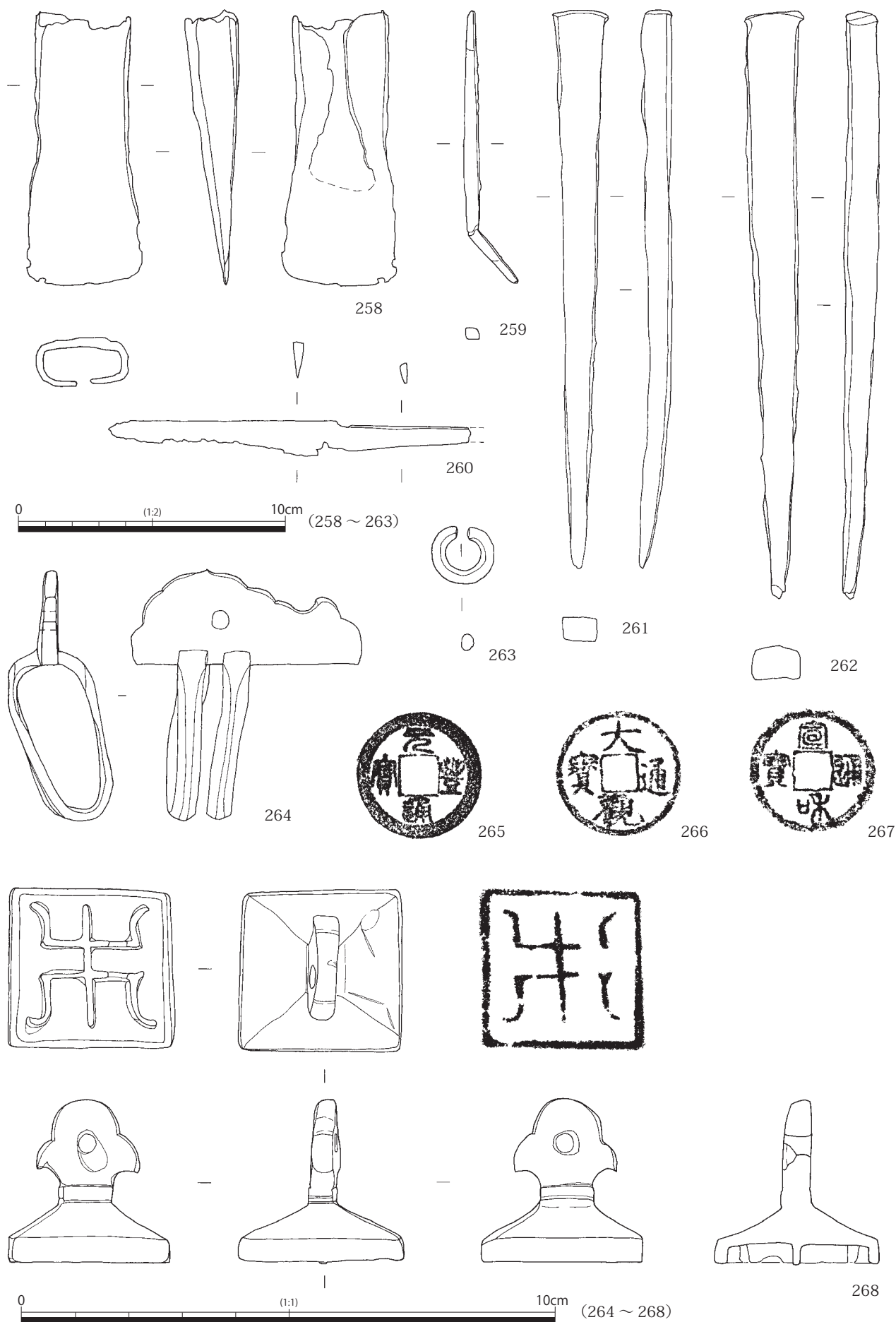


図 116 出土金属製品

第V章 自然科学分析

高住平田遺跡の古環境変遷

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

高住平田遺跡は湖山池の南側の開析谷に位置する。これまでの成果では湖山池に向かって流れる古代・中世・近世各時期の流路等が見つかっている。今回の分析調査では、調査区および調査区周辺の古環境変遷に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

資料は発掘調査担当者により3区北西部の下層確認トレンチ北壁断面より連続する不攪乱柱状試料として採取されている（図15）。この試料の肉眼観察および現地写真情報に基づいて、分析層準を検討した。以下に発掘調査時の層序区分に基づいて、堆積層の層相を記載する。

1層：褐灰色を呈する、細粒砂・粗粒砂・細礫・中礫混じり泥質中粒砂からなる。著しく擾乱ないし攪拌されており、初生の堆積構造は確認されない。上位層準から連続する幅数mm以下の垂直方向の根成孔隙が比較的多く分布する。根成孔隙は、砂、泥（シルト・粘土）で充填されている。下位の2層との層界は塑性変形しているように見える。形成年代は出土遺物から近世と推定される。

2層：褐灰～灰色を呈する、細礫、極粗粒砂混じり細粒砂質泥～泥。著しく攪拌されている。幅数mm以下の垂直方向の根成孔隙が比較的多く分布する。根成孔隙は、砂、泥（シルト・粘土）で充填されている。1mm以下の炭片が散在する。また2層中部では、泥がちな層準を挟在する。形成年代は出土遺物から中世と推定される。

3層：黒褐～褐灰色を呈する細粒砂混じり泥からなる。著しく攪拌されており、初生の堆積構造は不明瞭となっている。下半部は塑性変形しており、下位層準の堆積物が流線に沿って引きずり上げられており、層理面は火焰状に変形している。この変形構造は5層まで連続する。形成年代は出土遺物から中世と推定される。

5層：灰色を呈する砂混じり泥、腐植質土壌、中粒砂などの5cm程度の不規則に配置する偽礫からなる。これら偽礫は塑性変形により角が取れているものが認められる。人為的営力により形成された堆積物とみられる。形成年代は古代と推定される。

7層：上半部は灰オリーブ色を呈する泥、腐植質土壌、中粒砂の偽礫からなる。偽礫は変形しておらず、垂角でブロック状を呈する。根成孔隙など生物擾乱も確認される。下半部は灰オリーブ色を呈する粘土からなり、黒褐色腐植質泥が混じる。下に凸なロード構造や羽毛状の変形構造が確認される。この変形構造は19層まで連続する。なお、上半部の偽礫は5層に連続するものと判断される。

11層：黒褐色を呈する、細粒砂の不連続な葉理を挟在する有機質泥～灰色泥からなる。著しく変形しているため、層理面は不明瞭となっている。また、下位の12層の堆積物が貫入している。

12層：黒～黒褐色を呈する有機質泥からなる。木材片などの植物遺体が混じる。

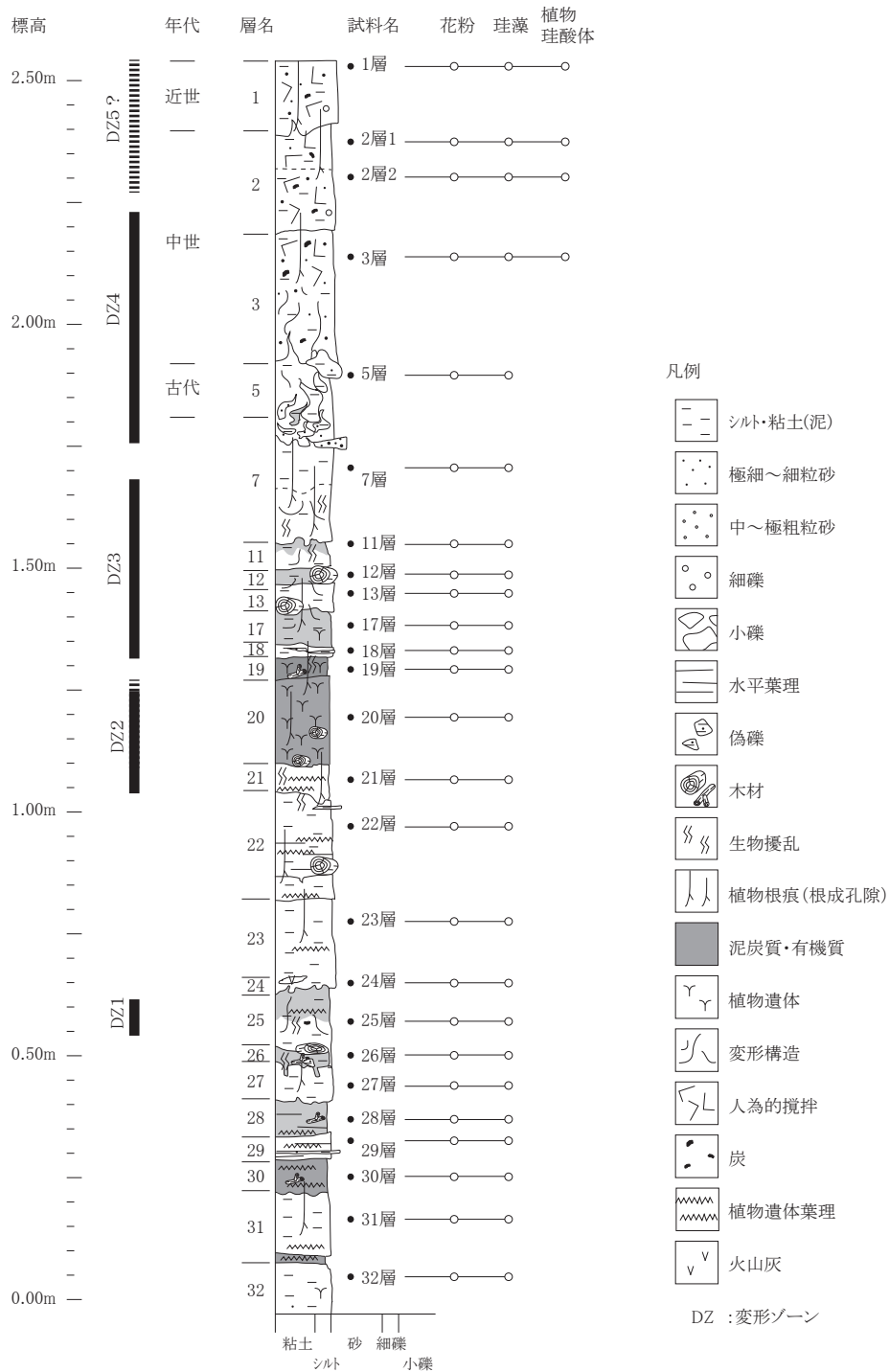


図 117 調査区北壁断面の層序および分析層準

13層：灰色を呈する有機質泥からなる。下に凸なロード状の構造が確認される。木材片などの植物遺体が混じる。

17層：暗灰～暗褐色を呈する植物遺体を挟在する有機質泥～泥からなり、上方粗粒化する。植物遺体は層状ないし葉理状に挟在するが、著しく変形しており、不連続となっている。また、樹木由来の根成孔隙など生物擾乱もみられる。

18層：灰オリーブ色を呈する泥からなる。不明瞭ながら、葉理状の構造が確認されるが、変形しており、不連続となっている。上位層準から連続する根成孔隙も認められる。

19層：極暗褐色を呈する泥混じり弱分解泥炭からなる。下部は20層に漸移する。腐植含量が下

位層準より多く、20層の表層をなしていた層準と判断される。上位層準の泥で充填された根成孔隙が認められる。この孔隙も変形している。木本由来の植物遺体も認められる。

20層：黒褐色を呈する泥質未分解泥炭～泥混じり未分解泥炭からなる。下部ほど泥がちで、植物遺体層も層状に堆積する。また、塑性変形しており、羽毛状、下に凸なロード状の変形構造が確認される。この変形構造は21層まで連続する。また、19層から連続する木本由来とみられる根成孔隙が認められる。

21層：オリーブ黒色を呈する、植物遺体葉理を挟在する泥からなるが、上位層準から連続する変形により、不連続となっている。また、下に凸なロード状の構造が確認される。また、下部に挟在する灰色泥層は垂直方向にズレが生じている。このほか上位層準から伸びる幅数mmの根成孔隙も認められる。植物遺体は異地性と判断される。下部は22層に漸移する。

22層：暗灰黄色を呈する植物遺体葉理を挟在する泥からなる。下位の23層との層理面は比較的明瞭である。生物擾乱が顕著である。上部には木材片が確認される。樹種同定の結果トネリコ属の根材であることが確認された。

23層：灰オリーブ色を呈する泥からなる。植物遺体が僅かに混じる。根成孔隙など生物擾乱が確認される。この傾向は上部ほど顕著となる。最下部は25層に連続する変形構造が確認される。

24層：断続的な灰オリーブ色極細砂（再堆積したテフラ）を挟在する灰オリーブ色を呈する泥からなる。下位層準に連続する変形構造が確認される。

25層：暗灰黄色を呈する泥からなる。下部で植物遺体葉理を挟在するが、著しく変形しており、羽毛状ないし下に凸なロード状の構造が確認される。また、根成孔隙など生物擾乱も認められる。

26層：黒褐色を呈する有機質泥からなる。木材片や植物遺体を層状に挟在する。下部で27層に漸移する。

27層：灰オリーブ色を呈する極細粒砂質泥～泥からなり、上方細粒化する。不明瞭な葉理構造が確認される。植物遺体が混じる。

28層：黒灰色を呈する植物遺体葉理を挟在する有機質泥からなる。植物遺体層準には枝材なども混じる。また、極細粒砂の薄層を挟在する。

29層：暗褐色を呈する植物遺体を挟在する有機質泥からなる。炭片が混じる。植物遺体の分解の程度は未分解～弱分解である。

30層：黒褐色を呈する植物遺体葉理、灰色泥質細粒砂を挟在する泥炭質泥。上方粗粒化する。

31層：黒褐色を呈する植物遺体葉理を挟在する有機質泥からなる。最下部に泥質未分解～弱分解泥炭層を挟在する。

32層：にぶい黄灰色を呈する、植物遺体を挟在する極細粒砂質泥～泥からなる。上方細粒化する。葉理構造が確認される。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で5g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学

顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではないが、全面を走査する）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は Round et al.（1990）に、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心型珪藻類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状型珪藻類（Pennate diatoms）に分け、羽状型珪藻類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms; 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝羽状珪藻類は、上・下殻の片方の殻だけに縦溝のある単縦溝類、上・下殻ともに縦溝のある双縦溝類、縦溝が管の上を走る管縦溝類、縦溝が翼管の上を走る翼管縦溝類、殻端部に短い縦溝がある短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf(1993)を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe(1974)に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種は、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。産出個体数 100 個体以上の試料は、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。淡水生種の生態性は、100 個体以上の試料について図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種（貧塩性種）は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約 10g について、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mm の篩による篩別、重液（臭化亜鉛, 比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman（1952,1957）、Faegri and Iversen(1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤（2007）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態等の情報についても記録する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

試料の乾燥重量を秤量した後、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）の一

覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。また、植物珪酸体含量を図示する。

2. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表3、図118に示す。珪藻化石は、1層、5層～20層、23層～26層の14層準で少ない。それ以外の11層準からは堆積環境を検討する上で有意な数量の珪藻化石が産出する。また、完形殻の出現率は、全般的に約40%以下であり、保存状態は悪い。産出分類群数は、合計で37属105分類群である。以下に、珪藻化石群集の近似したものをまとめて下位より述べる。

32層は、淡水域に生育する淡水生種(以下、水生珪藻と言う)が優占する。淡水生種の生態性(塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性)の特徴は、貧塩不定性種、好+真酸性種～好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真止水性種が多産する。流水性で付着性の *Meridion constrictum*、流水不定性で付着性の *Gomphonema angustatum*、好止水性で付着性の *Pinnularia sudetica* などが産出する。このうち *Meridion constrictum* は、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現する中～下流性河川指標種である。

31層、30層は、水生珪藻が優占するが、淡水生種の中でも陸上のコケや土壌表面など多少の湿気を保持した好氣的環境に耐性のある陸生珪藻も産出する。淡水生種の生態性の特徴は、前試料に近似する。陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys* が約15%産出し、未区分陸生珪藻の *Diploneis yatukaensis* などを伴う。水生珪藻は、淡水～汽水生で付着性の *Tryblionella plana*、流水不定性で付着性の *Pinnularia rupestris*、*Neidium iridis*、好止水性で付着性の *Pinnularia substomatophora*、*Pinnularia sudetica* などを伴う。このうち、*Pinnularia rupestris*、*Neidium iridis* は、水深が1m以下の水生植物が繁茂するような沼沢域に見られる沼沢湿地付着生種である。

29層～27層は、陸生珪藻が減少する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、好+真酸性種と好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真止水性種が多産する。好止水性で付着性の *Stauroneis acuta*、*Pinnularia ornata*、流水不定性で付着性の *Pinnularia viridis* が多産し、流水不定性で付着性の *Pinnularia rupestris*、*Cymbella aspera*、好止水性で付着性の *Pinnularia neomajor* などを伴う。このうち流水不定性種の全ては、沼沢湿地付着生種群である。

26層～23層は、珪藻化石が少なかったが前試料で多産した種類を中心に産出する。

22層、21層は、引き続き水生珪藻が優占する。生態性の特徴は、29層～27層に近似し、貧塩不定性種、好+真酸性種と好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真止水性種が多産する。好止水性で付着性の *Stauroneis acuta* が20～40%産出し、流水不定性で付着性の *Cymbella aspera*、好止水性で付着性の *Pinnularia ornata* を伴う。

20層～5層は、珪藻化石が少なかったが、前試料で多産した種類を中心に産出する。

3層～2層上部は、水生珪藻が優占し、貧塩不定性種、pH不定性種と好+真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。流水不定性で付着性の *Amphora copulata*、*Cymbella cuspidata* がそれぞれ20%産出し、淡水～汽水生で付着性の *Gyrosigma fonticulum*、流水不定性で付着性の *Craticula perrotettii*、*Cymbella aspera*、好止水性で付着性のなどを伴う。このうち、*Cymbella aspera*、*Stauroneis phoenicenteron* は沼沢湿地付着生種である。

種 類	生態性		標 記		試料名																											
	塩分	pH	流水	採得種	1層	2層	3層	5層	7層	11層	12層	13層	17層	18層	19層	20層	21層	22層	23層	24層	25層	26層	27層	28層	29層	30層	31層	32層				
<i>Pinnularia acroplicata</i> W. Smith	Ogh-tnd	at-ll	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia acroplicata</i> var. <i>undulata</i> Skvortzow	Ogh-tnd	at-ll	l-ph	O	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia acuminata</i> W. Smith	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia alpina</i> W. Smith	Ogh-hob	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-hob	ac-ll	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia brevicostata</i> Cleve	Ogh-tnd	ind	l-ph	RA,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia brevicostata</i> var. <i>sumatrana</i> Hustedt	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia divergens</i> W. Smith	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>depressus</i> (Grun.)Kammer	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia episcopalis</i> Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia exosiphos</i> var. <i>eteifiana</i> Kammer	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia genita</i> (Donkin)Cleve	Ogh-tnd	unk	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia macilenta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia neomajor</i> Kammer	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia nobilis</i> Ehrenberg	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia ornata</i> H. Kobayasi	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia paludosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia rufescentis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia rufescentis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia similis</i> Hustedt	Ogh-tnd	ind	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Kammer	Ogh-tnd	ind	l-ph	RB	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.)Cleve	Ogh-tnd	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
<i>Pinnularia subnodosa</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	-	-	-	-	-																								

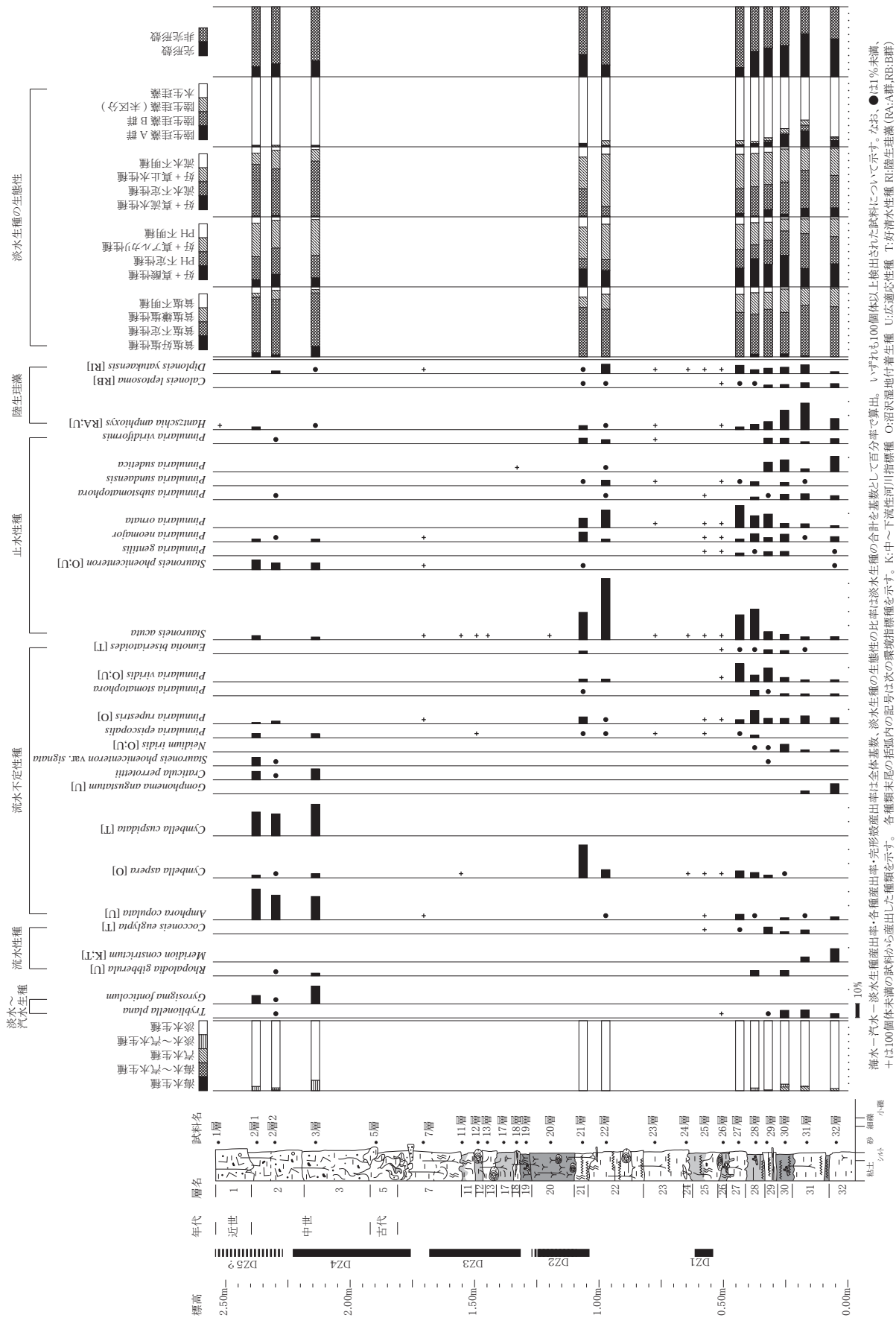


図 118 主要珪藻分析群集の層位分布

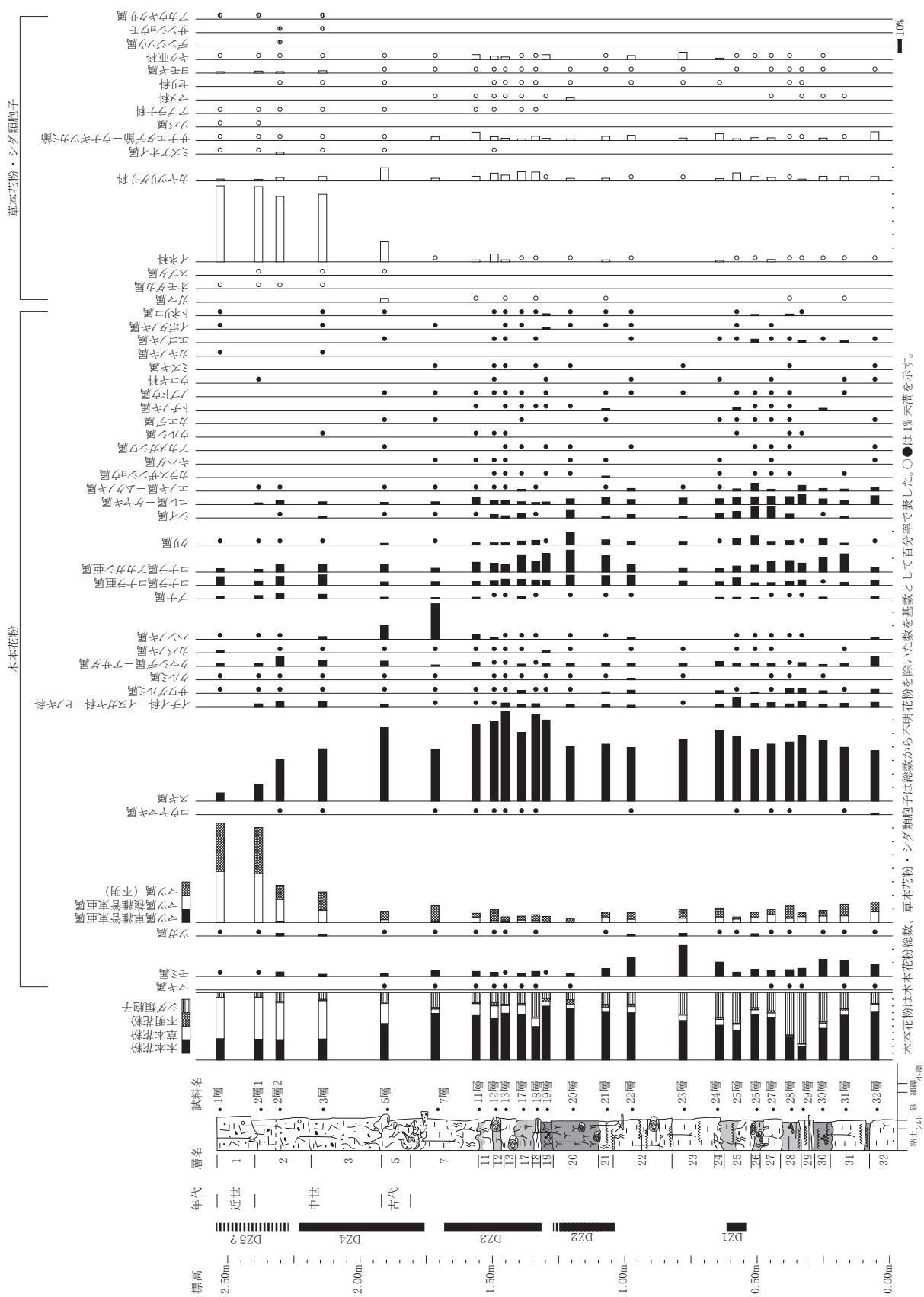


図 119 主要花粉化石群集の層位分布

1層は、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis* が少量産出しただけである。

(2) 花粉分析

結果を表4、図119に示す。花粉化石群集は層位的に細かな変化はあるものの、11層と7層、3層と5層、2層上部と2層下部の間の層準で大きく組成が変化する。

11層より下位では草本花粉に比べて木本花粉が非常に多い。木本花粉ではスギ属の割合が高く、木本花粉全体の半数近くを占める試料がほとんどである。次いで、マツ属、モミ属、アカガシ亜属が10%前後検出される。モミ属は23層で20%程度と極大になる。アカガシ亜属は、30層と20層付近で20%前後と極大になる。このほかハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、シイ属、ニレ属—ケヤキ属、トネリコ属などが数%程度産出する。草本花粉は全体的に少ないが、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属、キク亜科がみられる。水生植物のガマ属等がみられるが少ない。

7層～5層では、草本花粉が漸増傾向を示すようになる。木本花粉では依然としてスギ属の割合が高いが、随伴していたアカガシ亜属などが減少傾向を示すようになる。このほかハンノキ属、コナラ亜属、クリ属、シイ属、ニレ属—ケヤキ属が数%程度検出される。ハンノキ属は7層で極大となり、約30%検出される。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が増加傾向を示すようになる。

3層より上位では草本花粉の割合が急増する。草本花粉はイネ科の割合が高い。水生植物の種類数、個数が増加するのが特徴で、ガマ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属、デンジソウ属、サンショウモ、アカウキクサ属など水生植物の種類が産出するようになる。

3層よりマツ属の漸増がみられるが2層上部より上位では急増し、木本花粉全体の70%近くを占めるようになる。これに伴って、他の種類が相対的に減少するが、特にスギ属の減少が著しい。また種類数も減少する。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表3、図4に示す。植物珪酸体含量は、3層で約10000個/g、2層下部で約400個/g、2層上部で約2000個/g、1層で約6000個/gである。

表5 植物珪酸体分析結果

分類群	試料名			
	1層	2層1	2層2	3層
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	300	200	-	2,200
クマザサ属	<100	100	-	100
タケ亜科	300	300	100	100
ヨシ属	100	<100	-	100
不明	1,400	1,100	<100	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	600	-	-	3,800
クマザサ属	100	-	<100	100
タケ亜科	200	100	-	400
ヨシ属	100	-	-	200
ウシクサ族	-	-	-	-
不明	2,900	100	100	3,100
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,200	1,800	200	2,700
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,900	300	200	7,700
合計	6,100	2,100	400	10,400
珪化組織片				
イネ属類珪酸体	*	-	-	**
イネ属短細胞列	*	*	-	*

数値は含量密度を示し、10の位で丸めた値(100単位)で示す。<100は100個/g未満、-は未検出を示す。
珪化組織片の産状は、*が検出、**が多く産出するを示す。

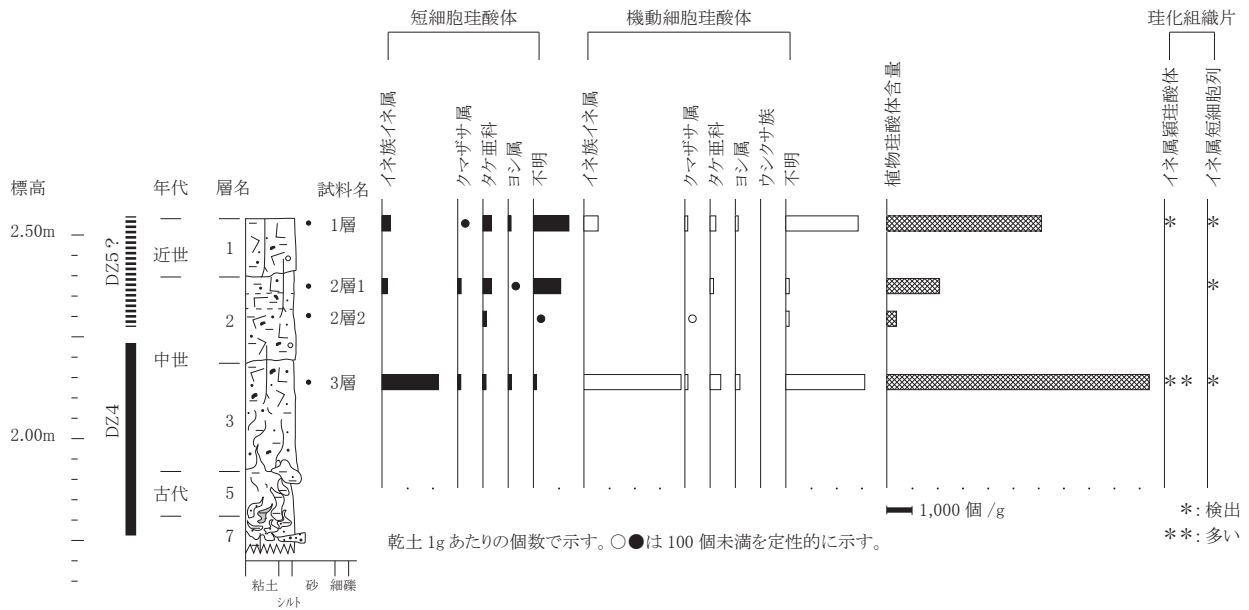


図 120 植物珪酸体含量の層位分布

栽培種のイネ属は、2層下部を除く層準から産出する。3層では短細胞珪酸体が約 2000 個 /g、機動細胞珪酸体が約 4000 個 /g と多いが、2層上部、1層では短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともに 1000 個 /g 以下である。栽培植物以外では、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属が各層準で産出するが、いずれも少ない。

3. 考察

(1) 層相および珪藻化石群集からみた堆積環境

ここでは、上述の層相観察結果および珪藻化石群集の特徴に基づいて、各層形成期の堆積環境について検討する。

32層の植物遺体葉理を挟在する泥層は、好+真止水性種と流水不定性種の多産によって特徴付けられ、*Meridion constrictum* などの中～下流性河川指標種を含む好+真流水性種を伴う。多産する *Pinnularia sudetica* は、何処にでも分布する汎布種で、電解質物質が低～中程度の貧栄養～中栄養水域に出現する (Krammer, 1992)。また、*Gomphonema angustatum* は、全国の湖沼、河川、鉱泉等に広く分布する普通種で植物などに付着して生息する種である。よって、32層は、氾濫堆積物の流入する池沼や沼沢地のような堆積環境で形成されたと考えられる。

31層・30層の植物遺体葉理を挟在する泥炭質泥層では、*Hantzschia amphioxys* を主体とする陸生珪藻A群が多産し、沼沢湿地付着生種群を多く含む流水不定性種、好+真酸性種が多産することで特徴付けられた。また、塩分濃度の高い水域に耐性のある淡水～汽水生種を伴う。淡水～汽水生種の *Tryblionella plana* は、海岸、沿岸、河口などに分布する (Krammer and Lange-B., 1988) ほか、我が国では佐賀県嘉瀬川河口 (汽水域) から見出している (山川, 1994)。よって、31・30層形成期には、基準面が低下し、しばしば乾燥する沼沢または湿地のような堆積環境へ変化したと考えられる。

29層～27層の泥～有機質泥層では、陸生珪藻は減少し、沼沢湿地付着生種群を多く含む流水不定性種と好+真止水性種、好+真酸性種が多産するようになる。多産種の *Stauroneis acuta* は、全国の湖沼、河川等に広く分布する種で、汽水域にも出現する (田中, 2002) とされている。また、

Pinnularia ornata は、大型の種で我が国では埼玉県の仙女ヶ池や森林公園沼などで報告（原口ほか,1998）されている。以上のことから、29～27層形成期には再び水位が上昇し、氾濫堆積物が流入する弱酸性を呈する池沼～湿地のような堆積環境に変化したことが推定される。

26層～23層の植物遺体が混じる有機質泥層～泥層では、珪藻化石の産出が少なかった。珪藻化石が少なかったのは、産出種のほとんどが壊れたり溶解していたことを考慮すると、堆積後に何らかの影響で溶解してしまった可能性が高い。珪藻などの生物源シリカ鉱物は、温度増加および時間経過にしたがって、オパールA→オパールCT→石英に変化することが知られている（Mizutani,1977;Mitsui & Taguchi,1977;Kano,1979;Iijima & Tada,1981）。氾濫堆積物など堆積後に好气的環境下で大気に曝された堆積物や乾湿を繰り返す堆積物では分解されやすい傾向にある。26～23層のうち24・23層などは浮遊土砂を多く含む懸濁した氾濫水が浮遊沈降するような堆積場で形成された堆積物と推定される。堆積後には多少の水位変動が生じていることが窺える。そのため、このような乾湿変動が珪藻化石の保存状態が悪かった原因として考えられる。

22層・21層の植物遺体葉理を挟在する泥層は、珪藻群集の生態性の特徴が29層～27層に近似しており、貧塩不定性種、好+真酸性種と好+真アルカリ性種、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種と好+真止水性種が優占あるいは多産するようになる。調査地点では再び水位が上昇し、氾濫堆積物が流入する時期を挟在する、弱酸性を呈する池沼～湿地のような堆積環境に変化したことが推定される。

20層～19層の泥炭質泥～泥炭層では、珪藻化石がほとんど検出されなかった。層相から基準面が低下し、湿地の堆積環境に変化したことが推定されることから、珪藻化石が産出しなかった原因として、上記したような乾湿の繰り返しが一因として考えられる。

18～7層の有機質泥～泥層は、層相から、土壌生成が進行する時期を挟在する、遊土砂を多く含む懸濁した氾濫水が浮遊沈降するような堆積場で形成された堆積物と推定される。これら堆積物からは珪藻化石が少なかったが、上記したような乾湿を繰り返すにより分解消失している可能性が高い。また、7層は樹木の根に由来する擾乱が顕著である。後述する花粉分析結果から、ハンノキ属が多産することから、7層形成期には湿地に生育するハンノキが林分を形成していた可能性がある。

5層は、母材の異なる偽礫堆積物からなる。人為的営力により形成された盛土堆積物と判断される。

3層～2層は著しく攪拌された砂質泥からなる。これらの堆積物周囲から人為的営力による客土であり、それらが耕作等の人為的擾乱を受けたものと推定される。これら堆積層の珪藻化石群集は、水生珪藻が優占し、貧塩不定性種、pH不定性種と好+真アルカリ性種、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産する。多産種の *Amphora copulata* は、底生移動型の生活形態をとり、止水または流れの遅いアルカリ性の水域に多く出現する（Patrick and Reimer,1975）。*Cymbella cuspidata* は、好清水性種で水素イオン濃度に対しては、pH不定性種で湖沼や河川の砂泥上に多いとされている。*Gyrosigma fonticulum* は、淡水生種であるが汽水にも生息する。我が国では菅生沼（茨城県）、松川浦（福島県）、多鯰ヶ池（鳥取県）から報告されている（原口,1965,1966,2000,）。以上述べた多産種の生態的情報に基づくと、塩類が集積するような沼沢湿地のような場所が推定される。著しく攪拌されていることおよび、後述するイネ属植物珪酸体の産状を踏まえると、3層形成期に調査区は水田として土地利用されていたことが推定される。

1層の著しく攪拌された泥質砂層は、珪藻化石の産出が極めて少なかった。層相から人為的攪拌が

及んだ堆積物と判断され、植物珪酸体の産状などから耕作土の可能性もある。僅かに産出した珪藻化石は好気的環境に生育する陸生珪藻 A 群に限られたことから、乾湿の繰り返しによる分解が推定される。

(2) 調査地点の堆積層中で認められた変形構造について

今回の調査地点の堆積物では、25 層～23 層最下部、21 層～19 層最下部、18 層～7 層下部、7 層最上部～3 層上部（2 層最下部）、2 層上部～1 層の垂直方向の 5 つの範囲で連続する変形構造が確認された。これらの変形構造は、Matsuda (2000) により定義されている、水底下の堆積物にみられる地震動による変形構造に類似する。Matsuda (2000) によると、1 回の地震動によって変形した堆積物の垂直範囲を変形ゾーン (Deformation zone) と呼び、上から順に(1)水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット (liquidized deformation unit)、(2)上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焰状（ただしフレイム構造とは別種）の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット (hydroplastic deformation unit)、(3)下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット (brittle deformation unit)、から構成される。また、地震イベントの年代は変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まる。

今回の調査地点で確認された 5 つの範囲の変形構造を下位より DZ 1～5 とする。いずれも含水塑性変形ユニットに比定されるもので 1 回の地震イベントにより生じた変形ゾーンの可能性がある。そうだとすると各変形ゾーンの上限の層準が地震イベントに相当することから、DZ 4 が中世、DZ 5 が近世の地震イベントに由来することになる。今回の調査では現地調査を実施していないため変形ゾーンの空間的拡がりを観察記載できていない。今後、隣接調査区での検討や不攪乱堆積物の X 線写真撮影などによる変形ゾーンの確定、検討が必要である。また同様な地震動に伴う地層の変形は周辺の遺跡でも確認されている。各遺跡の地震イベントの対比ができればほぼ同一時間面での人間活動のあり方の時空間的比較検討が可能となる。

(3) 調査区周辺の古植生変遷

今回の花粉分析の結果、中世以前の堆積物は、いずれの試料も木本花粉はスギ属が非常に多い。スギ属花粉は本来生産量が多いため、実際の周辺植生よりも、出現率が多いと思われるものの、遺跡が立地する低地を中心に、スギが多く分布していたと思われる。スギは現在では山間部にその分布が限られているが、富山県入善町には低地にスギの天然林が存在しており、富山県魚津市の海底からはスギの埋没林が検出されている。また、北陸地方の遺跡からはスギの木製品や自然木が多数検出されていることから、かつては、低地にスギが多く生育していたと考えられている（鈴木,2002 など）。これまでの分析例でも、約 2000 年前を中心としてスギ属の花粉化石や埋没林が、山陰～北陸の日本海側において多く検出されていることから、これらの地域にスギ林が拡大していったと考えられている（高原,1998）。また、青谷上寺地遺跡の分析結果をみても（安・辻,2009; 古環境研究所,2009）、弥生時代～古墳時代を中心にスギ属の花粉化石が多産する。

その他の木本類は、モミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、サワグルミ属—クルミ属、ニレ属—ケヤキ属、ムクノキ属—エノキ属、トチノキ属、カエデ属、トチノキ属、エゴノキ属、イボタノキ属、トネリコ属などが検出される。これらは成長が早く、萌芽による再生が容易な種類であるため傷害に強い。このため、これらは河畔や林縁に明るい林地を構成していたと考えられる。なお、23 層ではモミ属が、

7層ではハンノキが極大となる。モミ属は斜面地など土壌流出が起きやすい場所に生育することから、23層およびその前後層形成期の集水域は、斜面崩壊や土砂流出が起きやすい状況におかれていた可能性がある。また、ハンノキ属の増加は、上記したように湿地林の成立を示唆する。

また、アカガシ亜属、シイノキ属などの常緑広葉樹も検出され、海岸沿いの丘陵地など温暖で安定した場所に生育していたと考えられる。今回の結果では、これら常緑広葉樹の出現率は低いが、桂見遺跡のように、同時期にシイ・カシ類の花粉化石が多産する結果もある(三好,1978)。また、東郷池ではスギ属の産出は少なく、ニレ属—ケヤキ属、ムクノキ属—エノキ属など河畔林を構成する種類に、アカガシ亜属、シイノキ属などの常緑広葉樹を伴う花粉組成である(岩内ほか,1995)。これは、後背山地の地形や地質、低地の地形や堆積環境などの要因によって、低地の植生に違いが生じているためとみられ、低地の植生に地域的な違いがあるためと考えられる。

中世以降の層位である3層以降ではマツ属が漸増し、2層上部ではほとんどがマツ属で占められる。マツ属は伐採地などに先駆的に侵入して二次林を作るほか、樹形が美しく、成長が早い有用材であるためしばしば植林される。マツ属は風媒花で花粉生産量が多いため、花粉化石の割合ほど増加したとは考えにくい。周辺でマツの二次林や植林が増加したことは確かであろう。

一方、草本花粉は5層で漸増し3層より上位で急増する。急増の原因はイネ科花粉の増加にある。また、植物珪酸体でも3層より上位でイネ属珪酸体が産出する。イネ属植物珪酸体は3層で多く2層、1層で少ないが、イネ属以外の植物珪酸体も同じ挙動をとる。このことから、イネ属植物珪酸体の増減は堆積物中へのイネ属珪酸体の供給量の変化したのではなく、風化や堆積速度など化石化の過程が影響していると思われる。さらに、ヨシ属、ガマ属、オモダカ属、スブタ属、ミズアオイ属、デンジソウ属、サンショウモ、アカウキクサ属など水生植物の花粉化石や植物珪酸体が検出される。このことから、3層より上位は、水田耕土として使われた可能性が高い。

なお、植物珪酸体ではクマザサ属を含むタケ亜科検出されるが、これらは日本海側の多雪地によく見られる種類であり、後背山地に由来すると考えられる。

引用文献

- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理,42,73-88.
- 安昭彦・辻 誠一郎,2009,平成18・19年度ボーリング調査と古環境分析 花粉化石群の記載と古環境. 鳥取県埋蔵文化財センター調査報告27 青谷上寺地遺跡10 第9次発掘調査報告書,鳥取県埋蔵文化財センター, 121-126.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I) .Almqvist&Wiksell,539p.
- Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) ,147p.
- Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画,155p.
- 原口 和夫,1965,鳥取県鯉ヶ池産珪藻類. 鳥取県立科学博物館, 郷土と科学,10,7-12.
- 原口 和夫,1966,埼玉県仙女ヶ池の珪藻類. 採集と飼育,28,346-351.

原口 和夫,2000,菅生沼の珪藻類.珪藻学会誌,16,63-74.

原口 和夫・三友 清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

Iijima, A. and Tada, R., 1981, Silica diagenesis of Neogene diatomaceous and volcanoclastic sediments In northern Japan. *Sedimentology*, 28, 185-200.

伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.

岩内明子・三好教夫・安田喜憲・福沢仁之・長谷義隆,1995,東郷池(鳥取県)の年縞粘土層の花粉分析学的研究.日本地質学会学術大会講演要旨 102, 114.

Kano, K., 1979, Deposition and diagenesis of siliceous sediments of the Onnagawa Formation .
Sci. Rep., Tohoku Univ., 14, 135-189.

古環境研究所,2009,古環境調査土壌分析.鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 27 青谷上寺地遺跡 10 第9次発掘調査報告書,鳥取県埋蔵文化財センター,149-174.

小林 弘・出井 雅彦・真山 茂樹・南雲 保・長田 啓五,2006,小林弘珪藻図鑑.第1巻,(株)内田老鶴圃,531p.

近藤 鍊三,2010,プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.

Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER, 353p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. Suesswasserflora von Mittel-europa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae, Surirellaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.

Lowe, R. L.,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati. 334p.

Matsuda,J.-I,2000,Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain,Osaka,japan,*Sedimentary Geology*,135,99-116.

Mitsui, K and Taguchi, K., 1977, Silica minerals diagenesis in Neogene Tertiary shales in the Tempoku district, Hokkaido, Japan. *Jour. Sedim. Petrol.*, 47, 158-167.

Mizutani, S., 1977, Progressiv ordering of cristobalitic silica in early stage of diagenesis.*Contri.Miner.Petrol.*,61,129-140.

三好教夫,1978,桂見遺跡(鳥取県)の花粉分析.桂見遺跡発掘調査報告書.71-75.

中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

Patrick,R. and C.W.Reimer,1975,The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii 2 (1). *Monogr.Acad. Natur.Sci.Philadelphia*,13,213p.

Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G.,1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. Cambridge University Press, Cambridge. 747p.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

鈴木三男,2002,日本人と木の文化.八坂書房,255p.

高原 光,1998,スギ林の変遷.図説 日本列島植生史,安田喜憲・三好教夫編,朝倉書店,207-223.

田中 正昭,2002,日本淡水産動・植物プランクトン図鑑.584p.

Vos, P. C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologica*, 269/270,285-296.

渡辺 仁治・浅井 一視・大塚 泰介・辻 彰洋・伯耆 晶子,2005,淡水珪藻生態図鑑.内田老鶴圃,666p.

柳沢 幸夫,2000,II -1-3-2- (5) 計数・同定.化石の研究法—採集から最新の解析法まで—,化石研究会,共立出版株式会社,49-50.

山川清次,1994,嘉瀬川河口の珪藻.珪藻学会誌,9,41-72.

Witkowski, A., Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D.,2000,Diatom flora of Marine coast I. *Iconographia Diatomologica* 7. A.R.G.Gantner Verlag K.G., 881p.

Zong,Y. & B.P.Horton,1998,Diatom zones across intertidal flats and costal saltmarshes in britain.*Diatom research*,13,2,375-394.

追記

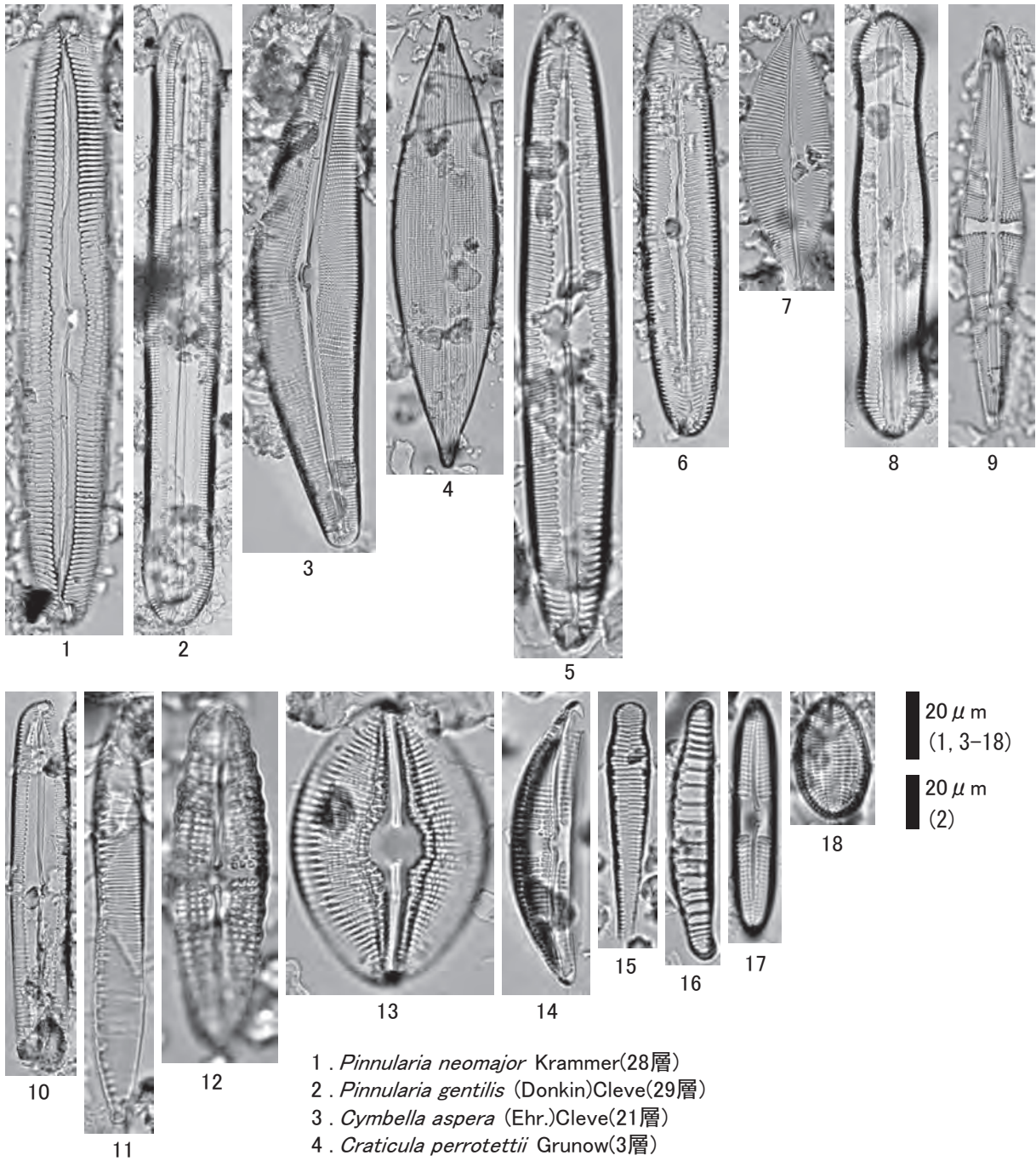
本章の分析は平成23年度に3区2H-9e～fで行った下層確認トレンチで採取した試料で実施したものである。

本章で使用する土層番号は、このトレンチの土層断面図の番号を用いている。第IV章第2節で述べた基本層序の呼称との対応関係は以下のとおりである。

本章土層番号	基本層序番号
1層	第Ⅲ-1 a層
2層	第Ⅳ-1 a層
3層	第Ⅳ-2 a層
5層	整地層
7層	第Ⅴ-2 b層
11層以下	第Ⅵ層

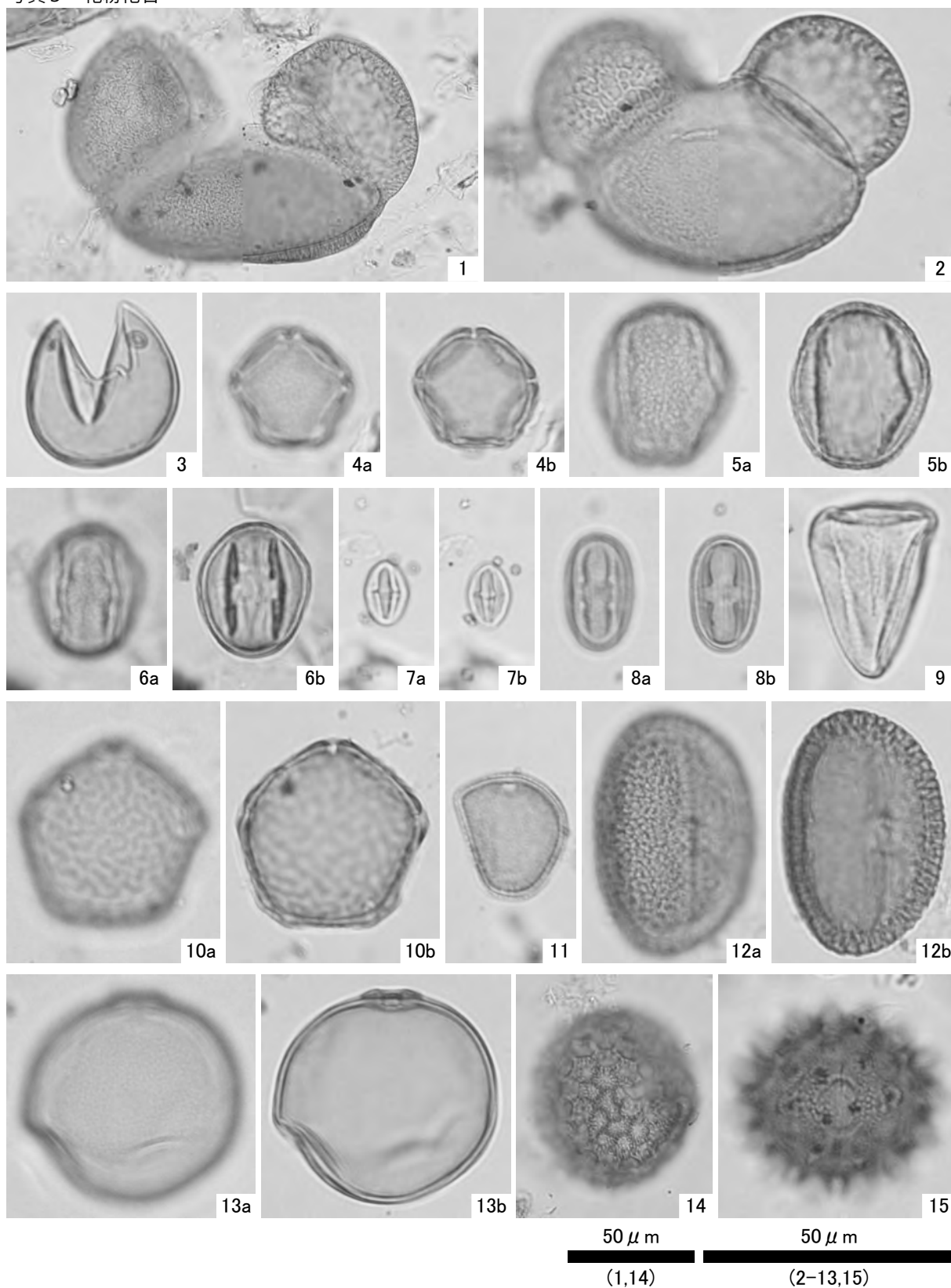
分析結果から、第Ⅴ-2 b層までは、乾燥する期間が多少あるものの、基本的には湖沼や沼沢地の低湿な環境にあったこと、整地された後の第Ⅳ層からは水田耕作が行われたことが明らかになった。

写真4 珪藻化石



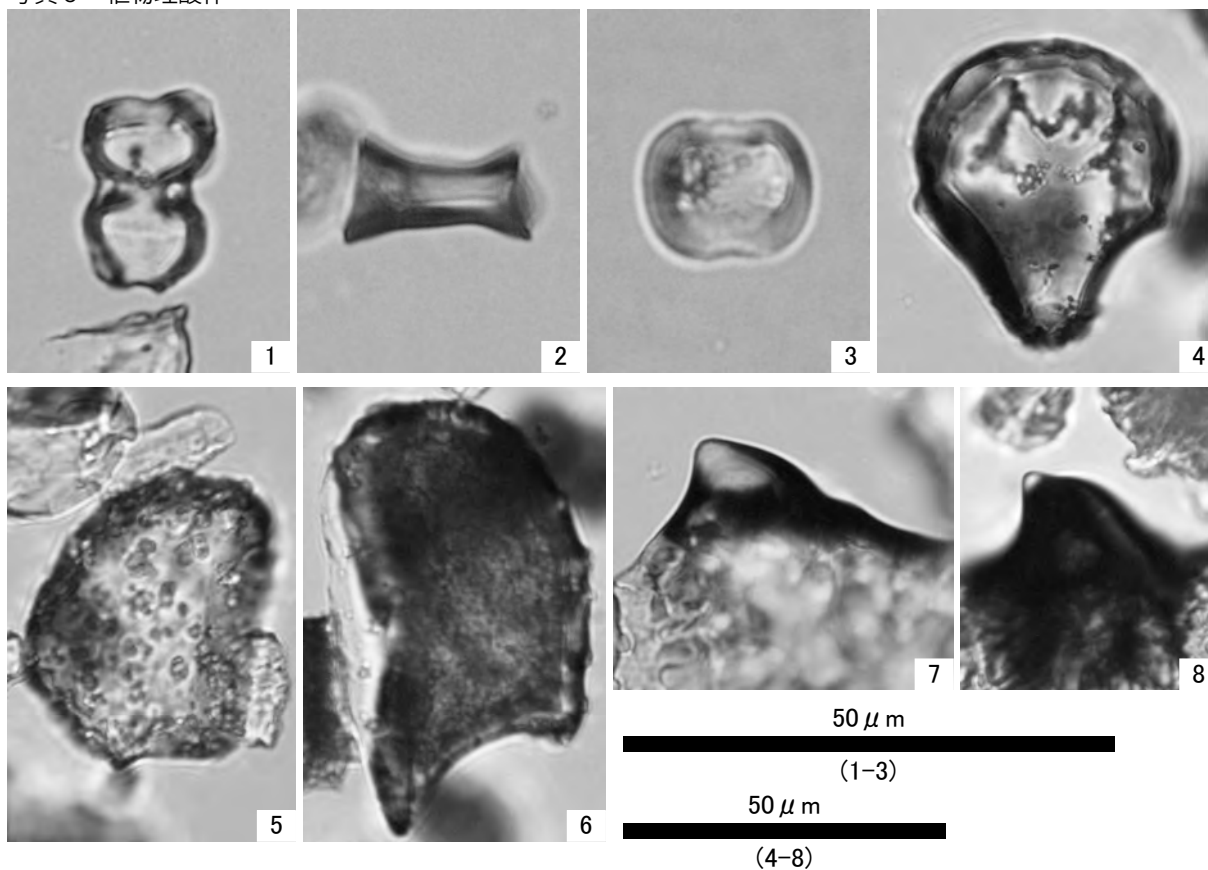
- 1 . *Pinnularia neomajor* Krammer(28層)
- 2 . *Pinnularia gentilis* (Donkin)Cleve(29層)
- 3 . *Cymbella aspera* (Ehr.)Cleve(21層)
- 4 . *Craticula perrotettii* Grunow(3層)
- 5 . *Pinnularia sudetica* (Hilse)M.Peragallo(32層)
- 6 . *Pinnularia viridis* (Nitz.)Ehrenberg(30層)
- 7 . *Cymbella cuspidata* Kuetzing(2層1)
- 8 . *Pinnularia ornata* H.Kobayasi(22層)
- 9 . *Stauroneis acuta* W.Smith(21層)
- 10 . *Pinnularia brevicostata* var. *sumatrana* Hustedt(21層)
- 11 . *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(30層)
- 12 . *Achnanthes crenulata* Grunow(30層)
- 13 . *Diploneis yatukaensis* Horikawa et Okuno(30層)
- 14 . *Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald(2層1)
- 15 . *Meridion constrictum* Ralfs(31層)
- 16 . *Eunotia biseriatoides* H.Kobayasi,K.Ando & T.Nagumo(30層)
- 17 . *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot(32層)
- 18 . *Cocconeis euglypta* Ehrenberg(31層)

写真5 花粉化石



- | | | |
|--------------------|-------------------------|-------------------|
| 1. モミ属(22層) | 2. マツ属(1層) | 3. スギ属(1層) |
| 4. ハンノキ属(5層) | 5. コナラ属コナラ亜属(1層) | 6. コナラ属アカガシ亜属(1層) |
| 7. クリ属(26層) | 8. シイ属(5層) | 9. カヤツリグサ科(5層) |
| 10. ニレ属-ケヤキ属(2層;2) | 11. ガマ属(5層) | 12. ソバ属(2層;1) |
| 13. イネ科(1層) | 14. サナエタデ節-ウナギツカミ節(22層) | 15. キク亜科(22層) |

写真6 植物珪酸体



- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(1層) | 2. クマザサ属短細胞珪酸体(2層;1) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(1層) | 4. イネ属機動細胞珪酸体(3層) |
| 5. クマザサ属機動細胞珪酸体(1層) | 6. ヨシ属機動細胞珪酸体(1層) |
| 7. イネ属穎珪酸体(1層) | 8. イネ属穎珪酸体(3層) |

第Ⅵ章 総括

今回、高住地区では初めての大規模な発掘調査を実施した。その結果、古代から江戸時代にかけて、自然流路を中心に人々がどのように調査地周辺を利用してきたのか、その一端がわかってきた。

古墳時代以前

調査区西側で実施した自然科学分析の結果（第Ⅴ章）、調査地一帯は長らく浅い沼沢地または湿地の状況が続いていたことが判明した。第Ⅴ層に縄文～古墳時代中期の土器をほとんど含まれないことから、その頃は人々が居住などに利用するのに適していなかったことが考えられる。一方、調査地北東部では縄文時代前期の土壌層である第Ⅶ-1 a層が確認でき、自然堤防などの微高地上で何らかの活動をしていたことが考えられ、今後実施する下層の調査によって明らかになるだろう。また、12河川からは縄文時代中期以降の土器や石器が出土した。土器はいずれも表面が摩耗しており、調査地の上流域にその頃の生活域が存在していたと想定される。

飛鳥～平安時代

調査地で本格的に人々の影響が及ぶようになるのは古墳時代後期後葉以降で、今回の調査で第3面で確認した遺構群にこの段階のものが含まれていると考えている。建物跡などは確認されなかったが、第Ⅴ層からは調査地の西側を中心に多くの遺物が出土した。丘陵裾あたりに何らかの活動の場があったことが考えられる。

その頃のまとまった遺物群として15平坦面及び21溝出土の一群がある。須恵器の蓋天井部外面または坏底部外面をみると、全体を回転ヘラケズリするものと、外周のみにケズリを施しそれ以外はヘラ切りのままか粗いナデを行っているものが混在する。鳥取県東部でこの頃の須恵器の編年が確立されておらず、近畿での様相と年代観を用いざるを得ないが、回転ヘラケズリを省略する点や小形化していないことを重視して古墳時代後期末から飛鳥時代前葉ごろの一群と考えている。

第2面では調査地中央に12河川が流れており、河川内に堰状構造物が構築されていたことから、川の水を何かに利用していた事が判明した。

12河川からは飛鳥～平安時代の供膳具の完形品を含む多くの土器が出土しているが、すべての時期の土器が均一に出土したわけではない。時期の判断が行いやすい坏と蓋でみると、受部を持つ須恵器坏とその対となる蓋のセットや中森祥が提示した古代土器変遷案のⅠ～Ⅱ期に相当するものは一定量出土する一方で、特にⅢ-2期のものはかなり少なくなり、次のⅣ～Ⅴ期の土器は再び多くなる。西側の丘陵を越えたところには現在調査中の良田平田遺跡があり、ここではⅢ-2期の土器が一定量出土している一方で、Ⅴ期の土器はほとんど出土しないようである。詳細な状況は整理作業が進むのを待つしかないが、土器の多寡の変化が2遺跡で連動する可能性があり、両遺跡の関連を考える上で重要であろう。

完形品とともに口縁部や頸部を故意に打ち欠いた坏や壺、漆やヘラで「×」などの記号が書かれた蓋が多く出土している点も注目すべきである。第Ⅳ章第4節で触れたように、完形品を中心とした土器は主に河川内の構造物の近くで多くなる傾向があり、1249、1250構造物の周辺でより顕著である。一般的な使用時の破砕品を廃棄したのとは異なり意図的な行為によるものと考えられる。

漆を用いて記号を書いた土器について検討を行った谷本進は、古墳時代からみられる赤色顔料を用

いたものを受け継いで7世紀前半に出土例が増加し、7世紀末には衰退するものの9世紀頃まで残るとする。そして赤色顔料や漆で記号が書かれた土器は近畿地方から島根県に分布し、その性格として古墳の葬送儀礼、律令的祭祀、製鉄工人による祭祀の3つがあるとした^{註1}。また古川登はこうした記号が「神あるいは被葬者という対象者・使用者の特定を意味する」とし、「集落遺跡の祭祀においては、その対象者である神に捧げる「神饌」を盛る器に彩色記号が描かれたと解することが無理のない理解である」とする^{註2}。

漆で記号や文字が書かれた土器は、谷本や古川が検討した1990年代以降に出土事例が増加している。古代の出土文字資料の集成データなどを元に調べてみると、その範囲は東に広がり、宮城県、茨城県、東京都、新潟県、富山県、石川県でも出土していることが確認できた^{註3}。これらの事例は多くが8世紀以降のもので、墨書土器に混ざって少数の漆書土器が出土する場合が多い。新潟県、富山県、石川県の漆関連遺物について検討した朝田要は、書かれているのが単純な記号や文字がほとんどで、墨書土器とともに出土すること、墨書と同じ記号であることなどから、漆書が文字を知らない特定のグループのための「容器の識別記号としての性格が強い」とする。また出土する遺跡に偏りがあること、墨ではなくあえて漆を使用していることなどから、多数の漆書が出土する遺跡は漆の生産や消費に深く関わっていたとし、こうした遺跡から漆液容器や漆工に関する遺物が出土することを示した^{註4}。漆書土器と漆製品製作との関連については、茨城県栗島遺跡の調査報告書でも指摘されている^{註5}。この遺跡でも漆工に関連する道具と漆書土器が出土しているが、共伴する墨書土器とは書かれる記号(文字)が異なり、書く内容でも区別している可能性がある。

谷本が指摘するように、漆書をするのには複数の理由が存在することが考えられる。この差は地域や時期の差によることも考えられる。漆を使う起源が両者で異なることもありうるので、これらを同じ俎上へのせて議論すべきでないのかもしれない。今回は出土範囲を把握することを主な目的として作業を行っており、現時点では詳細な検討が行えていない。これについては今後の課題としておきたい。

高住平田遺跡の漆書土器については、東日本の事例のように同時期の墨書土器が出土していないことや、漆工具が出土していないこと、ほぼ完形で複数がまとまって出土したことから、祭祀に使われたものと考えておきたい。

漆書土器を含む土器群が儀式などに伴うものとする、構造物構築時あるいは構築後に行った祭祀行為が考えられる。古代の水辺での祭祀行為としては齋串や形代木製品を用いるものが知られており、当遺跡の周囲では岩吉遺跡や桂見遺跡で木製祭祀具が出土している。こうした祭祀は律令国家体制が整備される中で都を中心に行われたものが全国に影響を及ぼしたものであるとされる。ただ、木製祭祀具は包含層から出土するものの、河川内からは出土しておらず、律令的祭祀とはしがたい。一方で多くの土器を埋納、投棄する行為はそれ以前から存在し、今回のものは律令的な色合いが少ない祭祀行為なのかもしれない。

第3面では粘土採掘を作ったと思われる土坑を確認した。第V-1 a層と類似する埋土であり、12河川と同時期のものであろう。採掘されたと思われる第V-2 b層は胎土分析結果から須恵器の胎土に近いようである。また第V層や12河川内からは窯の焼き台に転用されたとと思われる須恵器片が出土している。これらのことから遺跡の周辺に須恵器窯が存在した可能性も考えられる。

第2面段階では大規模な整地を行っていた。整地層は周囲よりも低い調査地中央部を中心に確認

できた。この上面では建物跡が確認できなかったことや第1面の様相から、水田開発のためのものと考えている。

整地層からは銅印が出土している。鳥取県内では5例目で、発掘調査で出土位置や層位が判明したものとしては初めてである。有孔蒼鈕であることや、印面が1寸四方で1文字あることから、平安時代の私印と考えられる^{註6}。印は文章に押すことで内容が正しいことを証明し、偽造を防ぐことを目的として、律令体制が整備される中で公文書に押印する官印のみが認められていた。その後、貴族や寺社での使用が行われるようになり、私印の使用を正式に認めた貞観10(868)年の太政官符ではその理由に文書に印がないことで「家司雑掌総論無絶」とあることから、この頃には押印する行為が広く行われていたようである。今回の銅印も同様の使われ方をしたもので、調査地周辺に文書を取り扱う施設が存在した可能性がある。

第Ⅳ層から出土した刀装具は役人などが持つ儀仗刀のものと思われるが、調査地でこれと関連する遺構が確認できないため、先に述べた銅印とともに詳細は判然としない。

鎌倉時代以降

12河川がほぼ埋没した段階で調査地で唯一の掘立柱建物が造られた。すぐ近くに直線的で区画溝の可能性のある1193溝があったものの、それ以外に目立った遺構は確認できなかった。そのため、建物の性格についてはよく分かっていない。

鎌倉時代頃になると川は2河川に変わり、調査地一帯で水田耕作が行われるようになる。2河川新段階の水田をみると、地形に合わせた比較的の小規模な区画をしていたことが分かる。2河川は、江戸時代になると水田耕作に利用しやすくするためと思われるが、1004溝として整備しており、これが昭和50年頃からはまる圃場整備まで利用された「小井手」に受け継がれる。また第2面で確認した粘土採掘坑についてもこの頃のものと思われ、引き続き採掘していたようである。

この頃の遺物に注目すると、2河川古段階の埋土からは12～14世紀頃の陶磁器が出土しており、これに伴って出土した土師器の皿や坏はほとんどが手づくねで成形されていた。同時期の因幡では、平安時代から続く回転台を利用したものが一般的である。在地の工人が、手づくね成形が主体である京都からの情報をいち早く受容したことが考えられる。

京都からの影響については、第Ⅳ層から出土した人形代からもうかがい知ることができる。立烏帽子をかぶった人物を表現したものは全国的にもあまり例がなく、眉と呼ばれる前面のへこみや後頭部側に通気のための隙間(風口)があることなど、具体的に表現されている。立烏帽子は有職故実では清涼殿へ昇ることができる殿上人と呼ばれる人々のみかぶることが許されたものである。殿上人は官位でいえば基本的には五位以上であり、因幡では、従五位下相当の国守しか該当する者がいない。国府から離れた高住地域で、立烏帽子をかぶった人物を目にする機会はほとんどないと思われる。人形代の烏帽子の表現をみると、形状や作法をよく知った者でないと作るのは難しいと考えられるので、作者がそうした情報を得ることができたことを示している。そのため、都の文化に関する情報がこの地にもたらされていたことを示すものといえるかもしれない。人形代は、第Ⅳ層から出土した遺物や烏帽子の形状を絵巻物に描かれているものと比較すると、平安時代末から鎌倉時代に作られたものと考えている。

遺跡は湖山池のほど近くにあり、池から日本海を介した対外交流が行われていた可能性がある。時代は下るが、15世紀になると湖山池東岸に守護所として天神山城が築かれるのもそうした理由があっ

たとえられる。そうした交流の中で京都からの情報が得られたとしても不思議ではなからう。

今回の調査で、高住地区のような小規模な谷底平野をどのように利用してきたか、地域の土地開発の歴史を知るきっかけができたのではないかと考えている。

註

- 1 谷本進「朱書記号と漆書記号の展開」『但馬考古学』第9集 1995
- 2 古川登「顔料あるいは塗料による彩色記号のある須恵器について」『岐阜史学』89号 岐阜史学会 1995
- 3 前掲谷本論文、古川論文の他、朝田要「総領浦之前遺跡出土の漆関連遺物について—コップ形須恵器を中心に—」『富山考古学研究』第7号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2004、三木雅子「第8節 名和飛田遺跡出土の彩色記号をもつ須恵器について」『名和飛田遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団 2005の集成データに明治大学古代学研究所墨書・刻書データベース (http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html)、『青森県史』資料編古代2（青森県史編さん古代部会 2008）などを参考に収集した。ただし、収集作業が不十分な地域がいくつかあるため、収集に漏れた資料があると思われるので留意願いたい。
- 4 前掲朝田論文と同じ
- 5 『栗島遺跡』財団法人茨城県教育財団 2007
- 6 久米雅雄「日本古代印研究」（『国立歴史民俗博物館研究紀要第79集』国立歴史民俗博物館 1999）に詳しい。

表6 漆書土器出土地一覧

遺跡名	所在地	時期	点数	漆書
市川橋遺跡	宮城県	8世紀後葉～10世紀	20	十、ノ、万、内、丈
山王遺跡	宮城県	8世紀～9世紀	5	大、太、○
中谷内遺跡	秋田県	9世紀前葉	1	×
山田遺跡	山形県	8世紀末	1	一
宮ノ下遺跡	山形県	8世紀後葉	3	十
西島A遺跡	石川県	8世紀後葉～9世紀前葉	1	七
徳久・荒屋遺跡	石川県	8世紀後葉～9世紀前葉	5	二、三、井、■
上荒屋遺跡	石川県	9世紀前葉	2	一、∴
戸水C遺跡	石川県	9世紀前葉	1	十
八日市B遺跡	石川県	8世紀末	1	×
八日市サカイマツ遺跡	石川県	8世紀後葉～9世紀前葉	10	十、■
藤江B遺跡	石川県	8世紀後葉	1	卅
加茂遺跡	石川県	8世紀前葉、8世紀後葉	2	上、十
田中遺跡	石川県	9世紀後葉	1	八
北方E遺跡	石川県	7世紀後葉	1	宮
四柳白山下遺跡	石川県	9世紀中葉	1	粳女
森ガッコウ遺跡	石川県			一、十、千、万
北高木遺跡	富山県	8世紀後葉	1	十
高瀬遺跡	富山県	9世紀前葉	1	十
桜町遺跡	富山県	8世紀後葉	6	大、N、十
惣領浦之前遺跡	富山県	8～9世紀	9	
堀切遺跡	富山県	9世紀中葉	1	■
間尽遺跡	富山県		10	个、大、立、■
中保B遺跡	富山県		1	×
石名田木舟遺跡	富山県	8世紀中葉～9世紀	9	十、一

遺跡名	所在地	時期	点数	漆書
在房遺跡	富山県		4	■
上野南遺跡	富山県		1	十
的場遺跡	新潟県	奈良～平安	13	一、十、大、「」、卅、■
北浦 A 遺跡	新潟県	?	1	○
緒立 C 遺跡	新潟県	奈良～平安	1	十
八幡林遺跡	新潟県	9世紀中葉～末	4	■子、■、石
箕輪遺跡	新潟県	9世紀後葉～末	5	人、×
一之口遺跡	新潟県	平安前期	1	■
井ノ町遺跡	新潟県	9世紀前葉～10世紀初頭	4	記号
鬼倉遺跡	新潟県	9世紀前葉～中葉	3	×、■
上田遺跡	新潟県	9世紀中葉～後葉	61	山、大、十、則天文字?、他記号1種
大坪遺跡	新潟県		1	■
八幡遺跡	新潟県	8世紀後葉～9世紀中葉	2	記号? 1種
江添 C 遺跡	新潟県	9世紀第2～第3四半期	12	田、大
今池遺跡	新潟県	9世紀	1	ツ
越前遺跡	新潟県	8世紀末～9世紀初頭	1	大
五十刈遺跡	新潟県	9世紀	1	十
竹直神社遺跡	新潟県	9世紀中葉～10世紀中葉	1	大
寺町遺跡	新潟県	8世紀後葉～9世紀前葉	1	○
腰廻遺跡	新潟県	奈良～平安	2	十、一
船戸川崎遺跡	新潟県	9世紀	4	十、一、千
栗島遺跡	茨城県		17	十、卅、⊖
鹿の子 C 遺跡	茨城県		1	七
東岡中原遺跡	茨城県		2	十、□
武蔵国府関連遺跡	東京都		2	由カ、■
滝岡田古墳	京都府	6世紀末	1	×
知見 1 号墳	兵庫県	7世紀後葉	2	×
文堂古墳	兵庫県	7世紀初頭～中葉	25	×、□
畑山遺跡	兵庫県	7世紀後葉	1	×
砂入遺跡	兵庫県	9世紀前葉	1	○
東家の上 3 号墳	兵庫県	7世紀中葉	3	×、■
西家の上 2 号墳	兵庫県	7世紀初頭	2	一
穴ヶ谷西 11 号墳	兵庫県	7世紀前葉	2	×、■
森地区の古墳	兵庫県	7世紀前葉	1	×
三保土戸遺跡	兵庫県	8世紀前葉	1	寺カ
七日市遺跡	兵庫県	8世紀中葉	1	×
山垣遺跡	兵庫県	7世紀後葉	2	春マカ、富貴
下小西坪遺跡	兵庫県	8世紀	3	×、大
高田遺跡	兵庫県	8世紀後葉	40	H、N、D、他記号2種
浦富 5 号墳	鳥取県	7世紀末～8世紀初頭	2	×
高住平田遺跡	鳥取県	7世紀後葉～8世紀初頭	5	×、△カ、⊖カ
吉岡遺跡（大海地区）	鳥取県	7世紀後葉～8世紀前葉	1	×
長瀬高浜遺跡	鳥取県	7世紀前葉	1	×
大御堂廃寺跡	鳥取県		1	記号1種
石州府古墳群	鳥取県	6世紀末～7世紀後葉	45	□、□、十、〇、他記号5種
石州府第 4 遺跡	鳥取県	7世紀後葉	3	×、他記号2種
出雲国府関連遺跡	島根県	8世紀初頭	1	×

表7 土坑、ピット、溝一覧表

図	区	地区	面	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺物	備考
24	2	1H-4a	1	8 土坑	3.52	2.46	0.34	○(土・陶=中)	埋土中に礫・木材
24	2	1H-3a	1	9 土坑	1.82	1.54	0.13	×	埋土中に礫・木材
25	3	2H-1e	1	1017 ピット	0.28	0.22	0.14	×	
25	3	2H-1e	1	1018 ピット	0.26	0.23	0.09	×	
25	3	2H-1f	1	1019 ピット	0.41	0.38	0.19	○(須=不)	
25	3	2H-2e	1	1014 土坑	3.41	2.04	0.43	○(土・陶=中)	枝材多数
26	3	1H-10d	1	1160 土坑	0.52	0.43	0.07	×	
26	3	1H-10d	1	1162 土坑	2.56	0.61	0.18	×	
26	3	2H-1d	1	1164 土坑	0.62	0.32	0.07	×	
26	3	2H-1d	1	1163 ピット	0.48	0.44	0.24	×	
26	3	2H-3e	1	1161 土坑	1.31	0.50	0.25	×	
26	3	2H-1d	1	1330 溝	5.00	1.46	0.26	○(陶=中)	
40	1	1H-9c	2	213 土坑	(0.49)	(0.17)	0.32	×	
40	1	1H-9c	2	214 土坑	(0.62)	(0.74)	0.25	×	
40	1	1H-9b	2	216 土坑	1.33	(0.74)	0.14	×	
40	1	1H-9b	2	217 土坑	0.75	0.36	0.21	×	
40	1	1H-9a	2	218 土坑	0.64	0.59	0.10	×	
40	1	1H-9c	2	222 土坑	(3.80)	(0.82)	0.11	○(土=中)	
40	1	1H-9a	2	219 土坑	0.62	0.44	0.21	×	
40	1	1H-9a	2	220 土坑	0.68	0.53	0.22	×	
41	1	1H-9b	2	215 土坑	(10.18)	(5.30)	0.23	×	
42	1	1H-7j	2	1009 土坑	1.59	(0.86)	0.17	○(瓦)	
42	1	1H-3h	2	1012 土坑	2.50	(2.26)	0.20	○(陶=中)	
42	1	1H-6j	2	1010 土坑	1.16	0.68	0.21	○(土=不)	
42	1	1H-2h	2	1011 土坑	0.80	0.35	0.02	×	
43	1	1G-2i	2	1107 土坑	0.36	0.30	0.08	×	
43	1	1G-2i	2	1105 土坑	0.44	0.34	0.27	×	1106 土坑<
43	1	1G-2i	2	1122 土坑	0.80	0.42	0.40	×	
43	1	1G-3i	2	1092 土坑	0.48	0.32	0.05	○(土=不)	
43	1	1G-3i	2	1086 土坑	0.45	0.28	0.06	×	
43	1	1G-3i	2	1093 土坑	0.30	0.18	0.03	×	
43	1	1G-3i	2	1130 土坑	0.50	0.27	0.05	×	
43	1	1G-3i	2	1085 土坑	0.56	0.40	0.08	×	
43	1	1G-4i	2	1089 土坑	0.94	—	0.09	×	
44	1	1G-6i	2	1044 土坑	0.71	0.55	0.11	×	
44	1	1G-6j	2	1036 土坑	0.88	0.62	0.16	×	
44	1	1G-6j	2	1045 土坑	0.52	0.34	0.05	×	
44	1	1G-6j	2	1046 土坑	0.26	0.22	0.07	×	
44	1	1G-6j	2	1034 土坑	1.14	0.95	0.22	×	
44	1	1G-6j	2	1035 土坑	1.59	0.94	0.19	×	1037 土坑>
45	1	1G-7j	2	1047 土坑	(0.46)	(0.20)	0.20	×	
45	1	1G-7j	2	1048 土坑	0.33	0.21	0.11	×	
45	1	1G-7j	2	1049 ピット	0.28	0.26	0.24	×	
45	1	1H-7a	2	1061 土坑	0.61	0.41	0.18	×	
45	1	1H-7a	2	1060 土坑	0.40	0.34	0.08	×	
45	1	1H-9a	2	1030 土坑	2.16	(2.10)	0.18	×	
46	1	1G-2i	2	1099 土坑	0.76	0.58	0.38	×	
46	1	1G-2i	2	1098 土坑	1.12	0.64	0.36	×	
46	1	1G-2i	2	1100 土坑	1.00	0.62	0.37	×	
46	1	1G-2i	2	1101 土坑	1.24	0.43	0.54	×	
46	1	1G-2i	2	1102 土坑	(2.34)	0.46	0.16	×	
47	1	1G-3i	2	1091 土坑	1.23	0.85	0.13	×	
47	1	1G-3i	2	1087 土坑	(0.98)	(0.39)	0.10	×	
47	1	1G-4i	2	1090 土坑	0.61	0.34	0.24	×	
47	1	1G-6i	2	1039 土坑	1.53	0.76	0.17	○(土・須=不)	
47	1	1G-6j	2	1038 土坑	1.01	0.60	0.17	×	
47	1	1G-6i	2	1041 土坑	0.75	0.72	0.18	×	
47	1	1G-5i	2	1043 土坑	0.68	0.62	0.12	×	
47	1	1G-6j	2	1037 土坑	0.80	0.80	0.21	×	1035 土坑<

図	区	地区	面	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺物	備考
47	1	1G-6i	2	1040 土坑	2.08	0.99	0.11	×	
48	1	1G-6j	2	1033 土坑	1.52	1.41	0.22	○(土=中)	
48	1	1G-7j	2	1051 土坑	0.72	0.57	0.17	×	
48	1	1G-7j	2	1050 土坑	0.66	0.55	0.22	×	
48	1	1G-6j	2	1032 土坑	1.92	1.46	0.16	×	
48	1	1G-7j	2	1052 土坑	0.84	0.64	0.24	×	
48	1	1G-7j	2	1053 土坑	0.86	0.50	0.08	×	
49	1	1H-7a	2	1062 土坑	(0.43)	(0.19)	0.12	×	
49	1	1H-7a	2	1059 土坑	0.41	0.40	0.12	×	
49	1	1H-7a	2	1058 土坑	(0.70)	(0.54)	0.17	×	
49	1	1G-4j	2	1123 土坑	(5.46)	(0.50)	0.17	×	
50	1	1H-7a	2	1079 土坑	0.94	0.88	0.12	×	1066 土坑>
50	1	1H-7a	2	1080 土坑	1.21	(0.58)	0.12	×	1081 土坑>
50	1	1H-7a	2	1069 ピット	0.36	0.32	0.14	×	
50	1	1H-7a	2	1065 土坑	0.41	0.36	0.16	×	
50	1	1H-7a	2	1064 土坑	0.70	0.43	0.20	×	1063 土坑<
50	1	1H-7a	2	1082 土坑	0.80	0.48	0.17	×	1068 土坑>
50	1	1H-8a	2	1071 土坑	0.31	0.30	0.10	×	
50	1	1G-8j	2	1073 土坑	0.58	0.57	0.14	×	
51	1	1G-2h	2	1117 土坑	(1.90)	(0.70)	0.14	×	
51	1	1G-2h	2	1119 土坑	1.02	0.77	0.08	×	
51	1	1G-2h	2	1120 土坑	1.64	1.09	0.10	×	
51	1	1G-2h	2	1121 土坑	1.72	0.68	0.12	×	
51	1	1G-3i	2	1096 土坑	(2.78)	(2.13)	0.22	×	2 河川>
52	1	1H-7a	2	1067 土坑	1.54	1.01	0.25	×	
52	1	1H-7a	2	1066 土坑	0.50	0.45	0.17	○(縄・弥)	1079 土坑<
52	1	1H-7a	2	1070 土坑	1.06	0.72	0.26	○(土=不)	
52	1	1H-8a	2	1072 土坑	0.26	0.24	0.10	×	
52	1	1H-7a	2	1081 土坑	0.30	0.28	0.15	×	1080 土坑<
53	1	1G-5j	2	1128 土坑	1.10	0.88	0.16	×	粘土採掘坑
53	1	1G-5j	2	1152 土坑	1.16	0.52	0.24	○(縄・弥)	粘土採掘坑
53	1	1G-5j	2	1129 土坑	1.37	0.93	0.28	×	粘土採掘坑
53	1	1G-5j	2	1155 土坑	3.01	1.28	0.11	×	粘土採掘坑
53	1	1G-7i	2	1074 土坑	1.89	(1.08)	0.12	×	粘土採掘坑
53	1	1G-6i	2	1077 土坑	(1.48)	(1.37)	0.19	○(須=不)	粘土採掘坑
53	1	1G-9j	2	1076 土坑	(2.71)	(0.73)	0.27	×	粘土採掘坑
54	1	1G-8j	2	1075 土坑	10.78	4.30	0.11	×	粘土採掘坑
55	1	1G-2i	2	1104 土坑	0.55	0.40	0.30	○(土=中)	
55	1	1G-2i	2	1097 土坑	0.63	0.41	0.31	○(土=不)	
55	1	1G-2i	2	1114 土坑	1.07	0.54	0.32	×	
55	1	1G-2i	2	1108 土坑	0.34	0.31	0.19	×	
55	1	1G-2i	2	1103 土坑	0.34	0.33	0.36	×	
55	1	1G-2h	2	1115 土坑	1.05	0.50	0.26	×	
55	1	1G-2i	2	1106 土坑	(0.42)	0.42	0.32	○(土=不)	1105 土坑>
55	1	1G-2i	2	1112 土坑	0.40	0.36	0.46	×	
55	1	1G-2h	2	1116 土坑	2.44	0.91	0.37	×	
56	1	1G-7j	2	1054 土坑	0.45	0.34	0.18	×	
56	1	1H-7a	2	1055 土坑	(0.36)	(0.14)	0.08	×	
56	1	1H-7a	2	1056 土坑	(0.58)	(0.16)	0.18	×	
56	1	1H-7a	2	1057 土坑	(0.88)	(0.74)	0.15	○(土=古)	
56	1	1H-7a	2	1068 土坑	0.82	0.48	0.10	×	1082 土坑<
56	1	1H-7a	2	1063 土坑	0.62	0.52	0.14	×	1064 土坑>
56	1	1G-3i	2	1125 土坑	(2.32)	1.19	0.16	×	
57	2	1H-8c	2	24 土坑	2.47	2.14	0.24	×	
57	2	1H-6c	2	46 土坑	(2.01)	(1.84)	0.36	○(土・須=古)	12 河川>
58	2	1H-2b	2	61 土坑	1.15	0.95	0.20	×	粘土採掘坑
58	2	1H-3b	2	52 土坑	1.00	0.95	0.07	×	粘土採掘坑、51 土坑<
58	2	1H-3b	2	51 土坑	1.94	1.81	0.24	○(須=墳)	粘土採掘坑、52 土坑>
58	2	1H-2b	2	55 土坑	1.76	0.96	0.06	○(須=古)	粘土採掘坑、56 土坑<
58	2	1H-2b	2	56 土坑	(1.48)	1.45	0.11	○(須=不)	粘土採掘坑、55 土坑>
58	2	1H-2b	2	62 土坑	2.19	1.84	0.22	×	粘土採掘坑
58	2	1H-3b	2	39 土坑	1.80	1.53	0.10	×	粘土採掘坑
59	2	1H-3b	2	40 土坑	1.85	1.15	0.29	○(土=中)	粘土採掘坑
59	2	1H-4b	2	48 土坑	1.88	1.56	0.40	×	粘土採掘坑

図	区	地区	面	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺物	備考
59	2	1H-4b	2	43 土坑	1.40	1.25	0.60	×	粘土採掘坑
59	2	1H-4b	2	41 土坑	1.44	1.42	0.21	×	粘土採掘坑
59	2	1H-4b	2	44 土坑	1.21	0.96	0.32	×	粘土採掘坑
60	2	1H-6c	2	47 土坑	2.39	1.89	0.26	×	粘土採掘坑
60	2	1H-5b	2	16 土坑	1.83	1.61	0.31	○ (土=中)	粘土採掘坑
60	2	1H-4b	2	50 土坑	(2.20)	(1.22)	0.30	×	粘土採掘坑
60	2	1H-5b	2	18 土坑	2.69	1.78	0.27	×	粘土採掘坑
61	2	1H-8e	2	25 土坑	(2.00)	(1.24)	0.07	×	粘土採掘坑
61	2	1H-8e	2	26 土坑	(1.35)	(0.67)	0.08	×	粘土採掘坑
61	2	1H-7e	2	37 土坑	1.09	0.88	0.30	○ (土・須=不)	粘土採掘坑
61	2	1H-8e	2	27 土坑	(1.10)	(0.85)	0.12	×	粘土採掘坑
62	2	1H-2b	2	58 ピット	0.52	0.40	0.06	×	
62	2	1H-2b	2	59 ピット	0.59	0.47	0.08	×	
62	2	1H-6b	2	17 土坑	0.78	0.74	0.20	×	
62	2	1H-5b	2	19 ピット	0.41	0.40	0.27	×	
62	2	1H-2b	2	54 ピット	0.38	0.25	0.10	×	
62	2	1H-8e	2	34 土坑	0.79	0.61	0.12	×	
62	2	1H-8e	2	30 ピット	0.79	0.67	0.17	○ (土=不)	
62	2	1H-8e	2	33 土坑	0.77	0.50	0.27	○ (土=不)	
63	2	1H-8e	2	29 土坑	0.86	0.59	0.11	×	
63	2	1H-8e	2	31 土坑	0.76	0.31	0.19	×	
63	2	1H-8e	2	28 土坑	0.72	0.69	0.09	×	
63	2	1H-8e	2	32 土坑	0.70	0.62	0.16	○ (土=不)	
63	2	1H-8d	2	63 ピット	0.34	0.32	0.10	×	
63	2	1H-8d	2	64 ピット	0.23	0.18	0.07	×	
63	2	1H-8d	2	65 土坑	(0.80)	0.51	0.05	×	
63	2	1H-8d	2	66 土坑	0.84	0.52	0.16	×	
64	3	2H-1a	2	1192 土坑	1.14	0.74	0.21	×	
64	3	2H-2d	2	1191 土坑	0.72	0.64	0.24	×	
64	3	2H-2b	2	1242 土坑	1.80	1.22	0.40	×	
64	3	2H-2c	2	1246 土坑	1.87	0.87	0.44	×	
64	3	1H-3e	2	1255 土坑	1.44	(0.80)	0.12	×	
64	3	2H-3e	2	1219 土坑	(0.46)	0.54	0.17	×	
65	3	2H-1b	2	1198 ピット	(0.34)	0.34	0.15	×	
65	3	2H-1b	2	1197 ピット	0.42	0.35	0.07	×	
65	3	2H-1b	2	1196 ピット	0.20	0.18	0.04	×	
65	3	2H-1b	2	1189 ピット	0.36	0.28	0.08	×	
65	3	2H-1b	2	1186 ピット	0.13	0.12	0.07	×	
65	3	2H-1b	2	1190 土坑	0.97	0.75	0.11	×	
65	3	2H-2c	2	1187 ピット	0.40	0.35	0.09	×	
65	3	2H-2c	2	1188 ピット	0.34	0.32	0.16	×	
66	3	2H-2e	2	1167 土坑	0.92	0.80	0.30	×	
66	3	2H-2d	2	1165 土坑	0.70	0.62	0.35	×	
66	3	2H-2d	2	1166 土坑	0.79	0.53	0.26	×	
66	3	2H-2e	2	1194 土坑	0.56	0.54	0.13	×	
66	3	2H-3e	2	1169 土坑	1.23	0.81	0.28	○ (瓦)	
66	3	2H-3e	2	1241 土坑	(0.54)	0.52	0.29	×	
66	3	2H-3d	2	1168 土坑	0.77	0.60	0.22	×	
67・68	3	2H-2c	2	1199 溝	2.47	0.86	0.26	×	(土=不)
67・68	3	2H-2c	2	1195 溝	3.74	0.79	0.12	×	(土=不)
67・68	3	2H-2c	2	1220 溝	4.46	0.96	0.28	○ (土=平)	
67・68	3	2H-3c	2	1170 溝	3.54	1.34	0.78	○ (土=平)	
67・68	3	2H-2b	2	1193 溝	24.00	0.65	0.24	○ (土・須=不)	
68	3	2H-2f	2	1267 土坑	0.89	0.72	0.17	×	粘土採掘坑
68	3	2H-2c	2	1338 土坑	2.08	1.02	0.26	×	粘土採掘坑
69	3	2H-3g	2	1271 土坑	(2.73)	(0.98)	0.34	○ (土=不)	粘土採掘坑
69	3	2H-2f	2	1265 土坑	1.74	1.56	0.26	○ (土・須=不)	粘土採掘坑
69	3	2H-3f	2	1264 土坑	(0.86)	(0.65)	0.26	×	粘土採掘坑、1263 土坑>
69	3	2H-3f	2	1263 土坑	(1.13)	(0.56)	0.21	×	粘土採掘坑、1264 土坑<
69	3	2H-3f	2	1256 土坑	1.22	0.92	0.12	×	粘土採掘坑
69	3	2H-3f	2	1257 土坑	0.82	0.58	0.19	×	粘土採掘坑
69	3	2H-3f	2	1259 土坑	1.32	0.86	0.11	×	粘土採掘坑
70	3	2H-3f	2	1269 土坑	2.80	0.96	0.20	○ (他)	粘土採掘坑
70	3	2H-3g	2	1237 土坑	3.19	(2.90)	0.35	○ (須=飛)	粘土採掘坑

図	区	地区	面	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺物	備考
71	3	1H-9f	2	1254 土坑	(1.22)	0.58	0.14	×	
71	3	2H-2f	2	1275 土坑	0.82	0.52	0.22	×	
71	3	2H-3f	2	1266 土坑	1.16	0.72	0.22	×	
71	3	2H-3f	2	1261 土坑	(1.03)	1.17	0.17	×	
71	3	2H-3f	2	1262 土坑	(1.74)	0.81	0.14	×	
71	3	2H-3f	2	1258 土坑	1.46	0.87	0.14	×	
72	3	2H-3f	2	1260 土坑	0.93	0.89	0.20	×	
72	3	2H-3f	2	1270 ピット	0.34	0.17	0.26	×	
72	3	1H-7g	2	1222 土坑	(0.71)	0.32	0.10	○(土・須=平)	
72	3	1H-8g	2	1224 土坑	(0.23)	0.25	0.02	×	
72	3	1H-8g	2	1225 土坑	0.46	0.46	0.07	○(土=平)	
72	3	1H-9h	2	1201 土坑	0.71	0.58	0.10	○(土=不)	
72	3	1H-9h	2	1202 土坑	0.22	0.20	0.04	×	
72	3	1H-9h	2	1203 土坑	0.56	0.53	0.11	○(須=不)	
73	3	1H-10g	2	1205 土坑	0.35	0.30	0.15	×	
73	3	1H-10g	2	1243 土坑	0.42	0.32	0.12	×	
73	3	1H-10g	2	1211 土坑	1.16	0.60	0.28	○(土・須=不)	
73	3	1H-10g	2	1214 土坑	0.91	0.48	0.12	×	
73	3	2H-1g	2	1226 土坑	(1.04)	0.53	0.14	○(須=不)	
73	3	1H-10g	2	1238 土坑	0.51	0.50	0.16	○(土・須=不)	
73	3	1H-10g	2	1221 土坑	0.44	0.34	0.34	×	
73	3	1H-10g	2	1213 土坑	1.10	0.42	0.28	○(土=不)	
74	3	1H-10g	2	1209 土坑	1.44	0.67	0.20	○(土・須=不)	
74	3	2H-1h	2	1206 ピット	0.28	0.22	0.14	×	
74	3	2H-1g	2	1215 土坑	0.78	0.68	0.22	×	
74	3	2H-1g	2	1231 土坑	0.70	0.45	0.11	×	
74	3	2H-1g	2	1232 土坑	0.40	0.28	0.07	○(須=飛)	
74	3	2H-1g	2	1233 ピット	0.28	0.21	0.09	×	
74	3	2H-2h	2	1204 ピット	0.33	0.26	0.11	×	
74	3	2H-1e	2	1268 土坑	1.12	0.61	0.17	×	
74	3	2H-2f	2	1272 土坑	1.30	0.85	0.31	×	
75	1	1H-8b	3	1156 土坑	2.20	0.77	0.40	×	
75	1	1H-8a	3	1158 土坑	2.89	0.97	0.28	×	
75	1	1H-8b	3	1157 土坑	1.36	0.59	0.47	×	
77	2	1H-7d	3	92 土坑	3.92	1.79	0.28	○(土・須=不)	粘土採掘坑
77	2	1H-2d	3	86 土坑	(1.87)	(1.32)	0.12	○(土・須=不)	粘土採掘坑
77	2	1H-3c	3	91 土坑	(2.33)	(0.95)	0.05	○(須=不)	粘土採掘坑
77	2	1H-2c	3	93 土坑	(1.45)	(1.28)	0.11	×	粘土採掘坑
77	2	1H-2c	3	87 土坑	2.10	1.62	0.13	○(須=古)	粘土採掘坑
78	2	1H-2b	3	104 土坑	(1.13)	(0.81)	0.10	×	粘土採掘坑
78	2	1H-2b	3	101 土坑	(1.46)	(1.09)	0.16	×	粘土採掘坑
78	2	1H-2c	3	94 土坑	2.04	1.29	0.21	○(土=不)	粘土採掘坑
78	2	1H-3c	3	117 土坑	1.27	0.98	0.13	○(須=墳)	粘土採掘坑
78	2	1H-2b	3	102 土坑	2.36	1.06	0.16	×	粘土採掘坑
78	2	1H-2b	3	98 土坑	2.01	1.72	0.21	×	粘土採掘坑
79	2	1H-3d	3	134 土坑	2.40	1.42	0.19	○(須=墳)	粘土採掘坑
79	2	1H-3c	3	130 土坑	1.70	1.58	0.12	×	粘土採掘坑
79	2	1H-3c	3	136 土坑	1.67	1.41	0.12	×	粘土採掘坑
79	2	1H-3d	3	132 土坑	(1.61)	(0.55)	0.15	○(須=墳)	粘土採掘坑
79	2	1H-3c	3	126 土坑	1.51	1.29	0.16	×	粘土採掘坑
79	2	1H-3c	3	135 土坑	1.41	1.39	0.16	×	粘土採掘坑
80	2	1H-3c	3	118 土坑	0.96	(0.78)	0.10	×	粘土採掘坑
80	2	1H-3c	3	119 土坑	2.65	2.07	0.17	○(須=古)	粘土採掘坑
80	2	1H-3b	3	108 土坑	(1.54)	(1.07)	0.21	×	粘土採掘坑
80	2	1H-4c	3	158 土坑	(1.80)	(2.76)	0.09	×	粘土採掘坑
80	2	1H-4c	3	121 土坑	2.90	1.94	0.14	×	粘土採掘坑
80	2	1H-4b	3	116 土坑	1.01	0.93	0.26	×	粘土採掘坑
80	2	1H-4b	3	114 土坑	1.15	1.04	0.29	×	粘土採掘坑
81	2	1H-7d	3	206 土坑	2.14	1.91	0.10	×	粘土採掘坑
81	2	1H-7d	3	195 土坑	2.16	1.87	0.27	×	粘土採掘坑
81	2	1H-6c	3	200 土坑	(3.00)	(1.74)	—	×	粘土採掘坑
81	2	1H-7c	3	201 土坑	4.29	(2.53)	0.24	×	粘土採掘坑
81	2	1H-5c	3	172 土坑	1.76	1.60	0.14	×	粘土採掘坑
82	2	1H-2c	3	90 土坑	1.52	0.62	0.12	×	

図	区	地区	面	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺物	備考
82	2	1H-2c	3	88 土坑	1.16	0.66	0.04	×	
82	2	1H-2c	3	89 土坑	1.82	1.43	0.14	○ (土・須=不)	
82	2	1H-3d	3	133 土坑	4.11	1.50	0.04	×	
83	2	1H-3d	3	137 土坑	1.34	0.62	0.12	×	
83	2	1H-4d	3	138 土坑	2.76	1.22	0.13	×	
83	2	1H-3c	3	120 土坑	2.64	1.58	0.13	×	
83	2	1H-3c	3	139 土坑	(0.96)	(0.25)	0.13	×	
83	2	1H-4d	3	141 土坑	0.83	0.52	0.05	×	
84	2	1H-4d	3	149 土坑	1.43	1.29	0.16	×	
84	2	1H-4d	3	148 土坑	1.33	0.62	0.16	×	
84	2	1H-4c	3	147 土坑	1.72	1.56	0.18	○ (土=不)	
84	2	1H-5d	3	181 土坑	2.01	0.90	0.19	×	
84	2	1H-5d	3	187 土坑	2.05	1.18	0.12	×	
84	2	1H-8d	3	207 土坑	1.94	0.73	0.12	×	
85	2	1H-4d	3	150 土坑	3.14	1.68	0.15	×	
85	2	1H-4d	3	151 土坑	11.10	5.65	0.10	×	浅い凹み
85	2	1H-5c	3	176 土坑	1.98	0.98	0.22	○ (須=古)	
85	2	1H-8d	3	208 土坑	1.20	0.33	0.08	×	
86	2	1H-2b	3	103 土坑	0.78	0.50	0.14	×	
86	2	1H-3d	3	142 ピット	0.28	0.26	0.18	×	
86	2	1H-2b	3	96 ピット	0.32	0.26	0.10	×	
86	2	1H-2b	3	100 土坑	(0.91)	(0.48)	0.09	×	
86	2	1H-3d	3	131 土坑	(0.65)	(0.70)	0.13	×	
86	2	1H-4f	3	80 土坑	(0.42)	(0.20)	0.95	×	
86	2	1H-3e	3	76 土坑	1.17	0.69	0.20	×	
86	2	1H-2d	3	83 土坑	0.65	0.55	0.08	○ (土=不)	
86	2	1H-4f	3	79 ピット	0.46	0.42	0.26	○ (土=不)	
87	2	1H-3c	3	123 ピット	0.82	0.76	0.05	×	
87	2	1H-3d	3	146 土坑	1.05	0.38	0.12	×	
87	2	1H-3b	3	107 土坑	(0.96)	(0.72)	0.21	×	
87	2	1H-3b	3	143 ピット	0.34	0.25	0.17	×	
87	2	1H-3b	3	106 土坑	0.40	0.29	0.10	×	
87	2	1H-3c	3	127 土坑	0.56	0.42	0.12	×	
87	2	1H-3b	3	109 土坑	1.05	(0.50)	0.13	×	
87	2	1H-3b	3	110 土坑	1.39	(1.70)	0.12	×	
87	2	1H-4b	3	111 土坑	0.46	(0.90)	0.03	×	
88	2	1H-4c	3	125 土坑	1.05	0.48	0.24	×	
88	2	1H-4d	3	155 ピット	0.50	0.50	0.17	○ (土=不)	
88	2	1H-4c	3	163 土坑	0.56	0.39	0.20	○ (須=墳)	
88	2	1H-4c	3	124 土坑	1.35	0.70	0.21	×	
88	2	1H-4d	3	154 土坑	0.56	0.27	0.14	×	
88	2	1H-4c	3	162 土坑	0.40	0.39	0.22	×	
88	2	1H-4b	3	115 ピット	0.44	0.40	0.30	×	
88	2	1H-4d	3	152 土坑	0.74	0.39	0.08	×	
88	2	1H-5c	3	157 ピット	(0.34)	(0.32)	0.14	×	
89	2	1H-5c	3	171 土坑	1.27	0.60	0.08	×	
89	2	1H-5d	3	179 土坑	0.73	0.54	0.25	×	
89	2	1H-6d	3	192 土坑	1.16	0.70	0.12	×	
89	2	1H-5c	3	170 土坑	0.93	0.60	0.08	×	
89	2	1H-5d	3	177 土坑	0.68	0.53	0.10	×	
89	2	1H-6d	3	188 土坑	1.09	0.65	0.15	×	
89	2	1H-5c	3	169 土坑	0.90	0.44	0.07	×	
89	2	1H-5c	3	173 土坑	1.00	0.74	0.19	×	
89	2	1H-5d	3	182 土坑	0.65	0.60	0.20	×	
90	2	1H-7g	3	69 土坑	0.51	0.44	0.18	○ (須=墳)	
90	2	1H-7c	3	202 土坑	(0.85)	(0.46)	0.12	×	
90	2	1H-7c	3	204 土坑	1.06	0.61	0.10	×	
90	2	1H-7c	3	205 土坑	(2.22)	0.92	0.05	×	
90	2	1H-7c	3	210 土坑	2.04	1.31	0.11	×	
91	2	1H-4b	3	112 溝	4.00	1.80	0.32	○ (土=不)	
92	2	1H-2b	3	97 溝	5.60	0.35	0.06	×	
92	2	1H-2b	3	99 溝	4.28	1.13	0.14	×	
92	2	1H-2d	3	85 溝	3.62	1.13	0.07	○ (土=不)	
93	2	1H-5d	3	186 溝	7.19	0.82	0.08	×	

図	区	地区	面	遺構名	長軸	短軸	深さ	遺物	備考
93	2	1H-6c	3	199 溝	3.70	0.59	0.12	×	
94	3	2H-1e	3	1334 土坑	1.40	1.26	0.35	×	粘土採掘坑
94	3	2H-1f	3	1319 土坑	1.18	0.58	0.09	×	粘土採掘坑
94	3	2H-1f	3	1326 土坑	1.24	0.49	0.12	○ (土=不)	粘土採掘坑
94	3	2H-2g	3	1325 土坑	2.00	1.70	0.10	×	粘土採掘坑
94	3	2H-3f	3	1313 土坑	(1.60)	(0.18)	0.28	×	粘土採掘坑
94	3	2H-2f	3	1314 土坑	1.24	0.62	0.10	×	粘土採掘坑
95	3	2H-3g	3	1276 土坑	1.20	1.10	0.14	×	粘土採掘坑
95	3	2H-3g	3	1277 土坑	0.54	0.50	0.12	×	粘土採掘坑
95	3	2H-3g	3	1278 土坑	1.61	1.03	0.11	○ (土=不)	粘土採掘坑
95	3	2H-3g	3	1280 土坑	1.76	1.04	0.16	×	粘土採掘坑
95	3	2H-1e	3	1333 土坑	(1.31)	(0.97)	0.16	×	粘土採掘坑
95	3	2H-2e	3	1304 土坑	1.70	(1.13)	0.13	○ (瓦)	粘土採掘坑
95	3	2H-2e	3	1302 土坑	1.11	0.67	0.16	×	粘土採掘坑
96	3	2H-2e	3	1301 土坑	1.62	1.06	0.10	○ (土=不)	粘土採掘坑
96	3	2H-2e	3	1300 土坑	0.81	0.40	0.07	×	粘土採掘坑
96	3	2H-2e	3	1299 土坑	1.07	0.95	0.13	×	粘土採掘坑、1297 土坑>
96	3	2H-2e	3	1298 土坑	1.13	0.68	0.12	×	粘土採掘坑
96	3	2H-2e	3	1293 土坑	2.03	1.03	0.16	×	粘土採掘坑
96	3	2H-2d	3	1318 土坑	1.23	0.64	0.12	×	粘土採掘坑
96	3	2H-2d	3	1310 土坑	0.49	0.36	0.14	×	粘土採掘坑
96	3	2H-2d	3	1308 土坑	1.14	0.77	0.13	○ (土=不)	粘土採掘坑
97	3	2H-2d	3	1331 土坑	(6.27)	(3.24)	0.35	×	粘土採掘坑
97	3	2H-3e	3	1289 土坑	0.67	0.46	0.12	×	粘土採掘坑
97	3	2H-3d	3	1332 土坑	(1.88)	(1.24)	0.18	×	粘土採掘坑
98	3	2H-2e	3	1312 土坑	0.72	0.54	0.11	×	
98	3	2H-2e	3	1297 土坑	1.10	0.47	0.11	×	1299 土坑<
98	3	2H-2d	3	1307 土坑	1.50	1.15	0.13	○ (須=平)	
98	3	2H-2d	3	1306 土坑	1.37	1.06	0.21	○ (土=不)	
99	3	2H-3h	3	1285 ピット	0.48	0.41	0.11	○ (須=不)	
99	3	2H-4h	3	1283 ピット	0.47	0.36	0.13	×	
99	3	2H-3g	3	1281 ピット	0.52	0.39	0.15	×	
99	3	2H-3g	3	1279 土坑	0.37	0.24	0.11	○ (土=不)	
99	3	2H-1f	3	1322 土坑	(0.74)	(0.38)	0.16	○ (土=不)	1321 土坑>
99	3	2H-1f	3	1321 土坑	0.60	0.48	0.17	○ (須=不)	1322 土坑<
99	3	2H-2f	3	1327 土坑	0.36	0.34	0.10	×	
99	3	2H-1f	3	1320 土坑	0.64	0.49	0.07	×	
100	3	1H-9f	3	1317 土坑	(0.34)	0.28	0.13	×	
100	3	2H-1d	3	1329 土坑	1.01	0.76	0.22	×	
100	3	2H-2e	3	1305 土坑	0.42	0.37	0.10	×	
100	3	2H-3e	3	1311 土坑	0.35	0.23	0.14	×	
100	3	1H-10b	3	1341 ピット	0.22	0.22	0.12	×	
100	3	1H-10c	3	1274 土坑	1.43	1.18	(0.24)	×	
100	3	2H-3e	3	1288 土坑	0.57	0.41	0.22	×	
101	3	2H-2b	3	1340 土坑	3.33	0.52	0.15	×	
101	3	2H-2c	3	1339 土坑	(3.24)	(0.89)	0.07	×	

土坑・ピットは大半が不整形なため、計測値は最大長を長軸とし、直交する最大長を短軸として記載した計測値はm、計測値の () は残存部の計測値を示す

出土遺物は、縄文土器・弥生土器を縄・弥、土師器を土、須恵器を須、瓦質土器を瓦、その他を他で表し、時期のわかるものは、古墳を墳、飛鳥を飛、平安を平、古代を古、中世を中、時期不明を不で表現した

備考欄の遺構名に付随する<、>は、当該欄の遺構との切り合い関係を表現する

例：1321 土坑> 当該欄の遺構が 1321 土坑に切られる 1322 土坑< 当該欄の遺構が 1322 土坑を切る

表8 遺物観察表(土器)

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
1	2河川	唐津焼皿	底径 3.8 残存高 2.0	外面底部露胎、その他内外面施釉	胎土：良好	
2	1004 溝	唐津焼碗	復元径 11.3 器高 7.0 底径 4.4	外面体部～底部回転ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ・施釉	胎土：明黄褐色 釉：灰白色 文様：灰オリーブ色 胎土：良好	
3	1004 溝	唐津焼皿	残存高 3.0 底径 4.8	外面底部回転ヘラケズリ、その他外面回転ナデ、内面底部砂目・鉄絵	内外面：灰白色 胎土：密	
4	2河川	土師器甕	復元径 25.8 残存高 3.2	外面体部ナデ、その他内外面ヨコナデ	内面：にぶい黄橙色 外面：黒色 胎土：密	
5	2河川古段階	白磁碗	復元径 14.6 残存高 4.5	外面体部下半露胎 その他内外面施釉	内外面：灰白色 胎土：密	
6	2河川古段階	土師器坏	口径 13.4 器高 3.8	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：にぶい黄橙色 外面：にぶい橙 胎土：1mm以下の砂粒含む	
7	2河川古段階	土師器高台付皿	復元径 9.7 器高 4.4 復元底径 6.0	内外面回転ナデ	内外面：灰黄色 胎土：密	
8	2河川古段階	土師器皿	口径 10.8 器高 2.4	外面底部指オサエ、内外面口縁部ヨコナデ、内面底部不定方向ナデ	内外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
9	2河川古段階	土師器皿	口径 11.1 器高 2.6	内外面口縁部回転ナデ、その他内外面ナデ	内外面：浅黄色 胎土：密	
10	2河川	土師器皿	復元径 10.4 器高 2.2	内外面ヨコナデ	外面：黒褐色 内面：灰白色 胎土：密	
11	2河川古段階	土師器皿	口径 8.6 器高 1.6	内外面ナデ・指オサエ	内外面：灰白～黒色 胎土：1mm大の砂粒を含む	
12	2河川古段階	土師器皿	復元径 7.6 器高 1.3	外面底部不定方向ナデ、内面底部ナデ、内外面口縁部ヨコナデ	内面：灰白～淡黄色 外面：淡黄色 胎土：密	
13	2河川	土師器皿	復元径 7.8 器高 1.0	内外面ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
14	2河川古段階	土師器皿	復元径 8.1 器高 1.4	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：黒褐色 外面：黄灰色 胎土：密	
15	第Ⅳ層	青磁坏	復元径 11.5 残存高 2.5	内外面施釉	内外面：緑灰色 胎土：密	
16	第Ⅳ層	白磁碗	復元径 13.0 残存高 3.6	内外面施釉	内外面：灰白色 胎土：密	
17	第Ⅳ層	瓦質鍋	復元径 38.8 残存高 4.8	外面体部下半ナデ?、その他内外面ヨコナデ	内外面：黒色 胎土：密	
18	第Ⅳ層	瓦質鍋	復元径 30.6 残存高 6.0	内面体部ハケ目	内面：灰白～黒色 外面：黒色 胎土：密	
19	第Ⅳ層	土師器坏?	口径 11.4 器高 3.7	外面底部ナデ?、その他内外面ヨコナデ	内外面：灰黄褐色 胎土：密	
20	第Ⅳ層	土師器碗?	復元径 10.6 残存高 3.7	内外面ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
21	第Ⅳ層	土師器皿	復元径 11.6 器高 3.4	内外面ナデ、外面に工具痕	内外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
22	第Ⅳ層	土師器皿	復元径 10.8 残存高 3.1	内外面ナデ	内外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
23	第Ⅳ層	土師器皿	復元径 9.6 器高 2.1	内外面ナデ、外面一部ハケ目	内外面：灰白色 胎土：密	
24	第Ⅳ層	土師器皿	口径 9.0 器高 1.5	内外面体部ナデ	内外面：黄褐色 胎土：密	
25	第Ⅳ層	土師器皿	口径 8.4 器高 1.5	内外面ナデ	内外面：灰白～灰色 胎土：密	
26	第Ⅳ層	土師器皿	口径 8.0 器高 1.7	外面底部指オサエ、外面口縁部指オサエ、その他内外面ナデ	内外面：灰黄褐色 胎土：密	
27	第Ⅳ層	土師器皿	復元径 7.6 器高 1.2	内外面口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面指オサエ	内外面：灰白～灰色 胎土：密	
28	第Ⅳ層	土師器皿	口径 7.4 器高 1.5	内外面ナデ、指オサエ	内外面：灰黄褐色 胎土：密	

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
29	第IV層	土師器杯	復元径 10.0 器高 2.4	内外面ナデ、外面底部摩耗のため不明	内外面：明褐色 胎土：密	
30	第IV層	土師器皿	口径 9.6 器高 2.1	外面底部回転糸切り、その他内外面ナデ	内外面：灰褐色 胎土：密	
31	第IV層	土師器皿	残存高 1.5	外面底部回転糸切り、その他内外面ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：密	
32	第IV層	須恵器杯	復元径 13.9 器高 3.5	外面底部ナデ、その他内外面回転ナデ	内面：灰白～黒色 外面：黒色 胎土：密	
33	第IV層	須恵器高台付杯	底径 6.0 残存高 1.5	外面底部回転糸切り、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
34	第IV層	須恵器高台付杯	残存高 3.0 復元底径 12.6	外面底部回転ヘラ切り、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
35	第IV層	須恵器杯	口径 7.6 器高 4.0	外面底部ヘラ切り、外面底部回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
36	第IV層	須恵器蓋	復元径 13.2 器高 2.4	外面天井部付近回転ヘラケズリ後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
37	第IV層	須恵器甕	復元径 22.8 残存高 4.4	内外面ヨコナデ	内外面：灰色 胎土：密	
38	第IV層	土錘	全長 6.3 直径 3.7	外面ナデ	外面：灰白色 胎土：密	
39	第IV層	土錘	全長 3.6 直径 3.3	外面ナデ	外面：暗灰色 胎土：密	
40	第IV層	土錘	残存長 3.8 直径 1.2	外面ナデ	外面：黒褐色 胎土：密	
41	12 河川	土師器碗	口径 13.5 器高 4.4	外面底部回転ヘラ切り、その他内外面回転ナデ	内面：にぶい黄褐色 外面：橙色 胎土：密	
42	12 河川	土師器杯	口径 11.9 器高 4.2	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：灰白色 外面：淡黄色 胎土：1 mm以下の砂粒を含む	
43	12 河川	土師器杯	口径 11.9 器高 3.7	外面底部回転糸切り その他内外面回転ナデ	内面：灰白～浅黄色 外面：灰黄色 胎土：1 mm以下の砂粒含む	
44	12 河川	土師器杯	口径 12.5 器高 3.3	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：にぶい黄褐色 外面：灰白色 胎土：1 mm以下の砂粒を含む	
45	1250 下層	土師器杯	口径 13.0 器高 4.0	外面底部回転糸切り その他内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：密	
46	12 河川	土師器杯	口径 10.6 器高 3.5	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：灰オリーブ色 外面：灰白色 胎土：密	
47	12 河川	土師器杯	口径 11.6 器高 3.1	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：にぶい黄褐色 外面：灰黄色 胎土：密	
48	12 河川	土師器杯	口径 11.1 器高 4.7	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：浅黄褐色 胎土：密	
49	12 河川	土師器杯	口径 13.8 器高 4.7	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：淡黄色 胎土：密	内面体部粘土接合痕
50	12 河川	土師器杯	口径 12.5 器高 4.5	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：灰黄色 胎土：密	
51	12 河川	土師器杯	口径 10.8 器高 4.1	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：浅黄褐色 胎土：密	
52	12 河川	土師器杯	復元径 9.3 器高 2.8	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：黄灰色 外面：灰黄色 胎土：1 mm大の砂粒含む	
53	12 河川	土師器杯	口径 14.3 器高 5.8	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内面：暗灰黄色 外面：黒褐色 胎土：密	外面煤付着
54	12 河川	土師器杯	口径 11.8 器高 4.2	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
55	12 河川	土師器杯	口径 10.9 器高 4.0	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
56	12 河川	土師器坏	口径 12.2 器高 4.3	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：橙色 外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
57	1249 下層	土師器坏	口径 14.2 器高 6.0	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：黒褐～黄褐色 胎土：密	
58	1249 下層	土師器坏	口径 10.5 器高 4.4	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：黄灰～灰黄色 外面：灰黄～明黄褐色 胎土：密	
59	12 河川	土師器坏	口径 10.6 器高 4.5	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：にぶい黄色 外面：灰黄～浅黄色 胎土：密	外面体部粘土接合痕
60	12 河川	土師器皿	口径 9.8 器高 3.3	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：明褐灰色 胎土：密	
61	12 河川	土師器坏	口径 9.8 器高 3.5	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄色 胎土：密	
62	12 河川	土師器坏	復元径 15.3 器高 5.6	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：浅黄橙色 外面：灰白～灰黄色 胎土：密	
63	12 河川	土師器坏	口径 13.6 器高 4.6	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：橙色 胎土：密	
64	12 河川	土師器坏	口径 13.2 器高 4.6	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
65	12 河川	土師器坏	口径 10.8 器高 4.1	外面底部回転糸切り、内面底 部不定方向ナデ、その他内外 面回転ナデ	内面：灰黄～黒褐色 外面：灰白～黒色 胎土：1 mm以下の砂粒 含む	
66	12 河川	土師器坏	口径 14.5 器高 5.4	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：褐灰色 外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
67	12 河川	土師器坏	口径 11.6 器高 4.4	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：にぶい黄橙色 外面：灰白～灰黄褐色 胎土：1 mm以下の金雲 母含む	
68	12 河川	土師器坏	口径 11.6 器高 4.1	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：1 mm以下の砂粒 含む	
69	12 河川	土師器坏	口径 11.1 器高 4.1	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：1 mm以下の砂粒、 金雲母含む	
70	12 河川	土師器坏	口径 12.0 器高 4.6	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：浅黄褐色 外面：にぶい黄褐色 胎土：1 mm以下の砂粒・ 金雲母含む	
71	12 河川	土師器坏	口径 12.4 器高 5.1	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：明褐色 胎土：密	
72	12 河川	土師器坏	口径 11.6 器高 4.3	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：密	
73	12 河川	土師器坏	口径 12.0 器高 4.3	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：灰白～灰黄色 外面：灰白色 胎土：1 mm以下の砂粒 を含む	歪み顕著
74	12 河川	土師器坏	口径 14.5 器高 5.6	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：淡黄～黄灰色 外面：浅黄～黒色 胎土：1 mm以下の砂粒 含む	
75	12 河川	土師器高台付坏	口径 14.6 器高 5.5 底径 8.0	内外面回転ナデ	内外面：灰白～橙色 胎土：1 mm以下の砂粒 含む	体部粘土接合痕
76	12 河川	土師器坏	口径 10.9 器高 3.3	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：浅黄色 外面：明黄褐～浅黄色 胎土：密	外面底部粘土接合痕
77	12 河川	土師器坏	口径 9.2 器高 2.5	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：灰白～灰色 外面：灰白～灰黒色 胎土：4 mm以下の砂粒 含む	
78	12 河川	土師器坏	口径 12.4 器高 2.5	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：1 mm以下の砂粒、 金雲母含む	
79	12 河川	土師器皿	口径 10.2 器高 1.7	底部外面回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：密	

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
80	12 河川	土師器皿	口径 12.5 器高 3.3	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：にぶい黄橙色 胎土：密	内面～外面口縁部煤付着
81	12 河川	土師器皿	口径 9.9 器高 2.3	外面底部糸切り、その他内外 面回転ナデ	内外面：灰黄色 胎土：密	内面口縁部煤付着
82	12 河川	黒色土器碗	口径 14.6 器高 6.1 底径 7.0	外面底部回転糸切り、その他 外面回転ナデ、内面ヘラミガ キ	内面：黒色 外面：灰黄色 胎土：密	
83	12 河川	黒色土器碗	口径 14.8 器高 5.9 底径 7.2	外面底部糸切り、外面回転ナ デ 外面口縁部ヘラミガキ、 内面ヘラミガキ	内面：黒色 外面：黒～灰黄色 胎土：密	
84	12 河川	黒色土器碗	口径 14.0 器高 5.5 底径 7.0	外面底部静止糸切り、外面回 転ナデ、外面口縁部ヘラミガ キ 内面ヘラミガキ	内面：黒色 外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
85	12 河川	黒色土器碗	口径 13.8 器高 5.2 底径 6.4	外面底部不定方向ナデ、外面 体部ヘラケズリ後ミガキ、外 面口縁部ヨコナデ 内面ヘラ ミガキ	内面：黒色 外面：にぶい橙色 胎土：1mm大の砂粒含 む	
86	12 河川	土師器碗	復元径 15.2 器高 6.9	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：にぶい褐色 外面：褐～灰褐色 胎土：密	
87	12 河川	土師器杯	口径 14.7 器高 5.4	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内面：暗灰黄色 外面：灰白色 胎土：密	
88	12 河川	須恵器碗	口径 15.0 器高 6.1	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：青灰色 胎土：2～3mm大の砂 粒含む	
89	12 河川	土師器杯	口径 13.8 器高 5.5	外面底部回転糸切り、その他 回転ナデ	内面：灰黄～黄灰色 外面：黄灰色 胎土：密	
90	12 河川	黒色土器杯	残存高 2.4 底径 6.4	外面底部不定方向ナデ、外面 回転ナデ、内面ミガキ	内面：黒色 外面：灰白色 胎土：密	
91	12 河川	須恵器皿	復元径 13.4 器高 2.3	外面底部回転糸切り、その他 内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
92	12 河川	土師器皿	口径 13.5 器高 2.1	外面底部糸切り、その他内外 面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	粘土接合痕
93	12 河川	土師器杯	復元径 17.6 器高 4.4	底部内面螺旋状暗文、体部内 面放射状暗文、外面ナデ	内面：明赤褐色 外面：にぶい黄橙色 胎土：1mm以下の砂粒 含む	赤彩土器
94	12 河川	土師器杯	復元径 17.1 器高 4.8	内外面ヘラミガキ 内面底部 螺旋状暗文	内外面：赤褐色 胎土：密	赤彩土器
95	12 河川	土師器杯	残存高 3.5	外面底部ヘラケズリ後ナデ、 外面回転ナデ、内面螺旋状暗 文	内面：明赤褐色 外面：浅黄橙色 胎土：密	赤彩土器
96	12 河川	土師器杯	復元径 9.0 残存高 4.7	外面上半ヘラミガキ下半ヘラ ケズリ、内面斜格子状暗文	内面：黄橙色 外面：橙色 胎土：1mm大の砂粒含 む	赤彩土器
97	12 河川	土師器杯	復元径 16.6 残存高 3.5	外面体部回転ナデ、内面体部 放射状暗文	内面：褐色 外面：灰黄色 胎土：密	赤彩土器
98	12 河川	土師器杯	復元径 14.4 残存高 4.8	外面口縁端部回転ナデ、外面 体部横ミガキ、外面底部ヘラ 削り後ナデ、内面横ミガキ	内外面：浅黄～褐色 胎土：1mm以下の砂粒 含む	赤彩土器
99	12 河川	土師器杯	復元径 16.9 器高 3.7	外面底部ヘラ切り後ナデ、外 面ヘラミガキ、内面ハケ目・ 回転ナデ	内面：にぶい橙色 外面：橙色 胎土：密	赤彩土器
100	12 河川	土師器杯	口径 15.4 器高 3.9	外面底部ヘラミガキ、外面体 部回転ナデ、外面口縁端部ヘ ラミガキ、内面ヘラミガキ、 内面口縁端部回転ナデ	内外面：赤褐色 胎土：密	
101	12 河川	土師器杯	口径 13.1 器高 3.3	外面底部ヘラ切り後ナデ、そ の他内外面回転ナデ	内外面：淡黄色 胎土：密	
102	12 河川	土師器皿	復元径 22.8 残存高 3.3	内外面回転ナデ、回転ヘラ削 り後工具調整	内外面：明赤褐色 胎土：1mm以下の砂粒 含む	赤彩土器
103	12 河川	土師器杯	復元径 16.0 器高 1.9	外面底部ヘラミガキ	内面：橙色 外面：浅黄色 胎土：密	赤彩土器

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
104	12 河川	土師器高台付皿	復元径 16.8 器高 3.0 復元底径 13.5	底部内面不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内面：明赤褐色 外面：にぶい黄褐色 胎土：1mm以下の砂粒を含む	赤彩土器
105	12 河川	土師器皿	復元径 22.5 器高 2.9	外面底部付近ヘラケズリ？、その他内外面回転ナデ	内外面：赤褐色 胎土：密	赤彩土器
106	12 河川	須恵器蓋	口径 16.6 器高 2.2	外面つまみ回転ナデ、外面天井部回転ヘラケズリ後ナデ、内外面口縁部回転ナデ、内面一定方向ナデ	内面：灰白～黒褐色 外面：灰白～黄灰色 胎土：1mm以下の砂粒を含む	外面煤付着
107	12 河川	須恵器蓋	口径 14.8 器高 1.5	外面つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ後回転ナデ、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
108	12 河川	須恵器蓋	復元径 15.6 残存高 2.0	外面天井部ヘラ切り、外面回転ヘラケズリ、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
109	12 河川	須恵器蓋	口径 16.3 器高 3.1	外面つまみ回転ナデ、外面天井部回転ヘラケズリ、内外面口縁部回転ナデ、内面不定方向ナデ	内外面：灰色 胎土：密	外面自然釉付着
110	12 河川	須恵器蓋	口径 14.9 器高 2.9	外面つまみ回転ナデ、外面天井部回転ヘラケズリ、内外面口縁部回転ナデ、内面不定方向ナデ	内外面：灰色 胎土：2mm程度の砂粒を含む	
111	12 河川	須恵器蓋	口径 15.5 器高 2.5	外面つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内面：にぶい黄色 外面：灰～黄灰色 胎土：密	
112	12 河川	須恵器蓋	口径 18.0 器高 3.2	外面つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
113	12 河川	須恵器蓋	口径 18.4 器高 2.9	外面つまみ回転ナデ、外面天井部回転ヘラケズリ、内外面口縁部回転ナデ、内面不定方向ナデ	内外面：灰白色 胎土：1mm以下の砂粒を含む	
114	12 河川	須恵器蓋	口径 12.9 器高 3.2	外面つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
115	12 河川	須恵器蓋	復元径 14.3 器高 2.8	外面つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
116	12 河川	須恵器蓋	口径 12.9 器高 2.5	外面つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ後ナデ、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
117	12 河川	須恵器蓋	口径 11.2 器高 2.3	外面つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	外面自然釉付着
118	12 河川	須恵器高台付環	残存高 4.6 底径 9.5	外面底部静止糸切り、その他回転ナデ	内面：明青灰色 外面：青灰色 胎土：密	口縁端部打ち欠き
119	12 河川	須恵器環	口径 11.9 器高 3.1	外面底部糸切り、内面底部不定方向のナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	外面体部にヘラ記号
120	12 河川	須恵器高台付環	口径 13.9 器高 4.0 底径 8.8	外面底部静止糸切り後ナデ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
121	12 河川	須恵器高台付環	口径 14.8 器高 4.6 底径 9.0	外面底部静止糸切り、内面底部不定方向ナデ、その他回転ナデ	内面：灰色 外面：灰白～灰色 胎土：1mm大の砂粒を含む	転用碗の可能性？
122	12 河川	須恵器高台付環	口径 15.3 器高 4.4 底径 9.4	内外面回転ナデ	内外面：黄灰色 胎土：密	
123	12 河川	須恵器高台付環	口径 13.0 器高 4.7 底径 8.7	内外面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
124	12 河川	須恵器高台付杯	残存高 2.6 底径 8.1	外面底部静止糸切り、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：青灰色 胎土：密	内外面底部に刻印「○」
125	12 河川	須恵器杯	口径 10.0 器高 4.0	外面底部回転ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
126	12 河川	須恵器杯	口径 10.8 器高 3.6	内外面回転ナデ、回転ヘラ切り後工具調整	内外面：明青灰色 胎土：密	
127	12 河川	須恵器杯	口径 9.0 器高 3.0	外面底部回転ヘラ切り後ナデ、内面底部一定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
128	12 河川	須恵器杯	口径 8.4 器高 3.1	外面底部回転ヘラ割り・不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：青灰色 胎土：密	
129	12 河川	須恵器蓋	口径 14.6 器高 3.9	外面天井部回転ヘラ切り、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内面：灰色 外面：暗灰色 胎土：密	
130	12 河川	須恵器蓋	口径 13.3 器高 4.1	外面天井部回転ヘラ切り後ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
131	12 河川	須恵器蓋	口径 11.4 器高 4.1	外面天井部回転ヘラ切り後工具調整、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：1～2mm大の砂粒含む	
132	12 河川	須恵器蓋	口径 11.5 器高 3.9	外面天井部回転ヘラ切り後工具調整、内面天井部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：浅黄色 胎土：1mm大の砂粒を含む	
133	12 河川	須恵器杯	復元径 11.6 器高 3.3	外面底部ヘラ切り後ナデ、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面底部不定方向ナデ、内面回転ナデ	内面：灰白色 外面：灰色 胎土：密	
134	12 河川	須恵器杯	口径 11.2 器高 3.5	外面底部ヘラオコシ後ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
135	12 河川	須恵器杯	復元径 11.2 残存高 2.5	内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
136	12 河川	須恵器杯	口径 11.0 器高 3.4	外面底部回転ヘラ切り、外面回転ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
137	12 河川	須恵器杯	復元径 13.4 器高 3.5	外面底部ヘラ切り、外面回転ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
138	12 河川	須恵器杯	口径 11.5 器高 3.9	外面底部回転ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内面：灰白色 外面：暗灰黄色 胎土：密	
139	12 河川	須恵器杯	口径 10.5 器高 3.4	外面底部～体部ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：1mm以下の砂粒多く含む	
140	12 河川	須恵器杯	復元径 10.0 器高 4.9	外面底部ヘラ切り 内面底部不定方向ナデ その他内外面回転ナデ	内面：灰色 外面：青灰色 胎土：密	
141	12 河川	須恵器鉢	口径 14.8 器高 6.6	外面底部回転ヘラケズリ その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
142	12 河川	須恵器杯	復元径 13.7 残存高 4.4	外面底部回転ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ	内面：灰黄色 外面：暗灰色 胎土：密	
143	12 河川	須恵器杯	復元径 12.9 器高 4.5	外面底部ヘラ切り後ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
144	12 河川	須恵器杯	口径 12.9 器高 3.8	外面底部ヘラ切り後ナデ、外面ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内面：緑灰色 外面：明緑灰色 胎土：密	
145	12 河川	須恵器高杯	復元径 16.6 残存高 4.4	杯部外面底部回転ヘラケズリ、杯部内面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
146	12 河川	須恵器高杯	口径 19.4 器高 5.0 脚底径 9.8	杯部内面不定方向ナデ、杯部外面底部ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ	内面：灰色 外面：青灰色 胎土：2mm大の砂粒含む	

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
147	12 河川	須恵器高坏	口径 13.9 器高 8.3 脚底径 7.2	坏部外面底部ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
148	12 河川	須恵器高坏	残存高 7.9 脚底径 10.2	坏部外面底部回転ナデ・カキ目？、坏部内面底部不定方向ナデ、脚部外面カキ目、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
149	12 河川	須恵器高坏	残存高 8.1 脚底径 9.8	内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
150	12 河川	須恵器横瓶	復元径 11.3 器高 21.4	内外面頸部回転ナデ、外面体部平行叩き後回転ナデ・一部カキ目、内面体部当て具痕	内外面：灰色 胎土：1mm大の砂粒含む	
151	12 河川	須恵器横瓶	残存高 23.3	体部外面平行タタキ後カキ目、体部内面当て具痕・ナデ	内外面：暗青灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒含む	
152	12 河川	須恵器横瓶	残存高 26.0	体部外面平行タタキ後カキ目、体部内面当て具痕	内面：オリーブ灰色 外面：灰白色 胎土：1mm以下の砂粒含む	
153	12 河川	須恵器広口壺	残存高 10.5	外面体部上半回転ナデ、外面体部下半ヘラケズリ、内面回転ナデ	内面：灰白色 外面：灰白～灰色 胎土：1mm以下の砂粒含む	
154	12 河川	須恵器広口壺	残存高 9.9	外面上半回転ナデ、外面下半ケズリ、内面回転ナデ	内外面：明青灰色 胎土：1mm以下の砂粒含む	
155	12 河川	須恵器壺	口径 19.9 残存高 8.9	内外面回転ナデ	内外面：暗灰色 胎土：密	
156	12 河川	須恵器広口壺	口径 10.2 器高 18.1	体部外面カキ目、体部下半～底部回転ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ	内外面：青灰色 胎土：1.5mm以下の砂粒含む	
157	12 河川	須恵器壺	残存高 12.4	外面上半回転ナデ、外面下半ケズリ後回転ナデ、内面回転ナデ	内面：灰色 外面：灰白～灰色 胎土：密	頸部打ち欠き
158	12 河川	須恵器鉢	残存高 10.8	外面底部ナデ、その他外面回転ナデ、内面底部付近不定方向ナデ、その他内面ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
159	12 河川	須恵器広口壺	残存高 13.0 底径 10.6	底部内面不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰～暗灰色 胎土：密	頸部打ち欠き
160	12 河川	須恵器壺	残存高 12.0 復元底径 11.5	体部外面回転ヘラケズリ後回転ナデ、その他回転ナデ	内面：灰白～黄灰色 外面：灰白色 胎土：1mm以下の砂粒含む	
161	12 河川	須恵器提瓶	残存高 23.5	体部外面回転ナデ・部分的にカキ目、体部内面回転ナデ	内面：紫灰色 外面：青灰色 胎土：1～2mm大の砂粒含む	
162	12 河川	須恵器提瓶	復元径 8.0 残存高 5.5	内外面頸部回転ナデ、体部外面調整不明、体部内面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	外面自然釉付着
163	12 河川	須恵器提瓶	口径 7.6 残存径 8.9	内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
164	12 河川	須恵器ハツ	器高 6.2	外面体部下半カキ目、その他内外面回転ナデ	内外面：橙色 胎土：密	
165	12 河川	須恵器甕	口径 14.0 残存高 6.0	内外面口縁部回転ナデ、内面体部当て具痕	内外面：灰色 胎土：密	
166	12 河川	須恵器甕	口径 13.8 残存高 5.7	外面体部タタキ、内面体部下半当て具痕、内外面口縁部回転ナデ	内面：浅黄色 外面：灰白色 胎土：密	
167	12 河川	須恵器甕	口径 18.8 残存高 5.9	外面体部タタキ、内面体部当て具痕、内外面口縁部回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	外面自然釉付着
168	12 河川	土師器甕	復元径 27.5 残存高 15.7	外面口縁部ハケ目、外面頸部ナデ、外面体部ハケ目、内面口縁部ハケ目後ナデ、内面ヘラケズリ後ナデ	内面：にぶい黄橙色 外面：黒褐色 胎土：1～1.5mm大の砂粒含む	
169	12 河川	土師器甕	復元径 22.1 残存高 16.7	体部外面板ナデ、体部内面ヘラケズリ後ナデ、内面口縁部板ナデ	内面：にぶい黄橙色 外面：黒色 胎土：密	
170	12 河川	土師器甕	口径 34.4 残存高 15.4	外面口縁部ヨコナデ、外面体部ハケ目、内面口縁部ハケ目、内面体部ヘラケズリ	内面：暗灰黄色 外面：淡赤橙色 胎土：密	外面煤付着

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
171	12 河川	土師器甕	口径 21.0 残存高 11.0	口縁端部ナデ、内外面頸部板ケズリ、内面体部ヘラ状工具痕	内外面：浅黄～黒色 胎土：1mm大の砂粒・金雲母含む	外面煤付着
172	12 河川	土師器甕	復元径 26.6 残存高 11.9	内外面口縁部ナデ、内面体部ハケ目、体部上半ハケ目調整	外面：黄灰色 内面：黄褐色 胎土：密	
173	12 河川	土師器甕	口径 26.4 残存高 4.5	外面口縁部ハケ調整後ナデ、外面頸部ハケ目、内面口縁端部ナデ、内面口縁部ハケ目、内面体部ヘラケズリ	内外面：灰白色 胎土：密	
174	12 河川	土師器甕	口径 23.6 残存高 6.8	内外面口縁部ヨコナデ、内面体部ヘラケズリ	内外面：灰黄色 胎土：密	
175	12 河川	土師器甕	口径 19.6 残存高 6.2	外面口縁部以下ハケ目、内面口縁部ナデ、内面体部ヘラケズリ	内外面：明黄褐色 胎土：密	
176	12 河川	土師器甕	口径 12.5 器高 9.1	内面口縁部ナデ、内面ヘラケズリ、外面口縁部指オサエ、体部外面ヘラケズリ後ナデ	内外面：にぶい黄橙色 胎土：1mm大の砂粒含む	外面煤付着
177	12 河川	土製支脚	底径 10.8 残存高 10.3	内面ケズリ後ナデ、外面ハケ後ナデ	内面：灰白色 外面：にぶい橙色 胎土：1～2mm大の砂粒含む	
178	12 河川	手づくね土器	口径 6.2 器高 5.9	内外面指ナデ	内面：黒色 外面：灰黄～黒色 胎土：密	
179	12 河川	ミニチュア壺	口径 6.6 器高 5.1	内面体部及び外面頸部指オサエ、内外面口縁部及び体部外面ナデ、外面底部ハケ状工具によるケズリ後ナデ	内外面：にぶい黄褐色 胎土：密	
180	12 河川	手づくね土器	口径 6.6 器高 4.3	内外面指頭痕	内外面：灰黄色 胎土：密	
181	12 河川	ミニチュア壺	口径 2.8 器高 4.4	内外面回転ナデ	内外面：浅黄褐色 胎土：密	
182	12 河川	製塩土器	復元径 8.0 残存高 5.5	内外面指頭痕	内外面：灰黄色 胎土：密	
183	12 河川	製塩土器		外面指頭痕、内面布目	内外面：赤褐色 胎土：密	
184	12 河川	製塩土器		内外面指頭痕	内外面：浅黄褐色 胎土：密	
185	12 河川	須恵器蓋	口径 13.0 器高 3.0	外面つまみ回転ナデ、外面天井部回転ヘラケズリ、内外面口縁部回転ナデ、内面不定方向ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	体部外面に漆書「×」
186	12 河川	須恵器蓋	口径 15.5 器高 2.4	外面天井部回転ヘラケズリ後ナデ、内面天井部不定方向のナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	つまみ内に漆書「×」
187	12 河川	須恵器蓋	口径 12.5 器高：2.3	外面天井部付近回転ヘラケズリのちナデ、内面天井部に不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：1mm以下の砂粒を含む	つまみ内に漆書「×」
188	12 河川	須恵器蓋	口径 14.7 器高 2.3	内面天井部不定方向のナデ、外面天井部回転ヘラケズリ後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	つまみ内に漆書記号 外面にヘラ記号「一」
189	12 河川	須恵器蓋	残存高 1.8	外面天井部回転ヘラケズリ後ナデ、内面回転ナデ?	内外面：灰色 胎土：密	つまみ内に漆書「○」 外面にヘラ記号「×」
190	12 河川	須恵器蓋	口径 14.9 器高 2.9	内面天井部不定方向のナデ、外面天井部回転ヘラケズリ後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	つまみ内に漆書「×」 内面に「×」
191	12 河川	須恵器蓋	復元径 14.8 器高 2.9	内面天井部不定方向のナデ、外面天井部回転ヘラケズリ後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	つまみ内に漆書「×」 内面に「×」
192	12 河川	須恵器高台付坏	口径 15.4 器高 4.7 底径 9.6	内外面底部不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内面：灰白色 外面：灰白～灰色 胎土：1mm大の砂粒含む	底部外面に墨書「×」
193	12 河川	須恵器高台付坏	復元径 17.3 器高 7.5 底径 9.7	外面底部ヘラ切り、内面底部不定方向のナデ、その他内外面回転ナデ	内面：灰白色 外面：暗青灰色 胎土：密	外面底部に墨書「深緑」
194	12 河川	須恵器高台付坏	口径 13.2 器高 4.8 底径 8.4	底部外面回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：1mm以下の砂粒を含む	底部外面に墨書「深緑曹司」

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
195	12 河川	須恵器環	口径 6.7 器高 3.9	内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、底部外面ヘラケズリ	内外面：灰白～灰色 胎土：密	底部・体部外面に墨書「縁」
196	12 河川	須恵器環	口径 8.0 器高 3.4	内外面口縁～体部回転ナデ、内面底部不定方向ナデ、外面底部回転糸切り	内外面：灰白～灰色 胎土：1 mm以下の砂粒含む	底部外面に墨書「高カ」
197	12 河川	須恵器環	復元径 14.8 器高 3.1	内面回転ナデ、体部外面回転ナデ、底部外面ヘラケズリ	内外面：灰白～黒色 胎土：密	底部外面に墨書「中内」
198	第IV層	須恵器高台付坏	残存高 2.5 復元底径 8.2	底部内面不定方向ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	底部外面に墨書(判読不可)
199	21 溝	須恵器蓋	口径 13.6 器高 4.1	外面天井部回転ヘラ切り、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内面：暗灰黄色 外面：灰色 胎土：密	
200	21 溝	須恵器蓋	復元径 13.0 器高 3.3	外面天井部回転ヘラ切り、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
201	21 溝	須恵器環	口径 14.6 器高 3.7	外面底部回転ヘラ切り、外面回転ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内面：オリーブ黒色 外面：灰色 胎土：密	
202	21 溝	須恵器環	口径 12.0 器高 3.7	外面底部回転ヘラ切り、外面回転ナデ、内面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
203	21 溝	須恵器環	口径 13.6 器高 4.2	外面底部回転ヘラ切り、外面ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内面：灰黄褐色 外面：灰色 胎土：密	
204	21 溝	須恵器環	口径 10.7 器高 4.0	外面底部回転ヘラ切り、外面回転ナデ、内面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
205	21 溝	須恵器環	口径 14.6 器高 4.1	外面底部回転ヘラ切り・ナデ、外面ヘラケズリ・回転ナデ、内面回転ナデ	内面：黄褐色 外面：黄灰～黄褐色 胎土：密	
206	21 溝	須恵器環	口径 13.8 器高 3.9	外面底部回転ヘラ切り・ナデ、外面回転ヘラケズリ・ナデ、内面底部不定方向ナデ、内面回転ナデ	内面：黄褐色 外面：灰黄色 胎土：密	
207	21 溝	須恵器提瓶	残存高 13.7	外面カキ目、内面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
208	21 溝	須恵器ハツ	残存高 13.0	外面底部回転ヘラケズリ、外面頸部回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
209	15 平坦面	須恵器短頸壺	口径 5.8 器高 7.3	外面底部回転ヘラケズリ、外面体部ハケ状工具による回転ナデ、外面口縁部～内面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
210	21 溝	須恵器高坏	口径 13.8 残存高 9.4	坏部外面底部回転ヘラケズリ・ナデ、坏部その他回転ナデ、脚部回転ナデ	内面：灰黄褐色 外面：にぶい黄褐色 胎土：密	
211	21 溝	須恵器高坏	口径 13.2 残存高 5.6	外面底部回転ヘラケズリ・ナデ 内面回転ナデ	内面：灰～暗灰黄色 外面：灰～灰白色 胎土：密	
212	21 溝	土師器甕	復元径 18.8 残存高 8.2	外面体部ハケ目、外面口縁部ナデ、内面口縁部ヨコナデ、内面体部ヘラケズリ	内面：黄褐～黒色 外面：黒色 胎土：密	
213	21 溝	土師器竈	底径 26.0 残存高 19.8	外面ハケ目、内面ナデ	内外面：浅黄色 胎土：1 mm大の砂粒・金雲母含む	
214	21 溝	土玉	全長 3.0 直径 3.0	外面ナデ	外面：灰色 胎土：密	
215	151 土坑	須恵器蓋	口径 14.6 器高 4.6	内面回転ナデ、外面天井部ヘラ切り後ナデ、その他外面回転ナデ、回転ヘラケズリ	内外面：灰色 胎土：密	
216	151 土坑	須恵器環	口径 11.0 器高 3.6	外面底部ヘラケズリ後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
217	151 土坑	須恵器環	復元径 14.2 器高 4.4	外面底部ヘラ切り後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
218	151 土坑	須恵器環	復元径 13.4 器高 3.6	外面底部ヘラ切り後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
219	151 土坑	須恵器高坏	口径 15.4 残存高 8.8	体部外面回転ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
220	150 土坑	須恵器環	復元径 11.2 器高 3.2	外面底部ヘラ切り後ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
221	40 土坑	須恵器環	口径 13.3 器高 5.4	外面底部回転糸切り、その他内外面回転ナデ	内外面：灰白色 胎土：密	
222	74 たわみ	須恵器高坏	残存高 6.5	外面脚部回転ヘラケズリ・ナデ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
223	第V層	須恵器蓋	復元径 16.8 器高 3.1	外面天井部回転ヘラ切り、体部外面回転ヘラケズリ、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
224	第V層	須恵器坏	復元径 12.0 器高 3.9	外面底部回転ヘラ切り、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
225	第V層	須恵器坏	復元底径 9.0 残存高 3.3	外面底部回転ヘラ切り、体部外面ナデ・回転ヘラケズリ、内面底部不定方向ナデ、内面体部回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
226	第V層	須恵器坏	復元径 12.9 器高 3.7	内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
227	第V層	須恵器高坏	口径 12.6 残存高 4.3	体部外面カキ目、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
228	第V層	須恵器高坏	残存高 8.1 底径 10.6	体部外面カキ目、その他内外面回転ナデ	内面：色 外面：にぶい橙色 胎土：密	
229	第V層	須恵器高坏	残存高 4.8 底径 12.7	体部外面カキ目	内外面：明黄褐色 胎土：密	
230	第V層	土製支脚	残存高 8.8 底径 10.8	外面指オサエ	内外面：灰黄褐色 胎土：密	
231	第V層	土錘	全長 6.4 直径 4.3	外面ナデ	外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
232	第V層	土玉	全長 2.9 直径 2.5	外面ナデ	外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
233	第V層	土玉	全長 3.3 直径 3.6	外面ナデ	外面：灰白～黒褐色 胎土：密	
234	第V層	土玉	全長 2.5 直径 3.4	外面ナデ	外面：褐灰～黒褐色 胎土：密	
271	小井手	唐津焼皿	残存高 1.8 底径 4.4	外面高台周辺露胎、内面見込み蛇の目釉剥ぎ	胎土：にぶい褐色 釉薬：灰白色 胎土：密	
272	小井手	肥前磁器皿	口径 10.0 器高 2.7 底径 4.3	外面施釉、高台端部露胎、内面見込み蛇の目釉剥ぎ、呉須絵付け		
273	小井手	磁器皿	復元径 10.6 器高 2.1 底径 6.6	外面施釉、高台端部釉剥ぎ、内面銅板刷り（青）		
274	小井手	磁器皿	復元径 10.1 器高 2.0 底径 6.9	外面施釉、高台蛇の目釉剥ぎ、内面見込みのみ銅板刷り（緑）		
275	小井手	磁器皿	復元径 10.8 器高 2.8 底径 6.2	外面施釉、高台端部釉剥ぎ、内面銅板刷り（緑）		
276	小井手	磁器皿	復元径 9.6 器高 2.2 底径 6.4	外面施釉、高台端部釉剥ぎ、内面銅板刷り（青）		
277	小井手	磁器鉢	残存高 5.2	内外面施釉 呉須絵付け		破面に接着剤付着
278	小井手	ガラス製品	残存長 8.4		透明ガラス	人面を表現
279	小井手	ガラス製品	残存長 7.5	合わせガラス	透明ガラス	側面に「組合目薬」底部外面に桜花と「共存同盟」
280	小井手	ガラス瓶	口径 2.3 器高 14.9 底径 5.6	合わせガラス、側面に目盛り、底部外面に星印	茶色ガラス	
281	小井手	ガラス瓶	口径 2.5 器高 7.8 底径 5.7	底部上げ底風	透明ガラス	
282	小井手	ガラス瓶	口径 1.2 器高 8.7 底径 2.5	合わせガラス、瓢箪形、くびれ部に3本の凸帯	透明ガラス	気泡目立つ
283	小井手	ガラス瓶	口径 4.5 器高 4.8 底径 3.5	口縁部ねじ切り、底部上げ底	白色不透明ガラス	
284	小井手	ガラス瓶	口径 5.4 器高 4.7 底径 6.3	合わせガラス、外面立体的な文様、口縁部ねじ切り	白色不透明ガラス	
285	小井手	ガラス瓶	口径 5.3 器高 3.9 底径 3.4	合わせガラス、外面2ヶ所ラベル用の凹み、外面底面に社章（テウメ？）、口縁部ねじ切り	白色不透明ガラス	
286	1004 溝	青磁碗	残存高 6.2	内外面線刻で花文	釉薬：緑色 胎土：灰白色	
287	1004 溝	青磁碗	残存高 3.4	体部外面線刻による蓮弁	釉薬：緑灰色 胎土：灰色	

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	調整	色調・胎土	備考
295	2河川	土錘	全長 3.7 直径 0.9	外面ナデ	外面：明赤褐色 胎土：密	
296	第Ⅳ層	土錘	全長 4.0 直径 1.3	外面ナデ	外面：灰黄色 胎土：密	
297	第Ⅳ層	土錘	全長 4.2 直径 1.3	外面ナデ	外面：にぶい黄褐色 胎土：密	
298	12河川	土錘	全長 7.4 直径 4.6	外面ナデ	外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
299	第Ⅳ層	土錘	全長 5.3 直径 3.5	外面ナデ	外面：にぶい黄橙色 胎土：密	
300	第Ⅳ層	鞆羽口	残存長 4.1		外面：灰白色 胎土：やや粗	先端部被熱による還元
301	第Ⅴ層	鞆羽口	残存長 7.6		外面：灰白色 胎土：やや粗	先端部被熱による還元
302	12河川	鞆羽口	残存長 9.6 最大幅 6.9		外面：にぶい黄色 胎土：やや粗	被熱による剥離
303	12河川	焼台	長辺 10.2 短辺 6.1	側面(破面)発泡	内面：暗灰色 胎土：密	須恵器裏片を転用
304	12河川	焼台	長辺 11.1 短辺 7.0	裏2片が融着、片側に窯体付着	内面：灰色 胎土：密	須恵器裏片を転用
305	第Ⅴ層	焼台	長辺 11.4 短辺 9.5	内外面に自然釉付着	内面：灰色 胎土：密	須恵器裏片を転用
306	21溝	焼台	長辺 15.5 短辺 9.7	長方形の破片、破面発泡	内面：暗灰色 胎土：密	須恵器裏片を転用
307	第Ⅴ層	円面硯	復元径 13.6 残存高 2.7	外面口縁部に2条沈線、その他内外面回転ナデ	内外面：灰色 胎土：密	
308	第Ⅴ層	円面硯	残存高 2.6	外面口縁部に2条沈線、その他内外面回転ナデ、脚部透かし孔	内外面：灰色 胎土：密	307と同一個体
309	12河川	円面硯	残存高 5.7 復元底径 22.0	脚部透かし孔、外面脚端部に段	内外面：灰色 胎土：密	
310	第Ⅳ層	須恵器坏		外面底面回転糸切り	内外面：灰白色 胎土：密	外面底面に墨痕
311	第Ⅳ層	須恵器坏		外面底面回転糸切り	内外面：灰白色 胎土：密	外面底面に墨痕
312	第Ⅳ層	須恵器坏		外面底面回転糸切り	内外面：黄灰色 胎土：密	外面底面に墨痕
313	第Ⅳ層	須恵器坏			内外面：灰色 胎土：密	外面底面に墨書(判読不能)
314	第Ⅳ層	須恵器坏	残存高 2.3	外面底面回転糸切り	内外面：灰色 胎土：密	外面底面に墨書(判読不能)
315	第Ⅳ層	須恵器高台付坏		外面底面回転糸切り	内外面：灰白色 胎土：密	外面底面に墨痕
316	第Ⅳ層	須恵器坏	残存高 1.5	外面底面回転糸切り	外面：黄灰色 内面：暗灰色 胎土：密	外面底面に墨痕

遺物観察表（木製品）

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	特徴	材質等	備考
235	1005 構造物	塔婆状木製品	最大長 210.5 最大幅 13.8 最大厚 9.0	裏面にホゾ穴あり、転用材か		
236	1005 構造物	塔婆状木製品	残存長 197.9 最大幅 19.1 最大厚 5.0	自然木を加工		文字（判読不可）が部分的に残る
237	12 河川	建築部材	最大長 202.3 最大幅 13.6 最大厚 11.5			
238	第IV層	田下駄	残存長 25.9 最大幅 11.0 最大厚 1.3			
239	第IV層	連歯下駄	最大長 14.8 最大幅 9.4 最大厚 3.2			
240	1175 ピット	漆器椀	直径 13.2 器高 5.8			
241	第V層	横木	最大長：13.3 最大幅 2.7 最大厚 1.1	軸孔がなく、未製品か		
242	第V層	横木	残存長 10.4 最大幅 4.3 最大厚 1.7			
243	2 河川	箱形組物材	最大長 14.3 最大幅 6.2 最大厚 0.8			
244	第V層	砕木	最大長 22.0 最大幅 1.4 最大厚 1.8			
245	12 河川	折敷	最大長 37.8 最大幅 25.6 最大厚 0.8	中央に刃物傷あり		
246	第IV層	台付盆	最大長 31.3 最大幅 10.5 最大厚 1.2	朱漆で内面に右巻三巴を施文		
247	12 河川	曲物蓋	直径 16.1 最大高 1.6			
248	21 溝	代掻具	最大長 44.5 最大幅 15.9 最大厚 3.7			
249	第V層	齋串	最大長 16.3 最大幅 2.0 最大厚 0.5			
250	第V層	齋串	残存長 7.6 最大幅 1.6 最大厚 0.6			
251	第V層	齋串状木製品	最大長 24.3 最大幅 1.4 最大厚 0.5			
252	第III層	箸状木製品	最大長 19.6 最大幅 0.7 最大厚 0.5			
253	第IV層	笹塔婆	残存長 11.7 最大幅 2.2 最大厚 0.5			墨痕あり
254	第IV層	箸状木製品	残存長 9.3 最大幅 0.6 最大厚 0.6			
255	第IV層	人形代	最大長 11.9 最大幅 5.0 最大厚 0.5	片面中央に刃物傷あり		
256	第IV層	小形調度具	最大長 9.6 最大幅 2.9 最大厚 1.6			
257	2 河川	すき櫛	最大長 8.2 最大幅 3.7 最大厚 0.9			
269	1005 構造物	塔婆状木製品	残存長 210.0 最大幅 17.0 最大厚 13.0	両面を平坦に加工 表面の基部には段を作出する 先端部欠損		

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	特徴	材質等	備考
270	1005 構造物	塔婆状木製品	残存長 118.0 最大幅 11.5 最大厚 8.5	片面を平坦に加工 一部樹皮が残る 両端を欠損		
288	第Ⅳ層	漆器椀		総黒漆 内外面とも筆描の朱漆草花文		
289	2 河川	漆器椀		総黒漆 内外面ともスタンプ文の朱漆草花文		
290	第Ⅳ層	漆器椀		総黒漆 外面スタンプ文の朱漆亀甲文		
291	第Ⅳ層	漆器椀		総黒漆 内外面とも朱漆のスタンプ文 (桜花)		
292	第Ⅳ層	漆器椀		底部外面を除く総黒漆		
293	第Ⅳ層	漆器椀		総黒漆 内外面とも朱漆のスタンプ文 (菊花)		
294	第Ⅳ層	調度具	器高 7.2	ほぞを除く総黒漆 ほぞ先端に筆描朱漆		

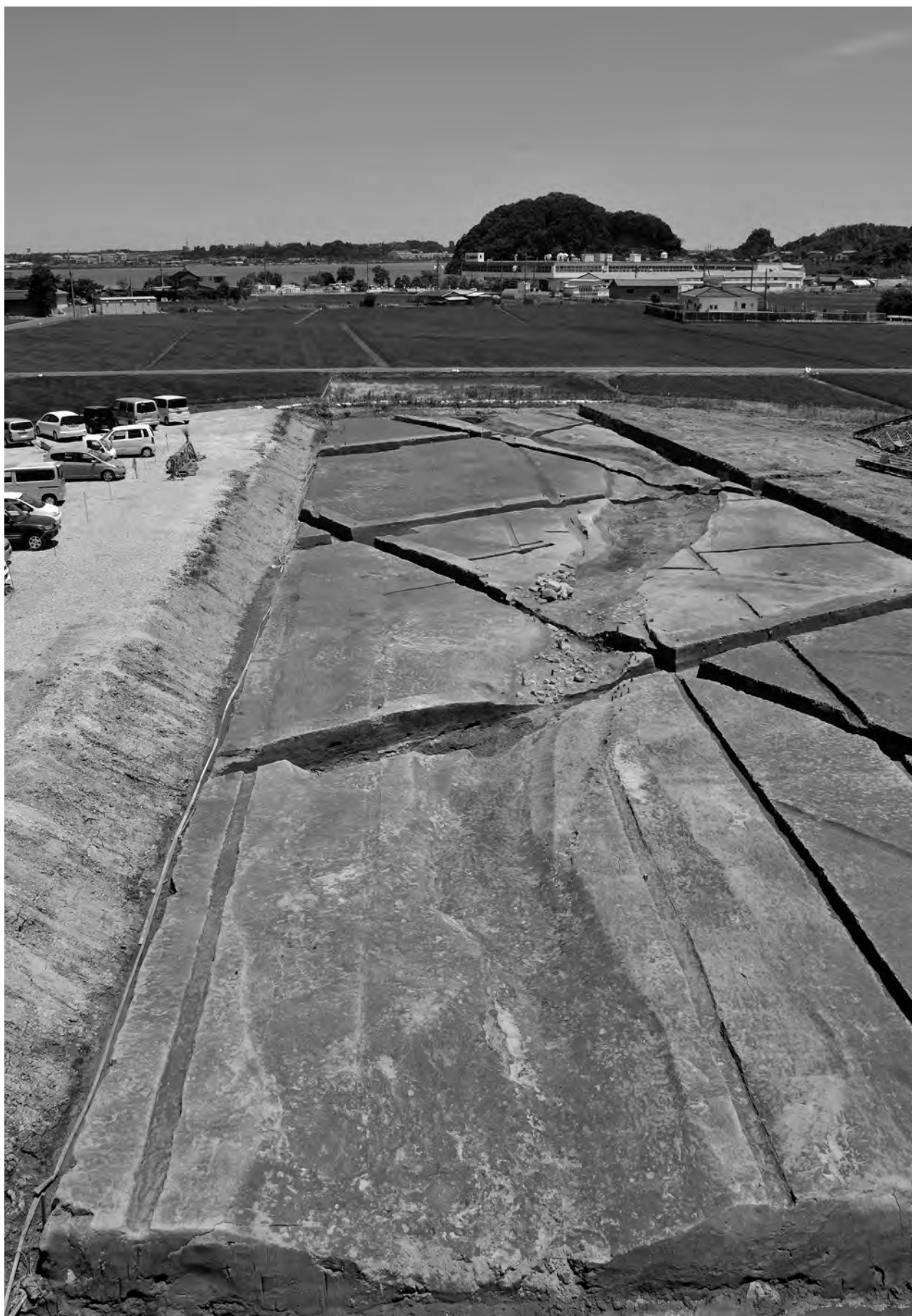
遺物観察表 (金属製品)

図番号	遺構・層位	種類	法量 (cm)	特徴	材質等	備考
258	1250 構造物	鉄斧	最大長 10.3 最大幅 4.2 最大厚 2.0		鉄	
259	第Ⅳ層	錐状工具	最大長 10.2 最大幅 0.7 最大厚 0.4		鉄	
260	12 河川	刀子	最大長 13.6 最大幅 1.3 最大厚 0.4		鉄	
261	第Ⅳ層	馬鍬歯	最大長 20.9 最大幅 2.1 最大厚 1.2	先端部分が片側に反る	鉄	
262	第Ⅳ層	馬鍬歯	最大長 22.0 最大幅 2.2 最大厚 1.3	先端部分が片側に反る	鉄	
263	第Ⅳ層	耳環	最大長 2.3 最大幅 2.1 最大厚 0.6		金銅	
264	第Ⅳ層	刀装具	最大長 4.7 最大幅 4.3 最大厚 1.6		銅	
265	第Ⅳ層	銭貨		元豊通宝	銅	1078 年初鑄
266	第Ⅳ層?	銭貨		大観通宝	銅	1107 年初鑄
267	第Ⅳ層	銭貨		宣和通宝	銅	1119 年初鑄
268	整地層	銅印	最大長 3.1 最大幅 3.0 最大高 3.1	有孔蒼鈕、印面「木」	銅	



図

版



1区 第1面 1004 溝完掘状況(南西から)



1区 第1面 1004溝 護岸礫群検出状況（南西から）



1区 第1面 1004溝 護岸杭群検出状況（南西から）



1区 第1面 2河川完掘状況（南西から）



3区 第1面 1004溝、2河川新段階完掘状況（北東から）



3区 第1面 水田畦畔検出状況（北から）



1区 第1面 1005 構造物全景（北から）



1区 第1面 1005 構造物西側 砂堆検出状況（北から）



3区 第1面 2河川新段階西岸 畦芯材検出状況（北東から）



3区 第1面 1020 畦芯材検出状況（東から）



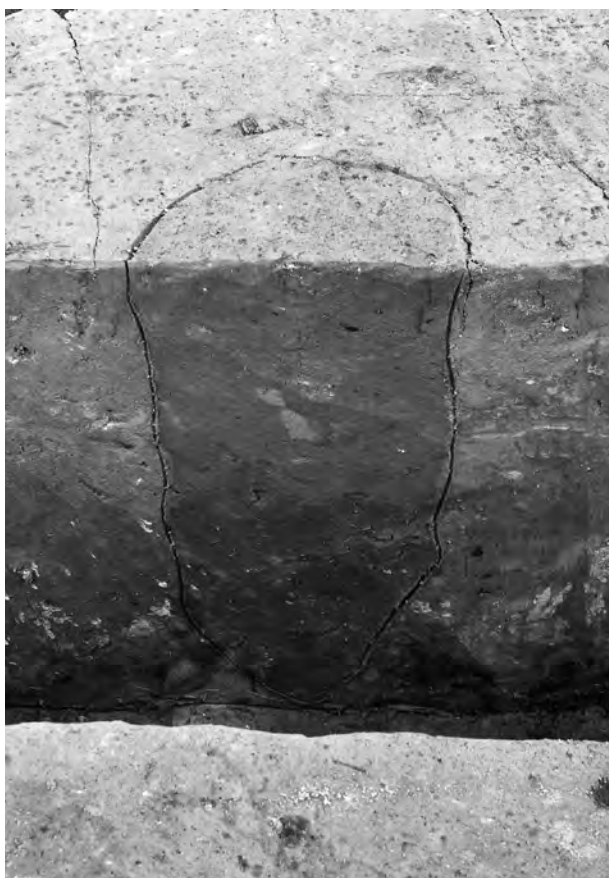
3区 第1面 2河川古段階完掘状況（北から）



3区 第1面 2河川古段階西岸 杭列検出状況（北東から）



3区 第2面 掘立柱建物跡 検出状況 (北から)



3区 第2面 1171ピット 断面 (南から)



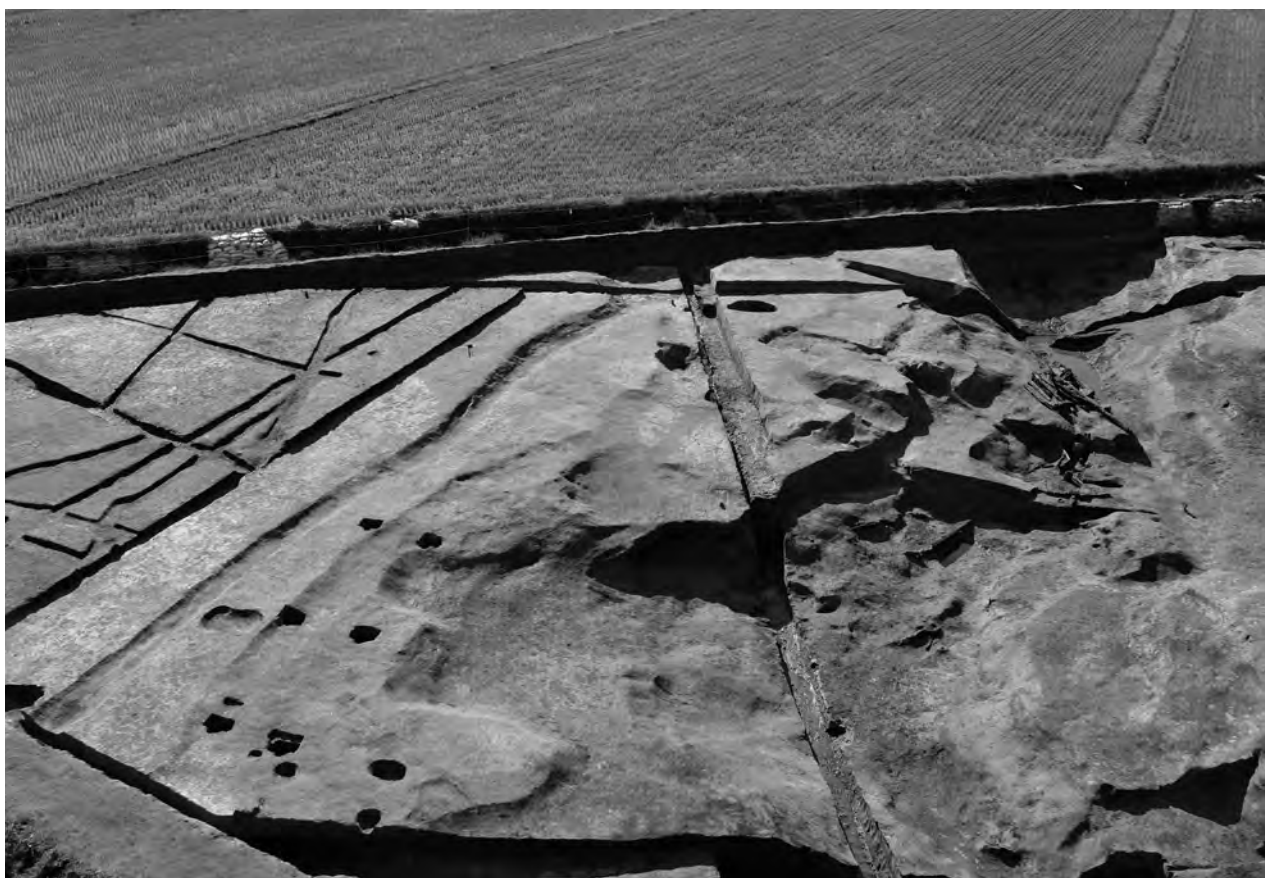
3区 第2面 1174ピット 断面 (南から)



2区 第2面 12河川完掘状況（南から）



3区 第2面 12 河川新段階完掘状況（北東から）



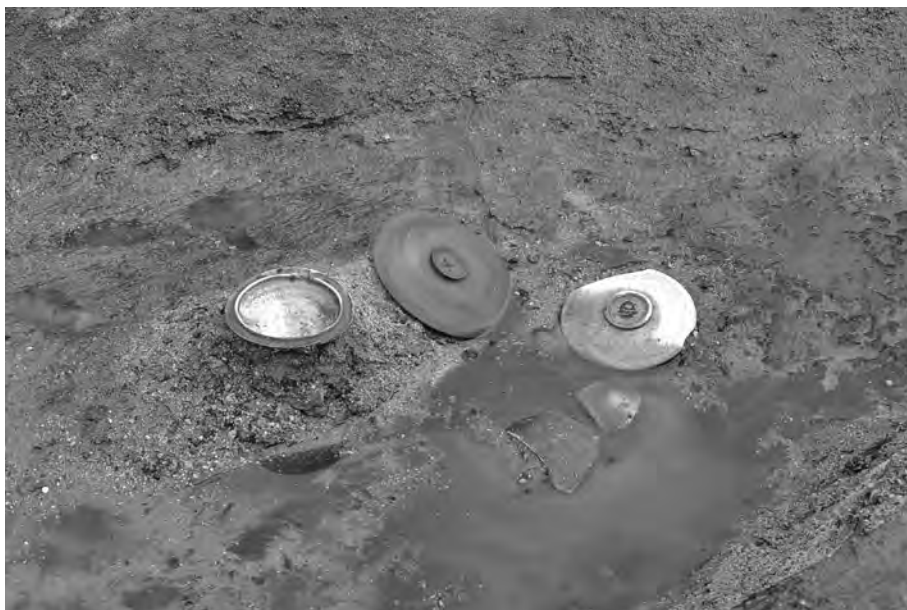
3区 第2面 12 河川古段階完掘状況（北から）



3区 第2面 1250 構造物検出状況（北西から）



3区 第2面 1249 構造物検出状況（南西から）



2区 第2面 12河川内
漆書土器出土状況



1区 第2面 12河川内
土師器坏出土状況



3区 第2面 12河川内
土師器坏出土状況



2区 第2面 21溝遺物出土状況（南から）



2区 第2面 21溝内 代掻具出土状況（西から）



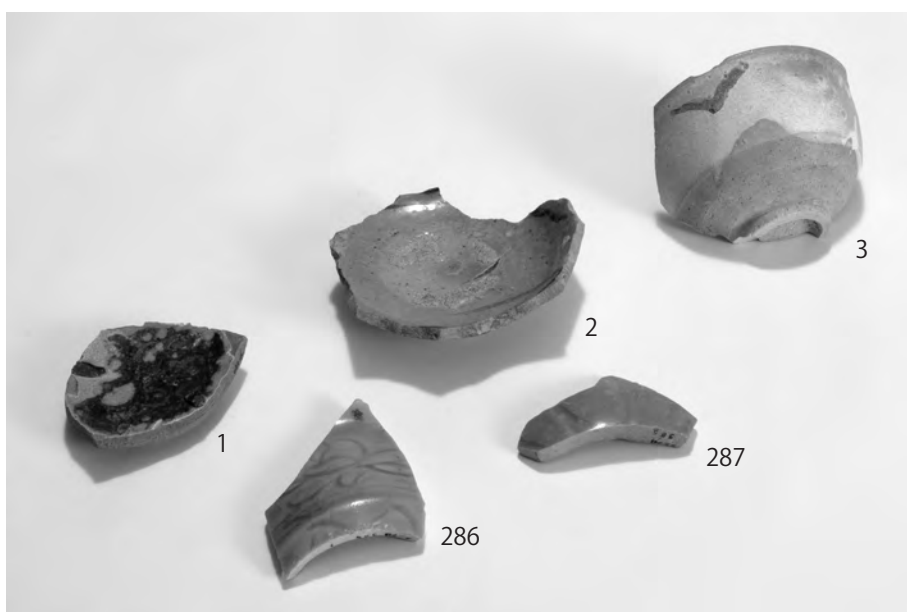
2区 第2面 64土坑 断面(北から)



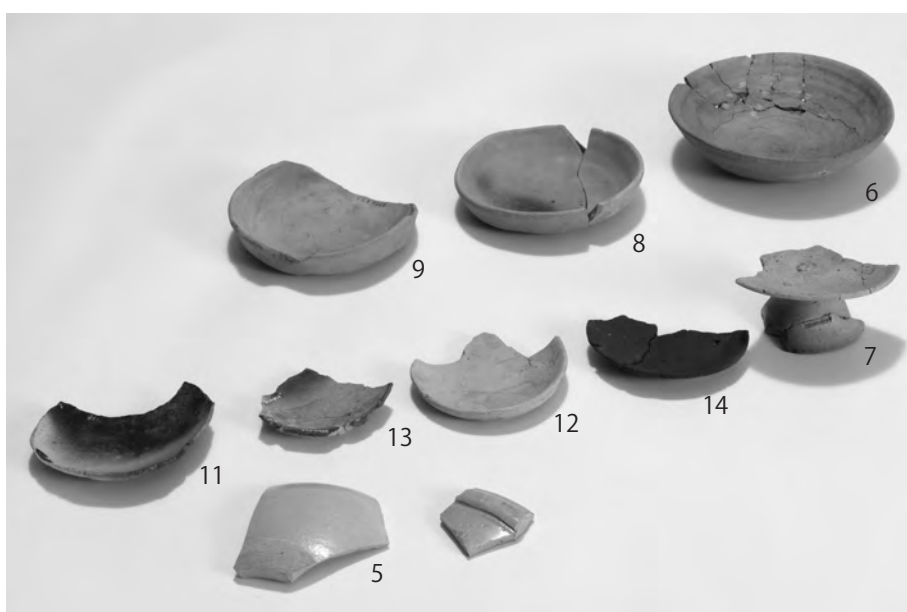
1区 第3面 完掘状況(南西から)



小井手出土遺物



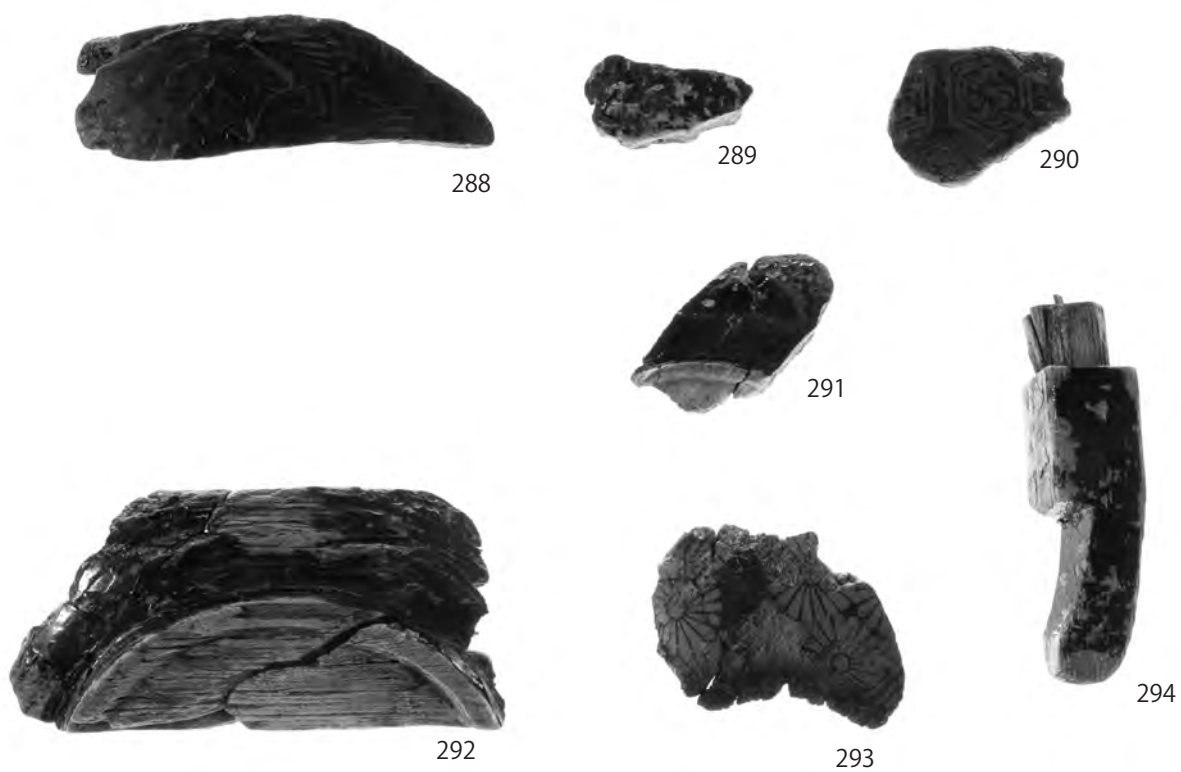
1004 溝出土遺物



2 河川出土遺物



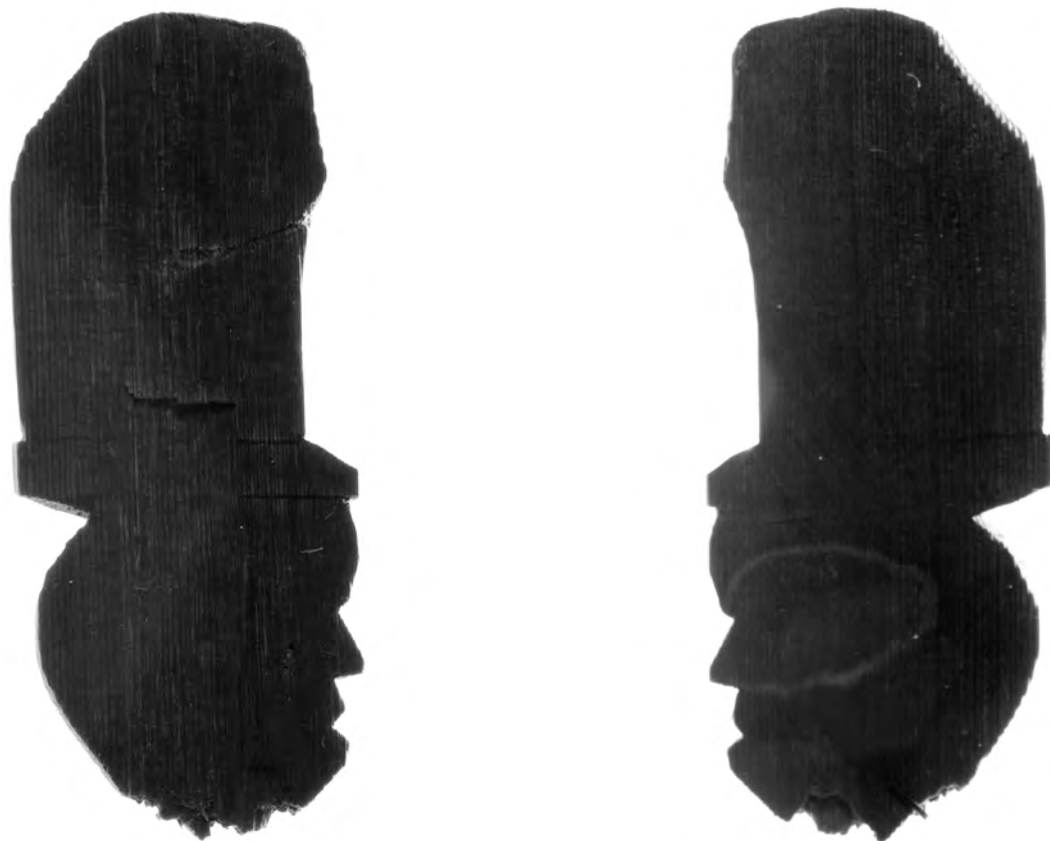
第IV層出土遺物



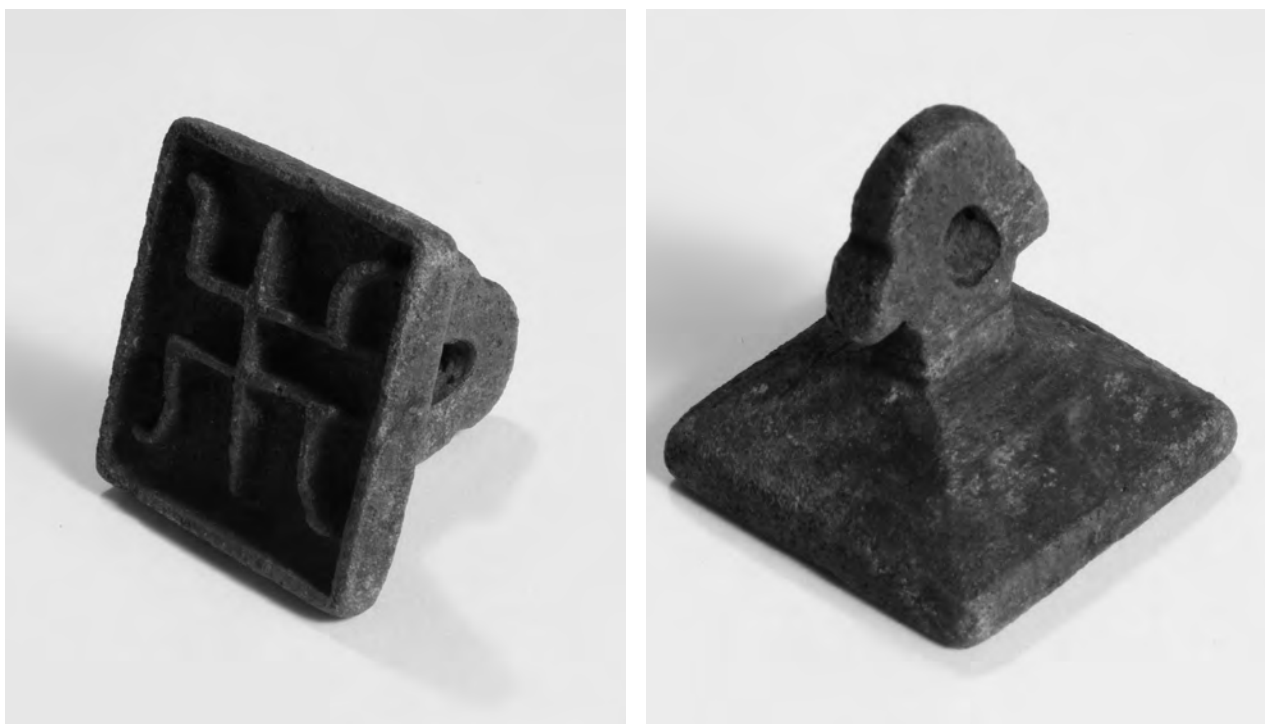
第IV層出土漆器



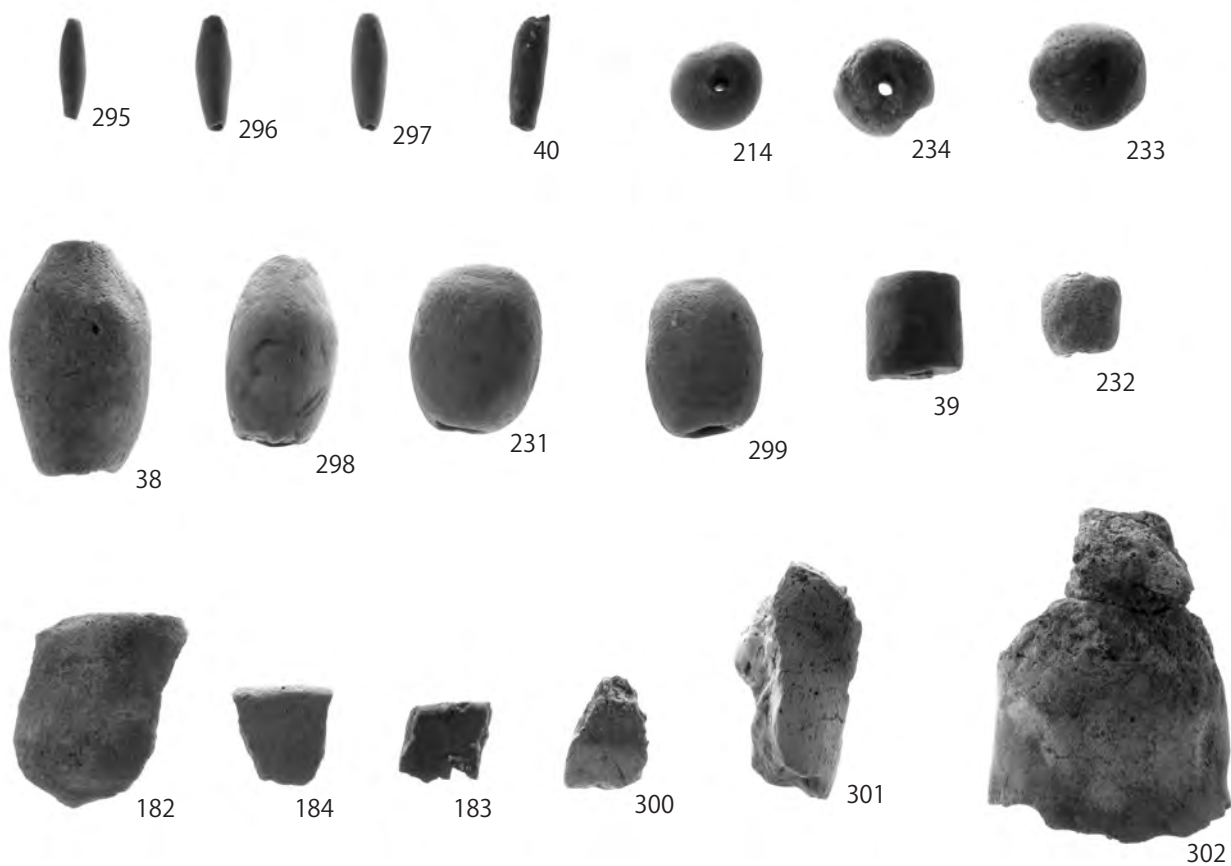
第IV層ほか出土 木製品



第IV層出土 人形代 (255)



整地層出土 銅印 (268)



第IV層、2 河川、12 河川、21 溝出土土製品



12 河川出土 飛鳥～奈良時代 供膳具



12 河川出土 須惠器甕、壺、提瓶、横瓶



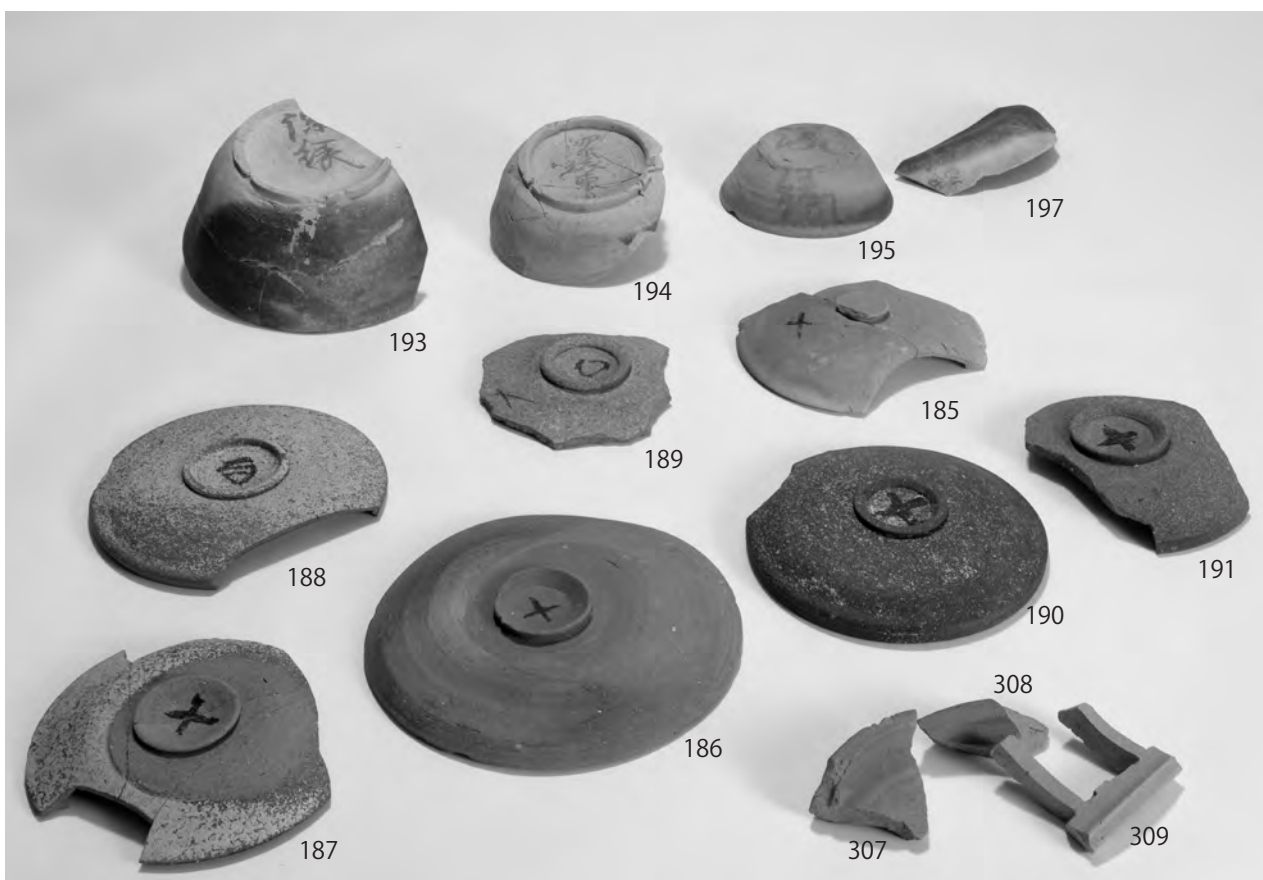
12 河川出土 土師器甕、土製支脚、ミニチュア土器



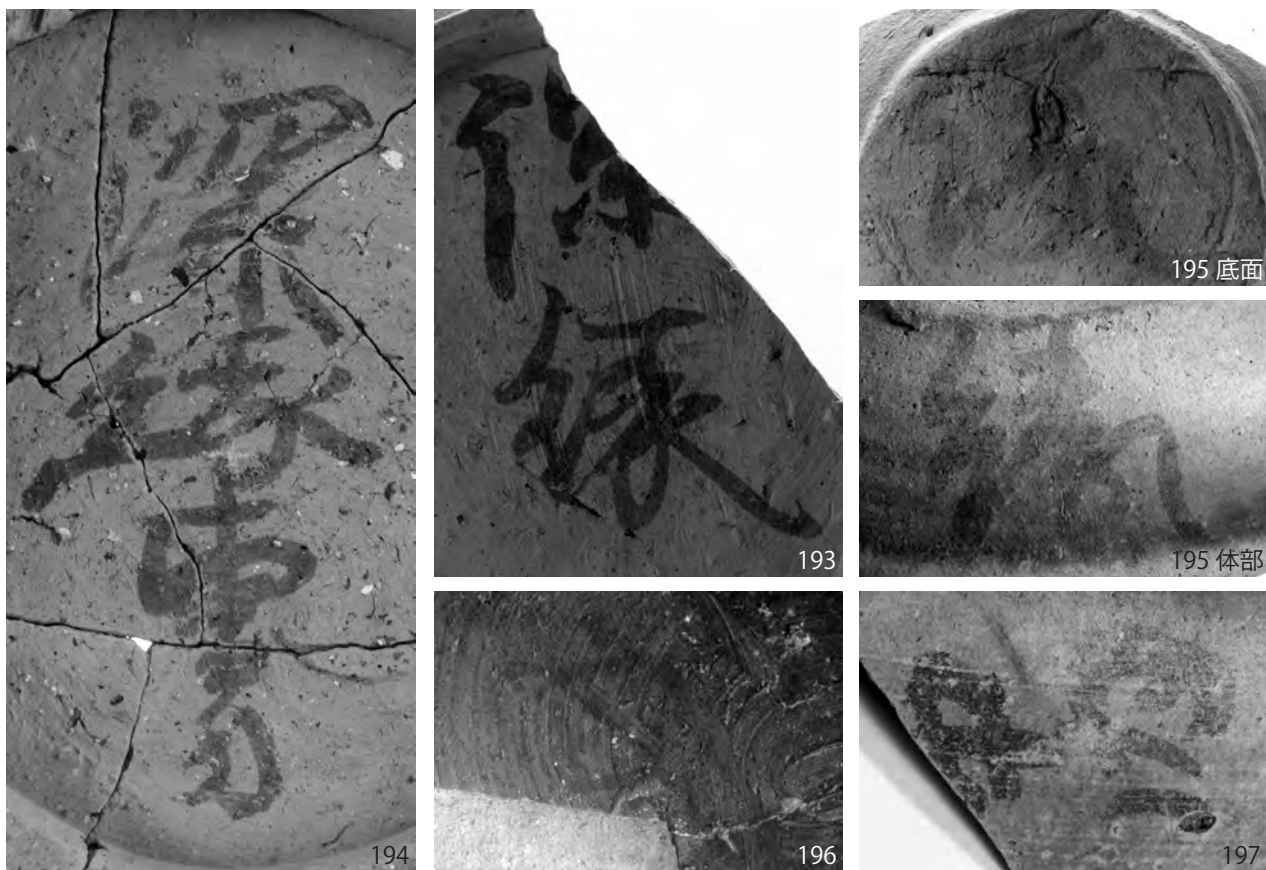
12 河川等出土 転用焼台



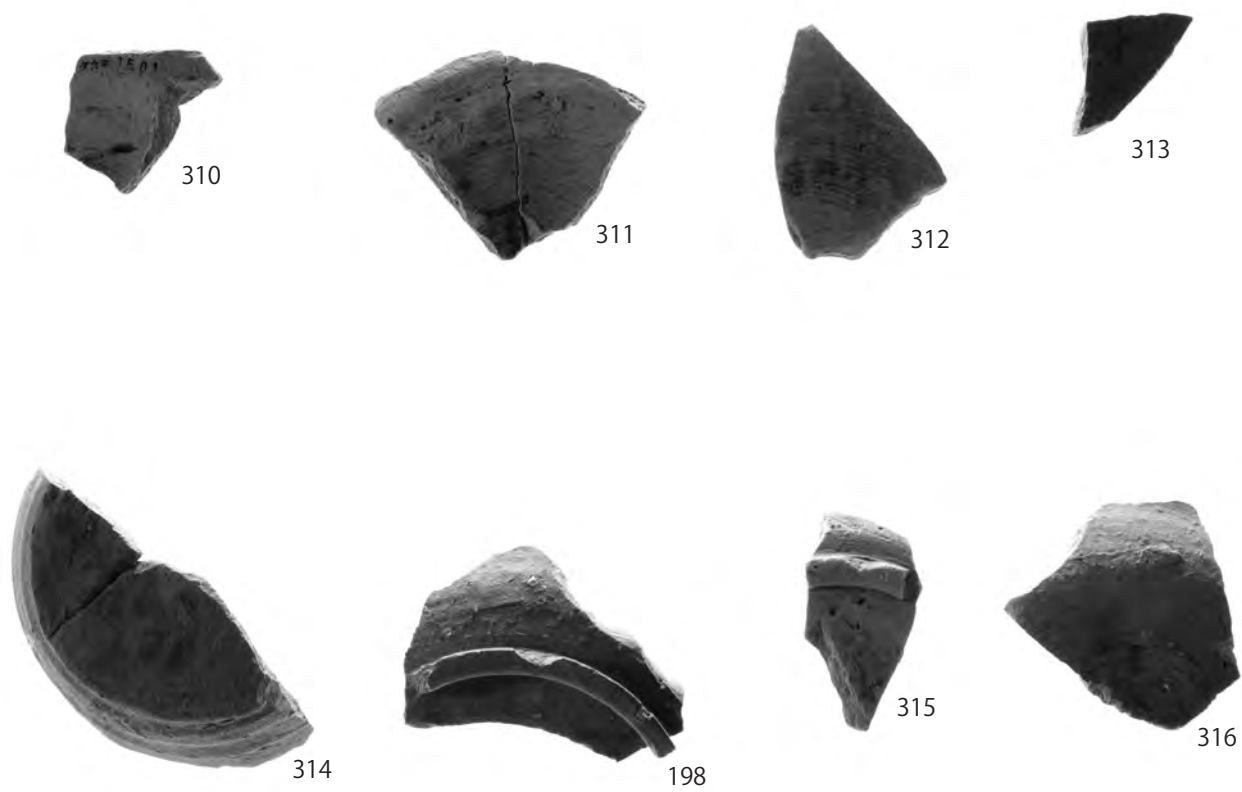
12 河川出土土師器に残る粘土紐痕跡



12 河川出土 漆書、墨書土器、円面硯



12 河川出土土器に書かれた墨書 近接写真



12 河川、第IV層出土墨書土器



21 溝、15 平坦面 出土遺物



21 溝出土 代搔具 (248)

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかずみひらたいせき							
書名	高住平田遺跡 I							
副書名	一般国道 9 号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	VI							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒井 正明、田中 正利、パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒 680-1133 鳥取県鳥取市源太 12 番地 TEL (0857) 51-7552							
発行年月日	西暦 2012 年（平成 24 年）7 月 30 日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかずみひらたいせき 高住平田遺跡	とっとりけんとりし 鳥取県鳥取市 たかずみあざひらた 高住字平田、 なかせ 中瀬	31201	1-427	35° 29' 34"	134° 08' 19"	20100527 }	4,230㎡	国道 9 号（鳥 取西道路）道 路改築工事
						20101130		
						20110513 }	5,185㎡	
						20111215		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
高住平田遺跡	集落跡	飛鳥時代～江戸時代	自然流路 2 条	2 条	土師器、須恵器、黒色土器、木製品（斎串、人形代、代掻具、卒塔婆状木製品など）、金属製品（銅印、刀装具など）			
			木製構造物 3 基	3 基				
			掘立柱建物 1 棟	1 棟				
			用水路 1 条	1 条				
			水田畦畔、土坑、ピット					
要約	<p>湖山池には南岸から数条の河川が流入しており、高住平田遺跡はこのうちの 1 つである三山口川が流れる谷の西側丘陵裾部に位置する。高住地区では初めての本格的な調査を実施し、飛鳥時代～江戸時代までの遺構、遺物を確認した。調査地の中央には古代から中世にかけての自然河川（12 河川、2 河川）が筋を変えながら流れており、江戸時代になると水路（1004 溝）として整備される。12 河川では河川内の構造物の周辺で奈良時代から平安時代にかけての供膳具が完形に近い形で多く出土し、当時の祭祀のあり方を表している可能性が考えられる。一方、河川の周辺では古代から中世の粘土採掘坑と中世前期のものとする掘立柱建物を 1 棟確認しているが、中世後期以降はもっぱら水田として利用される。古代以降の湖山池南岸地域の歴史を知る上で重要な知見を得ることができた。</p>							

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書VI

鳥取県鳥取市

高住平田遺跡 I

発行 平成24（2012）年7月30日
編集 財団法人 鳥取県教育文化財団
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570 鳥取県鳥取市1丁目271番地
電話（0857）26-7525
印刷 総合印刷出版株式会社
